別冊宝島281

隣のサイコさん

電波系からアングラ精神病院まで!

盗聴シンドローム、自殺未遂、
発明パラノイア、愛しすぎる女、
人格障害、ヤク中、監獄精神舎……

そして人権サイコパス!
妄想・幻覚・依存・発狂をめぐる、
遠くて近い魂のボーダーランドへ!!

隣のサイコさん

電波系からアングラ精神病院まで!

隣のサイコさん

電波系からアングラ精神病院まで!

失われた「正気」を求めて！

INTRODUCTION

どうやらこの世の中は、膨大な量の「電波」にさらされているようだ。
ある日の午後、原稿を本にしてくれないかという売り込みの電話が編集部にかかってきた。電話の主は、六十歳前後とおぼしきしゃがれ声のオヤジ。オヤジは唐突に妙なことを口走った。
「お宅の会社、TV局にルートはあるんですか？　私の本は、TV局の人がみんな読みますから。重要なことが書かれてるんですよ。マスコミは皆、隠してるんですから」
TV局？ルート？重要なこと？　なんだか符号めいてて危なそうだが、朴訥な口調につい吊られ、思わず「どんな内容の企画なんですか」と聞き返してしまった。
「うーん。たとえば、今、日本には財政破綻が近づきつつあるとマスコミが言ってますがね、あれ、嘘なんです。だってそうでしょう、お金は誰が作ってますか？　大蔵省の造幣局でしょう。金がなければどんどん刷ればいいんです、どんどん。そんなことをマスコミはなぜ隠して、不安ばかりを煽るのか、私には理解できんのです」
何を言ってるのか、最初はよく分からなかった。インフレ、国際為替相場、近代マクロ経済……といった反証の言葉が頭の中でぐるぐる回ったが、こちらが絶句している間に、そのオヤジは日本の隠された真実をなおも語る。そしてやおらこう話しはじめた。
「私の原稿は、もう、TV局の人がたくさん読んでくれてますから。この間も、そう、和田アキ子と、うーん、八代亜紀が読んでくれましたんでね」
「へえー。ずいぶん芸能界に顔が効くんですね。TV関係のお勤めを昔なさってたとか」
「いやいや、TVを見てるとね、私、いろんな人に原稿を送ってますんで、合図を送ってくるんです。素晴らしい内容だと。ちょっとしたしぐさで分かりますから。だからこれを本にして、TV局で売れば、もう皆買ってくれるはずなんです」
要するにこのオヤジ、自分が見つけた「この世の真実」を手紙に記し、TV局気付けでじゃんじゃん有名人に送り、TVに映るタレントたちのしぐさから勝手に「信号」を読み取っては使命感に燃える、「電波人間」だったのだ。
聞きかじった精神医学の知識にならえば、オヤジの言う大蔵省造幣局云々は誇大妄想、和田アキ子、八代亜紀の信号云々は、精神分裂病の症状にみられる幻覚症状の可能性がある。もしこのオヤジが、自分の家族であったり友人であれば、間違いなく病院へ連れていこうとしたはずだ。たとえ診断結果が分裂病であっても、最近では、手当てが早ければそれだけ、症状の緩和も、ひいては社会復帰も充分に可能というじゃないか。何よりも、分裂病は脳内伝達物質の分泌異常が一原因であると生理学的にも証明されている。医学的には、肉体の病と同じように定義できるのだ。

しかし、相手は見ず知らずのオヤジである。いきなり、
「あんた、病院いったほうがいいよ」
なんて言えない。「病」とは、「医学」という制度と係わりをもたなければ社会的には病でない、なんていう哲学的な議論もある。
そんな考えが頭に浮かんだものだから、結局は本人が切望する、文字通りTV局にルートのある出版社――扶桑社(フジサンケイ・グループ)、日本テレビ出版の電話番号を教え、受話器を置いたのだった。

◉

この本は、今紹介したオヤジのような人びとと社会の関係を見極めようという目的で編集されている。タイトルに冠した「サイコ」は、直訳すれば、これすなわち「狂人」のこと。ただ、ここで言うサイコとは、医学概念での「病者」を指しているわけではない。あくまでも、社会的な意味での「サイコ」のことだ。

「あいつ狂ってる」「頭がヘンだ」「いっちゃってる」、そんな比喩で語られがちな人びとのことである。この概念の中には、精神障害者、神経症、躁うつ病、依存症の患者、人格障害者、サイコパス、さらには社会へと溶け込んでいる健全パラノイア、はては路上の酔っ払いまで、心に歪みをもった(と世間が認知する)あらゆる範疇の人びとが、残飯よろしく今やいっしょくたにぶちこまれている。

巷には、こうした「病」の内実について啓蒙する書物はいくつも流通しているが――健全パラノイアだけは、逆にトンデモ本(©と学会)を自ら著し、癒す立場に回って立派に社会参加しているようだ――はたしてそうした人びとと「正気」な人びととの関係性を結び直すための発想の材料が、その中にどれだけあるか。どうみても、自分を「正気」と考える人びとには、およそ届きそうにない消極的な内容のものが多い。

本書では、サイコな人びとの心の歪みについて、身近な現場で実際にフィールドワークを行ってみた。よりたくさんの読者に、実は隣近所にいるはずの彼らの内実を直視してほしいからだ。彼らには、気の毒なところもあれば、おかしなところもあり、嫌なところもあれば、もちろん愛すべきところもある。すべて認めなければ、共存への道も切り開かれないはずだ。

そして、もうひとつ狙いをあげるとすれば、それは「人権真理教」に覆われてしまったニッポンの解毒である。人権という鉄のカーテンに遮られ、弱者保護の副作用として、逆にすっかり「腫れ物」にされてしまった彼らの未来やいかに⁉

電波は、なにも和田アキ子や八代亜紀からだけ飛んできているわけではない。「正気」な人びとの心の奥底でたえず鳴り響いている「人権真理教」のささやきも、またひとつの電波なのではないか?

別冊宝島編集部

PART 2 2001年依存の旅

PART ❸ パラノイア観光

PART ❹ 暴走海峡ミステリーツアー

PART ❺ 人権サイコパス！

表紙立体イラストレーション＝野崎一人
表紙撮影＝任博
本文写真提供＝小島義秀＋平山法行＋山田鎮二＋日本ヘラルド映画＋毎日新聞社
本文イラストレーション＝安芸良＋蛭子能収＋佐藤けろまん＋高橋製作＋丹波鉄心＋東陽片岡＋山野一＋山松ゆうきち＋山本タカト
本文扉写植印字＝木村勝昭（マリオ・アイズ）
表紙・本文デザイン＝中山銀士＋杉山健慈＋平澤眞佐子

PROLOGUE
狂ったのは誰だ

筒井康隆インタビュー

世界は精神病院！人間みな既知外!!

筒井邸には、なぜかサイコな連中が押しかけてくる。その撃退法は？　面白いガイキチはいるのか？
断筆中（インターネット上では解除）の文豪が説く、「自主規制」という疫病の巣！

聞き手▼大泉実成（ノンフィクション・ライター）
構成▼編集部

photo▶小島義秀

——今日は、別冊宝島のサイコ特集のためにいろいろとお話をお伺いできたらと思い、神戸のご自宅までお邪魔しています。ただ、ここで言うサイコとは、翻訳したうえに平明な言い方に換言すると、これすなわち「気違い」のことで……。

筒井 まず㋖という活字を作ってもらわなきゃいかんな（笑）。あるいは〈ガイキチ〉に言い換えるとか。我々が普通使っているのは、基地の外という〈基地外〉ね。あとは、これがうまく表現できていると思うけど、未知とか既知というときの既知という言葉があるでしょ。その既知の外の〈既知外〉。これ、素晴らしいでしょ。

大泉 それ、素晴らしいですね（笑）。

筒井 素晴らしいんだよ。これからずっと、この既知外を使おうと思ってる（笑）。

——今日びのメディアでは、既知外の話になると、病院や病気の文脈の中でオチをつけられることが多いと思うんです。たしかに、頭の病気を病気として認めてあげなければいけない、ということは理解できるのですが、ただ、そこにオチをつけられると必ず人権思想と結びついていく嫌らしさを感じます。これは、筒井さんが断筆宣言へ至った理由とも抵触すると勝手に解釈していますが、たとえば既知外をパロディにする小説があったとして、それが差別の烙印を押されると、だんだんそうした話はシック・ジョークになり、その後はアングラ化して最終的には個人の心の中に、漠然とした恐怖感や違和感だけが一人歩きするかたちで残っていくと思うんです。それは非常に不健全なことなんじゃないか。そうした不健全さを異化するのが文学・小説の仕事だと思うのですが、今日は、筒井さんが過去遭遇してきた既知外のお話と、それが小説に影響を与えたのか、与えたとしたら既知外のどんなところにインスパイアされてきたのか、そんな話をざっくばらんに伺うところから始められたらと思っています。

筒井 ほおー、わりと攻撃的ですね。これ、問題になりますよ。

大泉 最初に編集者が考えた特集のタイトルは「隣の『気違い』」だったんです（笑）。でも、さすがにそれじゃあ書店で売りにくいだろうからと、サイコにしたらしいですよ。

筒井 今のその「既知外」に変えたらどうですか、めちゃめちゃ売れたりして（笑）。

筒井家の安全保障策

大泉 筒井さんのエッセイ集（『笑犬樓よりの眺望』新潮文庫）を読んでいたら、㋖対策に、ご自宅の塀を高くするのにずいぶん費用がかかったと書いてあったんですが。「なぜ我が家の塀はかくも高いのか」という文で、ちょっとその下りを読んでみますと「そこで我が家の対策であるが、まず塀を三メートル半の高さにした（以前低い塀を乗り越えてとびこんできた奴がいるのだ）。百万円かかったが命には替えられない。それから門にはテレビカメラをつけた。（中略）それ以外の者はインターフォンで誰何（すいか）し、ファンだと言えば絶対に開けない」。

筒井 あの塀、ご覧になりました？ そのとおりになってるでしょ。

大泉 しかし、さすがに三メートル半はなかったですね（笑）。

筒井 実際は、二・五メートルぐらいですか。それだけあれば、飛びつけないですか

ら（笑）。

大泉　「低い塀を乗り越えてとびこんできた」ともありますが、それはいつ頃のことなんですか。

筒井　もうずいぶんたちますね。塀を高くしたりテレビカメラをつけたりした後も、二度ほど来てるんですよ。

大泉　その後は、テレビカメラで誰何しただけで追い返したんですか。

筒井　いや、そういうときにかぎって門を開けてしまうんですよ、保険会社の人間と間違えたりして。僕は一度も直接会ったことがなくて、対処したのはすべて妻です。入ってきてからハッと気がついて、慌てて内側のガラス戸を閉め、鍵かけて、ガラス戸越しにしばらく話をしたらしいです。あれは、関係妄想でしたね。僕の作品に書かれていることを通じて、自分と現実の僕に何か関係があると思い込む、という妄想ですね。

大泉　エッセイ集のなかでも描写されてましたが、自分の作品を筒井さんの自宅に送りつけてくるようなタイプが、まともに乗り込んできたわけですか。

筒井　それとは違いますが、自分の作品を送りつけてくる人はいっぱいいます。それに対して返事をくれないからと文句を言って、電話をかけてきて泣きわめくという人もいます。なかには何度も、原稿読んだかと、脅迫まがいの手紙を寄越した挙げ句に、「あの原稿は彼が自分のアイデンティティを追究したものなので、ぜひ返事してやっていただきたい」と、横から精神科のセラピストが口を挟んできたりするケースもありますね。河合隼雄さんにこのことを話したら、未熟なセラピストが患者と同一化したために社会的な常識を失ってしまった例だと言ってました。そういうことがありうるんですね。

大泉　セラピストが患者に巻き込まれた典型的な例ですよね。

筒井　それから、有名人妄想にかられて僕の家までやってきた堺の男性もいましたね。僕とつき合うには、自分も有名人でなければならないと思っているらしく、深夜の十二時にやってきて、「なんですか、こんな時間に」と応対に出た妻がインターフォン越しに怒ったら、「神戸の市内を横断してきたので時間がかかった」と言う。自分は『笑っていいとも』に出たし、タモリなんかとも友達でどうのこうのと。これは妻がインターフォンの問答だけで追い返してくれました。僕なら怒鳴りつけてるでしょうけど。この近所にも一人いましたね、自宅の門前で暴れ回った人です。

大泉　えっ、暴れ回ったんですか？

筒井　それは警官が来たから暴れたわけで（笑）。でも、警官呼ばなきゃ、家の中まで入ってくるから。

大泉　別のエッセイ集（『断筆宣言への軌跡』光文社）のなかに、「いつもガイキチ関係でお世話になっている垂水警察の担当者に頼み」とあるんですが、やっぱり決まった担当者の方がいらっしゃるんですか。

筒井　いや、決まった人がいるわけではないですね。転勤などでしょっちゅう代わりますから。警官なんていうのは、その既知外に道聞かれて、僕の家をわざわざ教えるんですから、地図まで書いて（笑）。妻が怖がりますから、そのたびに塀を高くしたり、門を頑丈にしたり、鍵を取り替えたりと、金がかかってしかたがない（笑）。

嫌な既知外

大泉　筒井さんにとって「こいつは面白かったな」という既知外はいましたか。

筒井　それはみんな、僕との仕事のつき合いがある人でね、それ以外の本当に面白い既知外には、実際には会いたくもないし、会いませんからね。でも、そういった人間に関しては、僕はむしろ本を読んでますから。有名な症例のほうがずっと面白い。そこらへんで見るのとはぜんぜん違います。このへんで見るのは、せいぜいブツブツ言いながら歩いている人とか、これは災害の後遺症なんでしょうけど、わあわあ号泣し続けている人とか、よくあれ疲れないものだと思うけど、一時間も二時間も街角で泣き続けている。可哀相ですけどね。それからこれは赤緑色盲があるのかもしれないけれども、少しボケているお婆さんで、とんでもないお化粧をして歩いている人もいますね。その程度です。

大泉　電話でアクセスしてくるタイプのなかにはいませんか。

筒井　年賀葉書を送ったのになんで返事をくれないんだと文句を言ってくる人はいますが（笑）、でも、そういうのはつまらんですね。

大泉　これは以前、僕がデータマンを頼んでいた子の話です。初めはぜんぜん気づか

筒井康隆氏

なかったんですが、ポイントをあげて調べ物を頼むと、それとは若干ずれたものを調べてくるようになったんですよ。あるとき、校庭に机と椅子で「9の字」を書くという事件が東京で起こったんですが、その首謀者のO君という人にたまたま十時間くらいのロングインタビューをしたんです。そのテープ起こしを頼んだら、そのデータマンの子、発病しちゃった。O君のことは、なんか変な奴だなあと思ってたんですが、じつは分裂病手前のボーダーの人で、病院に通って治療を受けていたらしい。分裂病の人って、こちらが話を引き出しすぎると、病状が悪化するというじゃないですか。

筒井　引き出してヤバイのは、本人ではなくてその話を聞くほうですよ。精神分析の医者に信じている奴がいますよね、分裂病は伝染する、ヘルペスみたいに皮膚から伝染すると（爆笑）。

大泉　そりゃ、新説ですね。心理的な転移はあるっていうけど、いくらなんでも皮膚感染は新説ですよ（笑）。

それで、仕事にならないから辞めてもらったんです。でも、二年くらい電話が続いた。どうやら、僕の家の電話が首相官邸と当時のアメリカ大統領、ブッシュのところに直結しているという妄想をもっていたみたいで。そいつは英語なんてロクすっぽできない奴なんだけど、ちょうど当時は、PKOで自衛隊を海外に派遣するかどうか議論が沸騰していた頃だった。彼はPKOに派遣すると、絶対世界は終わると思っていたみたいで、ある日、こんなメッセージが留守番電話に入ってたんです。「グッドモーニング、ミスターブッシュ」って（笑）。あれっ？あいつ英語が喋れたのかなと思って聞き耳を立ててると、「あの、グッドイブニングでも、いいんですけど」って日本語になった。たぶん喋ったあと、日本とアメリカの時差を考えたんでしょう。その後も日本語で、えんえん「PKOは止めてください」って喋り続けてたことがありましたよ。

奴は南の島の子だったんで、「シャーマンへの道」もあるわけだから、電話がくるたびに、とりあえずお前実家に帰れと説得してたんですけど、向こうは完全に飛んじゃってて。電話で喋ってたとき、「大泉さん、今、僕の目の前で何が起こっているかわかりますか」って言うから「何が起こってんだよっ」って聞くと、「（停まってる）車のナンバープレートの数字が転々と変わっていくんですよ。これはどういうことでしょうね」って（笑）。「それはお前の頭がイカレてんだよ」って、はっきり言ってやりましたけど。

筒井　そういったのは、悲しい話なんでしょうね。

これは、古い話になりますが、妻の友人に素晴らしい美形の女性がいた。母子家庭で家が貧乏だったのに無理して母親が彼女をお嬢さん学校に入れたんですが、年頃になっていろいろと縁談が来るのに、理想が高かったんでしょう、来る話、来る話、断っていた。それがいつのまにか、オールド・ミスと呼ばれるほどの年齢になってしまったわけです。焦り始めたんでしょうな、嘘つくようになった。「大会社の社長さんと結婚する」だの「有名な音楽家にプロポーズされた」だの言うようになり、少し頭がおかしくなったという噂が立った。当然、縁談もぴたりとなくなります。本人の話はますます肥大するいっぽうで、ある日とうと

う、二階の窓から道を歩いてる人にバケツで水をぶっかけて、病院に収容されてしまった。劣等感を過剰に防衛しようとして、おかしくなってしまったんでしょう。

大泉　自分の妄想に飲み込まれたんじゃないですかね。

妄想といえば、これ、私事で恐縮なんですが、僕のオヤジは典型的な中小企業の社長で、これがまあ、絵に描いたようなアッパー系のオヤジなわけです。「俺が俺が」という意識がとにかく強い。オヤジがそうだというわけではないんですが、その手の自己主張も、ある一線を越えると自分をその気にさせてしまうような妄想に飛躍することだってあるんでしょうね。

筒井　男というものには大なり少なり権力欲がありますけども、それが人並み以上に強くて、誇大妄想狂になってしまうにはまだ多分に正気が残っている、つまり既知外にもなりきれず、本当に権力をもつほどの甲斐性もなく、頭もさしてよくないとなると、悲しいことになりますね。こういった人間のことを、僕は昔『乱調人間大研究』(『暗黒世界のオデッセイ』新潮文庫収録)のなかで、乱調人間と呼びましたけどね。

ただ、僕の場合は、すべての人がちょっとおかしいと、そしてそのおかしいところがその人の個性だと見ていますから。どんな人だって、たとえば、いい仕事しているけれど、夜になると酒を飲んで暴れる。ア

ル中で有名になって、だけど昼間はいい仕事をしている。これ、アル中であることがその人の個性になっているわけですね。その人のちょっと変わったところを見ていると、その人がどういう人かわかるし、それも含めてその人の個性だということになる。逆に言えば、アルコールをぜんぜん飲めない人も、アルコール不堪症というんですか、それが個性になってるわけです。

人間みな、「病気」なんですから。僕は、文明だって、これすべて異常心理の産物と見なしてますよ。電話やラジオは分裂病、法律や武器はサディズム、地下鉄は肛門愛リビドーの産物（笑）。

まあ、人それぞれにサイコの世界があるわけでね、僕のなかにだってある。だから人を見て、まずこいつのいちばん面白い部分は何かと見るわけです。僕の場合はそうでないけれども、変な人を呼び寄せる人、あるいは相手の変なところを触発させる人がいるんですね、色川武大（阿佐田哲也）のようにね。僕は、もっぱら焚きつけるほうです。面白い既知外に会おうとすれば、誰でもいいから人つかまえて、そいつを狂気に追いやればいい（笑）。

けれど、とりわけ嫌なのがあって、自殺する奴、あれ嫌ですね。バーなんか行くと、女の子で傷見せて自慢する奴がいるんですね。「私、自殺未遂したの」って。あれ、何回でも何回でもやるんです。自殺が目的ではなくて、自殺未遂が目的という人騒がせな人たちですから。でも、未遂を繰り返しているうちに、いつ死ぬかわからない。これは、焦点的自殺ともいうんだけど、無意識では死にたいのに意識的には自分が自殺なんかしちゃいけないと思っている人が焦点的自殺をすると言われてますよね。マゾヒストのなかには、突拍子もない手段で死ぬ奴がいるんですよ。できるだけ苦しくて、しかもわざと死ににくい方法でね。

大泉　自殺もそこまでやればちょっと違ってくる、という奴ですね。

筒井　『乱調人間大研究』にも書きましたが（と本を取り出す）、回転している電気ノコギリに身を投げる奴（笑）。それから、これは映画の『気狂いピエロ』がそうなんだけど、ダイナマイトを全身に巻きつけて火をつける奴。真っ赤に焼けた鉄棒を喉に差し込む奴。燃えているストーブに抱きつく奴（笑）。池の中や冷凍庫の中で服を脱いで凍死する奴。風呂に首突っ込んで溺死する奴。これ、多いみたいですね。それから、鉄砲を込み入った方法でミシンに連結して自分を撃つ奴（笑）。これはエロティックなんだけど、自分の頭髪で首を吊る奴。ナルシズムがあるのかな。それから毒グモ飲み込む奴、というのもいますね（笑）。下着引き裂いたものとかズボンの金具とかを全部飲み込む奴。これは手が込んでて、自分の両手両足を数頭の馬に結びつけて、自分のからだ引き裂こうとする奴（笑）。石鹼溶かした溶液の中に身投げする奴。自分で自分を磔（はりつけ）にする奴。これはキリスト願望かな。自分で苦労して手製のギロチンを作って、それで自分の首切った奴もいる。

はっきり言えば差別ですよね

筒井　まあ、実際に何かに書いたことがあるけれども、もうキケロの時代から、キケロが「頭の病気はからだの病気よりも数が多く、しかもずっと破壊的である」と言っ

てるわけですね。作家はみなそれぞれ病気してるから、自分の病気のことを書き始めるとけっこう面白い。からだの病気ならば、結核文学なんてのがあるぐらいだし、心の病気ならば、作家のなかには既知外みたいな人もいるし、既知外そのものもいる(笑)。それは、なんて言うのかな、心の病気そのもののことを書くんではなくても、作品そのものが病気の産物ということは言えるわけですよね。

ただ、それを他人の目で見て書くということがどうもいかんわけですわな。それはからだの病気にしたってそうですね。いわゆる「病」と呼ばれるものだけではなくて、身体障害のあるからだも病気ですからね。それをことさらに、僕が今まで書いてきたということですよね。でも、早く言ってしまえば、僕の作品の場合は登場人物すべてが既知外なんです(笑)。だから、自主規制されたらもうどうしようもないわけでね。

ドタバタ書いてるときから、世界は喜劇の舞台であって、人間すべてドタバタ・タレントという考え方ですから。これ、言い換えれば「世界は精神病院、人間みな既知外」ということになっちゃいますよね(爆笑)。

大泉　筒井さんにとっては、たいていみんな既知外じゃないか、そうすると人間把握は、どいつが既知外かじゃなくて、どういう既知外かという領域に入っていくわけですね。いやあ、素晴らしい平等思想です。

筒井　平等思想もなにもね、これはだって、はっきり言えば差別ですよね。しかし、差別というのは、早く言えば、その発生のメカニズムからみても、やっぱり個々の人間が生きていく智恵なんですね。重病人の側へは寄らないというのも、自分が死なないための智恵ですよ。今、この近くの堺市で、O－157が騒がれているでしょ。それで急に海外旅行が増えて、海外へ逃げ出したり、わざわざ大阪へ食事に行ったりと、みな堺から逃げ出している。「引越しのサカイ」というぐらいで(爆笑)。

おそらくもう、差別は始まっていると思いますよ。僕の目から堺を見ると、面白いことに、あの街は差別を糾弾する団体の本拠地なんですね。フェミニズムの本拠地でもあり、黒人差別をなくす会も、堺です。その本家本元の本拠地で、大差別問題が起こりつつある。他人が差別されているのを擁護する立場じゃなくて、自分が差別される立場になってしまったわけです。

大泉　そうした団体の人たちにとっては、差別される立場を考えるいい機会になるんじゃないですか。でも、他人のことを擁護する感性ってなんなんでしょうね。

筒井　たとえば、身体障害者を擁護している団体があるでしょ。その連中が僕のところへ手紙を寄越したりするんですが、その文面を見たらヒステリックでですね、こんな奴らとても人権擁護なんていう仕事ができるわけないと思いますね。もう、めちゃくちゃ差別的なことを書いているわけです。

逆に、車イスに乗った連中は僕のファンが多いんですよ。以前、お芝居で各地を巡業したときのことですが、そういう人たちが劇場に来るんですよね、お母さんと一緒に。嬉しそうに握手を求めてきたり、サインしてくれと言ってきたりね。先日、雑誌の『通販生活』でいろんなアンケートを取ったんですけども、結局、僕に対して批判的なのは、そうした擁護団体の人や身体障害者の親。でも身体障害者自身は、てんかんの子もいたし車イスの子もいたし、一級の身体障害の子もいましたけど、みんな僕のファンですよ。

大泉　以前にホーキング青山という人を取材したんです。彼は四肢が完全に動かなくて、口だけで電動の車イスを操作するんですが、奴がとにかくお笑い芸人になりたくて、自分でホーキング青山っていう芸名まで名乗ってるわけです。そいつがいちばん嫌なのは何かっていうと、道端で会ったババアから「まあ、かわいそうねえ、大変ねえ、だいじょうぶう」って言われることで、「俺は赤ん坊じゃねえんだ」って怒ってましたけどね。

筒井　むしろ、そっちのほうがおかしいわけで、自分の気持に逆らって無理しながら言ってると思わなければいけないですね。たしかに、身体障害者が笑い者になりたがっている、ということも事実なんです。

身体障害者ばかりでやっている劇団があるんですよ。真面目な劇をやってるんだけれども、ウケようと思ってワザとギャグをやるわけです。それ、評判いいんです、観にいくと面白いから(笑)。ただ、それはなかなか公にはならないですね。新聞社の人たちも、そういった劇に招待されて観にいくんでしょうが、やっぱり心温まる作品でなければ記事にできないんでしょう。心温まる作品を身障者が演じたというのなら感動するだろうけれども、いくらその場では

笑っても、あとで自分を責めるわけでしょうな。これ、やっぱり自然に反してるわけですよ。

大泉　笑われたがっている奴らを、素直に笑っておいて恥じるわけですからね。

筒井　だから、演じてるほうは身体障害者かもしれないけれど、それを擁護したりしてるほうが逆にサイコであったりするわけです。

大泉　ババアの感性も、そうした新聞記者の感性も、あの気持ち悪さはなんとも言えないですね。評論家にもそういうタイプ、多いんじゃないですか。

文壇の中の関係妄想

筒井　評論家的サイコというのもありますね。評論家には、文章で書いたものと実社会とは別だと思い込んでいる連中が多いんです。たとえば、さんざん僕の悪口書いといて、僕を人非人扱いしておきながら、パーティで会うと「やあやあ」と言って嬉しげにそばへすり寄ってくる連中がいます。これは、日本の評論家独特の因習で、こちらが、仮に「お前は論敵だから話さない」と言ったならば、おそらく不思議そうな顔をするでしょうね。そうしてしまったほうが、自分たちにとって都合がいいからなのかもしれませんけどね。そうしないと、社会生活ができなくなるでしょうし。

大泉　とくに、筒井さんに論争をいどんでいた渡辺直巳のようなタイプの評論家、ああいう否定性が強い文章を書くタイプの評論家というのは、それを地で出したら、早晩社会生活できなくなるでしょうね。

筒井　それの言い訳として、論争してる相手に、「ややあ、論争してお互い原稿料儲かりましたね」と、問題を経済原則にすり替えるわけですな。

大泉　それに対して筒井さんはどう対処してるんですか。

筒井　呆れてます（笑）。だから、そういう、狭く言えば評論家、広く言えば文壇の世界というのもサイコですよね。文壇にはいろんな人がいて、文壇マスコミもいますし、文壇ジャーナリズムもいますし、このなかでは、僕はまともなんだけど、評論家にかかると、むしろこちらのほうが既知外にさせられてしまうんですね。

　柄谷行人（現代思想家・評論家）もね、てんかん協会との一件があったとき、「筒井さんがあんなに差別問題に対する意識の希薄な人とは思わなかった」と言うわけです。ぜんぜん違うんですよね。自主規制の話なんです、こっちが問題にしているのは。中上健次と柄谷の三人で文芸家協会脱退したときもね、みんなその場にいた人は覚えてるんだけども、最初僕が脱会しようかなと言ったら、中上健次が「うんしよう」と頷いて、それで柄谷も誘ったわけですよ。彼は「僕は会費をぜんぜん払ってないので、脱退する資格があるのかないのか」と言ったけども、いちおう会員ならあるんだと無理矢理仲間に入れたんです。

　その後、彼がどこかの座談会で発言しているのを読んだら、「あれは私が言いだしたことで」と喋ってる。困っちゃうんですよね。功績を横取りしようとして僕が嘘ついたみたいな感じになってね。書いている作品は凄いんでしょうが、現実のレベルでは明らかな事実誤認を平気でする。天才はそういうとこがあるんですね。我々仲間の褒め方で言えば、「ああ、えらいえらい、天才と紙一重だ」ということになる。これ、よく考えたらじつは既知外ってことじゃないかって（笑）。

――特に文壇と関わりのある評論家の世界って、まるで関係妄想のような「あいつが陰で俺の悪口を言っている」みたいな、そんな話ばかりが飛び交っているところですよね。

筒井　非常に政治的であって、その政治的なことを文学の批評言語でやるわけです。それが彼らの村の言葉なんでしょうけども、それは早く言えば、外部の人間を阻害するヤクザの隠語と同じなんです。ただ、ヤクザは新聞に文芸時評書かない（笑）。それが困るんですよ。一般の人、何がなんだかわかんない。

大泉　それをさも社会性があるようなフリをして書いてくるわけだから、そりゃあ実害大きいですよね。

筒井　先ほど話題に出た身障者にしろ、既知外にしろ、つまり差別に関係する領域のテーマも、ああいった文芸批評の隠語を使って展開すれば何書いても許される、そこで社会問題として論じてるフリをすれば、具体的な差別用語をいくら出しても、どこからも糾弾されない。糾弾されるものとされないものの違い、つまり自主規制されるものとされないものの違いは、非常に虚構的なんだと思いますね。

断筆宣言解除への軌跡

筒井　僕はいろんな人からなんやかや言われますけど、あまり腹立たないですね。最後は僕、勝つことわかってますから。

もうとにかく出版社は、のきなみ僕の原稿が欲しくて欲しくて仕方がないんです。しかし、最終的に自主規制を解除しても、被差別団体のほうが、僕をぜんぜん度外視して、出版社に直接言ってきた場合にどう対処するか、という点をまだ解決しなければならない。抗議を受けた出版社が「まず筒井さんを通して」といくら言っても、「いや、わしらそんなこと知らん。出版社というのは出版権をもっているんだから、出版したのが悪い。その話がまとまってから筒井には話す」というケースが今まで多かったけれども、それがあったらどうするかということです。向こうは、まず弱いほうへ弱いほうへ行きますからね。僕に直接言ってきたら、てんかん協会と同じで、その団体の売名活動であると思われ、悪者になってしまいますしね。

大泉　そのへんが煮詰まってくれば、断筆宣言解除となるわけですか。

筒井　そうですね。当分は締切りに追いまくられなくとも大丈夫なくらい、小説も書きためてありますから。

——出版権の話にからめて言えば、それに

対する抗議は、「お前ら取り次ぎをとおして世間に害毒ばらまいている」ということになるんだと思うんですが、問題は、それを受け取った読者がどう読んでいるかだと思うんです。たとえば「気違い」と記述されている本を読んだ人が、それを読んだから病者に対して敵意をもった感情を抱くようになるのかというと、そんな単純な話でもないわけですから。プレッシャーをかけてくる人たちの感性には不思議なものを感じます。その急先鋒に立つ「擁護者」の感性はもっとわからない。

筒井 罪障意識みたいなものがありますね。たとえば、ジャーナリストの本田雅和にしても、自分は以前人を差別した、それを今恥じている、というんで朝日新聞社に入社して、あんな差別オタクみたいになってしまった。それがいつのまにか本気になったんじゃないかな。目つきが違ってるもん。もう、気が狂ってる（笑）。

——筒井さんの言葉をお借りすれば、「自然に反している」状態を、抗議・糾弾でどこまで維持できるのか、言い換えれば自主規制でどこまで維持できるのか。それは一種の抑圧なんじゃないかと思うんです。この抑圧が行き着いた果ての世の中に対する創造力の貧困さ、「貧困なる創造力」でしょうか、それを解毒していただけるような作品がまた読める日を心待ちにしています。

（一九九六年八月一日収録）

大泉実成氏

サブリミナルからの「遊体X」！

1

悪魔のような精神科医

医者もひとつの商売ならば、おのずと獣道が開かれる――。
玉買い！・買い付け！・手配師！
これがいまどきのアングラ精神医療!!

夏原武
（フリーライター）

photo▶山田鎮二

「面白い話があるんだけど」

精神病院入院患者のリストが売買されているのではないか、という編集部からの情報の真偽を調べている過程で、闇ブローカーの世界に明るいM氏に連絡して要件を話したところ、それは知らないと言いながら、前記のように切り出してきた。

「リストの売買というやつとは違うと思うんだけどね、入院患者の帳面上での移動ってのがあるんだ。精神病院というのはさ、入院患者を増やさないと儲からないじゃないの。だからね、仲間内で入院患者を動かして儲けてるという寸法なんだよ。玉買いって言うんだよ(笑)。そうそう、ガソリンなんかでもやってるし、ま、もっと簡単に説明するなら、中古車業界の持ちつ持たれつに近いんじゃないの。いわゆる業者買いというやつだよね。まあ、私の話だけじゃなかなか信じられないだろうし、面白くもないだろうからさ、医者や関係者を紹介するから、取材してみるといいよ」

たしかに興味深い話だが、名ルポと語り継がれる大熊一夫の『ルポ・精神病棟』が書かれた時代ならいざしらず、今どき、いくらなんでもそんないい加減な話があるのだろうかと、筆者は半信半疑で取材を始めることになった。

買付け人と手配師

M氏からの紹介で、最初に会ったのは都内にある某開業精神科医のK医師だった。入院設備もなく、精神科医というよりも最近流行の神経内科、あるいは映画で見た精神分析医といった趣の院内。診察室もあまり病院然としておらず、患者はソファにくつろいで受診するなど、アメリカン・スタイルを採っている。

K医師は四十代手前で、やや腺病質な感じのする面立ちだが、語り口はソフトだし、少なくとも優秀な医師というイメージを与える人物だ。

「宇都宮病院はご存じですよね、あの患者虐待や不正受給で問題になったやつ。私ね、あそこに関係してたんですよ。いや、常勤とか非常勤の医師だったというわけじゃないんですけどね、大学の関係でつき合いがあったということにしておいてください。それでまあ、現在はこうして開業してるわけですが、正直言いましてね、日本の保険システムでは、注射を打ったり、薬剤を投与したりしなければ医者はやっていけないんですよ。精神科で本来いちばん必要な、患者と信頼関係を作ってカウンセリングするといった部分に関しては、ボランティアみたいなものなんです。だから、精神科医で儲けようと思ったら、宇都宮病院方式しかないんですよ(笑)。

いや、あれはたしかにやりすぎかもしれませんけどね。だけど、じゃあ現在はそういうのがないのか、と言えばそれは嘘になりますよ。もちろん、開放病棟を増やして親身にやっている病院も増えているんで、全体の比率から見れば少なくなってますけどね。ただ、ある意味では、ああいう事件があった後のほうが巧妙になったとも言えるんじゃないですか」

K医師のところでは、通院治療は別として、入院加療が必要な場合には当然、入院施設のある病院を紹介する。そして実は、このときのキックバックが大きいという。

「入院加療が必要かどうか、決めるのは誰

ですか？　医者ですよね。ま、私はそれを積極的にやってるというだけですよ（笑）。本来なら通院でいいかもしれないという人でも、入院していただいちゃうわけです。だけどね、そのほうが早く治るという説もあるんですよ。いや、べつに治るかどうかはどうでもいいんだけど（笑）。

精保（精神保健福祉法：精神保健および精神障害者福祉に関する法律）にはね、本人の同意がなくてはいけない、と書いてありますよね。つまり入院は任意である必要がある、と。例外としては、指定医が入院措置が必要であると判断した場合ですけどね、そんなの少ないんですよ。ほとんどは任意入院ですよ、形式上はね。思春期にちょっとおかしくなったような患者なんかは、親を説得すれば本人も納得しますしね。アル中なんかは周りが辟易してますから、どうにでもなりますよ。任意入院の正体なんてのはそんなもんです」

指定医というのは厚生大臣が指定するもので、正式には精神保健指定医と呼ぶ。各都道府県に設置が義務づけられている都道府県立精神病院に常時勤務している。精神病室がある病院には必ずいなければならない精神科医でもある。

「だけど宇都宮病院がそうだったようにね、厚生省の指定基準なんてのは大甘ですから。しかも、設置が義務づけられてる病院のほうにしたって、私立病院を代替えにしたほうが、自治体の負担は少なくなるから喜ぶわけですよ。となれば、これも経営ですからね、金儲けに走る人間が出たっておかしくないってのが分かるでしょ。

で、私としては患者を紹介して手数料をもらうわけですけど、これ、直接どこの病院にというのは私が決めるんじゃないんですよ。間に入っている人間が振り分けるんです。私や仲間の医者は手配師と呼んでますけど（笑）。全部でどのくらいの病院があるのかは知らないけど、かなりあるそうですね。うちだけでも十カ所ぐらいには割り振ってると思いますよ。

まあ、とにかく一度入ったら出るのは大変なんですよ。退院して差し支えないかどうかを決めるのは、医師だけですからね。本人や家族がいくら言ったところで、医師がダメと言えばそれまででしょ。強制的に入院させられた場合なんか、もうほとんどアウトですね、人生終わりですよ。だから、もし知り合いを精神病院に連れていくんなら、しっかりと調べて評判のいいところを探したほうがいいですね。私みたいな買付け人（笑）のとこに来ちゃだめですよ、絶対」

任意で入院した患者は自分の意志で退院できると法は定めているものの、実際には医師から、まだダメだよと言われると、ほとんどそのまま入院を続けることになるそうだ。だから長期間の入院患者が増えるわけだし、そうなれば病院の授かる利益も増すという仕組みになっている。

禁治産者生産工場

自嘲しながら買付け人と自分を呼んでいたK医師だが、その話を聞くと、彼から患者を、いわば「買い受けて」病院に送り込んでいる人間がどうやらこのシステムのキーを握っているようだ。

「まあ、ブローカーということだよ。需要と供給ということでね、病院を維持するためにどうしても患者が必要なところに、患

illustration▶山本タカト

者を送り込むというわけでね。前に紹介した臓器ブローカー（『別冊宝島』２３８号参照）となんら変わらんよ」と言うM氏の紹介で、買い受けている人間と会うことになった。

「売り買いという意味では、Mさんの言うとおりブローカーでしょうねえ。ただ、それだけじゃないんだよ。つまりさ、新規の患者を集めるのも大切だけど、もっと大切なのは長期にわたって入院している人間を効率良く動かすということだ。玉？　そうそう（笑）、よく知ってるじゃない。これがいちばん大切な仕事かもしらんね。

扱ってる病院は今どのくらいかなあ。数十というとちょっと大げさだなあ。十数カ所ということにしといてください。地区ですか？　それもあんまり言うわけにはいかないんだけど、北から南まであるわね。入院設備のある病院だから、指定医がいるということになるけどね、そんなの調べたって分からないようになってるんだよ。

つまりね、全部が全部、精神病院というわけじゃあないからね。普通の総合病院の内科に押し込むこともあるんだよ。この場合は、バンバン薬出してね、毎日点滴してそっちで利益が出るようにしてる。精神病患者ではない扱いだからね。でも、逃げられないようにしてるし、逃げられるような場所にはないから、そういう病院は（笑）。日本中の地図ひっくり返して探してみればいいんじゃない、ハハ。

ま、それはいいとしてね、こういう仕事が飯の種になりだしたのは、そんなに新しいことじゃないんだよ。うんうん、あの事件の前からもうあったんだ。私はね、もともとは薬のプロパーだから、そこから始まったのよ。サンプルどばっと配って喜ぶような医者とのつき合いが最初だからね、金儲けの好きな奴なんてのはいくらでも知ってるわけ。

それで、いろいろと考えた結果、病院というのは入院患者を増やして薬漬けにする

だけど、任意で入ってる奴だって、家族がひどいから。そういう例をちょっと話そうか。これはね、軽い躁うつの奴だったんだけど、躁病のときにね、酒飲んじゃあちょっと暴れてたのよ。長男で、家は商売やってるから普段はいいんだけど、その時期がくると商売相手のところに行ってね、喧嘩してきたり、注文しといてキャンセルしたりとか無茶してたわけよ。

さすがに親が困っちゃってね。最初は神経内科みたいなところに連れていったらしいんだよ。ほら、精神科ってのはいまだに外聞悪いじゃない。しかも地方で商売なんかやってるとよけいね。身内からキチガイが出たなんてことになると問題でしょ。だけど、結局はどうしようもなくなって精神科に連れてったんだけど、そこがまともな病院だったから(笑)、通院治療で充分ってことになったわけ。

ところが薬は飲まないし、相変わらず酒飲んじゃ大言壮語するし、しまいには株だ相場だって始まっちゃって、こらいかん、と。で、うちのネットワークに引っかかってきたわけね。もう、そりゃ私とつき合いのある医者だもん、これは入院しなければ駄目です、ってなもんだよ。家族も家族でさ、次男に跡継がせようと思ってるからね、渡りに舟だろ。本人なんか、なんにも分かってないんだからね。人間ドックだって騙して連れてったんだから、笑うだろ。

入院したのは、近畿地方のある病院なんだけど、じゃかじゃか薬かぶしてね、もう病状はどんどん悪化するわけ(笑)。なにしろもともと素質抜群だろ、こりゃ止まらんてやつだ。結局、禁治産者になってね、まだ入ってるんじゃないかな。面会に来るたびにひどくなってるもんでさ、母親なんかは泣くらしいんだけど、帰り際には医者に『よろしくお願いします』だから、ひどいもんだよ」

どっちがひどいかはともかく、いまだに昔の座敷牢のような感覚で、身内の厄介者を追い込んでしまうような古い人間がいるということなのだろうか。

再びM氏に連絡を入れ、患者を受け入れている病院について尋ねてみた。

「まあ、詳しいことは実際に入院患者を扱ってる医者を紹介するから、そいつに聞けばいちばん儲かるわけだから、それをうまく商売にできないかな、と思ったのよ。なかでも精神病院ならさ、入院が無期みたいなもんだから(笑)、こりゃいい、と。

で、あちこち声かけて始めたわけだけど、患者を見つけることよりも、バランス良く病院に渡すほうが難儀だね。どこだって、儲けたい病院は患者が欲しいんだから。贔屓できないしね、難しいんだよ、これがなかなか。そこで考えたのが帳面上でもいいんじゃないのか、という方法でね。患者を移動させたことにしたわけよ。半年とか一年単位でね。これでかなり不満が解消された(笑)」

扱いは完全に物品と同じで、梱包資材を支店間で動かしては裏金を作ったりしている、商社と変わるところはない。

「ただしね、虐待するような病院はダメだよ。だって、そうじゃない。事件になっちゃ困るんだからね。だから患者に対して薬をバンバン出すのはいいし、検査もどんどんやればいい。でも、虐待はいかんのよ。え？それも虐待だろうって？　う～ん、まあ長い目で見ればそうかもしらんね(笑)。

ばいいよ。面白いと思うよ、実態は。ただ、さ、ああいうルポが出たりしたから、偽装入院だけは注意してるよ。普通の、というか、まともな精神病院に体験入院するのは簡単でも、潜入するのは昔よりかなり難しいみたいいよ。あんたは大丈夫、ちゃんと話しとくから。内部も見せてもらえると思うよ。でも、そのまま出てこれなくなったりしてね（笑）」。

「キチガイ」好きの行政担当

後日、彼に紹介された病院を訪れることになった。その病院は、外観は病院らしく、白い壁面がシンプルな、冷たい感じの建物だった。どこといって特徴はないが、強いて言えば扉が高いことと、入り口に警備員がいて、いつも門が閉まっているのが印象的だ。筆者の実家のそばにも老人ホームがあって、たまに痴呆気味の老人が脱走したりして騒ぎになることがあるが、それでもちゃんと門は開いている。

受付で、M氏から紹介されたT医師に連絡してもらい、応接室でしばらく待つ。や

ややあ、と妙に明るい声で入ってきたT医師は、いかにも如才ない感じ。医者というよりも商売人といった風貌だ。

「え、出られなくなる？　大丈夫ですよ。Mさんに脅かされたんでしょ、ハハハ。約束さえちゃんと守ってもらえればいいですよ。場所を明かさないこと、固有名詞を出さないこと、この二つです。それさえなけりゃ、こんなのは与太話みたいなもんですから。

うちはね、指定医がちゃんといる病院ですけどね、常勤はしてないですよ。いや、そりゃ違反だけど分かりゃしませんよ。それなりの手当てはしてますからね、県にも役所にも。前の県の担当者が困った奴でね、キチガイ見るのが大好きっていう人だったから(笑)、その人のときなんか、よくここでパーティーやりましたよ。

患者を集めてね、カラオケとかやらせるんですよ。でも、ちゃんと歌えるわけないでしょ？　それが面白いと言ってね、酒飲みながらゲラゲラ笑ってるんだから困った人ですよ。ま、たしかに面白いですけどね。いくら歌を歌うんだよと言っても、自分の話とか始めちゃうのがいるしね。

『僕はここになんでいるんだろう、何もしていないと思うけど、そういえば昨日はお腹がとっても痛くて、やっぱり僕は病気なのかなと思ったけど……』なんてのを絶叫調でやるんですから(苦笑)。それで、急に途中から歌いだしたりするんですよ、全然違う歌をね(笑)。なかには途中で泡吹いて倒れちゃうのもいるし、そら凄いですよ。看護人にちゃんとガードはさせてるんですけど、スリリングでしたねえ」

治さず死なさず

こういう病院に入ったら終わりだな、と思わせるに充分な話がさらに続く。

「最近ね、実験的にやってるのがレーザーなんですけどね。ええ、レーザー光線。これの波長をいろいろ変えて、患者の目を照射してみたりするんですよ。何が見えるか訊いたり、脳波を取ったりね。

いやあ、人体実験と言われるとそうかもしれないけど、私の恩師がこういうのが好きでねえ。断るわけにもいかないんですよ。恩師ってのは大学教授なんですけどね、新しい治療法を見つけるのが趣味みたいな人で、けっこう有名ですよ。レーザーだけじゃなくて、コバルトとかもやりたがるんでね、ちょっと危ないですよ。ま、ちょっと病室のほうを見ながら話続けましょうか」

T医師の案内で、応接室から病室へと向かった。

「ここが大部屋ね。ほら、いっぱいいるでしょ。いや、大丈夫、ここはおとなしいのしかいないから。ちょっと入ってみます？いい、あっそう。べつに大丈夫なんだけどなあ。みんな薬もちゃんと飲んでるから、おとなしくなってますよ。で、まあ、こういう部屋が四つばかりあってね、あとは閉鎖病棟というやつですね。大部屋だって管理は厳しいから、実質的には閉鎖病棟と変わらないけどね。ここから閉鎖病棟になります。個室ですから」

頑丈そうなドア、鉄格子こそはまっていないが、ちょっとやそっとでは割れそうにない窓ガラスが威圧的だ。中に入る患者は、べつだん汚物に塗れているようなことはないものの、膝を抱えてうずくまっていたり、

頭を常時左右に振りながら何か口ずさんでいる者、四畳くらいのスペースを行きつ戻りつする者など、やはり尋常な雰囲気ではない。

「暴れるのもいますけど、そういうのには薬を飲ませれば落ち着きますしね。それでも駄目なら拘束衣を着せればいいんですよ。完全にいっちゃってる奴は別だけどね。うちの拘束衣は刑務所の皮ワッパを参考にしてあるからね、苦しさも半端じゃないですよ」

皮ワッパというのは、囚人の懲罰などで使われるものだが、両手を背中に回し、上下から交差させて固定させるため、その苦しさは筆舌に尽くしがたいとも言われている。かつて体験者から聞いた話では、息が苦しくなり、ろくに眠ることもできず、衰弱するという。

拘束衣というのは、たしかに自傷他害の恐れがある患者のいる精神病院では必須アイテムではあるものの、ここのように苦痛を与えるのが目的になっている例は初めて見た。試しに着けてみたが、数分と着けていられないほど苦しい。

「いや、だからね、殴ったりなんてことする必要はないんですよ。そういうね、あとで傷が残るようなマヌケなことは、どこもやってないでしょ、今。ある意味じゃね、大切なお客さんなわけですから、長くいていただく必要もあるわけで(笑)。生かさず殺さずじゃないけど、治さず死なさずかな」

実験のウワサ

長居は無用と、早々と帰ることにした。ちょっと呆れるほど、医師としてのモラルもくそもないといったT医師だが、彼と同期で現在は大学病院に勤務している人物から話を聞くことができた。

「あそこ行ったんですか。うーん、どうしてああなったのかなあ。彼はね、僕なんかよりも優秀な医者だったんですよ。ただ、ちょっと研究熱心過ぎるところがあってね。えっ？　そうそう教授の影響かもしれないけどね。だから、治すとかなんとかよりも、どうして狂うんだろうとか、狂い初めはどうなのかとか、障害のある人間に対してこういう刺激を与えるとどうなるのか、そういったことに興味が強かったみたいですね。そこへもってきて、彼にしてみれば大学に残れなかったもので、どこかタガが外れてしまったのかもしれませんね。そりゃ大学に残れば、いろいろ研究はできますし、データも集まりますから」

こうして患者がベルトコンベア式に送り込まれていくわけだが、この手の精神病院というのは、実は大学教授などから好かれているという話がある。なぜなのか。それはかつて大学で講師をしていた、O氏の口から聞くのがいいだろう。O氏は、T医師の同期生から紹介された人物だ。

「精神病というのは、まだまだ分からないことが多いんですよ。ある意味じゃ、なんでも精神病にしちゃうこともできますからね。日本ではまだ、正式に裁判などで認められてないですけど、多重人格なんてのもそうでしょ。あれは、アメリカの医者が創り出した病気だという説もあるんですよ。つまり、芝居のうまい奴に騙されたにすぎない、というね。

人間なんてのは、ちょっとしたことでがらりと人格が変わることは珍しくもないし、それは多重人格なんて大げさなものでもないでしょう。感情が高ぶっていた、あるいは逆に落ち込んでいたというだけでも、普段のその人とは大分違いますからね。ともかくですね、もっと研究しなければならないことが多いのは事実なんです。そうなると、サンプルデータはたくさんあったほうがいいのは言うまでもありません。

だけど、今でも精神科に行くのは抵抗がある人がほとんどでしょう。本当なら精神科でしっかりと治療を受ける必要があるはずなのに、神経内科あたりですまそうという人も多いしね。ところが、ああいう病院(T医師がいるような病院)ならば患者はたっぷりいるし、一例報告ものに近い(珍しい)患者も多いわけです。それはもちろん、最初からそうだったのか、あそこでそうなったのかは分かりませんけどね。

でも、それはどうでもいいんですよ。ようはサンプルとして価値があるかどうかですからね。そういう患者を連れてきてもらったり、こっちから行ったりしてね、いろいろ実験したりするわけですよ。脳波はもちろんですけど、CTなんかね。いや、正

直言えば、脳を見たいんです、いちばん(笑)。中国では針麻酔を使う、開頭手術がありますけど、ああいう形が理想ですねえ。意識はしっかりしている人間の脳を刺激できるわけですから。私はやってませんけどね、そういうことをやった医師もいるという話ですよ」

学究の徒は世事に疎しというか、この冷たさは尋常なものとは思えない。それはともかく、最後の人体実験の話には興味がある。人間の精神などと言ったところで、心というのはあくまでも脳にあるわけだから、狂うということはその脳に欠陥が発生していることに他ならない。となれば、内臓が悪ければ開腹するように、やはり開頭するというのは筋としてよく分かる。が、脳腫瘍や脳梗塞などの病を治療するためならいざしらず、刺激を与えて反応を見るために脳手術を行うのは、これはどう言い繕っても、実験ということになる。

○脳味噌スライス

再びK医師に連絡をとり、この話をして

みた。

「そんな話まで取材したのか、しょうがないなあ。あのね、それはもともとはね、入院中に死んだ患者なんかを強制的に献体させるシステムがあるわけ。もちろん、遺族の了承はもらってるよ。医者が見たがるのは、他の部分はどうでもよくて、脳味噌なんだよね。病理検査だのなんだの、脳味噌をスライスしてみたりするやつ。それが精神病者の脳ということになれば、価値があるんだろうな。

Tさんって人のとこでやってる視神経に刺激を与えるとかいうのもそうだけど、あんまりこのへんの話はしたくないなあ。針麻酔ねえ、それも聞いたことはあるけど、本当かねえ。あ、そう言えば、ある病院で中国から研修医がたくさん来てたことがあったなあ、あれかもしれないな」

渋るK医師をなんとか説得して、その病院にいたという医師の連絡先を聞きだした。ただし、残念ながら電話での取材となってしまったが。

「針麻酔で脳に刺激を与える？　ああ、それ、ちょっとズレて話が伝わってますね。たしかに中国のほうから研修医を受け入れたのは事実ですけど、公式にではありませんよ、もちろん。記録なんか残ったら困りますからね。

そのときに、向こうでも精神病に関してはあまり進んでないようで、いろいろやったのは事実ですよ。だけど、その針麻酔うんぬんというのはちょっと違いますね。いや、実際に手術を行ったことはありますけど、それはある患者に脳腫瘍ができて、それが原因で障害が出ている例がありましてね。しかも特異体質で麻酔を打つと危なかったんですよ。それで、ちゃんとした脳外科医も呼んで、針麻酔なら体質的にも問題ないだろうということでやったのはあります。

ところがね、これちょっとマズいんですが、手術に失敗して、亡くなったんですよ。そのときに、せっかくだから、というのもちょっとマズい言い方だけど(苦笑)、いろいろと検査したのは事実ですね。もうずいぶん前の話ですよ。生きてる患者の脳をいじったわけではないですからね、言っときますけど。

だいたい、そういう形で脳をいじったところで、意味がないとも言われてるんですよ。そりゃね、昔はロボトミーなんてのがありましたけど、今はねえ。もちろん、脳そのものを検査することも重要ですよ。しかしCTとかもあるわけだしね。脳の委縮なんてのはそういうので充分分かるし、そもそもレントゲンでも分かりますから」

どうも話に尾鰭(おひれ)がついていたようだが、この話もどこまで本当のことを言っているのかは疑わしい。生きている人間にさまざまな処置を施してこそ意味があることは、ナチスや七三一部隊の例からも分かる。そうした実験が医学の進歩に貢献しているのも、また事実ではある。もちろん、許されることではないが。

それでも、患者をサンプルとして大学に連れていったり、亡くなった患者の脳を提供したりというのは、金銭授受以上の効果となっているのは間違いないようだ。前出の元大学講師O氏も言う。

「そりゃ、大学と深い関係になってれば、(病院を)権威づけしやすいし、顧問なんかにずらりと有名どころを並べることもできるでしょ。もちろん、役所に対しても効果

はありますよ。権威に弱いという意味じゃ、役人がいちばんですから(笑)。双方にメリットがあるわけですよ。こちらは実験やデータ、向こうは安全保障というね」

酒を飲ませるアル中治療!?

ここまでは、医者や仲介者の話をずっと聞いてきたが、実際に治療を受けた側の話も紹介しなくてはバランスを失する。これがなかなか進捗しなかったが、ようやく、ひとりの男性に会うことができた。現在は、清掃員をしているJさんである。四十歳というが外見は還暦に近い。

彼はアルコール中毒だった。それもかなり進んでいて、筒井康隆の小説ではないが、小さな行列が見えたりする「震顫せん妄」の状態に陥るまでになった。

Jさんは周囲の勧めもあって精神科を訪れた。もちろん中毒を治したくて行ったわけだ。そのとき三十歳だったというから、今から十年ほど前になる。そして即日入院ということになった。以下は彼自身に語ってもらうことにするが、Jさんは言語障害

気味になっており、彼の言うままに言葉を再現しても伝わらないので、整理してある。Jさんとの会話は大変困難であったことを付記しておこう。

「あー、最初はですねえ、アルコールやめるには病院に入っちゃえばいいかなあ、そんな簡単な気持だったなあ。それも簡単に外出できるような病院じゃあ駄目だから、厳しいところに行くのがいいだろうなあと思った。だけど全然違ってたなあ。怒られてばっかりいたし、薬もどんどん飲まされて、なんかしらないけど眠って検査されることも多かったしねえ。

　もっとひどいのが、酒飲ませるんだよ、おれに（笑）。お前、飲むとどうなるのか、飲んでみないと分からんだろ、いいから、これ全部飲んでみろって。焼酎の五合瓶とか出すんだよ、医者があ。おれはやめるために来たんだ、と言ったら、医者の言うこと聞けとかってまた怒られてなあ。飲んだ飲んだ、うまかったよ（笑）。そしたら、でもまた変なものが見えてきたなあ。おれがよく見たのは、あれだ、虫だ、虫。昔から虫嫌いだったから」

　断っておくが、Jさんは別に知能障害があるわけではない。ちゃんと大学も出ている。話し方がそうなったのはアル中になってからで、もっとひどくなったのは入院してからだ、と言っていた。

「でなあ、虫が見えますと言ったら、お前、虫なんかどこにいるんだ、とかまた怒られて。その後もときどき飲まされた。飲んでる状態で、なんかレントゲンみたいなもの（CTか？）されたり。うん、そういう状態でどうなってるか見るのが大事だと言ってたな。

　入って一年くらいはずっとそんな感じで、だからなかなか治らない。それから大学のえらい先生のところにも連れていかれたけど、ここではとにかく検査ばっかりで、薬飲んで、検査して注射してだったなあ。で、病院にまた戻って、毎日薬飲んで、あとは作業してた。もう、その頃になるとなんか頭がボーッとしちゃって。今もボーッとしてるけどさ（笑）。難しいこととか考えるのが駄目になったし、手もうまく動かなくて、疲れたなあ。

　殴られたか？　あ、そういうのはない。なんか古くからいるんだという看護人さんが言ってたけど、お前らはいい時代だよなあ、昔ならバットに電気だなんて言われたよ」

　Jさんは話をしているのだが、視点が定まらず、からだをつねに揺すっている。それも、癖というレベルではなく、テーブルの物が倒れるほどの揺すり方だ。

「こういうふうになったのは、薬のせいだと思うんだけどなあ。親が早くに死んでたから、おじさんがたまに来てくれたんだけど、なかなか出してくれなくて。酒は飲みたいと思わなくなったよ。でも、頭がボーッとしてるから、はっきり物が言えなくて、まっすぐ歩けなくて、そういうのは出せないと言われた」

　だが、彼は退院できたのだから、まだ良かったのかもしれない。そのおじさんにしても悪意はなかったのだろうが、アル中の甥というのはやはり厄介者だったのだろう。

治すと壊すが紙一重？

　しかし、アル中患者に酒を飲ませて検査

をするというのは初めて聞いた話だ。じゃあ、シャブ中ならシャブを打ってやるんだろうか。再び、前述の「買い受け人」が語る。
「かもね。分からんよ、何するかは。それはこっちの範疇じゃないし。ただ、長年医者とつき合って思うのは、治すというのと壊すというのは紙一重ということだよなあ。治すために注射してるのか、注射するとどうなるか試すためにやってるのか、分からんもの。

精神病というのは治る病気であるし、完治しなくても通院していれば社会生活は営めるというのが本当だろう。だけど、そう思わない医者もいるということだよ。開放的な治療を行って千人治したとしても、それが基準になるとはかぎらない、と言ってる医者もいたしね。

これから？　続けるけど、これからは老人のほうがいいかもしれないな。老人を預かるというのがいちばんニーズはあるわけだしね。痴呆症なんかだったら、精神病院でもいいだろうから。俺は人非人かもしれないけど、そういうのを求めてる人も多いのを忘れないで欲しいね。本人のことは騙してるし、ある意味じゃ監禁に近いかもしれないけど、家族が了承してるってことだね。家で面倒見きれなくなったから、頼むから預かってくださいという例も多々あるということだよ。需要があるからこういう商売してるわけでね、ま、もちろん言い訳だよ、言い訳」

本来ならば、Jさんが入っていた病院へ取材に行きたかったのだが、これはどうしても実現しなかった。また、暴力団の介在という点については一部でその痕跡が見られたものの、大がかりな話とまでは言えなかった。ただひとつだけ、こんな例があった。それは自分のところの組員の名前をK医師に貸し、入院患者の頭数に加えているという話だ。まだまだ書くべきことはあるのかもしれないが、紙幅の関係もあるし、ここで筆を置くとしよう。

【『囚人狂時代』外伝】塀の中の発狂する面々

「ギエエエエ！」「ウキキキキキー！」
クソ塗れ、血塗れ、ヘド塗れで
狂っていく囚人たち。
その先のニッポン、
八王子医療刑務所精神舎へといたる道のり！

見沢知廉（作家）

かつて宇都宮病院は、人権関係者の間などで「北関東医療刑務所」と呼ばれていた。

当時、私はまだ模範囚で監獄内の工場に出ていたのだが、ある日、食堂のテーブルで「病院当局は例えば、〝人間杭打ち機〟と称して患者の胴と足を縛って天井にぶら下げ、何人かがその縄を引っぱってかけ声とともに、吊り下げられた患者の脳天を地面に何度も思いきりぶつけるのであった」という新聞記事を読んで、つい「はっはっはっ」と爆笑してしまった。「こりゃあひでぇなあ、監獄の方がまだマシじゃねえか」と。

だがこれは甘かった。

ある幹部看守は監獄を「国家権力の最後の砦」と言った。「法に従えないどんな奴も、ここで調教矯正する。ここで手に負えなけりゃ国家の敗北だ。だからどんな手だって使う」。

『塀の中の懲りない面々』がヒットして、監獄物の本が一時かなり出た。しかしそのほとんどは「普通の囚人」、つまり監獄の中でも一番上の階層である工場生活者のことしか書いていない。

よほど狂っているかバカでない限り、またはよほど反抗しない限り、九五%の囚人は工場に出る。工場で他囚と談笑して仕事をし、夜は雑居や「夜間独居」に帰る。

ここで規則を犯すと、「取り調べ」として独居房に入れられ、懲罰を受ける。

どうしても工場の普通の生活ができない者、反抗魔、懲罰常習者などが、パープー工場（モタ工、仮工場、調整工場などという）や厳正独居（昼夜独居）に送られる（普通の生活ができない――というのは、要するに狂っている、ひどいバカ、ケンカ狂、変態、不具者、ひどい老人、梅毒などヤバイ病を持っている奴らのことだ）。

普通、独居房（独房）に入れられれば、だいたいはおとなしくなるが、それでも暴れたり騒いだり反抗したりすると、自殺房（第二種独居房）や保護房に入れられる。そこでもまだおとなしくならなかった者のみ、最後の手段として「栄光ある」医療刑務所に移監（送られる）されるのである。

法務省は頭のおかしいのをM級、からだのおかしいのをP級と内分けする。

M級、つまり精神の波長が狂った囚人を収容する「医療刑務所」は八王子、岡崎、城野などにある（八王子はP級も兼ねている。しかし北舎はP級、南舎はM級と、まったく独立して運営されている）。

精神病院での暴力や残虐は、宇都宮病院などの問題などをきっかけに旧法である精神衛生法が八七年から精神保健法に改正され、人権の監視機関を設置するなどして劇的に改善された。――どっこい、精神病（や人格障害など）のうえに「囚人」という二重苦を背負っている人間は惨めなもので、いまだに暗闇の中で糞小便と暴力に塗(まみ)れて、イモ虫のようにのたうっているのである。

その〈監獄六段地獄〉を順に追って、監獄に来る精神科医や臨床心理技師（前者は論文などを書くため研究しに来る。後者は

プロフィール

見沢知廉（一九五九－）

中央大学法学部出身。一水会議長、統一戦線義勇軍前総裁。両組織に参画した八二年、「イギリス大使館火炎ビンゲリラ事件」や「スパイ処刑事件」で逮捕され、懲役十二年の判決で千葉刑務所へ。所内で反抗を貫いたため、八年半を厳正独居房で過ごし、精神病の囚人が収容される八王子医療刑務所にも送られた。九四年、獄中で書いた小説「天皇ごっこ」で新日本文学賞受賞。九六年、獄中の体験を綴った『囚人狂時代』（ザ・マサダ）を発表し注目を集める。思想家・暴走族評論家としても活躍中。

photo▶山田鎮二

分類課長といって、犯罪者の分類や洗脳がお仕事である）の変人ぶりも書いてみよう。

長期刑務所の工場者たち

刑務所にはいろいろ種類がある。女だけのW級とか、二十六歳以下のY級とか外人のF級とか。八年以上、実質は九年以上の囚人をL級といい、関東にあるL級施設は千葉刑務所である。

収容者は六百～八百人だが、だいたい八割が殺人者、残りも強盗や放火、誘拐犯などばかり。収容者の三割は無期懲役である。無期になるためには強盗殺人か強姦殺人、単純殺人なら二～三人殺るか、または死体をバラバラにするまで頑張らなければならない。

殺人のなかでも一番軽いのは「十年」組だが、十年というと本当に純粋に殺人だけを犯して、死体をあれこれ「加工」しないで、運良くその場で捕まった連中である。

昼の間囚人は、小学校の講堂のような大きな工場で、印刷やバインダー、靴や紙袋や模型や簡単な電気製品を造っている。

殺人者ばかり――といっても、日本人の習性なのか、まったくおとなしく黙々と仕事をしている。脇目をしただけで懲罰、少し私語を口にしただけで懲罰――などという、凄まじい規則地獄の故であるのだが。

午前午後の休憩、一日四十分の運動、昼食とそのあと少しの休憩、演芸や入浴――などのときにはかなりワイワイ話ができる。

工場にいるのは「マトモ」とされる囚人たちである。では会社や学校のようにまともな話をしているのか、というとこれがかなりキレている。例えば新宿バス放火犯の丸山博文は、人と会話が全然できない。ニヤッと笑うといきなり人のホオをピシャッと叩く、毎晩寝小便をする、行進の最中に硬いウンコがコロコロ転がってくるので看守が「誰だ！　クソ漏らしたのは！」と怒鳴ると、丸山である。この丸山でさえ、一度八王子に送られたのだが、二カ月の検査の後、「マトモ」と認定され、千葉に戻ってきて、工場で仕事をしているのだ。

放火や強姦というのは、殺人に準ずるぐらい刑が重いのだが、だいたいの場合、この二つをやった奴らは全然反省していない。感極まると、よほど気持のイイものなのか、必ず犯ったことの自慢話を始める。

「いやあ、火の粉がパチパチと弾けてひゅうひゅう舞い上がるとき、生きててよかったなあ、と思うねえ。一つの家、人生がたった数時間で丸ごと灰になるなんて、感動的だよなあ」

「もう少女から更年期過ぎたババアまでやったけどね、まだ毛もはえてない少女ね、あの味は忘れられないよなあ。まあ、ババアはババアで肩書きとかそいつの人生行路を一瞬で食っちまうという、別の快感があるけどね」

それに対して殺人犯はどうか。『FBI心理分析官』に出てくるような計画狂や殺人魔というのは日本では稀で、ほとんどが一瞬の勢いで殺ってしまったという連中ばかりだ。食堂のテレビから、宮崎勤とか勝田清孝の凶状がワイドショーなどで報道されていると一斉に、

「いやあこいつ、悪い野郎だなあ！」

と叫んでしまうし、岡田有希子が死んで脳ミソが飛び散る写真を一面にした『報知新聞』が回覧されると、蒼くなって「うっ、

illustration▶山野一

気持が悪くなった」とうつむいてしまうのだった。

工場には、十六人殺した連合赤軍のメンバー、山口洋子の小説『夜の底に生きる』のモデルになった銀座ママ・バラバラ殺人犯、「オヤジは最初から殺るつもりだったけど、オフクロはつい勢いでやってしまった。考えてみればカワイソウなことをした」と言っておきながら運動大会で金属バットを振り回す一柳展也、横浜連続銀行強盗、K（ノック）O（アウト）強盗などがいて、興に乗ると「なかなか死なない」「いやすぐ死んだ」と殺人話に花が咲くこともあるほどだが、いや、監獄では、こんな鬼畜でさえ、ヒエラルキーの最上階に位置するのである。

パープー工場

千葉刑務所には、独居房のある十一舎というところの隅に、独居房を二つブチ抜いて造ったような二つの「調整工場」があった。だいたいこういうのはどこの刑務所にもあって、「パープー工場」と呼ばれている。工場では務まらないが、独房だと仮釈放がなくなるので入れてやる不具者や梅毒持ち、狂人。または、独房に入れておくとよけいひどくなるが、かといって工場には出せない懲罰常習者や反抗魔を飼い殺しにするためここに投げ込む。

私は反抗ばかりしていたので後半八年半

は独房にいたのだが、「環境を変えればおとなしくなるのでは」と、結局都合三回、パープー工場に出された。

最初に出たときは、七畳ぐらいの房で、そこに入ると三人が小机に向かって仕事をしていた。そのなかの一人の若い奴が、仕事をしながらずっと「誰か」と話をしてヘラヘラ笑っている。休憩になって三人から話を聞くと、一人は分裂病で普段まったく口をきかないがときどき大暴れするらしい。一人は誇大妄想狂で、「千葉刑の土地を今度買ったの。ここも壊して五階建てのビルを建てるんだ」とマジで話す。

残りの一人は元ゾクで、シンナー、トルエン、シャブをやったうえに塗装工の四重苦で、フラッシュバックが一日中きて、一日中ずっと幻覚と対話している。上空を戦艦大和が飛び、その周りをネズミが走り、隣にゾクの仲間がいてそれを指差して笑っているとか。工場で「あっ、お岩さんだ」とか「雪男が来る」と口走っていると分類課長が飛んできて肩をポンと叩き、「いやあ君、君は疲れてる。うん、少し休んだ方がいい。いいとこ連れていってあげよう」と、パープー工場に連れてこられたという。

この大和は死姦までしている。シャブやシンナーで完全にイカれて女友達のところに行き、ノドや顔、上半身三十カ所メッタ刺しにして、血塗れなのでスカートを上げて隠すと、赤の下着が見えてムラムラした。脱糞してるのに尻にパンティを押し込み、死姦してしまったという。これがものすごく良かったらしく、思わず腰を激しく使うと、長く切れたノドから笛のように、ヒュウヒュウ音が出るので「楽しかったよ」という話だ（さすがにこの大和と、このあと独房に戻って発狂した誇大妄想狂の二人は、後に八王子に送られた）。

パープー工場の四人は、むろん皆殺人者である。この四人の間で一時「背後霊ごっこ」が流行った。「どうせ人を殺ってんだし、殺人ばっかりの刑務所なので、みんな死んだ霊が後ろにくっついているに決まってる」という話になり、「背後霊だぞー」と叫びつつ、他人の背後におんぶする、という遊びだった。

分裂と誇大妄想狂が他へ移動して、躁うつ病のヤクザと、一家四人を殺して死刑を宣告されるが恩赦で釈放され、女子中高生のハーレムを作ってうち二人を刺したという二人が来た。後者の方は、フロ屋を覗いて注意されたので、フロ屋一家を全員斧で切り刻んでいる。死刑を待っている間に「講和条約恩赦」で無期になり、二十年務めて出て、非行少女の相談役をしている間に家がヤンキー中高生の溜まり場になったのだという。朝一回、昼休み一回、夜一回と、一日三回中高生とやりまくっていたらしい。五十歳を過ぎた、ハゲたオジさんなのだが……。

パープー工場というと、この他にも「天井に蛇がいる」と部屋中を逃げ回る奴、部屋の隅に行って「ジリリリンリリリ」と受話器を持つ格好をして「沢口靖子」に電話をかける奴、「夜中に看守が毎晩ハブラシを切りにくる」と叫びながらハブラシを振り回す奴、連続懲罰七カ月うたれて気がふれ、一日ブツブツ呟いている奴、刑務所の煙突にのぼってしまった奴……などがいた。しかし、独居房や八王子医療刑務所は、このさらに下にある。

厳正独居

工場にも出ずに、朝も夜も独房に入って、中で一日誰とも口をきかないで袋貼りをするのを厳正独居（昼夜独居）という。法律上は六カ月を上限とするが、私の八年半（これは独居出せ裁判を起こした磯江洋一氏の十年に次ぐ記録）にみられるよう、いくらでも延長できた。

いるのは反抗魔、というより訴訟狂、懲罰常習者、政治犯大物、完全な狂人、老人性痴呆症……など。

刑務所に来る医者は、内科や外科、歯科などは給料が少ないのでヤブ中のヤブだが、精神科医だけは大物が来る。ロンブローゾやフーコーなどもそうだが、精神病理学の研究者にとって「凶悪犯刑務所」は研究対象の宝庫なのである。

私は数人の医者からカウンセリングを受けた。最初の医者は東大研究室に属し、土居健郎の弟子、つまりフロイトのひ孫弟子にあたるフロイト派だ。この医者は私ともう一人の「真性パラノイア」に興味を持って精神分析をした。

そのパラノイアというのは、一流大を出てドイツ語もペラペラなのだが、エディプスコンプレックスの類型そのもののような奴だった。父親を殺すことだけが小さい頃からの生き甲斐で、ずっと狙っていたのだが父親も勘づいて隠れ回り、しかたなく代わりに父親の親友を刺し殺して切り刻んだとか。

毛布を被って房の隅にうずくまり、看守

が注意しようとすると、狼のように噛みつく。最初は毎日のように非常ベルが鳴って、武装警備隊が殴り蹴り、袋叩きにしてズタ袋に詰め保護房に投げ込んでいたが、「あれは本物」という精神科医の上申で、一人だけ独房で「休養中」の札が貼られ、ずっとうずくまっていることが許された。

工場では、ほとんど暴行や暴力、血や死を見ることはない。しかし独居では、このような光景が日常茶飯事だった。

ピストルを数千丁密輸した奴は、看守の言葉の揚げ足を取って、「あんた、それで公務員？　バカじゃないんですか」などと言うのが得意で、週に一回は警備隊に袋叩きにされ、肋骨骨折二～三回、歯はみんな折られてしまった。

そう、最初に独房に入ったとき、左隣の房の奴が、朝四時頃、しきりにがりがりと高い窓を掻く。あまりにうるさいので周りが暴れたら、看守が言うには「あいつは脳梗塞で、もう脳が溶けちゃってんのよ」とか。「空が痒い」ので空を掻いていたのだという。

こいつもそのあと、週に一回袋叩きにされていたが、致命的な出来事がある日起こった。巡回の看守が「うおお、お前、何やってんだ！」と叫んでドアの鍵を開けると、「ギャア！」という声とともに、珍しくその囚人が看守を追いかけていったのである。

「えっ？　なんだなんだ」と思っていたら、もちろんすぐ警備隊が来て殴り蹴り、保護房に入れたのだが、あとで聞くに「あいつ、机の上にウンコして、そのウンコで人形をこねて造ってたんだ。看守が入ったら、それをちぎって投げながら追いかけてきたんだってよ……。楽じゃねえよ、この商売も……」。

保護房！自殺房！自殺！発狂！

演説、看守暴行、ケンカ、暴力――はもちろん、場合によっては口ごたえ、ドア蹴り、看守の前でのツバ吐きや自傷などの場合も非常ベルが押される。ベルが鳴ると、腕や靴に鉄の入っている、機動隊のような、皆柔道や空手をやっている格闘専門の警備隊というのが飛んできて、柔道で倒し、顔にビニールや布を被せて殴り蹴り、ぐったりすると後ろ皮手錠や猿ぐつわをはめて、緑色の大きなズタ袋に入れ、保護房へと運ぶ。

保護房に入れておけるのは上限一週間だが、一度出してもまたすぐ入れられる。一メートル半四方の真っ暗な空間に、天井にはマイクやカメラ、壁や床は暴れてもいいようリノリウムで、窓はない。映画『告発』とそっくりである。カレンダーもラジオも新聞も、ハシやタオル、ハブラシさえなく、食事は後ろ手錠なので地面を這って食べる。ズボンが下ろせないので糞尿は垂れ流し。メチャクチャに臭い。夏は死ぬほど暑く(それで先日、関西で一人、脱水死したのだ)、冬は氷が張る。便器と水道のみが備わっているが、水は天井のマイクに向かって「出してください」と叫んで、ようやくチョロチョロと出るだけ。

自殺房、というのはこれほどでもないが(その代わり上限がなく、いつまでも入れておける)、天井にカメラ、マイクが埋まり、窓は鉄で打たれ、当然物がいっさいなく、ハシ、タオルなどからノート、ペンまでいっさいドアの外に出される。それらは、い

ちいち許可を得て看守の見張っている前でのみ使わせてもらう。
　脱走未遂、自殺未遂、看守暴行（脱走や看守暴行はだいたい刑が二～三年増える）の三つをやると、お決まりのコースで保護房一週間、懲罰六十日のうえ、残刑中ずっと自殺房となる。
　懲罰というのは私物いっさいを没収され、ラジオ、新聞他すべてとめられ、一日八時間の仕事中身じろぎもせず一カ所に座り、「反省」の紙を視線も動かさないで見詰めていなければならない。そのうえ、腕や指、足や腹、顎の角度さえ決まっていて、動いているのが見つかると、「懲罰不服従」として、いつまでも期間を延ばされる。
　こんな独房である、廊下に血が溜まっているのは年中で、いつも悲鳴や叫び声がし、だいたいのことには慣れる。
　しかし、それでもショックなのが自殺と発狂だ。私は独房にいる間、自殺を二回、発狂は十数回見た。
　パープー工場で一緒だった誇大妄想狂が発狂したときなど、いきなり麦飯に味噌汁をかけてそれを頭から被り、十一舎中に響く、「ギエエエエ！」という動物が絞め殺されるような奇声を発した。看守部長が慌ててドアを開けると、汁塗れで目が宙をさまよい、口からヨダレを流す誇大妄想狂がそれに飛びかかった。二人が汁塗れで叫びながら廊下を転げる。すぐに警備隊が来て誇大妄想狂を保護房に入れたが、それ以来彼は一日中、号泣するか哄笑しつづけるだけ

の狂人になってしまって、結局三〜四カ月、保護房で飼われたが、さすがに八王子送りとなった。

無期だが、二十年模範囚だったのであと少しで仮釈放だという人が、ちょっとしたつまみ食いをしてしまい、「取り調べ」を受けるため独房に来た。これはむろん懲罰になる。懲罰になれば仮釈放は取り消し、あとまた三〜四年は刑期が延びる。

その夜、ズボンの横についているバンド用の短いヒモを結んで、流し台の水道に掛け、座って首をくくった。

朝、看守が「あああああ！」とよろけると、すぐ警備隊が来た。夏なので、下の食器口が開いていたから覗いてみると、首がぐったりと伸びた坊主頭の囚人を廊下に引きずり出し、看守が屍の胸の上に乗って、おしゃべりしながら飛び跳ね踊っている。〈蘇生ダンス〉と言われているが、もうダメとわかっていても、一応蘇生のため、これをしなくては――ということになっているらしい。「ダメだ、死んでるよ、クソもらしてんもん」などと笑いつつ、看守が胸の上でピョンピョン飛び跳ねる。――やがてタンカがきて、顔に白い布をかけ、規則なので胸に手錠を置いて、裏門から「出所」していった。

もう一人、パープー工場で一緒だった、「沢口靖子に電話する男」は、ある日、突然高らかに童謡や民謡を歌い出した。係長がちょうど近くにいて、「静かにしろ！　何踊ってんだ。……第一、歌詞間違ってるぞ！」などと変な怒鳴り方をしていたが、これはいつもとかなりムードが違うと気づき、医務職員を呼んだ。医務職員がドアを叩きつつ、「おい、おい、俺の言ってることがわかるか！」と叫ぶが、電話男はますます感極まって絶叫する。警備隊と医者がなだれ込んで取り押さえ、抗精神薬をタップリと注射してから、からだを毛布で巻きつけて連れていった。一〜二週間様子を見たがダメで、これもまた八王子送りとなった。

つまり八王子医療刑務所、というのはそこまでひどくないと送られない地獄中の地獄なのだ。医療刑務所の精神舎に行くのは、完全な狂人か、またはどんなに弾圧しても反抗してくる反抗魔だけに限られる。

さて、その魔窟へと進んでみよう。

精神科医という変人たち

私は、実は八王子に行きたくて仕方がなかった。

むろん、ムチャムチャに「勘違い」していたのである。

八王子医療刑務所には、南舎と北舎がある。北舎は内科疾患者専門の施設で、南舎は精神疾患者専門。その運営や内容は別世界のように違う。北舎は平沢死刑囚などが亡くなったところだが、これは本当に天国なのだ。ただ、「ガンになっても末期ガンまでいかないと八王子には行かせてもらえない」というぐらい、「死ぬ寸前」の囚人だけしか行けない。

そんな「半分死んでる」囚ばかりなので、仕事はない、若い女のナースがいて面倒を見てくれる、食事はいい、冬はスチームがある、一日寝て本を読んでいればいい――と至れり尽くせりだ。検査で数カ月いて帰ってきた奴らからその話を聞いて、「それはおいしすぎる！」とパンと机を叩いた私は、「医者にねじ込んで、どんな手を使っても八

王子に行く！」と固く決意したのだった。

前述のフロイト派の精神科医は、ラスコーリニコフの論文を書くために、他の患者は二〜三週間に一回、五分で診察を終えるのに、私には週一回、一時間半のカウンセリングを続けた。

「いいでしょう。精神分析に協力します。その代わり、病理学のレクチャーや投薬で融通を利かせてください」と、薬をなかなかくれない監獄で、ビタミン剤やユベラ、カルシウムまで手に入れていた（普通は、風邪でも三七度以上ないと、アスピリンをくれない。腹痛もゲリ便を見せないと胃散をくれないというほどひどい）。そんな仲だから私は「八王子に行かせてくれ！」とかなりしつこく頼んだ。「いや、研究材料を手放すわけにはいかない！」と医者も怒ってハッキリ言う。

「あいつはキチガイだよ、見沢君」と、躁うつ病のヤクザは医者のことを言った。「俺の女房が精神病院に勤めてたから知ってんだけど、医者ってのはね、変なのとばかり毎日つき合ってるから、パープーがうつっちまうらしいのよ」。

このヤクザは不眠を訴え、医者の診察を受けていた。医者はいきなり「それで、君の家庭環境は？」と生活史を聞きに入った。「先生、自分は眠れんので来たんです。眠れんのと家庭環境とどういう関係があるんですかね」。医者は、銀ブチの眼鏡を上げ、一転してヒステリーを起こし「患者なら僕に従いたまえ！　さあ、なんでヤクザになったんだね！」。ヤクザも机をバンと叩き、「バカヤロー、ヤクザだから眠れないんじゃねえよ！」。医者はカルテを机に叩きつけ、ツバを吐くとそのままプリプリと帰ってしまったという。この医者は、怒ると看守や幹部にも「バカヤロー！」と怒鳴ったりするので、看守も道をよけて通ったほどだった。

ちょうどその医者からカウンセリングを受けている頃、ある雑誌で川尻徹という精神科医が「ヒトラーや山本五十六は死んでいなかった」などとすごい説を展開していたので、私はそのことを訊いてみた。

「川尻？　知らないね。学者の間では評価されてないね。……なんだって、なんだね、その話は。地方病院の医院長か。ふうん、いや、実はね、逆転移なんて用語もあるんだが、特に地方の精神科医なんかは、患者のがうつっちゃって、相当おかしなのがたくさんいるんだよ……」

「キチガイ、ってうつるんですか？」

「いや、正確にはうつらない。……ただ、躁うつ病は周囲に影響を与えるし、ヒステリーや神経症なんかは伝染するな」

「先生もよくヒステリー起こしますよね」

「……職業病、だよ」

この医者は宮崎勤の鑑定で有名になったF教授と兄弟弟子の間柄にあり、F教授を千葉へ連れてきたりもした。

「先生も、じゃあ鑑定したことありますか？」

「むろんあるよ。この前したばかりだ」

「じゃあ訊きますが、このパープー工場や独房、八王子にいる連中、こんだけ狂ってて、なんで鑑定にひっかからないで刑務所来ちゃったんですか？」

「僕も不思議でいろいろ訊くとね、警察としては心神喪失で無罪や心神耗弱で刑が軽くなるのは嫌らしいんだ。それで、裁判のときはじっと黙ってろよとか、検事と裁判

官には〝すみません〟しか言うなとか、かなり吹き込むらしいね」
「鑑定は絶対間違いませんかね」
「だまされることはまずないけど、この世界は流派が違うと見解が全然違ってくるからね。学説もいろいろあって大変さ」
流派――というのはすごい。私を診た二人目の医者はヨーロッパ近代派、ラベリング派で、私は人格障害だけで八つ、計二十くらいの病名をもらった。三人目はオーソドックスなDSM派で、ほとんど病名をもらえず「五分診察」になってしまった。さらに分類課の臨床心理学者からもカウンセリングを受けたが、精神病理学と臨床心理学は似たようなことをやるのに、専門用語まで全然違う（患者のことを病理学はクランケ、心理学はクライアントと言ったり）。
最初の医者などは、分類の心理学者のことを「ああ、あのバカね」と平然と言っていた。
一つ、面白い人物で忘れられないのは、その後私が送られることになった八王子医療刑務所の脳波技師である。他のどの医者も言うし、本で読んでも「脳波でわかる異常はてんかんと薬物中毒だけ」と述べているのだが、「医療刑務所でキチガイ相手に脳波一筋二十年」というその技師は、「脳波を見れば、そいつの人生や知能程度はわかる」と豪語した。私の脳波を見て、「うん、君はインテリだね。文章書くのが上手だろ。芸術家だ。頭も狂ってないな」とスパスパ言いあてた。
私はいたく感動して、この話を後に、何人もの精神科医に話したが、「そんなのは絶対ウソだ」とまったく信じない。職人芸というか、毎日あれだけの狂人に囲まれて、その奇妙な脳波を見続けているうちに、医者の常識を超えてしまったのか、または「伝染って」しまったのだろう……。

夢の八王子へ

最初の医者が千葉刑務所をやめるとき、「引き継ぎ」で「八王子送りも考えうる」と書いてくれた。私はそのまま反抗（願箋、幹部面接、情願、訴状、人権委告発、弁護士呼びなど）を続けたものだから、二人目の医者もやめたあと、保安と医務部長が相談して、「じゃあ、八王子に送ろう」ということになった。
五～六年ぶりに私服を着、車に乗って、久々のシャバを見る。やがて、病院のような白く奇麗な八王子医療刑務所に着いた。たしかに女のナースがいる。ワクワクする。ただ、支給のパンツや囚人服には大きく黒々と〈南舎〉と印が押してある。連行の途中でも、「そいつはどっちだ？」「南舎の方だ」と看守や医者が言い合う。
鉄の格子をいくつも開けて、南舎の一階の独房に入る。
独房の中は、床も壁も風呂場のようなタイル貼り。畳もない。ビニールを貼ったベッドが埋め込まれ、汚い机とイスがあり、流しと便器はあるが窓は鉄で打たれ、普通の房にある薬缶やようじ、布団やちりとり、箒などがない。床や壁にはひからびたヘドや便、血や髪がこびりつき、すさまじい臭気がする。
「な、なんだこれは？」と、明治四十二年に建てられた千葉の十一舎に慣れていた私でさえ、吐き気を覚えた。
「とにかく寝よう。朝、担当に聞こう」と

気持を持ち直そうとしたものの、右隣がうるさい。とにかく、一秒も休まずにカタカタ音がして、しまいには大声で「UFOが来る！　窓に宇宙人が来た。連れていかれる。助けてくれ！」と叫びだした。

左隣は、昼間は熟睡し、食事のときだけ看守に力ずくで起こされ、モーローと食べてまた寝るのだが、夜になると五分おきに報知器を鳴らす。「カターン」という報知器の大きな音で看守を呼び、「眠れません！」と喚く。

初めての夜、私は眠れずに怒り、両隣の壁を思いっきり蹴飛ばして「うるせぇ！」と脅した。千葉でなら、かなりおかしくうるさいのが隣に来ても、それをやれば「二人で壁を蹴った」と、二人とも袋叩きにされ保護房、懲罰。これが怖く、相当バカでもシーンとなる。ところが両隣、わからないのか聞こえないのか、「UFO！　UFO！　脳みそとられる！」「眠れないよお！」と騒いでいる。

私はたまらず看守を呼び、話をした。

「やめさせてくださいよ！　規則違反でしょう」

「だって、こいつら狂ってるんだもん」

「狂ってるって……ここはからだの弱い人が来るとこでしょう?」

「そりゃあ北舎。ここは南舎。こっちに来るのは完全なキチガイだけだよ」

えっ！と私は驚いた。そんなの知らなかった！　そう言えば、精神科医が紹介状を書いたのだ。しまった……。内科や外科に頼みゃよかった……。

『カッコーの巣の上で』を超えた場所

耳にチリ紙を詰めて寝た。両隣はこれで済んだが、向かいが、午前四時から六時までの約二時間、演説を続けた。

「おい、看守、臭いぞ、ブタ野郎、ブーブー言うぞ。なんだここは、早く連れてけ、警察呼んでこい。明日の天気はなんだ、うるさいぞピーピー鳴るな！　そこに座れ、看守、金よこせ。スイカ持ってこい……」

朝、担当（看守部長）と話をした。南舎と北舎はまったく別のシステムで運営されていて、南舎から北舎へは絶対移れないという。南舎は作業療法として仕事もあるらしい。

食事はたしかによかった。ところが窓を開けて食器を受け取ると、とたんに軟便というかこねくり回した液便の腐ったような凄い臭いが漂った。向かいの右側や左側の何人かが垂れ流しでおしめをしているものの、すぐはずして便をこねて人形を造ったり壁に絵を描いたり、食って吐いたりするのだという。

睡眠も食事も充分にとれず、ボーッとしたまま運動に出された。看守とナースが来る。ラジオ体操をさせられ、ナースがカルテに何か書いていく。体操もロクにできない奴ばかりなので、これも観察なのだろう。

帰ると、房がびしょびしょだ。垂れ流しが多いので、運動に出ている間に、房内にホースで水をまくのだという。それでタイル造りなのだ。

運動場へ移動する途中、陶器や紙袋、植木の工場を通った。当局も「作業療法」と悟って諦めているのか、坊主頭、ランニングに半ズボン姿の囚人たちが、作業などほとんどできない状態で、ヨダレを流しなが

ら踊ったり地面を転がったりしていた。
雑居の方を通ると、なぜか昼間でも電気をつけない暗い部屋にベッドが並び、その上で壁に向かって念仏を唱えたり、横になって足をバタバタさせたり、毛布を被って房の隅にうずくまっている奴が見えた。映画『カッコーの巣の上で』に出てきたのは明るいキチガイばかりだったが、八王子のキチガイはメチャクチャに暗い。犯罪を犯すキチガイというのは、やはりネガティヴなのだろう。一日中、壁にメトロノームのように、頭をゴンゴンぶつけ続けるバカがやたら多い。性犯罪を犯したキチガイ囚は、とにかくチンポを露出したがる。坊主頭がランニングシャツ一枚でチンポを出して踊る様は、この世のものではない。
一日に三〜四回は、こちらの心臓がピクン、とするような激しい暴れ騒ぎが起こる。神経症やヒステリーのレベルではなく、完全に精神病のノリだ。鉄のドアや壁にぶつかり、絶叫するのだが、骨が折れるのではと思うぐらいだった。
向かいの左側が特に一日二回ずつ暴れ、そのたびに警備隊が来て保護房に入れたり、医務がクロルプロマジンやハロペリドールを注射する（私も実験で飲んだが、本当に頭や全身が鉛のように重くなり、何も考えられず、何をする気も失う）。ところが、ときにはそれさえ数時間しか効かない。その男は、保護房を二週間体験しても収まらず、おまけに注射も効かない。医者や警備隊がザワザワと話をしながら連行して、ある日ぐったりして帰ってくると、しばらく寝たきりで点滴を打って食事もとれなくなった。
「どうしたんですか？」
と掃除夫に訊くと、「電気ショックだろ」

とあっさり言った。
監獄であり精神病院でもある八王子医療刑務所南舎——正気があるのはほとんどいず、囚人なので連絡者も途絶え、「権力の無法地帯」と化しているわけだ。
八王子医療刑務所は、かつて全国の精神病院に先がけてロボトミーをやった。八王子の成功で全国の病院もやり始め、社会問題化し病院がやめたあとも、八王子は最後までやり続けた。最盛期には週に何人もの頭に穴をあけたという。
看守の暴行も、限度を超えて、思わず笑ってしまうほどだった。巡回の看守が、今日は機嫌が悪いなと思うと、適当に目についた房いくつかに入って、「このキチガイ野郎！」と喚いて靴を脱いで片手に持ち、それでメッタ打ちにする。バチンバチン、と威勢のいい音が廊下中に響き渡る。
電気ショックは最後の手段にしろ、それまではとにかく抗精神薬で攻めまくる。中で百種類近い抗精神薬を試してみた私にもよくわからないが、「口ごたえなんかすると、全身の血管に何千本の針を刺したような、転げ回るような苦痛のする注射を打たれる」という囚もいた（城野医療刑務所からの国連人権委員への告発書によると、訴訟をしたら医療刑務所に送られ「全身の神経をワイヤかブラシで削られるようにからだの内部が痛んだ。全身の筋肉、内臓から骨の髄までを何十億本の針でじわっと刺される痛さ」の注射を毎日打たれ、あまりの苦しさに「訴訟を取り下げます」と叫ぶと、「ようし、お前の病気は急に良くなった！」と注射をやめたという。この川口喬氏の告発は、冗談のようだが医療刑では厳然として本当のことなのである）。
レクリエーションだけは、南北合同でやる。慰問演芸など講堂でやり、北舎の囚は真っ白い着物のような病衣を着ているのだが、まともに歩けるのがほとんどいない。冥土の土産に無理して見にきたんだろうが、拍手するわけでもなくダラリと伸びきっている。
南舎というと、ギャグに受けて笑ったり拍手をするのではなく、慰問の素人剣劇が来たときなど、チャンバラのシーンで人が動くだけで、立って飛び跳ね、猿の人形のように大きく両手をバチバチさせて、ヨダレを流して転げ笑っている。
「ウキキキキー！」
ときどき、イスをひっくり返してエビのように転がったり、天井を指差して大きくのけぞったり、地面に倒れて床で水泳をしたりする。
映画会となると、必ずスクリーンに突進するバカがいる。美人が出てニッコリしたりすると、南舎は突っ込むし、北舎は（死ぬ寸前なので）合掌して念仏を唱える。
『囚人狂時代』で書いた恐怖の盆踊り大会のときなど、キチガイ代表何人かが着物を着てウチワを持ったのだが、帯も留められないので皆着物がはだけ、パンツ一丁に腹を出して、盆踊りなのに阿波踊りやダンス、スキップをしている。感極まってチンポを出したり、着物を手に持ってグルグル回したりするのが出てくるのだが、ゲストの町内会のババアは、案外平気で笑っている。北舎はほとんど七十～八十代なので、六十代のババアを熱い目で見ている。よほど感じたのか、単に具合が悪いのか、次々とバタバタ倒れてナースや看守にタンカで運ばれる。

いきなり南舎の一人が幹部席の前に行って土下座をした。
「俺を男にしてやってください」
えっ？　何なんだ、お前……。
白い着物を着た両腕のないのがウチワをくわえてピョンピョン踊っている。片手や片足くらいだと、刑務所では普通扱いされるが、この男のようにさすがに両腕がないと（どうやって犯罪を犯したんだ）八王子だ。クネクネ身をよじるのだが、これが蛇のようで迫力がある。
フィナーレの花火では、南舎がかなり怯え、何人かがウウと叫んで脱糞した。
これがみんな精神鑑定をパスして「刑事責任あり」とされてきたのである（刑事訴訟法四八〇条では、発狂した場合、検事の指揮権により刑の執行を停止し、釈放して精神病院に入れなくてはならないとある。しかし「事実上の精神病院」の八王子医療刑務所などがあるので、刑訴四八〇条の実例はほとんどない）。日本で鑑定→無罪になるには、よほど「キチガイのエリート中のエリート」でなければならないのだ。宮崎勤の場合も、事件が大きいのでちゃんと鑑定をしてくれているのであって、あの程度で事件が小さければ、まず鑑定さえやらずに「刑事責任あり」となるだろう。
事件当時はマトモで、中で狂うこと（プリゾニゼーション）もあるが、中で親しくなったキチガイたちに訊くとやはり昔からおかしかったし、奴らが犯した事件も、たとえば親友にガソリンをかけライターで火をつけるなど、「感動的」である。
宮崎のように普通に歩いて指を差して現場検証できるような奴は、八王子にはまずほとんどいなかったもんなあ……。

電波妄想

盗聴器がいっぱい！

「からだに埋め込まれたので探してください」
私生活を盗み聞きする隣人たちは、実在するのか？
盗聴防止コンサルタントが遭遇した、電波の国のアリスたち！

永江朗（フリーライター）

藤井正之さんは盗聴器発見業の草分けである。盗聴器が発信する電波を追って盗聴器を見つけ出し、それを撤去する。この仕事が世間に認知される前は、受信機を積んだワンボックスカーで街中を走り、電波をキャッチすると「おたく、盗聴されてますよ。お望みなら撤去しますが」と、いわば流しの盗聴器発見業をやっていた。

ぼくも藤井さんの受信機搭載車に同乗して、都内を回ったことが何度かある。大久保のラブホテル、高田馬場の民家、銀座のオフィス、ｅｔｃ。いろんなところに盗聴器が仕掛けられている。いやはや。

盗聴器といえばなんだか物々しい感じがするが、ようするにマイクと発信機である。原理はいたって単純だし、秋葉原などに行けば置時計やコンセント、電卓などに偽装された盗聴器が誰でも手軽に買える。

少し前から一般誌やテレビのワイドショーでも盗聴器の話題を頻繁に取り上げるようになった。それとともに藤井さんの会社、東和通信社にも「盗聴されているようなので調べてほしい」という依頼が増えてきたそうだ。盗聴器の存在が一般にも知られるようになると、ヘンな依頼人も増えてくる。ことにテレビを見て「ワタシも盗聴されている」と連絡してくる人にはヘンな人が多いと、藤井さんは苦笑する。

ヘンな人とは、現実にはあり得ないような仕方で盗聴されていると信じている人びと、盗聴した内容を何者かが「送信してくる」と主張する人びとである。精神医学の知識のカケラも持ち合わせていないぼくには、それを《病気》かどうか判断する根拠は何もない。しかし、それはどうみても《妄想》としか思えない。

以下は、藤井さんが出会ったヘンな依頼人たちのお話である。

◎からだに埋め込まれた！

ヘンな依頼人、困った依頼人といえば、「盗聴器がからだに埋め込まれている」と電話してくる人ですね。思い出すたびに情けなくなるのは六十歳ぐらいのオバさんの一件ですよ。そのオバさんは、「どこへ行っても盗聴されてる」と言うんです。だから部屋に盗聴器が仕掛けられているわけじゃないんだ、と。

なぜ盗聴されていることに気づいたかというと、「行く先々で話がことごとく漏れているから」だそうです。ある場所で話した内容が、別のところに行くと漏れている。別のところで別の人に言った内容が、まるで関係のない人にバレている。

「バッグの中に盗聴器があるんじゃないかと思って、バッグを取り替えても話は漏れる。洋服やアクセサリーに仕掛けられているのかと思って、服やアクセサリーを替えても、やっぱり聴かれているようだ」と彼女は説明します。ということは、結論はひとつ。部屋やバッグの中や服にではなく、自分のからだの中に盗聴器が埋め込まれているとしか思えない、のだそうです。

「からだに埋め込まれた盗聴器を調べる方法はないですか」とオバさんに訊かれました。《調べる方法》って言われてもね。そもそも、盗聴器をからだに埋め込むなんて、ありえないことなんですから。

しょうがないから、金属探知器を差し出して、「これ使って、自分で調べてみてください」と使い方を説明したんです。

ところが、そのオバさん、ぼくの前で素裸になっちゃった。さっさと横になって、ぼくに調べろって言うんですよ。しょうがないから、うつ伏せになってもらって頭から足の先まで金属探知器でずうっと探していきまして、「ありませんね。じゃあ仰向けになってください」と、もう一度頭の先から足の先まで調べました。若くてかわいい女の子ならまだいいけど、六十歳のオバさんに裸になられて、その上を神妙な顔して金属探知器をかけるなんて、やってられないですよ。

そのオバさんは、見た目は普通でしたよ。とくに緊張しているとか、興奮しているようには見えない。真剣に「私のからだに盗聴器が埋め込まれている」と訴えるんですから。その一点を除くと、他はごく普通のオバさんなんですけどね。

全身に金属探知器を当てて、何か機械が埋め込まれている様子はまったくないということがわかっても、オバさんはいまひとつ納得してくれません。次に彼女は「それじゃ盗聴器じゃなくて、天井裏に人が潜んでいて、こちらを監視しているにちがいない」と言い出した。ここんところは、外出先でも盗聴されてるというのとは矛盾するんですけどね。

オバさんの家は東京の郊外、K市にありました。すぐ近所にある親兄弟の家はずいぶんお金持のようで、ベンツが二台もある大きくて立派な屋敷でしたが、彼女は小さな一戸建てに一人で住んでました。

ぼくが行ったときはドアの鍵が壊れていて、たしかに忍び込みやすい状態にはなっていたけれども、天井裏を覗いても人が上がった様子はまるでない。どの家でも天井

illustration▶山松ゆうきち

裏はホコリだらけで、最近誰かが入ったとしたらひと目でわかりますからね。というわけで、素裸を見せられた後は、汚い天井裏の探索までやらされたわけです。もちろん何にも出てきませんでした。一応、このときはそれで納得してくれたようです。それっきり連絡もありませんので。

夫も子どももいる四十五歳ぐらいの女の人が、やっぱりからだに盗聴器が埋め込まれているって言ってきたこともあります。「札幌に行ったら、札幌でも盗聴されてた」と言うわけです。旅行に行っても、旅行先で聴かれている、これはもうからだの中に埋め込まれているとしか思えない、と。

夫のほうは女房の盗聴器騒ぎを困ったことだと思っている様子でもない。かといって、女房に同調して騒いでいるわけでもないんです。いったいどう思っているのか、いまひとつよくわからない夫でしたよ。

一年ぐらい前に調査をして、そのときは盗聴器なんてないと納得してもらいましたが、つい先日もまた「どうも盗聴されているようだから、調べてくれ」って電話がありました。こういうケースにはあまり関わりたくないですね。

けっこう回数が多いのね、おたく

ヘンな依頼人でも、ぼくが行って当人の目の前で探して、「盗聴器なんかない」ことが確認できると、納得して安心する人も多いんですよ。本人からではなくて、家族から依頼があることも多いですね。「女房が盗聴器を仕掛けられてると思い込んでいるんだけど」とか、「娘が盗聴されてると言っている」というふうに。

こういう場合は、夫自身は女房や娘の被害妄想なんだとわかっているようです。「絶

対に盗聴器なんてないと思うんだけど、本人を納得させるために探してくれ」ってあらかじめ言う人も多い。「病院にもかかっているんだけど、盗聴されていると言ってきかないから、納得させてやってくれ」と言われたこともあります。その人の前で丹念に調査して、それでも見つからなければ、「よかった。盗聴器がないということがわかったんで、女房も明るくなった」なんて言われることもあります。

人間って、疑心暗鬼にかられると落ち込むし、もっと大変なことになる場合もありますからね。それが「盗聴器なんてなかった」とわかるだけで解放されるみたいですね。そういう依頼人の場合は、ああ、調べてみてよかったと思いますよ。人のためになったような気持になります。

実際に盗聴器を仕掛けられても、人はおかしくなっちゃうんですよ。誰かと電話で話した内容が、まったく別の人に漏れているとか、家の中の様子や会話が逐一知られているとか。そういうことが長期間続くと精神的にまいってきますよね。

でも、ほんとうに盗聴されてヘンになっちゃったのか、ヘンだから盗聴されていると思い込んじゃっているのかは、話を聞いていればだいたいわかります。どちらも精神的に消耗しているとしても、話の内容はぜんぜん違いますから。

いちばん困るのは、夫婦ふたりでハマッているようなケースです。O市の夫婦のときも困りました。最初に電話してきたのは夫のほうでした。「近所の人が盗聴してるみたいだから、調べに来てくれ」と。

依頼内容を説明する口調はごく普通でしたよ。ヘンな人っていう感じはありませんでしたね。でも、「近所の人に盗聴されてる」と言われたとき、「ああ、これは盗聴器は出てこないな」と思いました。こういう依頼をしてくる人はヘンな人が多いから。

たいていそうなんですよ。土地売買だとかマンションを建てようとしていて日照権だのなんだのでモメているとき以外は、近所の人が盗聴するなんてことはまずありえませんから。だって、そうでしょう? 普通の人を隣近所の人がわざわざ盗聴したって、なんの得にもなりませんからね。

行ってみると、夫婦とも四十代半ばでした。夫は病院に勤めていると言ってましたが、暮しぶりから判断すると医者ではなさそうでしたね。

夫婦ふたりで、「セックスしていると、隣の人に盗聴されて困る」と言うんですよ。激しくヤッた次の日は、隣の奥さんに会うと、「夕べは激しかったわね」と言われるって、ふたりとも真顔で言う。

依頼人の家は一戸建てでしたが、隣家との間隔は一メートルもない。屋敷を一軒潰した土地に、五戸も十戸も鮨詰めにして建てたような安普請の建売ですね。壁も薄いようです。窓の下は道路。道路からいきなり玄関という家で、奥さん自身も、セックスのときは声が大きいと言ってましたし、この距離なら道を歩いている人には聞こえるだろうと思いましたよ。盗聴器なんか仕掛けなくても、隣家に聞かれることもあるでしょう。

ところが、よく聞くとヘンなんですよ。「盗聴されているから声を出さないでヤルんだけど、それでも隣の人はわかる」って言うんです。声を出さないでしても、隣の奥さんに翌日、「けっこう回数が多いのね、

おたく」と言われる。たしかにほぼ毎日ヤッてるらしいんだけど。

もちろん依頼どおり盗聴器を探しました。でも見つかるわけがない。電波も出ていませんでしたしね。

ただ、調べていてヘンな感じがしました。夫婦には中学二年生の女の子がいましてね。二階は四畳半が二間続きになっていて、一方が夫婦の寝室でもう一方が娘の部屋になっている。二つの部屋の間には襖があるだけ。声が大きくて隣の家の人に聞かれるって夫婦は言うんだけど、ぼくは娘に聞かれることを心配したほうがいいんじゃないかと思いましたよ。中学二年生といえば多感な時期ですからね。毎晩のように隣で両親がヤッていて、しかも声が大きいっていうんだから、娘のほうが気の毒です。

結局、この夫婦からの依頼はこの一度きりでしたけどね。

私生活を暴く校内放送

五年ぐらい前だったかな、五十歳ぐらいの女流画家にも困りましたよ。行ってみると、あまり裕福そうには見えない暮しぶりで、盗聴器のことよりも、自分の自慢ばかり聞かされる。

彼女は地元では名門のW高校を出たんだそうです。その高校からは三菱銀行の頭取になった人も出ているとか、毎年東大合格者を大量に出しているとか。ぼくは広島出身ですから、W高校を出たと言われてもピンとこないんだけど。終戦間もないころに名門高校に進んだというのが彼女の自慢というか、すがりつく過去の栄光だったんですね。

高校卒業後は銀行に勤めたそうです。で、彼女は売れない画家と結婚して、絵の勉強のために夫婦でヨーロッパに行った。まだ誰もが外国に行けるような時代じゃなかったんだけど、あり金はたいてヨーロッパに行って、五年間勉強して帰ってきた。帰ってきても絵では食えない。しかも、一年後に夫は病気で死んでしまい、彼女は画家になった。そんな身の上話を延々と聞かされました。

この女流画家の家の近くに高校があるんですが、その高校が彼女を盗聴していると言うんですよ。彼女が何かを喋ると、校内放送で同じことを言うそうです。そんなことはありえないんだけど、納得してもらうには調べるしかない。もちろん電波も盗聴器も出てきません。

「ありませんよ」と言うんだけど、「いや、絶対にあるはずだ」と女流画家は言い張る。ところが「これだけ探してもないんだから、間違いなく盗聴器は仕掛けられていません」と言っていたら、ある瞬間から急に納得したようで「よかった」と喜びはじめた。突然、ガラッと変わったという感じですね。「これまでは盗聴されていると思うと、安心してオナニーもできなかった。よかったよかった」なんて言い出した。そして、いきなり「セックスしましょう」って言うんですよ、ぼくに。ほんと、いきなり。

なんとか断わると、こんどは「食事をごちそうしたい」って言って、ぼくを近所の焼肉屋に連れて行きました。食べていると「今日は精つけてもらわないとならないからね」って言うんですよ。ゾーッとしましたね。

いや、美人という感じじゃありませんで

したね。ブスというほどでもないけど。いわゆる淫乱っていうんでしょうね。

彼女の家の近所に、彼女の絵を置いている画廊がありました。画廊のオヤジはデパートの美術サロンなんかにも彼女の絵を置いて、売れたら代金を払ってくれるんだそうです。画商というか、画廊のオヤジは六十五歳だそうですが、絵を置いてくれるのと引き換えに肉体を要求するそうです。というよりも、彼女の言い方だと、オヤジは彼女が行くといつでもヤッてくれる。一週間でも十日でも、毎日行けば毎日ヤッてくれるんだそうです。なんとも強いオヤジですよね。それがケチで、ホテルなんかに行かず、事務所のソファーでヤルんだそうです。彼女が行くとカーテンを閉めて、ソファーでヤッちゃう。

焼肉を食べ終わって、「今日は夕方から盗聴器発見の仕事の予約が入っていて、お客さんが待っているから」とむりやり手をふりほどいて帰ってきましたよ。なんか、怒ったような顔をしてましたけれどもね。

で、次の日の夕方、その女流画家から電話がかかってきた。ところが今度は、いきなり「このやろう!」って怒鳴ってる。「おめぇ、盗聴器はなかったなんて言ったけど、ちゃんとあるじゃねぇか」って。「今日喋ったこと、さっきも校内放送で言ってたぞ」と叫んでいるんですよ。前日とはまるで別人のように言葉が乱暴になってたんでびっくりしましたよ。電話に出るなり「このやろう!」ですからね、五十歳のオバさんが。もちろん二度と行きませんよ。

キチガイ呼ばわりしやがって!

若い被害妄想の人もいますよ。この前の依頼人は二十五歳の男性でした。田舎の百姓の伜で、両親と同居している。やっぱり「近所の人に盗聴されている」と言う。「近所の人がオレをヘンな目で見るのは、盗聴しているからだ」って。

でも、ヘンな目で見るのも当たり前なんですよ。彼は高校を卒業してからこの七年間というものまったく働いていない。就職もせず、家の仕事も何もしていないんだから。毎日、犬の散歩をするだけ。それも夜の十時ごろからですからね。働いていないから、本人の自由になる金もない。それで小遣いはいまだに両親にせびっているらしい。

昼間はブラブラしていて、夜の十時に犬の散歩をしていれば、近所の人も怪しげな目で見るのは当然じゃないですか。狭い田舎のことだから町内中みんな知っていますよ。隣近所のオバさんたちも、道端で集まって噂話をするのに「あそこのウチの伜は、毎日ブラブラしていて、夜中になると犬と散歩している。ヘンだね」って言ってるんでしょう。仕方ないですよね。

こんな田舎で、ブラブラしている無職の男を盗聴しても、誰も何の得にもなりゃしない。盗聴器なんてあるわけないんですよ。

本人がちゃんと就職するなり、せっせと家の仕事をするなりすれば、隣近所もヘンな目で見ることも自然となくなるでしょう。両親は、働く気もないのなら、病院に行って医者に診てもらったほうがいいんじゃないかと言ってるようです。

もっとも、この男の話は聞けば聞くほどわけがわからない。たとえば「クルマを運転していると、近所のオバさんの声が聞こ

える」とかね。彼には彼なりの理屈があって、盗聴器というのはただのマイクと発信機にすぎませんから、それだけでは近所のオバさんの声が聞こえるはずがない。だからトランシーバーのような、マイクと発信機・受信機とスピーカーがついたものが仕掛けられているんじゃないかとか、盗聴器でその男の声を聞いて、受信機とスピーカーでオバさんが声を流しているんじゃないかって言います。

ぼくと世間話をしているときは、ごく普通の男です。でも、《被害》について喋りはじめると、ちょっとおかしい。表情や声の調子なんかは変わりませんが、話の内容はどんどんおかしくなっていく。当人は真剣です。どちらかというと「盗聴されて困っているからなんとかしてほしい」と、ちょっとこちらにすがるような感じですね。

もっとも、本人も妄想だってわかっているようなところもあるんです。『盗聴のすべて』(『ラジオライフ』別冊、三才ブックス)というシリーズがあるでしょう？　あの本を読んでいるんですよ、彼は。あの本には盗聴されているという被害妄想について書かれたパートがあるんですが、それを持ってきて、「ぼくもまったくこれと同じなんですよ」って言ってるんだから(笑)。ですから、自分でも妄想かもしれないとは思っているんでしょうね。

ただ、ぼくのほうから「それは妄想だから、病院に行きなよ」とは言いにくいし、難しいですね。

三十歳の女性で、「自分は盗聴されてる、人の話し声が聞こえる」と言い張る人がいたんですよ。一応丹念に盗聴器を探したんだけど、もちろん見つからない。親御さんに「お医者さんに相談したほうがいいのでは？」と言ったんですよ。そうしたら父親が怒っちゃって。「ウチの娘をキチガイ呼ばわりしたな！　訴えてやる！」って大騒ぎになっちゃった。その女性も仕事も何もしていない人でしたね。外に遊びに行くでもなく、ずっと家にいる人でした。

つけ込む悪徳業者たち

業界には、そういうちょっとおかしい人をカモにしている悪徳業者も増えてます。ぼくのところ(東和通信社)では、料金は探す部屋の面積によって決まっています。盗聴器があってもなくても料金は同じ。ところが悪徳業者は調査料とは別に撤去料を取る。調査料は安くても、「ここにも一個ありました」「おや、ここにも一個ありますね」と発見して撤去するたびに撤去料がどんどん加算されるシステムです。

こういう悪徳業者は、探すフリして自分で持ち込んだ盗聴器を見せて「ありました、ありました」とやるわけです。お客のほうは、最初から盗聴器があるものと信じているから、簡単に引っ掛かっちゃう。しかも、こういう人は何度でもカモにされるんです。

ひどい業者になると調査料は三万円で撤去料は十万円だそうです。盗聴器が見つかった場合でも十三万円で済むのかと思ったら違うんですよ。撤去料は一個十万円。もし四個盗聴器が仕掛けられていたら、四十三万円になってしまう。先日もそういう業者に引っ掛かっちゃったという人から相談されました。

悪徳業者の手口としては、家庭用のコードレスホンを盗聴してからその家を訪ね、

「おたくは盗聴器を仕掛けられてますよ。その証拠に、さっきはこんな話を電話でしてたでしょう?」と取り入るっていうのもあるようです。

政治家や実業家でもなく、資産家でもないごく普通の人が、自宅に四個も盗聴器が仕掛けられるなんていうこと自体がおかしいと思ったほうがいい。そういう話を聞いた段階で、すでにこれはインチキかもしれないと思うのが普通ですよね。

＊

以上が藤井さんのお話だ。

新しいテクノロジーが新たな「狂気」を引き寄せる。藤井さんの話を聞きながらこんなことを思った。

なぜ盗聴電波なのだろう、なぜ盗聴器なのだろう。おそらく、話にあった二十五歳の男性依頼人も愛読していると思われる『盗聴のすべて5』(『ラジオライフ』別冊、三才ブックス)には、妄想と盗聴器の関係について精神科医の香山リカ氏にインタビューした記事がある。ここで氏が語っているのは、分裂病では〝なにか他人に聞かれている〟という感覚を持つことがあるが、そのとき〝どうやって聞かれているのか〟が気になっている。そこにちょうど盗聴器や盗聴電波の存在をメディアを通じて知る。当人は「そうか、盗聴器のせいだったんだ」と思い込むというわけだ。

そういえば、ぼくの知人は分裂病を患ったときに「テレパシーが聞こえる」とさかんに言っていた。彼はどこで《テレパシー》という概念を得たのだろうか。SFか、映画か、それともテレビの超自然現象番組か。彼がテレパシーという言葉を知らなかったら、いったいそれを何と名づけただろう。「神様の声」とか「悪魔の囁き」とでも言ったのだろうか。彼の今後の治療の見通しなどについて担当医に訊いたとき、「テレパシーがなくなるといいんですがねぇ」と担当医までが《テレパシー》という言葉を使っていたのがおかしかった。

前述のインタビューのなかで香山リカ氏は、時代時代の新しいテクノロジーと妄想が結びついてきたことを指摘している。明治時代は電気と結びつける患者が多く、現代では電波、超音波、X線など結びつけられる対象が多様化しているという。

なぜ新しいテクノロジーなのだろう。どうして電波であって、「この鉛筆が囁いている」とか「裏の畑のジャガイモがオレの噂話をしている」とか「出窓に置いたサボテンがワタシをバカにしている」ではないのだろう(いや、そういう臨床例もあるのかもしれないけれども、あまり聞いたことがない)。

内部がさっぱりわからないブラックボックス化した道具やシステムが増えて、それだけぼくらも「狂気」をそれらに託しやすくなったということなのだろうか。盗聴器の次に「狂気」を吸い寄せる物はなんだろう。

photo▶山田鎮二

藤井正之さん

ザ・ミザリー症候群

メディアは人類の触覚か？
妄想と現実の境を失った、
頭のおかしなファンたちの明日なき爆走！

熱狂的な読者が作家を監禁し、その足を潰し、脅迫・拷問を加え、自分の思惑どおりの作品を執筆させる……。スティーブン・キング原作の映画『ミザリー』（九〇年）で描かれた異様な話は、しかし何もフィクションの世界だけに留るものではない。私生活に襲いかかる突然の闖入者、恋愛妄想が生み出す迷走者、憧れのアーティストに対する征服欲に支配された逸脱者……。そんな〝ストーカー〟たちを魅きつけてやまないメディアの住人から、過去遭遇してきた、一線を踏み越えるファンの狂態について話を聞いた。

取材・構成▼平山夢明（作家）

背筋がゾクッとくるのは「愛しい愛しい」っていう偏愛タイプ

談▼千葉麗子さん（脱アイドル／現デジタルコンテンツ&プロジェクト・デザイナー）

安達祐美宛に届けられた小包が、日本テレビ局内で爆発したのは一年半ほど前のこと。古くは美空ひばり・硫酸かけ事件のように、芸能人に襲いかかるファンの妄想にモラルはない。

九一年にアイドル・デビューするが、現在は魑魅魍魎渦巻く芸能界に見切りをつけ、電脳クリエイターとして毎日を送る千葉麗子さんが、自身を標的にしてきた〝アイドル・ストーカー〟たちの暴走ぶりを振り返る。

私は初めっから、ゲイノー人になりたかったわけじゃないのね。ママが昔、モデル

に憧れてて「麗子ちゃんはいいわね、キレイで」なんて言うもんだから、〝そっかぁ、じゃあママの夢を叶えてあげなくちゃ〟ぐらいの気持でこの世界に入ったの。だから、有名になるためなら何でもやりますみたいなアイドル人種じゃなかったの。アイドルデビューだったけど。

　私、サイン会なんかでも本当に気持の悪い人が来ると「あ、いや、ちょっと気持ち悪いから握手したくないです」って言ってたのね。事務所の人には怒られたけど。したくないのはしたくない。そういうスタンスだったんですよ、自分の中では。でも傍から見れば、やっぱりアイドルの〝チバレイ〟なわけで、そういう勘違いから、ついつい私の本性をむき出しにさせるような妙な人たちには、かなり出会いましたね。

映画『ミザリー』より（ビデオ発売元：日本ヘラルド映画　¥3,800 税込）

精子ジャムにチンコ証明

　大阪でラジオの番組を持ってたんで、月に二回ほど東京駅を利用していたんですよ。あるとき、おトイレに入ったのね。そしたら入口のところに女の子たちが二、三人溜まってたの。「ああ、いるな」と思ったけど気にせず入ったら、なかの一人が「あ、今のチバレイコだ」なんて言ってるのが背中越しに聞こえたのね。個人的にはそんなふうに呼ばれるのは物凄く抵抗があるけど、でもそれは仕事柄しかたないわけだから、個室に入ったわけですよ。

　そしたら出るときになって、外から押さえてやがんの、「チバレイコだ、チバレイコだ」って騒ぎながら。普通なら「やめてくださ～い」とか哀願したり、シクシク便所で泣いたりするんだろうけど。事務所の人に後で話したら、「お前よくやったな」って言ってたけど、私はそういう行為をすること自体「こいつら気狂いだな」って思ったんで、逆ギレしたのね。

「テメーラ！　なにやってんだよ！　開けろよ」って怒鳴りまくって、バクーンッってドアを思いきり蹴っ飛ばしてやったのね。そしたら相手が私の剣幕にビビッたみたいで、キャハハハハとか笑いながら逃げて行ったの、嬉しそうに。その姿を見て「ああ、やっぱり気狂いだな」って思ったけどね。不思議なのは、全然ヤンキーとかじゃないのよ、その子たち。普通の女子がやるところが、病の根は深いぜって感じ。相手してもらったのが嬉しいだなんて、倒錯してるよね。

私だって、最初っからこんなだったわけじゃなくて、ファンの人は大事にしなくちゃとか、ありがたいなぁなんて思う時期も当然、あったのね。今でも常識あるファンの人は大事にしてるし、それでも「これはおかしい？　ファンという人種って何？」って考えさせられる経験が私を変えたんだと思う。

私は十六歳でデビューして、事務所も小さかったのね。それにマネージャーも、もともと芸能界の人じゃなくて、ゲーム会社のプログラマーの男の子だったんで、規制というかショービズ界のドロや約束事みたいなものとは無縁だったのね。それに自分でも将来はクリエイターになりたかったから、言い方は変だけど自分をプロデュースするっていうか、自分の仕事に関係するものはオープンにさせてたし、仕事の選択も可能なかぎり自分でしていたの。だからよく言われる、デパートでの「営業」なんてのは一回もしたことなかった。

そんな感じだから事務所に来たファンレターも、あるとバンバン開けて見ちゃうのね。そしたらなかに小包があったのよ。なんだろうって見たら『ぼくが造った手作りのジャムです。レイコちゃん食べてね』って包みの上に手紙が差してあったのよ。包みを開けたら、ハチミツの壜のなかに真っ白の液体が詰まってる。

私は即、精子だなって思ったよ。周りにいたスタッフもさすがに驚いてたけど、「これは精子だよ」って私が言ったら「そうかもしれないねぇ」って。驚いたことに結構、大きい壜だったのね。そのなかにタップリ、満タン。ヨーグルトみたいなのがドロッと入ってた。思わず開けようとしたけど、それはさすがに止められた（笑）。

そしたらそれから一カ月後に、同じ男の子から自分のチンコの写真が送られてきたのね。おかしいのは「写るんです」とかで撮ったセルフ写真じゃなくて、証明写真で撮ったものなのね。街にあるでしょ、ボックス型の三分間写真、アレなのよ。本来、顔であるべきところがチンコになってるの（笑）。それもボッキしてるのね。スッポンポンでスタンバッっててフラッシュが焚かれるたびに、レンズに当ててたかと思うとおかしくて（笑）。

たしか四枚だったと思う、連続して写ってた。事務所の人は「見るな！」って言ったけど、怖い物見たさだよね。私は見ちゃった。それからだね、ファンって怖いなぁって思い始めたのは……。〈ファン＝気狂い＝怖い〉みたいな公式ができちゃった。まだデビューして一年くらいだったから、十七の頃からそんな妙な洗礼を受けてたのね。

その前の年は、Ｆ３０００のレースクイーンをやっただけだったから世間への露出も少なかったし、「レイコちゃん、可愛いねぇ」なんてレース場で言われると、「こうや

ってファンができて、アイドルってのは伸びていくんだなぁ」ぐらいのもんでしたよ。言っても信じないかもしれないけれど、その頃はファンレターの返事まで書いてたんだから。でも、精子ジャムやらチンコ証明が来てからはやめた、そういうことは。以後はキッパリと返事書くのはやめました、断筆だね。

アイドル・ストーカー

こういう話をすると「ショックだったでしょう」って言われたりするけど、ショックはなかった。私は気狂いとかに興味津々だからさ。事務所の方ではいろいろと気を遣ってたみたいで、勝手に手紙を開けるなとか言われたけど、見たね。手紙はそういう気狂い系と誹謗中傷が多かった。ドラマで男優とキスシーンなんかあると必ず、『おまえ死ね』とか『○○とキスしやがって』とかきたね。でも仕事だから仕方ないやって、そういう手紙については昇華できるのよ。

背筋がゾクッとくるのは『愛しい愛しい』っていう偏愛タイプ。私が芸能界辞める頃に、仙台の子から頻繁に手紙が来るようになったのね。その内容ってのが『レイコちゃん、昨日の夜は最高だったよ。ありがとう。もう良かったよ。僕はレイコちゃんの物だし、レイコちゃんも昨日のように僕を愛してね』って。「またヤラせてね」みたいなもんだったのね。

初め見たときは「何考えてんだよ、コイツ」って感じで放っておいたのね。そしたらまた来て『このあいだ会いに行ったのに、どうしていないの』とか『待ち合わせ場所は渋公（渋谷ハチ公前）って言ってたじゃ

千葉麗子さん

ん。僕、仙台から出てきたんだよ。どうしていないの』とか、だんだん、うわぁ、なんかコイツ妄想がエスカレートしてるって感じの手紙がドンドン送られてくるようになって、ドキドキしてたのね。

どうしてって、この子が本当に仙台からやって来て、自分の住所も電話番号も写真も同封してるんだもの。これは究極に入ってるなぁって予感がしてたんだけど、タイミング悪くその頃、芸能界を辞めて今の会社（チェリーベイブ）を興したのね。相手も長くてしつこかったんだけど、チェリーベイブの立ち上がり当初は自宅兼オフィスにしてたのよ。オートロックだし、セキュリティーに関しては安心してたからね。

そしたらある日、同居してた妹が「おねーちゃん。変な人がいるよ」って朝、起こしにきたのね。「誰がいたの？」って聞いたら、「ゴミ捨てに行ったらギターを持った男の人が入口に立ってて、ジッと私を見てるの」って言うのよ。そんな話をしてたらチャイムがピンポーンって鳴って、妹が「はい、チェリーベイブです」って出たら、「チバレイコさんいますか」って。「失礼ですが、どちら様ですか」って妹が聞いたら、その仙台の子だったのね。泡喰って「だめだめバッテン！」って妹に合図して、上からマンションの入口を見たらいるのよ、センダイが。

結局、姿が消えるのを見計らってから仕事には出かけたけど、あれは本当に怖かった。そしたら三日ぐらいして手紙が来たのよ。『このあいだは、せっかく行ったのに会えなかったね。残念だったよ。今度また電話してよね』って。もう、それからすぐに引っ越した。事務所も別にしたし、もしかしたら昔の事務所に今でも手紙が行ってるかもしれないけれどね。

姑息な追跡

でも本当にタチが悪くて薄っ気味の悪いストーカーはね、そんなとこにはいなかったね。広告代理店にいた。Nっていう男がいるんだけど、こいつが最低で自分の顔がいいのを悪用してて、新人のアイドル喰いが趣味なの。しかもやり方が卑劣。親が金持のボンボンなんで車もチャラチャラした流行物に乗ってるんだけど二十五、六のくせして中身がパァーなの。

私はそいつに狙われたわけなんだけど、握手会とかサイン会とかスケジュールをチェックして必ずやって来るのよ。しかも、他のファンの子たちとつるんで来るのよ。情けないことに他のファンの子たちもNがルックスが良くて、広告代理店勤務っていうことで頭が上がらないみたいでグループのリーダーにしちゃってるのね。

あるとき、スタジオ撮影会っていう仕事があって、現場に着くとNがいたのね。私はビックリして、なんであんたいるの？みたいな顔してたら、「ここ、親が経営してるんだよねぇ」って。怖かった。得体が知れないっていうか、手段を選ばないぞって感じがしたのね。その後でも家の前のローソンで張ったりするの。仕事で遅くなって買い物してると「やあ、偶然だね」だって。何言ってんだか。

今やってる、マルチメディアなんかのシンポジウムや講演とかでも、勝手に関係者

の控室に入ってくるしね。○○広告代理店ですって受付で言うと、たいてい、どこでもフリーパスにしちゃうみたいで、つきまとうつきまとう。煙草吸って休憩してると、真後ろにいたりするから本当に不気味。公私混同も甚だしいけど、本人はそれに執念燃やしてるから『今、家の前にいるから出てこいよ』とか変なEメール送ってくるの。でもあんまりひどいんで、『あなたの上司に訴えますよ』ってEメールで送ったの。そしたら効果てきめん！　シーンとなっちゃって音信不通。

せいせいしたと喜んでたら、次のイベントでまたいたのよ。取り巻きと一緒に神妙な顔しちゃって。そのときは握手会も兼ねてたんだけど、嫌な予感がしてたのね。そしたら案の定、取り巻きたちが「N君を許してあげてください」「悪気があったわけじゃないんです」って本人に代わって懇願するように言うのね、握手しながら。おまけに本人もチャッカリ並んでて、握手したら「ごめんねごめんね」って言いながら手を離さないのよ。しまいには警備員に引き離されてた（笑）。

笑っちゃうのはその後、ゲームのイベントの仕事なんか事務所に持ってきてんの。やることなすこと全部がサイテーでしょう。当然、断ったけどね。

路上のセクハラ電話

この握手会ってのがクセ物なんだよね。最初に気持の悪い人とはしないって言ったけど、ほんとは誰ともしたくないのよ。当然でしょ、知らない相手なんだから。だから、握手会が終わると「さぁ！　手を洗おう」って宣言してたもの。まだ客が会場にいても、関係ないのよ。有名だったよ、私のこの宣言は。本当にヤダった。

だってさぁ、あんなの自分でオナニーとかした後だよ、絶対。分かんないけど。でも、私はそう読んでるよ。だって自分が大好きなアイドルの女の子に会いに行くってなったら、僕のチンコ触った手で握手しようとか、そういうのあるって絶対、ほんとあるある。多いときは百人とか二百人と握手するわけだから、汗っぽいとかいろんな手があるでしょう。絶対洗うね。事務所なんかニコニコ笑えとか、握手は両手でしなさいとか言ってたけどね。

イタズラ電話の類は今でもありますよ。スタッフしか知らないはずの番号に「イクー、あんあん。イクー！　レイコ、イクよー」って男の声で入ってるの。このあいだなんて、携帯にかかってきたから「テメエー、ふざけんな！　かけてくんじゃねぇよ、この野郎！」って叫んじゃった、西麻布の歩道上で（笑）。まわりの人は驚いて見てたけど。スタッフの誰かが番号をリークしたか、このなかにも気狂いがいるんだね。

最近名古屋で、ニッポン放送の公開録音があったの。そのときはマネージャーなしで一人で行ったのね。そしたら会場で普通の感じの男の子が「髪の毛ちょうだいよ！　髪の毛ちょうだいよ！」って叫んでるの。びっくりしたけど「私、アイドルやめたのよ」って真顔で言い返したの。そしたら「僕は前のイベントにも参加したんだよ。覚えてるでしょう」って。確かに顔は覚えてたけど、二年ぐらい前のイベントだったのね。「うん、覚えてるけど」「じゃあ、髪の毛ちょうだいよ」だって。

どんな理屈で、そうなるのか分からないけど、「やだよ」って言ったのね。そんなこんなしてたら本番が始まったのよ。ファンに囲まれて放送するっていう感じで柵も何もない状態だったんだけど、その子は本番中に突然、人垣から飛び出してくると私の頭から髪の毛抜いてったの。「もーらい！」だって。もう唖然としちゃって言葉もなかったわよ。その子、私が表紙になってる雑誌に引き抜いた毛を挟むと逃げてった。ナイフとかだったら一発でおしまいになるところだもの、怖い経験でしたよ。

ヘア写真集出してけ！

ファン以外でサイコな奴ってのは、N以外ではTだね。あいつは完全に変。でも、芸能界にいる男の子ってのは、みんな変なんじゃないの。モテたいだけなら、サーファーとかでもいいわけだし、「俺は芸能人になるんだ」っていうアンテナの男の子ってのは、やっぱり変だよね、何か怖いよね。それでもTほどヘンなのは珍しいんじゃない。ゲイノー人とつき合ったことはないから詳しくは知らないけど。

私、女も男も含めてゲイノー人の友達っていないのよ。現場では「今度遊ぼうね」とか、女の子だったら電話番号教え合ったりするけど、実質かかってくることはないよ。社交辞令の一種だね。アイドルだからって横のつながりなんかないの。

Tの場合は結構イイ男だし、今、ウレ線でしょう。他のアイドルなんかも噂になりたいって気があるのか、誘ったら断らなかったみたい。それを私が断ったもんだから、いきなり控室に入ってきて電気消して、鍵掛けて「フェラチオしろ」だもの、パンツ下ろして。私は他につき合ってる人がいるからできないって言って、部屋から飛び出したの。

でも泣き寝入りは嫌だから、その場で共演していたドラマのプロデューサーや監督に「Tに今、これこれこういうことをされました」って言ったのね。完全に犯罪でしょう、普通なら。それがどっこい誰もTを叱らないの。その瞬間、「ああ、こんなもんか」って芸能界への未練は吹っ切れたのね。事務所も向こうは大御所だし、ウチは弱小。私は泣き寝入りはしたくなかったけど、結果的にはもみ消されたっていう感じね。

でも自分が誘えば断る女はいないなんて、バカは同じくバカなアイドル喰ってればいいのよ。でも、こんなことがまかり通るんだから異常な世界でしょう。

思えば変な世界でしたね。「誕生日を祝ってあげるから」って出かけたらヤーさんのパーティーに連れてかれたり、そんなのは事務所が私を騙してるんですもの。

だいたい芸能プロなんて、抱えたアイドルが落ち目になってきて契約期限も迫ってる、本人も辞めたがってるなんてときになると、手のひら返しますから。収支を計算して、この子にはマンション代やらドラマの役やCM取るための裏金なんかでいくらかかったと。ところが、その子の稼ぎが予想どおりなくて全体的には赤字だとすると、精算するからヘア写真集出していけとか、もっと質の悪いプロダクションに売り飛ばすとかが日常の世界ですからね。

知り合いの子なんかは逃げてるよ。元所属してた事務所から本気で。行方くらましてるもの。そういう世界ですから。振り返

ればファンの怖さのほうがマイルドだったかもしれないね。

なんとか死者も出さずにすんでるわけだけど、危ないよ、これは

談▼鈴木慶一さん（ミュージシャン）　取材▼成田毅（フリー編集&ライター）　構成▼内池久貴（編集&著述業）

知らないうちに、見知らぬ人の住民票が自分の家に登録されていたら、どんな気持になるだろうか。一方的な妄想に憑かれた女から、突然、使用済みの下着が大量に送りつけられてきたらどんな気持になるだろうか。ムーンライダーズの鈴木慶一さんが、二十年近くにわたって関わりを持たされた奇妙な女性の行動を語る。

事の起こりは十七、八年ほど前。ムーンライダーズを結成して二年ほどたっていた頃だから、僕が二十六、七のときかな。東京の大田区にある僕の自宅に「今、羽田空港にいるんですけど……」という電話が女性の声でかかってきた。名前を聞いても、ぜんぜん知らない人なんだけど、「待ち合わせをしたはずですが」って。そのときは、「いや、してないです」と言って切ったんだけどね。

数日後、また電話がかかってきた。博多の人らしくて、今度は博多からだったんだけど、「この間、待ち合わせしたのに、なぜ来てくれなかったんですか。私、待ってたんですよ」と。で、なんで僕の電話番号を知ってるのか聞いたら、僕が教えたんだって言うんだ。あるコンサート会場で席が隣同士になって、そこで教えてくれたって。でも、僕はずいぶん長い間博多に行ってなかったし、そもそもそれは僕が行くはずもないハードロックのコンサートだった。だから「それは僕じゃない」と言っても、「いや、鈴木慶一さんだ」って譲らない。

そのときもそこで電話は終わったんだけど、また頻繁にかかってくるようになってね。次の電話がなんだったたっけな……。あっ、そうだ、「婚約指輪送りますから」って。それで本当に送られてきたんだけど、包みを開けてみると駄菓子屋で売ってるような、百円か二百円のオモチャの指輪。しかも、一緒に手紙が入ってて、「私たちはこれで婚約しました。東京に出ていきます」と書かれてた。

なんで送り返してきたの！

ヤバイな！とは思ったんだけど、まだ姿は見せてなかったし、その時点では変な人だとは決めつけてなかったんだ。当時は『ミザリー』なんて映画もなかったし、こういう人たちに対するガードも甘かったからね。熱烈なファンくらいに思ってたぐらいだから、電話があれば、それなりに話を聞いてあげる、牧歌的な時代だったよ。

だけど、次第にこれは変だぞと思いはじめたんだよね。たとえば、ムーンライダーズに『イスタンブール・マンボ』というアルバムがあって、そのジャケットの裏側に女の人が顎に手をあてている写真が印刷されているんだけど、それに対して「私の顎にはホクロがあります。これは私への合図ですね。ジャケットを変えてください」って、訳のわからないことをしつこく電話で

言ってきたり。
言動が非常に変だなと思ったのは、彼女は「お父さんとお母さんに虐待されてる」と主張する。それでどういう虐待を受けているかと聞くと、お父さんが沖縄に行って、お土産にハブとマングースが闘っている置物を買ってきたんだって。それが部屋に置かれてて怖いから、その置物から逃げたいって言うんだよね。なんだかよくわからない(笑)。その頃からかな、今度は電話より手紙が増えてきたんだよ。内容は、とにかくハブとマングースが中心(笑)。それがいかに怖いかということを説明しつづけるんだよ、便箋に細かい文字でビッシリ十枚分くらい。
詩がビッシリ書かれた大学ノートが届いたこともあった。アルバムになることを想定してたんだろうね、一曲目から十曲目までタイトルのついた歌詞が書かれてた。よくは覚えてないけど、ミョーチキリンな詞ばかりだったよ。それも、一行ごとに文字の最初と終わりに彼女の認め印が押してあるんだよ(笑)。ハンコだらけなわけ。これは、相当ヤバイな、と思った。

鈴木慶一さん

そういう電話や手紙がしつこく続いたから、誰が僕の電話番号を教えたのかを、バンドのメンバーとかに聞いたんだけど、「そんなこと言って、本当は博多に行ったときに自分がなんかしたんじゃないのか。ナンパしちゃって、あとがもつれて困ってんじゃないの」って、誰も本気にしてくれないんだけど(苦笑)。いろいろ知人に調べてもらったんだけど、納得のいく答えが出ない。ひとつだけ、ちょっと怪しい連中が思い当たらないこともなかったんだけど、確証はないから……。
でね、また「上京する」という電話があって、その後、今度は小包が送られてきた。「爆弾じゃないだろうな」とおそるおそる開けたら、中は全部下着。それも使用済みの。

ブラジャー、パンティ……汚いTシャツ。箱のいちばん下にはボロボロの辞書が一冊入ってた。それで全部。でも、このときは送り主の住所が書いてあったから、送り返した。彼女、「なんで、送り返してきたのか」って、あとで怒って電話してきたけどね。

未知との遭遇

そのうち、悪いことに博多でコンサートをやることになったんだ(苦笑)。たしか七九年頃のツアーだったと思うから、その人が最初に電話してきてから三年くらいたってたかな。この頃は電話が早朝にかかってくるようになってたんだけど、こっちはもういい加減、相手にしないで切るじゃない。七時にかかってきて、それを切ると今度は七時五分にかかってくる。また切ると七時十分にかかってくる。それが三十分くらい続く。期間にも波があってね、一週間くらい集中したかと思うとなくなるというように、二カ月に一回くらい集中してた。電話番号を変えたらと思うかもしれないけど、家には僕の家族が他にも何人かいて、簡単には変えにくかったんだ。

博多に行ったんだけど、彼女がいつ現れるか不安だったよね。それで、実際来たんだよ。コンサートが終わって、ホテルのラウンジで雑誌の取材を受けてたら、ホテルの一さん、ホテルのフロントにお越しください」って館内放送の呼び出しがかかった。「まさか……」と思いながら行ったら、いるんだ! 一度だけ写真が送られてきたことがあるんだけど、その人が目の前にいる。二十代半ばくらいで美人といえば美人だけど、口紅は唇から見事にはみ出してるし、髪はバサバサに乱れてる。目は中空を漂っていてね。

僕を見て、その人、なんて言ったと思う? 「鈴木慶一さんですか?」と聞くんだよ。「そうですよ」と答えると、「私と会ったこと、ありますよね?」って。「いや、ない。今日が初めてですよ」って言ったら、「ああ、そうですか」と帰っていった。ものの一分たらずだよね。本当に、なんだったんだ、今のは、だよね。

あとで聞いたら、僕を呼び出す前に「鈴木慶一さんはいますか?」って楽屋に来てたらしいんだ。その場にいたごく普通のファンの女の子たちには「あなたたち、なんでここにいるんですか? あなたたち、鈴木慶一さんのなんですか?」って詰問したり、僕を探してロッカーを一つひとつ開けて回ってたらしい。それから楽屋を出て、ホテルに来たみたい。そのとき偶然、ホテルのロビーにいた僕のマネージャーが言うには、口紅塗りながら歩いてくる女がいて、それを見ただけで「これは鈴木が気にしていた例の女じゃないか」ってわかったそうですよ。

でね、そのとき僕は何年かぶりかの博多だったんだけど、博多には鈴木慶一がよく来る店があるという話を耳にして、その店がどこにあるのかを聞き出して行ってみたんだ。仲間の一人をその店のマスターのところに行かせて、「鈴木慶一さんってよく来るんですか?」って質問させたら、「よく来ますよ」と言うんです。それで「今日も来てますか?」って聞いたら、店内を見回して「今日は来てないですね」って! 衝撃的だったね。オレもいるんだよ、マスターの目の前に! みんなでゾーッとしてさ、

すぐ帰ったんだけど……。

どうもオレの偽者がいるみたい。例の女性と、その偽者に関わりがあるかどうかはわからないけど、彼女は僕の顔を見て、僕が鈴木慶一だとわからなかったみたいだからね。この話、謎ばっかり膨らんでくるでしょ（笑）。

第三の男

それで東京に帰って何日かしたら、また電話がかかってきた。「本当に家が怖いので、とにかく家出をします。下宿させてください」って。こっちは「ダメだ」ってすぐ切るんだけど、また電話がかかってくる。そういうのが何度かあって、ある日ね、これは怖かった……。

徹夜で家にこもってデモテープを作ってたのね。マネージャーが居間のソファーで寝てたんだけど、僕は一人で家の中のスタジオに入ってギターを弾いてレコーディングをしていた。ヘッドフォンで耳を塞いでいるから周囲の音は聞こえない。でも、人の気配がしたんだよ。それでパッと見たら、目の前に例の人がいる！ 玄関とか開けっぱなしだったと思うんだけど、いきなり目の前にいたわけ。しかも、スタジオの中にまで入ってきて、やっぱり髪の毛を振り乱してね。「ウワァー！」って大声出して叫んでしまった。まず相手の手を見たよね。ナイフかなんか持ってたら危ないと思ったから。持ってなくてよかったけど……。

それで、「なんだ！」って言ったら、「今まで送った婚約指輪とか手紙とかすべて返してください。もう私はわかりました。それを返してくれれば、もういいです」って。でも、そんなもん捨てちゃってるからないんだよね。返せない。それでちょっとした押し問答があったんだけど、一分たらずで、「じゃあ、わかりました」って出て行った。

出て行って、どこへ行ったかと思ったら、家の奥に入っていったらしい。僕は追いかけなかったんだけど、マネージャーが駆けつけたら、その人ギャーッて叫んで、バァーッと玄関めがけて走って出て行ったらしい。なんだったんだ、アレは……。

数日後、電話がかかってきたんだけどね。「そのまま同居するつもりでいた」と言うんだ。聞くと、博多で転出届を出して大田区に転入届を出してからウチに来たらしいんだ。その後また、大田区に転出届を出して博多に転入届を出したみたい。調べてみたら、本当にそうなってた。つまり、一時はウチの自宅に彼女の住民票が入ってたんだよ。

その頃で、最初の電話から四、五年たってたかなぁ。これはもう一回何かあったら、次こそは警察だなと思ってたんだけどね。それから、一度はパタッと電話がなくなった。一、二年なくて、また電話があるようになったんだけど、もう彼女だってわかった瞬間、電話を切るようになった。僕以外のウチの人間が出たときは、ちょっと怒ったりしたらしいけどね。

去年もまた電話があったらしいよ。かれこれ、十七、八年……、長いよね。どう考えても、ムーンライダーズが好きとか、僕のことが好きとかいうわけじゃなさそうだったんだけどね。ムーンライダーズに言及したのは、さっき言った「ジャケット、変えてくれ」という話だけだし、僕に対して「好き」だとか言ってくることもなかったし

ね。

妄想ではあると思うんだよ。ただ、その引き金が僕と会ったというコンサート。でも、そんなの僕は行ってないし、他に隣接したアイテムは見当たらない。僕と会った二度とも「鈴木慶一さんですね?」と確認して、すぐに姿を消す。本当のことはわからないけど、彼女はそのコンサートで座っていた人間を追っかけてて、その人間と僕とが別の人間だということが彼女の中で消化しきれてないんじゃないかな。彼女の妄想に介在する人物がいるんだよ、きっと。

類は友を呼ぶ

今話した女性については、べつにムーンライダーズの鈴木慶一が引きつけたわけじゃないと思う。でもね、彼女をきっかけに、続々、そういう人が現れるようになってきたんだ。

八〇年頃からかな。そういう人を引きつける要因がこちらにあったのかもしれない。僕なりに分析したこともあるけど、歌詞に触発される人が多いみたいだね。「この歌は、この一行は、私のことを言ってますね。」って。なんで、こんなことを書くんですか」って。なかには「この一行を変えてくれ」と言ってくる人もいる。

変わった手紙も来たよね。便箋に三十枚くらい、その人の半生が書いてあって、最後には「最近、神が見えます。来週、入院します」。そのあと病院から絵ハガキが来たよ。文章はムチャクチャで意味がまったくわからず、一文字ごとに文字の色を変えてある。山下清の絵ハガキだったけどね。

別の人では、「鈴木慶一さんに言いたいことがあるんですけど」と、延々六十分くらい喋っているテープが送られてきたりというのもあった。二十四時間、僕を監視しているとしか思えないようなことをする人もいる。ここ数年は、夜、タクシーから降りるとき、必ず周りを見てから降りているしね。なんだか、こっちが妄想に侵されているみたいだね(笑)。

変な人と、普通のファンやグルーピーとの区別というのは、非常に難しいね。ぜんぜんわからないよ、それは。ボーダーライン上にいるような人が多いと思うんだ。

いまんとこは、なんとか死者も出さずにすんでるわけだけど、危ないよ、これは。自殺したり、誰かを殺したり、オレを刺したりとか、そういうのは困るじゃない。自殺を試みたという報告はあったんだけど、それは大事にいたらなかったみたいだから……。そういうことに対してこっちに責任ないんだけど、自分の曲に触発されたとか言われると、やっぱり気持が、重く澱んでくるじゃない。

変な話、精神科医ってけっこう危ない目に遭う人、多いらしいよね。殴られたり、まれに刺されたり。僕たちは精神科医のように、直接、そういう人に接しているわけじゃないけど、どこかちょっと似たとこがあるよな。

僕たちが作っている歌は、チューブだとかサザンオールスターズみたいな健康的なものじゃないわけで、もう少し違うものを作ってるんだよね。どっか変わった音楽、ワイヤード(神経が高ぶる)なものをやってるわけだから。他のミュージシャンにもそういうファンに悩まされている人はいるみたいだけど、僕にこれだけ多いというのは、

やっぱり何か発信しているところがあるのかもしれない。

僕自身が八六年からニューロティックなことになってしまったこともあるしね（不安神経症）。そういうときに作った曲で、二度と歌えない曲というのもあるよ。その曲？「何だ?この、ユーウツは!!」（『ドント・トラスト・オーバー・サーティー』収録）という曲だけどね。ちょうど発病した頃の曲で、それを歌っていると、またスイッチが入っちゃいそうでね。

僕自身が、自分が癒されたい部分を作品にして吐き出してるのかもしれないよね。発症してから作っている曲というのは、より自分を癒すために作っているから、よりそういう人を引きつけているのかもしれない。そうすると、やっぱりリスクは大きいじゃない。実際、こういう場では言えないようなことも含めて、いろんなことがいっぱいあるから。

そういう人を引きつけるようなものを発信している自負？ まあ、ある種、すごいんだろうね。すごいんだろうけど、自分も苦しいじゃない。そういう損得勘定からいえば、ゼロって感じだよね（笑）。音楽やってる人間には、ちょっと神経症的な人は多いけど、作ってるものには、そういう匂いがしない人もいるでしょ。で、する人もいるよね。オレのはちょっとしてるんじゃないかな。それで、歌詞に対して、ああだこうだと言われるんじゃないかな。僕の歌を聴き手は一対一の世界と受け取って、過剰に反応する。ある意味では、類は友を呼ぶというかね（苦笑）。

何だ？この、ユーウツは!!（１番のみ）

鈴木慶一、鈴木博文／作詞　E.D MORRISON／作曲

Today　目がさめたら　もうユーウツの中
Newspaper 広げて　もっとユーウツの中

これから先の　My life　まるでわからない
ここまできた　My life　どこもわるくない

とつぜん　心が離れていくよ
Oh Dear My Friends　この手を握っていてよ

これから先の　My Life　まるでわからない
ここまできた　My Life　どこも悪くない

Loneliness　いつの間　心のなか
悲しくもないのに　心が泣く
Loneliness　いつまで　心のなか
おかしくもないのに　心が笑う

Dear My Friend　その手を　つかんでいてあげる

（作詞：鈴木慶一）

ファンクラブの隠れた意味

まぁ、こういう人たちを見ていると、ファンの人に手を出すとかは絶対にしなくなる。大昔の若い頃はわかんないけど（笑）、今は決してしない。

これ以上、こういう人たちが増えてくると怖いですよ。人数が増えれば、飛び抜けちゃう人もいるかもしれない。オレの耳には入ってきてないだけで、もういるのかもしれない。それはわかんないよね。ファンが増えるというのは普通に考えれば嬉しいことなんだけど、そのなかにちょっと違う人も交じっているのは……嬉しくはないよね。そういう人がたくさんいるというのがまた神話化される部分もあるかとは思うけど、ここまでくると、もういいよ、勘弁してよという感じ（笑）。

ちゃんとした公認のファンクラブを作ったというのには、そういう理由もあるよね。ファンクラブの中というのは非常に見通しがきくからね。そうすると、「ちょっと変な人がいるから気をつけてください」というような情報も入ってくる。もちろん、その変な人を排除することはできないけど、何か飛び抜けたことをしないように、監視というとオーバーだけど、見られるようにしておく。アイドルのファンクラブだって、そういう機能を果たしているんだと思うよ。

異常なファンの暴走が怖くて創作活動をやめる可能性？　それはない！　それはまったくロジックの違うことだから。こっちはそういう人を生み出そうとして音楽を作ってるわけじゃないから。それはアクシデントとして捉えないとやってられないよ。

それにさ、そういう人たちを生み出すのが怖いと言ってる反面、そういう人たちをさらに触発してしまいかねないことを新たに始めてしまうという矛盾したこともやってるんです。

たとえば、今は情報ネットワークとかインターネットとかがあって、聴き手とか作り手の間の関係が大きく変わりつつあるでしょ。ひとつの例を挙げると、ある人から送られてきた僕たちの作品に対する論評をムーンライダーズのホームページで褒めてあげたりする。そうすると、会ったこともない人なのに、知り合いのようになる。そうしたなかで、危険もまた増していると思うんだ。もちろん、評論に助けられる機会の方が圧倒的に多いんだけど。

自分のなかで、こちらとの関係を見い出し、それを膨らませていく。つまり、現代の聴き手と作り手の距離は非常に接近しているわけ。電子的なメディアのなかでクローズしているという状態は、遠いようでいて近い。これが新たな人物を生み出す可能性はあるのに、僕はそこにまた足を踏み入れてしまう。

今度のアルバム（十二月発売予定）だってそう。結成二十周年記念ということもあって、ホームページを使ってファンの声を公募して、その声をアルバムのなかでサンプリングしてみようかという案があるんだけど、それだって、新たにスイッチを入れてしまう危険なことかもしれないよね。この取材だって、これが活字になれば、またそういう人たちにスイッチを入れることになるかもしれないのに、僕はこんなことを話している（笑）。やっぱり、音楽を作る人というのはどうかしてるんだよ（笑）。

パソコン通信

仮想現実の脳スパーク野郎ども！

**なんでもありのバーチャル世界に歯止めはきかない！
妄想、自己本位、変態、馬鹿……。
これが気違いネットサーフィンだ！**

クーロン黒沢（フリーライター）

天才と気違いは紙一重――。

ということで、インターネットやサイバーマネーに詳しく、果ては家族とJAVA言語で会話しているような天才たちのなかにも、気違いに限りなく近い人は意外と多い。具体的な例として、埼玉県の奥地・吹上町において実際に起こった事件を紹介してみよう。

主人公は吹上在住の、ある有名な脳スパーク中年男性である。彼は発作的に突拍子もないことを計画することで、吹上近辺ではちょっとした有名人なのだが、彼が最近密かに計画を練っていたのが、今流行（？）の『インターネット教室』だった。

脳のスパークした野郎とはいえ、インターネットを教えるのはまったく自由。そう決めた瞬間、彼はさっそく近所のNTTへ走り、町の公民館に無断でデジタル回線の工事予約を入れようとしたり、料金着払いでパソコンを買って公民館に送りつけようとしたり、気違いならではの飛び抜けた発想と行動力によって、多くの市民に多大な迷惑をかけまくった。が、本人にはまったく罪の意識がないというから困ったものである。

科学の進歩した世の中ではあるが、気違いもまた、新しい世界に容赦なく進出しているのだ。

データバンクにアクセス

妄想、自己本位、変態、馬鹿などなど。あらゆる気違いのサンプルが巣食う、爽やかでアットホームなパソコン通信『ニフティ・サーブ』では、気違い研究にもってこいの楽しい仲間たちが、二十四時間態勢で

元気いっぱいケンカや変態行為に精を出している。モニタリングセンターの諸君、まことにご苦労である!といった雰囲気だ。
ここでは、これまで私がニフティの掲示板で巡り会い、心に残った数々の興味深いメッセージを傾向別に分析してみたいと思う。
登場する人びとには「気違いみたいだけど辛うじて正常」という人もいれば、完全に切れてる、病院行けこのバカ!といった感じの犬野郎もいる。
実際のリアルな社会では逮捕されかねない変態的行為も、下層……いや仮想のいわゆるバーチャルな世界では黙認されているのが現状である。インターネットの倫理規制を巡って、今世界中で大論争が巻き起こっているが、それとはまったく関係ない低レベルの次元において、彼らはネットワークでの気違いライフを表現の自由という旗の下でエンジョイしているのだ……そんなわけで、ここまで読んでワケがわからないという人も、あまり気にしないで読み進んでみよう。

無害な人と有害な人

ターミナル駅の地下道などを歩いていると、ブツブツつぶやきながらフラフラしている楽しそうな人を見かけることがある。
ああいう人を避けて歩くに越したことはないが、万が一ぶつかったとしても、まず殺されることはない。おおむね温厚そうな人ばかりのようだし、ひとりでブツブツ言う権利も憲法では保障されている。
ネットワーク上にも似たような人は大勢いるようだ。ニフティの掲示板では「スピリット(こころ)のコーナー」という場所に、よくその手のブツブツが散乱しているが、気違いのレベルによって文章の意味不明度も変わり、読んでいて面白いものから気分を鬱々(うつうつ)させてくれるイヤーなものまで、頼みもしないのにバラエティに富んでいる。

…………

●田村亮子のどこがいいの?(長文要約)
検索キー:田村を叩く会同士求む

アニメのYAWARAのファンには許しがたいこと。いま再放送してるんですが、それを見るにつけ頭に来ます。田村のことを〝YAWARAちゃん〟と呼ぶ輩はアニメを見たことがないのでしょう。アニメの柔ちゃんは可愛くて一途でほんとにいい子なのに、似ても似つかねえ痴漢も哀れむ程のおツラの田村と一緒にして欲しくない。
先日、アニメでYAWARAスペシャルがあった時も、案の定オープニングで田村が出演していました。やめろ! アニメとダブらせるバカが必ず出るから。一番最初にYAWARA呼ばわりした人間と会ってとことん話し合いたいですね。もしくは、殺しちゃいたいですね。

…………

田村選手に見せたら投げ殺されてしまいそうな内容が淡々と書いてあるが、これなどは読んでいて比較的楽しく、どちらかというとアッパー系の作用を持つ電波テキストと言えよう。反対に、見るからにトゲトゲしい、ダウナー系のヤバいメッセージも二つばかり紹介したい。
まずはニフティの「売ります」掲示板でケンカを売っていた謎の男、そしてもう片

方は「仲間募集」の掲示板で、なぜか屠殺を見たいと連日書き続けていた男である。

●喧嘩売ります。

検索キー：売ります

僕は今まで、僕より強い人を見たことがないんです。僕は、空手やグレイシー柔術をやってるわけではありません。
現在201戦200勝、1敗、僕の最近のファイトによくある傾向として、例えば、がむしゃらの中の一発が相手の鼻の横で目の下、犬歯のちょい上にヒットした瞬間、逆の手がさらにヒットさせる、瞬間的な判断パンチ。ぐにヒットさせる。一回目でヒットした点にす戦いません?ぼくと。やる時はK－1じゃなく、アルティメットルールで。

●屠殺（鳥、豚、牛）が見学できるところ

検索キー：仲間募集

屠殺（鳥、豚、牛）が見学できるところをご存じの方。どなたか教えてください。
出来れば首都圏が希望ですが、一応全国各地どこでも構いません。

ケンカを売っていた男は、なんと文末に自宅らしい電話番号と名前まで書いていた。見ると、どうやら東京に住んでいるらしい。二百一戦して負けたのは一度だけだと豪語しているが、どこで戦っているのか考えるとちょっと怖い。ひょっとして頭の中？
……気になったので文末に書かれていた電話番号に連絡をとってみると、意外にもコール二回で中年女性らしい声が応答した。
「ハイ、○○ですけど(署名と同じ名字)」
「あ……黒沢ですが○○さんいますか」
「いません」
「あの……」
「ガチャ」
○○君のお母さんらしい人は、私に喋る暇も与えず受話器を置いてしまった。誰かのイタズラなのか。それともニフティの誰かと対戦した挙げ句、もう戦えないほどコテンパン（死語）にされてしまったのか……。
○○君の消息も気になるが、もう片方の屠殺マニアも負けずに興味深い。なぜ屠殺が見たいのか、屠殺を見てどうしたいのか、そのあたりがいっさい触れられておらず、非常に不気味である。さっそく彼に電子メールで「ヤー、ボクも屠殺見たいなあ」と、カマをかけてみたが、警戒されたのか返事はなく、果たして彼が屠殺を見学できたのかできなかったのか、それについても謎のままだ。

飢えた分裂気味の方々

高校時代、体育教師のKはタブー満載の黒い過去を振り返り、多感な若者たちを前に、こんな話を聞かせてくれた。
「オレさあ昔、○○市のボランティアで気○いに水泳教えたことがあるんだけどよお、あいつら本能で動いてっからさあ、プールの中でチ○コ立てたりして参ったぜヒヒヒ」
そんなわけで(どんなわけだ!?)、ニフティでもダントツの情報量を誇る「文通希望」掲示板は、別名「ネットナンパフォーラム」と囁かれるほど、朝から晩まで見境なく、女目当ての野郎からの飢えたメッセージが

photo▶平山法行

投げ込まれているが、その大部分は「じじょっ女性のかた、友達になってください」とか「当方三十五歳の管理職、ものわかりのいい愛人求む」など、比較的他愛のないメッセージがほとんど。

そんな『文通希望』の波の狭間に、たまーに浮かんでいるのが「盛りのついた気違いからの怨念入り公開ラヴレター」だ。

一見すると普通の文章だが、読めばピピピと波動を感じる電波レターは頻繁に見られるものではないが、漁師が大ナマズをしとめたとき嬉しいのと同様、テイストレスな求愛メッセージをたくさん集めた日など、つい「大漁だ！」と叫びたくなる衝動を抑えるのに苦労してしまう。

●僕とエッチしてくれる女性メール下さい

検索キー：文通

見てくれてありがとう！僕は工学系の大学院生です。歳は23歳の男です。最近、女性友達がめっきり減りました。とっても寂しいです。女子高生、女子大生、23、24、25ぐらいのOLの方、ぼくとまじめなメー

ル交換をしませんか？明るくて、楽しい女性の方を希望しています。
　できれば、彼氏がいないのが希望です。僕としては、本当に恋人になってもらえる女性が希望です。まじめにメールをしてくれて、恋人になってくれる女性の方には僕の、童貞をあげます。エッチがしたくてたまらない！冷やかしだけはやめて下さい。

●10代の女の子へ

検索キー：交際

　20歳以下の女の子でお兄さんが欲しいという人居ませんか？ただし、そこら辺にいるコギャル、マゴギャルは却下します。もちろん援助交際も却下します。
　年齢26歳（すごい若い）。題名は必ず「お兄さんになって下さい」にして下さい。

　最初の文章を分析すると、爽やかな学生が女の友達を探しているように見せかけて「まじめなメール交換をしませんか」などと気取ってはみたものの、だんだんと下半身がムズムズしてきて本性を抑えきれなくなり、「恋人になってもらえる女性が希望です」と調子に乗り始め、最後には「エッチがしたくてたまらない！」と下品な品性を爆発させてしまった、といったところか。
　そして次のメッセージ。こいつに「お兄さんになって下さい」と頼む「そこら辺のコギャル、マゴギャル」がいるのかどうかはともかく、いきなり片っ端から却下しまくり、そのうえメールの題名まで指定する尊大さには気違いの香りが若干臭う。しかしこいつら二人を足しても、次に登場する男には到底勝てないだろう。久々の大物である。

●夢のある女の子、是非メール下さい

検索キー：仲間募集

年　齢：38歳（見た目は30歳前後）
職　業：音楽関係のプロデュース
雰囲気：石田純一に似た優しい人と言われます。また、我が道を行くタイプでおネエちゃん好きな性格がビートたけしに似ていると言われます。
　夢はあるのだけれど、適切なアドパイス（ママ）や金銭的な援助がないために目的が達成出来ない女の子、協力したいと思います。
　また、自分がこの先どう生きるべきか分からないけど、今の生活から脱却したいと思ってる女の子もOKです。今までに2人の女の子をサポートしました。
（その1：歌手になった娘）
　歌のセンスはあるのだけど、付き合っていたのがとんでもない連中ばかりで、会った時点（カラオケ屋で会った）ではテレクラに電話してお金を稼いでいた様でした。
　仕事を探して、歌のレッスンをしてあげました(2年)。その後オーディションを受けさせあるプロダクションと契約を結び、

今は歌手デビューを待っている状態。

（その2：途中で逃げた娘）

2週間前に渋谷でやくざにからまれているのを助けてあげた。16歳の家出少女でした。学校も中退し家にも帰れないので、とりあえずウイークリーマンションを借りてあげました。美容師になる夢を持っていたので、美容学校の願書を取りに行ってあげたりバイト先（美容室）をみつけてあげたりしました。同時に、家に帰れるように電話し、また中退になった高校に叔父といつわって行き、高校に復帰出来るようにしてあげました。しかし毎日カネカネの電話ばかりになったので、終わりにしました。

金に困ってない（と仮定しよう）、いい歳こいた石田純一似の音楽プロデューサーが、よりによって夜中のニフティで「夢のある女の子」を探すこと自体かなり胡散臭いが、わざわざ実例挙げているのがまた泣かせる。

しかーし『その1：歌手になった娘』はまだいいとしても『その2：途中で逃げた娘』は、冷静に読むとかなりスゴい話だ。

まあ、まず「渋谷でやくざにからまれる

16歳の家出少女」というシチュエーションもとりあえずスゴいけど、そんなことより、たった二週間でヤクザから救出してマンション借りて美容学校に入れる準備して仕事探して美容室で働かせて家に帰れるように工作して高校に叔父といつわって潜入して復学させ、さらに毎日カネカネの電話をさせるってよー、相当暇なんだなあ。もしくはドラえもんか？

とりあえず面白そうな奴なので、知り合いのハッカーがくれた女性名義のIDを使い、こいつに次のような電子メールを送ってみることにした。

「……ハーイ18歳の女の子でーす。でも高校生じゃないでーす。いまプーなんだけど、専門学校行って英語とか習ってアメリカとか行きたいんだけど、どんなことすれば援助してくれるの？……」

すると、予想どおり間髪いれず返事が来た。

●至急返事下さい

僕を信頼してついて来る気あるか、この人間の言うことを聞いていれば自分には明るい未来があると思えるか、自分がもっと輝けると思えるか、そう思えれば援助することを考えます。

実際にサポートすることを決めてからのことになるけど、バイトもした方が良いと思うから、履歴書の書き方や○○さんに合いそうなバイト先も考えなきゃいけないし。

色々やらなきゃいけないことあるけど、ちゃんとついてくる気があるのかな？相談にものるし、必要なら金銭的な援助もするけど、のんきにプーをしている時間なくなるけど大丈夫？それこそお尻をひっぱたくように「あれやれ、これやれ」言うことになると思う。○○さんがそうしてもらいたいと心から思うなら、一度会いませんか？

今週は大丈夫。来週はレコーディングの関係で、時間がつくれるか分かりませんよ。

二週間でいろいろできるドラえもんのような男だが、来週はレコーディングで忙しいから今週会いたいそうだ。自意識過剰なのはともかく、文章の態度がやたらでかくて押しつけがましいので、読んでいるうちだんだんと自分がイライラしてくるのが分かる。

第一サポートされるのに、なんでバイト探したり履歴書書かなきゃならねえんだ？お前が援助するって言うからメール出したのに、働かされるんじゃ意味ねえだろうよこの馬鹿！と、関係ないのに画面に向かってブツブツ言ってしまう自分も気味悪いが、とにかく頭にきたので、その後届いた彼からのメールはすべてシカトしている。

親戚たち

●キス＆ペッティングしたいな（京都）

検索キー：文通

変なタイトルで驚かせてしまったかも知れませんが、でも僕は普通の人ですから安心して下さいね！　僕は現在A（キX）とかB（ペXXXグ）フレンドを求めてます。

僕はCよりAやBの方が好きなんです。

Cは動物みたいだから！　女性を抱き締めているとスゴ～ク幸せな気持ちになれます。もし、よろしければ僕とA＆Bフレンドになって下さい。僕は本気です。年齢とかは問いませんが、秘密は守って下さい。
会っても名前以外は聞きません。僕は女性を困らせるのは好きではありませんから。
最初からBに抵抗あるなら、AフレンドでもモチロンOKです。僕は本気です。

……………………

気違いとは言えないが、「文通希望」や「仲間募集」などで特殊性癖の仲間を募っている人びとのなかにも、もうすぐ気違いになれそうなユカイな仲間がたくさんいて、日本の未来も楽しみな今日この頃。
ちなみに、ペXXXグ友達を募集しているこの男はまだ二十歳。本気なのは充分伝わってくるが、Cは動物みたいだから！と言い切り、会って名前しか知らない女とキXやペXXXグをしたがっている自分を「普通の人ですから安心して下さい」と自己紹介してしまうのは、まさに気違い幹部候補生と言えよう。
次に紹介するのは「女性の方、初めてのオナニーを教えて！」という題名でポストしていた男からの手紙。こいつに例の女性IDを使い「私の初めてのオナニーは台所のテーブルの角です。あなたのオナニーも聞きたいわ」という丁重なメッセージを送ったところ、忘れた頃に「僕の初オナニー」に関する詳しい手記が、電子メールで届けられた。気持ち悪いので紹介しよう。

……………………

●メール有り難う

じゃあ僕のオナニー初体験を告白しましょう。小学校の5年と6年の間の春休みでした。あるときなぜか急に、中身はどうなっているのかなと思い、なぜかすでにいきり立ってるおちんちんの皮を、根本の方にひっぱってむいてみました。
するとどうでしょう、亀の頭のようにくびれた頭がでてきました。なにかドキドキしてきて、そのいきり立ったおちんちんを、なにも知らないで前後にこすってみました。すると急に気持よくなって、ぴゅうっと白い何かが、先から出てきました。
僕はびっくりして病気だと思い、どうしようか悩みましたが、気持ちよかったのでもう一度やったらまた気持ち良くなって白い物が出ました。何だろうとずっと悩んでましたが、毎日一日何回もしていました。
それからしばらくして、雑誌かなにかでこれがオナニーだということを知り、ホッとしたと同時にくせになって毎日してます。

……………………

なにはともあれ、気持ちよかったという雰囲気だけは充分に伝わる、かなり読みごたえのある文章である。
こんな面白い告白がタダで読めてしまうのも、ニフティの男性会員さんに気違いを含めて親切な方が多いからである。
だがそれも、パソコン世界全体の宿命、すなわち慢性的な女性不足からくるものでしかなく、多くの場合、親切なのは相手が女性だった場合のみに限られ、残念ながら男性に対してはそれほど皆さん、親切にはしてくれない。
しかし先日、そんな私の固定観念を吹き飛ばす「究極の親切（？）」とも言えるスゴいメッセージが『仲間募集』掲示板にアップロードされているのを発見した。しかも

対象を男性に限定しており、一度読んだら死ぬまで頭に焼きつくインパクトの強さ、さらに気違いのスメルもかなり強く臭う……。

……………………………………

●尺八がしたい！

検索キー：仲間募集

体育会の大学生（とくにアメフト、ラグビー、体操）の合宿や寮へ呼ばれて、次々と尺八させてもらうことが希望です。
どなたかアレンジしてくださる方がいましたら連絡下さい。秘密守ります。

……………………………………

最後の「秘密守ります」というのが凄い。まるで「僕はホモとか尺八なんて恥ずかしいと思わないけどサー、君は恥ずかしいでしょ。じゃあ君の秘密は守りますよ」と言われているようで、なんか知らないけど読んでるだけでゾクゾクするような熱い文章。しかも合宿で次々と尺八させてもらうのが希望とか。世の中には親切な人がいるものである。男だけど……。

面白いので、ちょっと怖いがメールを出してみることにした。どうも筋肉系が好みのようなので、気をきかせて文体も筋肉風にしてみる。

「……よう！　○○君こんちは。オレは東京に住んでいるバーベルが趣味の筋肉男だぜ。毎日たまっちまって仕方ねえんだよ。尺八してくれるんだってな。へへ、連絡くれよ。楽しみにしてるぜボウイ……」

我ながらなかなかの名文だが、それはともかく、こちらからメールを出した翌日に尺八君からの返事はなく、もしかしてフザけすぎたかなあ……と反省したその翌日になって、ようやく彼から味のあるメールが届いた。

……………………………………

●尺八どうされますか？

以前、尺八で連絡貰いましたが、その後如何(ママ)がでしょうか？今週末は比較的自由です。尺八する場所はうちでも構いませんが、○○さんはどういう所がいいですか？
また、そちらの詳しいプロフィールを教えてください。僕は口の中よりも、顔面に発射されるのが好きです。どんなかっこうとか、どんな感じでされるのが好きでしょうか？男には良くしゃぶらせているのでしょうか？メール待ってます。

……………………………………

それにしても「尺八で連絡貰いましたが」とか「尺八どうされますか」「尺八する場所はうちでも構いません」など、ここまで「尺八」という単語を事務的に使う男も珍しい。気になったので、また返事を出してみようかと少し悩んでみたりしたが、筋肉風の文体はとても体力を使うため、このメールを最後に尺八君とは連絡を絶っている。

しかし、今から五年後ぐらいに突然……「五年前に尺八の件でメールした者ですが」などと、相変わらず事務的なメールが来そうな予感もする。そのときはしてもらおう。

ということで、この気違いネットサーフィンは予想どおり不毛である。なんだか頭も少し悪くなったような気がするし、仕事でもない限りあまりお勧めはできない。唯一の救いは、気違いにも親切な人がたくさんいるという事実を知り得たことだろうか。

どくだみ荘の女帝

サイテー木賃アパートに取り憑いた、狂った猿との闘争記！

クーロン黒沢（フリーライター）

うちの実家は、都内某所でアパートを経営している。アパートといっても、それは典型的な安アパート。テラスに花が咲いているようなシャレたものではなく、最低カーストの貧乏人のみ住むことを許された、四畳半・トイレ共同・木造二階建て・築二十年、壁の継ぎ目から隣室の明かりが漏れてくる……そんなボロボロ、サイテーな木賃宿である。

こんなところに住む人間といえば、それはもう、どいつもこいつも過去のありそうな奴ばかりで、怪しい福建人や上海人はもちろん、気違いも多い。

過去にも数名……ドアがあるのに窓から出入りを繰り返し、近所で泣きながら地面をゴロゴロ転がっていた若い劇団員風の男や、部屋の壁を無断で緑色に塗り替え、家具もカーテンもすべて緑色に統一しているサイコな中年男性（まだ入居中）。鉛筆で壁に「僕はホモです」と書き殴るホモっぽい男など、気違いに限りなく近い人びとを見てきたが、そいつら全員束になってもかなわないような大物が、ついに場末の我がアパートにもやって来た。

イヤな予感

彼女の名は長谷川エミ子。仮名と言いたいところだが、本名である。

某不動産屋の仲介で、エミ子が我がアパートにやって来たのは一年前のこと。名前だけを見て、どんな女なのか期待に胸を膨らませていた私は、挨拶に来たエミ子をひと目見て、心の底から憂鬱な気分になった。

エミ子の顔を有名人に譬えると、毛沢東夫人の江青といったところだろうか。それも文革末期あたりの……。黒ブチで牛乳ビンの底みたいなレンズの入ったメガネをかけ、北朝鮮でかけたようなスゴイパーマの施された髪。ヤセ型で眼光の鋭いエミ子は低い声でモゴモゴと挨拶を済ませると、ビビる母親に「これ……土産……」と言い、腐りかけたみかん六つと缶コーラ二つを手渡して姿を消した。イヤな予感がする。

翌朝、うちの玄関を誰かがガンガン叩く。寝ぼけた母親が扉を開けると、立っていたのはエミ子だった。

集中監視体制

「あの水道管うるさい、眠れない」

最初はこの言葉を真に受け、修理屋を呼んだり水道局に問い合わせていた母親も、エミ子の部屋がまったくのスカスカで、畳の上に黄色い敷布団が一枚敷いてある以外、家具らしいものが茶碗一つ見当たらないという恐ろしい光景を見てしまったことと、同じ文句を

photo▶山田鎮二

日に三度も四度も繰り返し言いに来るエミ子の目を見て、なんとなく気違いのオーラを察知。その後は、

「うるさかったら耳栓でもしてなさい」

と、いっさい相手にしないことに決めた。

すると、エミ子。今度は周りの部屋の住人に攻撃の矛先を向け始めた。最初にターゲットとなったのは、隣に住んでいた部屋中グリーンの物静かなサイコ中年男である。

「テメー、ウルセーんだよ。ブッ殺すぞコラ」

エミ子は可哀相な隣の男を集中的に監視。男が少しでも物音をたてると、待ってましたとばかりにヤクザ顔負けの口調で絶叫するのだ……。そしてお次は向こう隣の上海人。彼はエミ子にドアを蹴飛ばされたとき、あまりの剣幕についビビッてしまい、エミ子から完全にナメられ、毎日ドアを蹴られるようになってしまった……。そして、関係ないのにトバッチリを受けた不幸な奴が、我がアパートの真向かいに住むお隣の息子さん。

彼の部屋は運の悪いことに、狭い通りをはさんでエミ子の部屋の真正面。エミ子は暇になると彼の部屋にツバを飛ばし罵りまくっていた。この気違いのツバが原因で、向かいの一家は延々一年近くも、窓をすべて閉めきって生活しなければならなかった。まったく同情

を禁じ得ない。

通行人の不幸

エミ子の発作は夜になるとますますヒドくなり、アパートの前を通りがかった通行人が軽くセキでもしようものなら、ガバッと瞬間的に反応し、窓からツバをペッペッとレーザー光線のように飛ばし、「テメーコノヤロー殺すぞ」と恐ろしい罵声を浴びせまくる。ここでセキをした男がひと言でも反抗しようものなら、部屋から飛び出て狂った猿のように襲いかかるのだ！

一度など、通行人の男とつかみ合った挙げ句、男に頭をペシッと一発叩かれたエミ子は、突然ギャーギャーギャーと大声で叫び始め、「警察呼んでヨー、ウギャー殺される、ワー、モギャー」と悲鳴が止まらなくなった。

しかたなく、呆れた近所の住人が警官を呼んだが、予想どおり、怒られたのはエミ子の方で、叩いた男は近所中の人びとから同情されつつ、忌まわしい街を足早に去っていった。

一帯にドシーン！

こうしてエミ子は気の弱い住民たちを利用して増長を続け、朝から仕事もしないで二階の窓を全開にし、近所の平和な家庭の人びとに向かって、絶叫調で〝死ね〟とか〝カス〟とか〝チンポコ〟とか、あらゆる下品で粗暴なボキャブラリーを駆使して威張り散らし、まるでこの一帯を支配する王のように振る舞い始めるようになった。

夜になると部屋の白熱灯に照らされて、カーテンすらないエミ子の部屋の窓に、ウロウロ動き回る不気味な影を見ることができる。ネズミのように従順な近所の人びとはこの気違い女司令官の影に怯え、必然的にうちにも苦情が殺到するようになってきた。

エミ子は今夜も発作を起こし、午前三時にギャーギャー叫びながら部屋の中でピョンピョン飛び跳ねている。気違い女が着地するたび、近所一帯にドシーン！という音が響きわたり……ドシーン、ドシーン、ウギャー、ドシーン……もう我慢できない！

あの女を送り込んできた不動産屋を呼んでみるが、やって来た担当者も、突如猛獣のようにウーウーうなり始めるエミ子にビビり、「ひとまず今日は帰ります」と言い残したまま、尻尾を巻いて逃げ帰る始末。

というわけで肩で風切って歩いてたエミ子だが、意外にも気違いの天下はそう長く続かなかった。ある日、突然キレてしまった私の母親が、なんと消火器を片手にエミ子の部屋のドアをガンガン叩きまくり、出てきたエミ子の髪をつかんで階段から叩き落としてしまったのである。

警官隊を動員しろ!!

このとき、私は家を留守にしていたのだが、後から聞いた話では、消火器を振り回しながら般若のような顔で追いかけてくるうちの母親に、さすがのエミ子もあちこちにアザをつくりながらギャーギャー叫びつつ逃亡し、なんと某池袋警察署に駆け込んで「警官隊を動員しろ」と迫ったというからスゴイ。

しかし応対に出た警官に「あんたの問題だろ、そりゃ」と、ひと言で片づけられてしまい、その時点で、長く続いたエミ子の暗黒王朝は、完全に崩れ去ったのである。

つまり、ジャングルの掟に従う野生の気違い女・エミ子にとって、自分を力でねじ伏せた私の母親は、すなわち彼女にとっても新しい支配者となったのだ。

それから一月もたたないうち、エミ子は何も告げずにアパートから姿を消してしまった。それ以来、エミ子は二度と部屋に帰ることなく、消息も滞納されたままの家賃も、ともに闇の中へ消えたままである。

今回、我が家がエミ子から学んだ貴重な教訓、それは「有害な気違いには力で立ち向かえ」ということであろう。ありがとう、エミ子よ。

電波系手記

俺のからだは誰のもの

症状だけみるなら、俺は完全にキチガイだ。
しかし、こうして冷静そうに文章を書けるのは、
俺がつねづね「一秒前の自分でさえ、赤の他人に思えてしまう」
という視点で自分のことを見ているせいかもしれない。

村崎百郎（工員）

photo▶平山法行

「夜ごとのゴミ漁りを通して知ることのできる近隣住民のキチガイ度について書いてほしい」というのが編集部からの依頼だった。なるほど、たしかに趣味とはいえ、プライバシー暴きのゴミ漁りを十六年間も続けていると、「普通の人間が出すゴミのパターン」というのは見えてくるし、それを大きく逸脱した「気違いじみたゴミ——捨てた人間がキチガイではないかと思われるもの」というのも分かるようになってくる。それは、うまくは言えないが、袋に入ったゴミの詰め方を見ても明らかなように「キチガイじみている」ものなのだ。

しかし、それを説明する前に、俺は自分のことを語る必要がある。

近所で一番のキチガイ

俺は、生まれてから現在に至るまでの三十四年間、意識のある間は絶え間なく、さまざまな音や声やビジョンを頭の中で直接受け取り続けている〝電波系〟のキチガイだ。

ただ幸運なことに、あまりに数多くの電波を受信しているおかげで、神だの悪魔だのを名乗るクソ電波どもの「あなたは選ばれた人間です」などというたわごとを真に受けて図に乗ることもなく、なんとか見かけは平穏に社会生活を送っている（詳しくは『電波系』太田出版刊、特殊漫画家・根本敬氏と共著を参照）。

最近では「村崎は電波系のキチガイのワリには人の話も聞けるし字も書けるようだ」ということで「貴重な患者」と重宝されて、たまに電波についての文章を雑誌に発表している。俺の文章を読んだ医者からは「このぐらい冷静なら大丈夫」などとも言われるが、過去にやってしまった電波がらみの陰惨な暴行事件など、本当に都合の悪いことは書かないようにしているだけで、実は今でも気を抜くと、いつ電波にからだを乗っ取られて他人を襲い出しても不思議ではないという危うい状態なのだ。

たとえば、年間を通して電波の強かった昨年（九五年）は、真夜中に何度も強力な感情操作系の電波に襲われて、その苦しさに絶叫して暴れてしまい、付近の住民からは「何か事件のようだ」と警察に通報され、大家からは「今度騒ぎを起こしたら出ていってもらいます」という最終警告書を二通ももらっている。

正気を失うくらいに暴れるものだから、発作のたびに部屋の電化製品が壊れたりコードが切れたりして、テレビやラジカセやビデオはいくらゴミ漁りで使えるものを拾ってきても間に合わないぐらいだ。パソコンのプリンターも、設置している位置が悪かったのか、つい先日、買ってから半年もたっていない二台目を叩き潰してしまった。パソコン通信用のモデムのコードに至っては、多いときには月に三度も引きちぎってしまうので買い置きをしているほどだ。電話器は現在のもので四台目だが、これはあと三台ばかりゴミ漁りの拾い置きがあるので壊しても大丈夫と安心している。

部屋の電化製品ばかりを集中的に壊す理由は自分でもよく分からないのだが、たぶん発狂中の俺には、自分を苦しめる電波が部屋にある電化製品を中継して来ているよ

うに感じられるのだろう。電化製品以外では、針金の入った強化ガラスの窓を殴ってヒビを入れたのと、玄関の横の壁を大きく叩き破ってしまったことが悔やまれる（アパートを出ていくときの弁償が高くつきそうだからだ）。

　また、風呂へ入って鏡を見ると、からだのあちこちに覚えのない痣や傷跡がついていて「ああ、またやっちまったのか……」とイヤな気分になる。そういう現実を冷静に考えてみれば、アパートの隣人や付近の住民にとっては、間違いなく俺こそが「隣のキチガイ」なんだと思う。だから、この俺の原稿は、本書のコンセプトとはまったく逆に、俺自身や俺に近しい仲間のことを書いていくことになりそうだ。

ゴミの詳細

　しかし、いちおう編集部の意向にそって、「キチガイじみたゴミの詰め方」について説明だけしておこう。

　袋に詰める程度の単純な作業でしかない「ゴミ出し」だが、それでも、ゴミ袋の結び目やゴミの詰め方の違いには、人間の個性というものが必ず出てしまう。几帳面な性格の人間のゴミは整然としているし、いいかげんな奴のゴミは不燃物と可燃物の区分けもデタラメだ。そして、回収日の前夜にゴミを捨てるような奴らは、圧倒的にいいかげんなゴミを出す奴らが多いのだが、「全体を通して共通する特徴」というのも確実に存在する。

　たとえば、テレビやビデオ、ラジカセなどの電化製品を捨てる奴は、たいてい物音を立てないように路上に静かに置いていく。それはもちろん「他人に気づかれずに捨てる」ためなのだろうが、「今まで使ってきた製品に対する感謝の気持」というのもあるのだろう。捨てるものとはいえ、自分が使ってきたものをぞんざいに路上に放り投げて、その場で壊すような奴はほとんどいない。

　同様に、着古した服を大量に捨てるときなども、女性は洗濯して畳んだ状態できちんと捨てるし、男の場合もロクに畳みはしないが、服は服でひとかたまりにして単品で袋を作って捨てていることが多い。これが本当の〝愛着〟とでも言うのだろうか。

　長年ゴミを漁ってきたが、今まで自分が着ていた服と台所の生ゴミをムチャクチャにかきまぜて、服を汚して捨てるようなゴミ出しをする奴にはお目にかかったことがない。

　このような「ゴミ出しの法則」は、他にも文房具やら包装紙やら、ジャンルごとに細かくあげればきりがなく存在していて、「普通の人間の出すゴミ」にはだいたいこれがあてはまる。そして逆に言えば、「キチガイじみたゴミの詰め方」というのは、これらの「法則」を大きく逸脱したものなのだ。

　そんなゴミ袋は夜の路上でも異様なオーラを放っているので一目で分かるし、俺は気味が悪いのでなるべく近寄らないことにしている。

　どういうものかというと、とにかくすべてがメチャクチャなのだ。たとえば、被害妄想などの強い奴だと思うが、ゴミとして出すものをものすごく細かく千切って、ゴミ袋がパンパンになるまで詰め込んでいたりする。ひどいのになると、本や雑誌を細かくカッターで切ったり、手紙類も全部一

センチ以下の小さな正方形の紙片にして、絶対に復元不可能な状態にして捨てる。服にしても、なんの意味があるのか、裏側にバター(?)のようなものを塗りつけて捨てている奴がいて驚いたことがある（それは男物で、しかも、ものすごくダサい服でカビ臭かった）。漫画週刊誌のゴミでは連載ものの最後のページを全部破って捨てていた奴がいた（これは単なるイジワルか、アオリ文句の収集マニアだったのかもしれない）。腐ったトーフを幾重にもタオルや服でくるんで捨てている奴もいた（おかげで俺は「腐ったトーフのニオイは恥垢のニオイとよく似ている」という、どーでもいいことを発見した）。

他にもコトバでは説明しにくいのだが、こういう「キチガイゴミ」は拾うと確実に背筋がゾクゾクして嫌な気分になるので、興味のある方は実際にゴミ漁りをして探してみるといいだろう。

この他にも、ゴミから出てきたノートや日記の中身を読んで、それを捨てた奴がキチガイであることが分かる場合もある。どちらにしても、拾って楽しいゴミじゃないことだけは確実だ。

そして、恐ろしいことに、そうしたことをふまえて、「客観的な視点」で俺がいつも出すゴミを考えると、それはどれもご町内で一番の「どこへ出しても恥ずかしくない見事なキチガイゴミ」なのだ。拾ってきたゴミの一部に（キチガイのゴミも含まれる）、自分の生ゴミから古着まで、なんでもかんでもメチャクチャに突っ込んで捨てている。

こんなふうに、ゴミから考えても「キチガイは俺だ」というのはますます確実なものになっていく。どうやら、この原稿で書かねばならないのは、やはり俺自身のことのようである。それが「隣近所のキチガイの何たるか」を読者の皆さんに分かってもらう、いちばん良い方法だと思う。

妨害電波と闘う！

俺は冒頭で自分のことを〝電波系〟と書いた。それが具体的にどういうことなのかというと、たとえば、こうしてキチガイをテーマにした文章を書こうとすると、パソコンに向かってキーボードに指を置いた瞬間に、全国のキチガイ連中から「俺たちのプライバシーを勝手に売るんじゃねえ」「この裏切り者！」などというやかましい声が電波でやってくるからたまらない。精神科医に言わせれば、そんなものは「自分の内部の声」でかたづけられてしまうんだろうが、いくらそう思い込んでみても声が聞こえてくることに変わりはなく、うっとおしいことこのうえない。

この種の電波はつい先日まで、『電波系』という本の原稿を書いている最中に頻繁に起きた〝電波〟からの妨害現象とよく似ている。実はそちらのほうがはるかにひどいものだったのだ。その妨害現象を説明すると、俺の「症状」と「キチガイ度」が見えてくると思う。

〝電波〟は本の刊行が決まって原稿を書き出した昨年末近くから、夜昼の区別なく「そんな本を出すんじゃない」「俺たちの秘密を漏らさないでくれ」と数多くのいやがらせの声やビジョンを俺に送ってきた。その声も最初は哀願に近いしおらしいものだったが、俺が無視して原稿を書き進めるとしだいに強迫めいたことを言い出すようになり、「お前がこの原稿を書けばみんなが不幸になるぞ」とか、「電波の秘密をばらしたら、どんどん（電波がらみの）事件が起きるぞ」とか、「お前を殺してやる」といった物騒な声がいくらでもやってきた。

俺は三十四年に及ぶ受信経験から、電波の言うことなんかまともに聞いちゃいなかったが、実際問題として（プライバシーがあるので詳しくは書けないが）、その本にかかわった人間や、根本氏と俺の共通の知人の関係者に急に〝電波〟が来るようになって入院する人が出たりしたものだから、だんだん無視できなくなり、同時に腹も立った。

「類は友を呼ぶ」という〝単なる偶然〟現象で済ませたいものだが、考えてみると本の刊行が決まる直前にも俺の周辺で似たような電波がらみの事件が二件ほどあり、そんなことを気にしはじめると思い当たることがどんどん出てきて、俺の精神はしだいに消耗していった。「これが電波のやり口だ、俺の被害妄想を増幅させて発狂へ追い込むつもりなんだろう」と考えるだけの余裕はあったが、追い討ちをかけるように電波が送ってきたビジョンは、俺がこれまで見てきたなかでも相当に気持の悪いものだった。

ある日などは、地元の駅で待ち合わせた人を迎えに行こうと部屋のドアを開けて外へ出ると、足元に自分の死体が折り重なるようにして駅まで延々と数千体転がっているビジョンが飛び込んできて、非常に不愉快だった。おそらくは、電波の野郎がごていねいにも秒単位でわずかながら存在する「駅へ行くまでにこの俺が死ぬ可能性とその結果」を数千パターン見せてくれたのだろう。死因は脳溢血や心臓発作をはじめ、交通事故や隕石の落下などさまざまで、死体は血を吐いたり、頭が潰れたり、踏切のあたりでは電車にでも轢かれてバラバラに

なった細切れの肉片がそこらじゅうにころがっているなど芸も細かかった。

ドッペルケンガー（二重身）なんて、今までに何度も見ているので珍しくもなんともないが、これほど派手に自分の死体が大量に累々と路上に転がっているのを見るのは初めてだったので、そのときはさすがに驚いた。しかし、冷静に考えてみれば、自分が突然死ぬ可能性なんかいくらでもあるんだし、そんなものが見えたぐらいで動揺する必要はないのだと自分に言いきかせた。

本の原稿を書き上げる最後のあたりになると、朝起きると自分の頭の右斜め後方にバスケットボール大の空間ができていて、そこに小さなハエが何匹も大量発生してうるさかった。頭の後ろにあるはずの空間なのに、どういうわけかそれは右目の前に見えて、通常見える風景と重なって邪魔でしょうがなかったので、想念で空間の中に新聞紙をつくり出し、丸めてバンバンとハエを潰しまくった。小さなハエなのでなかなか潰れないし、全部潰しても朝起きるとまた増えているんで困っているとドラッグに詳しい編集者にこぼしたら、「お前、それはシャブ中患者の妄想と同じだぞ」と言われた。

どうやら電波は、俺をなんとか発狂状態にしたいらしかった。この他にも自転車に乗っている最中に突然左の耳から聞こえる音が完全に消えてしまったり、気を抜いて駅のホームに立つと、右足が勝手に電車に飛び込もうとするなどの現象は頻繁に起こった。

症状だけ見るなら完全にキチガイなのだが、こうして冷静そうに文を書けるのは、俺がつねづね「自分はつねに分裂／生成をくり返している」という妄想のもとに「一秒前の自分でさえ、赤の他人に思えてしまう」という視点で自分のことを見ているせいかもしれない。たぶんこれは、現実逃避指向の入った離人症の一種なのだろう。どうしても自分のことが他人事のように思えてしかたがないし、自分という存在が「肉体」という乗り物に「搭乗している」感じがするのだ。

そして、俺が「被害妄想」にある程度の耐性があるのも、こうして自分のことさえ「他人事」としてつき離して考えてしまうか

らなのだろう。被害妄想が膨れあがっても「赤の他人がどう苦しもうが俺の知ったことではない」という視点で自分を見ているおかげで、暴れずにすんでいるわけだ。まったく何が幸いするか分かったものではない。

ただ、自分から離れていきそうな夜はやっぱり不安だし、そういうときに寂しさを感じないといったら嘘になる。だから、そういう俺が、「自分が自分のからだと一つになりたい」という欲望を持つのはきわめて自然の成り行きだろう。俺が他人を真面目に愛せない理由もそこにある。「好きな人と身も心も一つになりたい」などという欲望は、それ以前に「自分自身と一つになりたい」という欲望が満たされて初めて持つことが可能になる気がするからだ。

類は友を呼んだ悩み相談

さて、俺の症状ばかりを羅列してもしょうがないので、今度は仲間のキチガイについて語ろう。

「類は友を呼ぶ」という言葉どおり、なぜか俺の人生の周辺には俺と同様のキチガイが頻繁にいたし、そういう連中を見てきて気がついたこともある。これから書くことが読者の皆さんのキチガイ理解の一助となり、こうした連中の引き起こす犯罪の防止に役立てば幸いだ。

ただし、俺は論理的思考というのができないので思いつくままに書いていく。

まず、俺が今まで会ったキチガイ連中の多くは、すでに完全にイカれているくせに「自分が狂ってしまう」ことを極度に恐れていた。正常な皆さんには滑稽な話だろうが、「キチガイは自分のことを狂っていないと思い込む」というのは本当だと思う。キチガイを名乗るこの俺にしても、心の底では「俺ぐらい正常な人間はいないだろう。世界じゅうの人間が最低俺のレベルで正常なら戦争なんか起こらないだろうし、もっと良い世の中になっているだろう」と思いあがっている（そういう点からも俺がキチガイなのは明らかである）。だから、人間は少しぐらい「自分は気が狂っているかも」と考えるほうがマトモなのだ。そのぐらい謙虚に考えたほうがいいと、真性キチガイの俺は思う。

また、友人のキチガイのなかには長時間しゃべっていると、まったく同じ話を繰り返しだす奴が何人かいる。こういうのは可愛いもので、俺はそういうときにはまったく同じ受け答えをして、同じ会話を楽しむ。まるでタイムマシンに乗って、過去に返ったようなトリップ感覚がシラフで味わえるのは大変にお得だ。

今までの最高記録は、喫茶店で六時間相手の悩みを聞いたときで、合計四回、それぞれ四十分あまりも同じ会話をしたことがある。相手のキチガイの悩みというのが完全なダブルバインドの物件で、本人が身のほど知らずの願望を諦めないかぎり解決のしようがないものだったので、話がある程度進むとふりだしに戻って「実はこれこれこうなんですが、どうしたらいいと思いますか？」という質問が一言一句違わず相手の口から出てくる。そのときは俺も腹をくくって、まったく同じ解答とまったく同じ相槌を繰り返し、会話がまったく同じ部分にさしかかると「それはひどいね」などと憤慨してみせた。

そのときはまるで、台本のない芝居の稽古をしているような気分だった。一応こちらは相手に合わせて同じセリフを語りながら、「なんとかこいつが幸せになれる根本的な解決策はないものか」と必死に考えていたのだが、なにせキチガイの悩みだけに、本当にキチガイじみていて救いようがなかった。絶対に実現不可能な妄想にしがみついていて「それが実現しなければ自分の人生には価値も意味もない」などと思い込んでいるのである。

「お前にゃ無理だよ！」なんて言おうもの

なら、マジで自殺しかねない勢いだった。こういう人間は自分からその妄想を捨てるか、または完全に自閉して妄想の中に没入し、その願望が達成された「自分だけのリアリティ」の中に浸る以外に心の平安など得られないだろう。

「お嫁さんになりたい」とか「金持になりたい」とか「人の役に立つ仕事をしたい」など、誰が聞いても安心できる「社会のものさしに合わせた小市民的な欲望」を持つことだけが正しい生き方なんて思えない俺には、「馬鹿言ってんじゃない！ 現実を見ろ！」という陳腐なセリフはとても言えなかったし、言ったところでなんの解決にもならなかったろう。

こういう人間は他人の批判を聞けないものだ。それは会話中に相手が言った「いつまでも夢見てんじゃないって私をキチガイ扱いする人がいるの。そう言われるとアタマがどんどん痛くなって気分が悪くなるんです」という言葉からも明らかだった。だから俺には、相手に合わせながら「だけど、別の道や生き方だってあるんじゃないの？ 幸福になる方法なんかいくらでもあるじゃない」という方向に話題を持っていくのが精一杯だった。

しかし、「幸福を追求する権利」は日本国憲法でも保障されているし、その方法を他人の俺が口を出すのはどう考えても「余計なお世話」だ。かくして、喫茶店の営業時間が終わるまで堂々巡りの「悩み相談」は続いた。

あとで分かったのは、その相手は絶えず誰かに相談していなければ不安なようで、相談の電話をかける友人がみんな寝てしまう深夜になると、いつも二十四時間営業の「命の電話」のたぐいに電話をしまくっていたらしい。「悩み相談とは、悩みの解決方法を教唆するばかりが重要なのではなく、〝相談者の話し相手になる〟ということだけでも重要なのだ」というのは本当だ。

こんな話を読んだ精神科医は、俺について「患者の分際でセラピーの真似事をするなど言語道断だ！ そんなことをしては症状が進むだけだ」とお怒りになるだろうが、誤解しないでほしい。人でなし鬼畜の俺には、「他人を救おう」なんて善意はハナからこれっぽっちも持ち合わせちゃいない。この場合だって、貴重な時間をさいてわざわざキチガイの話を聞いたのは「自分よりも症状の重い救われないキチガイの悩みを真剣に聞くふりをして、その実、自分の正気を確認して優越感を味わって自己を保つ」という、人間としてはド最低の矮小かつ薄汚い根性まる出しの悪意に基づいた行動なのである。

もう少し言うと、「自分よりさらに不幸な人間を見て、自分の幸福を確認する」というのは弱くてみじめで矮小な人間にありがちな、もっとも金のかからない娯楽で、それはTVのワイドショーや事件報道などにチャンネルを合わせれば、誰でも楽しめるので読者の皆さんにもお薦めだ。

ちなみに、例にあげたこのキチガイは、その後七年を経ても身のほど知らずの欲望を捨てることができず、生活も人間関係も堕ちるところまで堕ちて、昨年夏に某精神病院に入院したきり連絡がとだえている。何度か病院から「キチガイがいっぱいいるので気持が悪い。こんなところにいると本当に気が狂ってしまいそう」という電話をもらったが、俺は電話口で笑いをこらえる

のに必死だった。電話がこなくなったところをみると、うまくまわりになじんで溶け込めたのだろう（爆笑）。これは他人事ではなく、もしかするとそう遠くはない、明日の自分の姿なのかもしれないが、とにかく無責任に面白かった（人非人だからね）。

この件から俺が学んだことは、「人は人生のあるべき時に、あるべき場所で、自分がこれまで持ち続けてきた何かを捨てなければ、決して前には進めない」ということだ。そして、もちろんそれを持ち続けて堕ちていくのも自由なのだ。「堕ちてゆく快感」というのも確実に存在する。それは「鬼畜」をやっている俺が保証する。

被害妄想系の逆襲！

次にキチガイの引き起こす傷害事件のトリガーとなるものについて、かつて自分でもずいぶんそういうことをした俺がその心理を説明しよう。

俺は十六年前に上京してから一カ月の間に、十以上の職場を転々とした。ほとんどの場合、初日の昼休みまでにその工場や現場の主任や監督を殴り倒して帰ってきたものだ。どこでもかなり派手に暴れたのに、不思議なことに警察沙汰にはならなかった。履歴書を出しているから俺の住所も明らかなはずだったのに、何もなかったのは、どこも「あんなキチガイに付きまとわれてはたまらない」と思ったせいだと思う。また、そう思われるようなひどい暴れ方と捨てゼリフをかました記憶はある。

暴れた理由は俺が若くて今より短気だったので、「人から命令された」のが耐えがたかったというムチャクチャなものだったが、「田舎者だと思ってナメられてはたまらない。東京モンはみんな俺を馬鹿にするにちがいない」という被害妄想があったのも事実だ。

被害妄想というのは一人で考え込むとどんどん増幅するし、そういうときは他人の視線や些細な行動がとてつもない悪意を持ったものに感じられ、感情の爆発を促して暴力行為を起こすきっかけになっているのだ。

そういう意味では、被害妄想系のキチガイにとっては、国の総理大臣よりも飲食店

の店員のほうがはるかに重要な存在だ。読者の皆さんにも覚えがあると思うが、混んでいる定食屋で給仕の店員が注文を間違えたり、お茶や水をテーブルに運んでくるのを忘れたりすることは珍しくないだろう。普通の人間にとっては「よくあること」でも、被害妄想がパンパンに膨れ上がってテンパッているキチガイにとっては、冗談ではすまされない。頭の正常な読者の皆さんは納得できないだろうが、俺のようなキチガイの世界では、爆発寸前のキチガイ相手に注文を取り忘れただけで「こん畜生！俺を馬鹿にしやがって！」と殺人事件が起きてもまったく不思議ではないのだ。そういう場合は、きっかけになった行動だけ見ても、キチガイが暴力行為を起こした原因や理由は見えてこないだろう。

同様にもう一つ書いておきたいのが〝視線〟のことだ。俺のようにひがみっぽくて他人の幸福を素直に喜べない矮小な自我を持ったクズは、他人からの侮蔑の視線にはとりわけ敏感だ。これは理屈で説明できるものではない。目が合った瞬間にピンとくるし、その視線のそらせ方で、相手が自分をどう見たかを完全に理解してしまう。もちろん、「こいつは俺を馬鹿にしている」と思ったり感じたりすること自体がすでに被害妄想の症状なのかもしれないが、そんなことはテンパッた連中には到底理解できない。

これは俺がいつも体験していることだが、工場の汚い工員服で商店街を歩くと「人はいかに格好で他人を見るか」というのがよく分かって面白い。通り過ぎる通行人のほとんどが故意に視線を合わそうとせず、目が合う連中のほとんどは「何だこいつは」「側へ寄るな」という視線を送ってくれる。ガキを連れた奥さんなんか、「ほ〜らボクちゃん、勉強しないとあーゆー人になっちゃうのよ」と心の中で言いながら、子どもが俺の方に近づかないように自分の側に引き寄せたりする。読者諸君も「他人の冷たい視線」がどれだけ人の心を傷つけ、被害妄想を増幅させるものか体験したければ、思い切り汚らしい格好をして街を歩いてみるがいい。

「人を格好で判断するようなくだらない人間どもとはこっちだって口もききたくない」というこの俺にしても、粉だらけの工員服の自分を鏡で見ると、「こんな奴と細い道で出会ったらものすごく嫌だろうな」と思うし、きっとそういうときは侮蔑の視線を送るんだろう。そうした視線はある意味で、殴る蹴る以上の暴力なのだ。

俺は近所を歩いていて、俺の異様な顔を見て（メディアに出るときは被りもので隠しているが素顔はとっても凶悪なのだ）不審そうな顔をする中年のおっさんやおばさんを見るたびに、軽い殺意が沸き上がってくるのを確かに感じる。また、そういうものは新たな憎悪が深層心理に蓄積されていくばかりではなく、現代社会に生きる我われは、別に悪意がなくても知らず知らずのうちに他人の心を傷つけ、お互いの憎悪を増幅しあって生きている部分があるものだ。

不愉快極まりない通勤電車や人混みを思い出してほしい。俺は「社会が悪い」なんて言うつもりは毛頭ないし、キチガイの発狂はキチガイ本人の心の弱さが原因であることは間違いないと思っているが、そのキチガイを犯罪者にしてしまう責任が我われ全員にあるとも思う。

では、どうすれば良いのかとなると、鬼

畜な俺が書くには抵抗があるが、「一人ひとりが深い人間理解と豊かな想像力を持って、自分以外の他人に対して思いやりの心を持って接する」という陳腐な結論以外にキチガイの犯罪を抑止する方法はないと思う（最低！）。もしもそんな社会が実現すれば、キチガイの犯罪を完全になくすことができないにしても、この世はもっと慈愛に満ちた素晴らしいものになるだろう。（あああああ！　書いてて気持ち悪くて指がひきつけを起こしたぜ！）。そんなことは、お前ら人間どもには百億年たっても無理だろうけど

な。

俺も一匹のキチガイ鬼畜として老後を考えると、「年をとって文章を書くのがめんどうになって、工場で働くのが嫌になったら、気にくわない文化人の一家でも襲ってとびきり陰惨で猟奇的な皆殺しをやったあげくに、〝絶壁な世界がやってくる〟なんていう気のきいたセリフを吐いて、そいつらの肉でもむさぼり喰ってやろう」という鬼畜プランを立てている。そうすりゃあ、精神病院にぶち込まれて薬浸けにされて、何がなんだか分からなくなって死ねるという、豊かな老後が送れるだろう。

べつに死刑のことは気にしていないぜ。一人、二人を殺すような通常の殺人ではなく、大量過ぎる殺人や、けた外れの猟奇殺人をやれば精神鑑定は必至だし、俺はその結果にも自信がある。また、そういう尋常ではない事件を起こせば、適当な理由をつけて支援してくれるバカな文化人どもが出てくるんだろう。今からそいつらにお礼をいっとくぜ、この**バ〜〜〜〜〜カ！** それから俺の起こした事件についてのノンフィクションやノベライゼーション、舞台化、映画化の話が出たら、俺はがめつくロイヤリティをしっかり取るぞ（刑務所や精神病院では使い途がないから、儲けた金は全額精神障害者のための福祉施設に寄付しようと思ってるけどな）。

そんなわけで俺は老後がとても楽しみだ。どの一家を惨殺するかはこれからじっくり考えていこうと思う。実行はまだ先になると思うが、まあ、気長に待っていてくれ。政治家連中の言い草ではないが、「約束を守れる鬼畜、村崎百郎」というのを俺は必ず証明する。

付記：本書を読んでいる「キチガイ」諸君へ——おそらく、この本の読者のほとんどは「キチガイ」の奇異な行動を興味本位で面白がる好奇心の旺盛な連中だと思う。そのことには俺もとりたてて感想はないし、それはそれでいいと思う。なんせ俺が言うのも何だけど、キチガイのやることや言うことは本当に面白いんだからな。

問題はこの種の本が本屋に並んでいると、「俺のことが不当に書かれているのではないか」と考えて、目を皿のようにして全ページをくまなくチェックせずにはいられない被害妄想の強い精神病院OB＆OGの連中だ。俺はここでそういう連中に言っておく。自分のことが書かれていると思っても騒ぐなよ。その記憶はいったいどこから来たものか、もう一度検証してみろ。知人や友人に確認を取れ。主治医にも相談しろ。早まって包丁なんか持ち出すなよ。電波はそういう罠をいくつも仕掛けて俺たちに発狂を促すんだ。自分の名前と歴史を思い出せ！　奴らにからだを渡してはいけない。

それに、自分のことが書かれて、「笑いものにされている」とだけ感じるのは大きな間違いだ。耳をすまして遠くから聞こえてくる笑い声をよく聴いてみろ。悪意に満ちた哄笑ばかりじゃないぞ。なかにはあんたのことを好ましく思うフレンドリーな笑いもあるさ。記事を読んでも、笑わずに真剣な面持ちでオレらキチガイのことを真面目に考えている奴もいる。敵も生まれれば、理解者も出てくることだろう。だから必ずしも「書かれることは侮辱されること」ではない。そこを考えて早まった行動は慎しめよ。

2001年依存の旅

Part 2

シャブより ほかに 神はなし！

打たずに死ねるか！
非合法の視線だけじゃ、
覚醒剤依存の本性は見えてこない――。
アッパー系大国ニッポンに生きる、
語られざる薬中たちのメンタリティ！

吉永嘉明
（東京公司）

photo▶山田鎮二

本書の読者のみなさんにとって、覚醒剤はまったく縁のないものだろうか。それとも……。

僕には最近、覚醒剤はけっこう身近なものになってきている。たとえば、ウチの事務所には次のような電話がかかってくる。

「はい、東京公司です」

「あの〜、すいません。覚醒剤ってどこで買えるんですかあ?」

「はぁ。ええとですね、ウチはいちおう編集室なのですが……。それに、覚醒剤はイリーガル・ドラッグですので、たとえ取材などで知っていたとしても、お教えするわけにはいきません。ご理解ください」

「バッキャロ〜! こんな本作っといてなにスカしてんだよ! だいたいドラッグの作用教えといて購入方法教えないなんて、不親切じゃねーか!」

「うるせぇ! 自分でゲットするガッツもオツムもねぇようなヤツにゃあ、ドラッグなんて高根の花なんだよ! 乗りこなせやしねえよ! センズリでも(マンズリでも)こいてろ!」

もちろん最後の台詞は心の中の叫びだが、こういう電話がかかってくるのは事実。これは、本業である編集の仕事で『危ない1号』というゲス本を作っており、昨年、その誌面で、身も蓋もないDRUG特集を組んだからだ。

この本のおかげで、なんだか「東京公司は、ドラッグのことなら何でも教えてくれるところ」などという乱暴なイメージができあがってしまったらしい。

嘘だ。僕らはなんにも知らない。ただちょっと取材しただけなんだよ〜。

もっとすごいのもある。若い女性の声で、「あのぉ、シャブ入れたらテンパっちゃって、ちょっと相談にのってもらえませんか?」ってヤツ。いいかげんにしてくれよな〜。ウチは編集室なんだってば!

この時は、クリニックに行くように勧めたのだが、「(警察に)チクられるからヤダ」とごねられ、結局、一時間ほど電話でカウンセリングしたら落ち着いたみたいだった。彼女の言い分は、「医者なんてどうせシャブやったことないんだから、私の気持なんかわかるわけない」というものだった。じゃあ、僕だったらわかるってのか、おい。

とまあ、世の中、覚醒剤に関心のある人、覚醒剤にハマってる人がたくさ〜んいるってことを痛感している今日この頃なのだ。

▼シャブ売りの経済原則

ドラッグ取材をするまで、僕は常々疑問に思っていたことがある。それは、高校生などの若いコがどうやってシャブを買っているのか、ということだ。別にカマトトぶるわけじゃないが、自身の学生時代を思い起こしても、そんなもの、どこで売ってるのか皆目見当がつかなかった。

そこで、「けっこう悪い」「シャブあぶり放題」と噂されるクラブPに若作りして行ってみた。クラブというのはもちろん、お姉さんが横につかない方だ。

ホールに入るとトイレに直行、しゃがむ方に駆け込んでしばし待つ。じき、僕の隣に数人が一緒に入った。すると、さっそく「ズゴォ〜」「フガォッ〜」と鼻を強く啜る音が漏れ聞こえてきた。

「ああ、やってるな」

噂は本当だった。覚醒剤をスニッフィン

グしているのは間違いない。
そこでこちらも負けじと、大げさに鼻を啜り、荒い鼻息を一発かましてバタンと戸を開ける。隣からは三人のロック系の少年が出てきた。目を合わせると、「お前もか」という含み笑いを返してきた……。
彼らは都下の高校生で、シャブをキメてよく踊りに来るのだという。「ボアダムスの音がシャブくて大好き」というA君の話によると、覚醒剤は先輩から買うとのこと。つまり彼らの学校には、ヤクザに就職した先輩がいて、後輩にシャブを売りにくるのである。
目から鱗だった。ああ、どうして僕の高校にはヤクザがいなかったんだ〜。
シャブ、スピード、S、速いヤツ、走るヤツ、冷たいヤツ……このような通り名でユーザーに親しまれる覚醒剤は、ヤクザが扱っていることによって、すべてのイリーガル・ドラッグのなかで最も購入しやすいものであろう。クラブで知り合った少年も、「覚醒剤とマリファナだけはいつでもゲットできる」と言っていた。その口調にはまるで、酒でも買うような気楽さがあった。
なんてこったい。
ちなみに、ヤクザが覚醒剤をメインに扱う理由はずばり、これが最もうま味のある商品だからだ。覚醒剤というのは、使用量を増やすことで、すべてのドラッグにつきものの耐性をクリアできる。これが非常に重要なポイントで、使用量の増加とともに深くハマっていき、一度深くハマるとなかなかやめられない……どんどん量が増え、ハマりやすくやめにくいとあれば、これは安定した需要が見込める優良商品であると言えよう。ちなみに、マリファナはイリーガルの壁を超えさせるためのエサにすぎない。
ということで、あなたはたまたま知らないかもしれないが、覚醒剤は、そこらじゅうで売っているのですよ。

▼ピンピンしてる人びと

シャブはそこらじゅうで売ってて、ハマってるヤツもたくさんいるって話がすんだところで、本題に入ろう。覚醒剤依存者のメンタリティってヤツだ。
覚醒剤の使用は、モチベーションによって大まかに次の三つのパターンに分けられる。
①遊び的使用
②ドーピング的使用
③逃避的使用
僕が取材で出会った人たちは、①と②が多かった。遊び的使用というのは、ちょっと危ないモノに興味があって手を出してみたというケースなどで、たとえば京浜東北線沿線に住んでいる某女子高生。彼女は、それ以前に取材で知り合ったやりてババア(といってもまだ二十三歳！)に紹介してもらった。
「シャブやるキッカケ？　ちょっと太めになってきたからダイエットしようと思って。駅前にうろついてるイラン人に声かけたら簡単に売ってくれたよ。一グラム二万だったかな。(池袋の)サンシャインに三日立って稼いだ金で買ったんだ」
ようするに売春したわけね。で、効果はどうだった？
「うん、バッチリ！　見てよこのからだ。ほんと全然食欲なくなっちゃうんだ。サイ

コーだよ〜。それにセックスもいいんだ」
確かに皮膚感覚が鋭敏になるので、セックスにハマりやすくなる。ただし男の場合、射精しづらくなるので、クタクタになる。また、ドーピングを繰り返すうちに勃たなくなるので、行き着く先はインポ。女は得だ。
入れ方はどうしてんの？
「あぶり専門。渋谷のさ〜、Yっていうお店でコレ見つけたんだ。もうチョー便利」
と、彼女は一本のグラスパイプを見せてくれた。シャブをあぶる以外、何の使用法もなさそうな一品だった。ちなみにあぶりだとスニッフィングと違い鼻の粘膜をやられずにソフトに吸引できるので、若いコに人気がある。
シャブやるようになって、何か性格とか変わった？
「え〜、別に自覚ないなぁ。強いて言えば、元気になったことかなぁ。徹夜明けでも学校に行けるから、夜更かしもできるし……」
確かにシャブを入れると、眠らずにいられる……というより眠れなくなる。元気になるというのも、疲れを認知しなくなるというだけで、実は疲れてるハズだ。彼女の場合、量が少ないのと、まだ育ち盛りでからだが丈夫なのが幸いして、いい方向にしか自覚していないといったところだろう。
次にドーピング的使用について。仕事の効率をあげるために用いるケースで、使用者は肉体労働系に多い。これは僕が住んでいる、とある下町で知り合った、工員のおじさん（42歳・年収三百五十万円）に聞いた話。
「ウチの工場には毎週、定期的にヤクザがシャブを売りにくるんだよ。一グラム一万だな。俺はやってないけど、けっこう多いよ。みんな静中（静脈注射）キメてるね。ヤツらはやたら元気に働くけど、なんだか怒りっぽくてさ。ちょっとしたことで怒鳴り合ってるよ。そういえば誰かが『ヤクザは

シャブを公共の場に隠してる』とかいってさ、みんなで工場とか近所の団地とか探したっけ。見つからなかったけど」

うーん、まさにドーピング。シャブは気持ちよくなるから頭脳労働には向かないが、単純作業ははかどるのである。また、カリカリと気が短くなり、性格がセコくなるという特徴もある。ケンカしたり団地を探したりってのもその兆候であろう。

それで、シャブをどう思いますか？

「べつにねぇ、からだ壊してるヤツはいないし、強力なスタミナドリンクみたいなもんだろ」

肉体労働系の依存者というのは、からだを鍛えているという点と、ハッキリした目的意識があることから、そんなに病んだ印象は受けなかった。

▼まさかクビになるなんて

そして最後の逃避的使用。日頃からうつ気味な人や、何かトラブルがあって精神的に追い込まれた人が気持を持ち上げるために入れたりするケースで、これが最もデンジャラスなような気がする。

中居さん（仮名／28歳・男性）は、もともとうつ病気味だったが、学生時代は特に神経科のクリニックに行ったこともなかったという。そんな彼が最初に覚醒剤に手を出したのは、大学受験で一浪している時だった。中学時代の友人がヤクザの手下のようなことをやっていて、受験勉強で鬱々としていた彼に勧めてきたのだ。その時は、二、三度スニッフィングしただけだったが、妙に気が晴れたという。

スニッフィングは、最も基本的な摂取法。白濁結晶を鏡やCDケースなどの上で細かく砕き、細いラインを作ってストローや丸めた紙幣で鼻から吸い込むのだ。五分ほどでキューと熱くなり、元気がでる。特別な道具が必要ないので、出先での景気づけなどに重宝される。

その後、彼は一心不乱に勉強し、みごと一橋大学に合格。大学時代も真面目に過ごし、大手電子メーカーに就職する。と、ここまでは順調だったのだが、非常にシャイだった彼に、一流企業の過酷な業績争いは肌に合わず、日に日にうつ状態が進行していったという。憂さを晴らそうと酒を飲んでも、よけいにくよくよしてしまうタチで、ついに彼は、大学時代は一度も会わなかった例の中学時代の友人にコンタクトをとった。

友人は、中居さんの連絡を受けると、その日の夜に彼の家にやってきて、「これ、おみやげ」と言って覚醒剤を一グラムくれたのだという。これがヤクザの商法なのだ。最初はタダで与えて味を覚えさせ、しっかりハマってきたら正規のレートに引き上げるのである。

その日から、中居さんの覚醒剤への依存が始まった。おみやげの一グラムを一カ月ほどで使い果たすと、今度はハッキリと「買いたい」と友人に連絡。三カ月後には一グラムを二週間で消費するようになり、半年後には一週間になった。

「当初は、朝起きて出勤前に二〜三ライン入れてたぐらいだったんだけど、えらく調子がいい感じで、仕事にもポジティブになっていったんだ。でも、徐々に物足りないようになってきて、ライン数が増え、会社にも持っていってトイレで入れるようにな

っていった。会議の前とかには必ずスニッフしてたね。そのあたりまでは何も問題なかったんだ。でも、あぶりを覚えてからは、ついついだらしなく入れてしまい、会社も休みがちになったんだ」

　あぶりだと、長時間入れつづけるという傾向がある。中居さんもそのパターンにハマり、無断欠勤が相次ぎ、ついに会社をクビになってしまった。

「まさか僕が会社をクビになるなんて。臆病なまでに慎重な優等生タイプだったのに。でも、覚醒剤を入れていると、気が大きくなるっていうか、どうでもよくなっちゃうんだ」

　これこそシャブの本質である〝カラ元気〟ってヤツだ。何も問題は解決されていないのに、悩むことをやめてしまう……つまり仮想現実を生き、仮想快楽を貪るのだ。だが、それもまた、ひとつの現実か。

「で、抜けると事態の深刻さに狂いそうになり、そこから逃れるためにまた入れるんだ」

▼性格変えるか、入れて生きるか

　無職となった中居さんは、二日間あぶり続けるのがアベレージとなった。あぶりに使う火も、百円ライターから注入式のジェットライターになった。ガスがすぐになくなってしまうからだ。

「もう、あぶり始めると動くのが面倒臭くてもどかしくて。ジェット・ライターを買う前までは、すぐ近くのコンビニまで行くのも辛くて百円ライターのガスがなくなったらマッチを、マッチがなくなったらローソク、それが燃え尽きたらガス台で……という具合に部屋じゅうの火を使ったね」

　シャブは興奮剤だから基本的には活動欲求が高まるのだが、使用量が増加するにつれどんどん理性が飛び、つまらないことに

ハマるようになる。たとえば、部屋の片づけを延々としたり、何時間にもわたるマラソン・オナニーに耽ったり、血管が浮きにくい女性の場合、射ち場所を一日中探したり……とにかく創造的でなくなる。中居さんの場合、シャブをあぶる行為にハマったというわけだ。

彼は、あぶっている間は寝食はまったくせずに、自分の部屋に篭もったまま、ビデオを見たりマンガを読んだりしてひたすら無為にすごしたという。

「やったことっていったら、『ツインピークス』のテレビ版を三回繰り返して観たことぐらいかなあ。あれ、なんだかたゆたうんだよね」

そして、三日目に気絶するように寝入り、今度は丸一日寝つづける。起きると異常に大食いをし、またあぶり始める……この繰り返しを二カ月続け、ついにからだを壊して入院するハメになった。だが、これがきっかけで覚醒剤から足を洗うことができた。

「入院した時には正直ホッとした気持だった。これでまともになれるって。でも……」

彼は退院した後、コネで中堅企業に入社し、一年ほどまじめに勤めた。だが、やはり会社勤めに馴染めず、またしても覚醒剤に手を出してしまったのだ。しかも今度は静脈注射で入れるようになった。そのものズバリ、水に溶かして血管に射ち込む、最もオーソドックスな摂取法だ。射つと数秒後に「ラッシュ」と言われる電流が走るような感覚が全身を襲い、ドッカーンとぶっ飛ぶ。一度この味を覚えると、もう他の方法では物足りなくなり、針中になる人が多い。

「射つと全然違うんだ。シューッといっきに上がれるんで、だらだら入れたりせずにすむし。こんなことなら最初から射てばよかったって思ったよ」

だが、調子のいい日々は長くは続かなかった。彼は次第にテンパるようになっていったのだ。

「シャブが抜けてくると、なんだか平常以上に鬱々としてくるんだ。それに、イライラしてきて突然部屋の中で暴れたり、友人に訳のわからない電話をしたりもした。とにかくそわそわが収まらなくって、それでまた射つ。そうすると落ち着くってわけ」

この時点で、中居さんは依存症に中毒症状を併発している。こうなると、覚醒剤が入っている状態が日常で、抜けている時が非日常となってしまう。今、彼はフリーターをしながら毎日静脈注射をキメている……。

いやあ、見事に転落してしまったケースである。しかし彼の場合、もともと性格的に社会に馴染めずにいたわけで、本人自身、シャブを覚える以前に自殺まで考えたこともあったという。合法非合法はおいといて言うならば、「死ぬより、シャブキメて生きたほうがまし」という考え方もあるのかもしれない。おそらく性格を根本から矯正することは至難の技だろうから。

ただし、覚醒剤で辛い状態を乗り切っていくと、終いにはそれなしでは日常を乗り切れなくなっていくのも事実だ。う〜ん。性格変えるか、入れて生きるか、それが問題だ。

▼たった一度でも精神病に

ではここで、覚醒剤の作用・副作用につ

いて、医学的に見てみよう。薬物依存(特に覚醒剤依存)について専門に取り組んできた、関東労災病院神経科の永野潔先生に聞いてみた。

——いわゆる「テンパリ現象」はどうして起きるのでしょうか。

「ようするに、パニックになっているんですね。外界からのいろんな認知とか感覚とかありますよね。光とか人の声とか。通常はそういうものを頭の中で統合して、自分なりの表象を思い描いたうえで反応したり行動したりするわけです。その、刺激に対する統合の過程が覚醒剤によって壊されちゃうんです。で、統合機能が落ちると同時に、外界からの刺激の量が増えるわけです。敏感になってますから。つまり情報過剰になって、どうしたらいいかわからずにパニクるんですね」

——覚醒剤は、本当に精神依存度が高いのでしょうか。

「どの薬物がいちばん依存度が高いかという点に関しては、まだ結論は出ていません。ただ、サルの実験でですね、心臓の中にカテートリーを入れていろんな薬物を注入し、サルがレバーを手でパタッとたたくと薬物が自動的に体内に入るという装置を使ったものがあるんです。一回たたくと液がシュッと入る。二回目は二回たたかないと入らない。三回目は四回……という具合に二の二乗ずつたたく回数が増えていく。そういう装置でサルがどれだけたたくかで依存性を比較するんです。その実験によると、コカイン、覚醒剤、ヘロインの順で依存性が高いというデータが出ています。ただ、サルの実験ですしね、サルにも固体差はあるでしょうから。とりあえず、覚醒剤がアルコールやマリファナなどと比べて非常に依存性が高いのは事実でしょうね」

——覚醒剤を入れている人のなかにも、調子よくやっている人と調子悪くやっている人がいますが、依存せずに乗りこなすことは可能なんでしょうか。

「調子悪くやっている人が依存している人ですよね。でも、調子よくやっている人も危険なんですよ。覚醒剤のようなアッパー系の薬は肉体依存がないので、一見、乗りこなしが可能なような気がするんですが、精神障害を引き起こすんですよ」

——肉体依存、つまり禁断症状などが出るということは、逆にそれが危険を知らせる安全弁の役割を果たすという面もありますよね。

「そう。だから、覚醒剤を調子よくやっていると、ひょんなところで蓄積していって、いろんな精神障害がじわじわときます。まず、認知の歪み。物忘れがひどくなったり、怒りっぽくなったりという性格変化が進行して、で、ある日、一線を超えると精神病になる」

——その、ある一線というのは、どのへんで来るか判断できるんですか。

「それは本人にはわからないですね」

——怖い話ですね。

「そう。だからアッパー系はいちばん怖いんですよ。それに、覚醒剤によって精神病になる確率は、その人の体質によります。だから、依存してない人でも、たった一回の使用で精神病になってしまうケースもあります。あと、肉体依存はないとはいえ、覚醒剤がからだにも危険なのははっきりしています。たとえば、ある重罪犯刑務所でね、覚醒剤を射ったことのある人を対象に

検査したら、八割がC型肝炎だったというデータもあります」

先に、遊び的使用やドーピング的使用は一過性に終わる確率が高い、つまり依存する危険性が低いと書いたが、依存していないから安全というわけでもないらしい。それに、人生は何が起こるかわからない。今は調子よくやっていたとしても、この先、事業に失敗したり世にも美しい恋人に振られたりと、いろんな挫折を経験することもあるだろう。そんな時、厳しい精神状態から逃れる手段として覚醒剤を用いたならば、これは逃避的使用に他ならない。そして、一過性の体験で「理性飛ばし」を知っている人にとって、再び手を出す確率が高いことはいうまでもない。そこのところを先のダイエット女子高生に聞いてみた。

「え〜、い〜じゃん。そういう時こそ使わなきゃ。ノイローゼにでもなったらど〜すんの」

そういうものかなぁ。

▼医者はチクらない

なんだかこの原稿、覚醒剤を有効利用している（と思っている）人の話が多いが、もちろんできるならばやめたいと思っている依存者もたくさんいることだろう。では、覚醒剤への依存を絶つにはどうしたらいいのか。

覚醒剤がなかなかやめられないのは、逃避的モチベーションを除くと、入れてハイになった後、抜けた状態の時にリバウンドが来るからだ。つまり、無気力になったり鬱々としたりする状態から抜け出すためにまた入れるわけである。このイタチごっこから抜け出すには、クリニックへ行くのがてっとり早い。そして、覚醒剤の使用を告白したうえでカウンセリングを受けるのだ。

こんなことを言うと、読者のなかには「警

察に通報されたらどうする」と思う人もいるだろう。しかし、医師には診察内容を口外してはいけない「守秘義務」というのがある。永野先生もこう言っていた。

「それは警察に通報すべきじゃないし、絶対にしません。法的にも、通報したり人に言ったりしてはいけないという職規がありますから。それに反したら罰せられますし、訴えられたら負けます」

　不安な気持はわかるが、病院は信じていいのではなかろうか。それに、抜けた状態の鬱々とした気分は、三環系のトフラニールなどの抗うつ剤で解消されるという。幻覚や妄想がひどくなっている人でも、精神病薬のメジャー・トランキライザーなどでほぼ治るという。もちろんこれも固体差や耐性などが激しいはずなので、確実とは言えないが。

　また、処方される安定剤がダメなら、エクスタシー（麻薬指定）などの抗精神作用の強力なイリーガル・ドラッグに依存を切り替えるという手もあるだろう。エクスタシーは完全に非合法だが、精神依存度が極度に低いので、シャブよりはよっぽどマシってもんだ（あくまで喩え話であり、べつに勧めてるわけではありませんよ〜）。でも、人によっては、やっぱりリバウンドが来るケースもある。そこはプロザック（米国の精神安定剤・国内未認可）などのイリーガル・スマートドラッグで乗り切る……あ〜、きりがない。

▼シラフだって シャブいじゃない！

　戦争時に国をあげて覚醒剤をバラまいたわが国は、それを教訓に一次予防はかなり徹底している。イリーガル・ドラッグのなかでもシャブだけ「覚醒剤取締法」という独自の法律が定められ、取締まりも厳しい。それに例の、「覚醒剤やめますか、人間やめますか」という差別的コピー。あれが功を奏してか、ほとんどの日本人が「覚醒剤は怖い。あんなものをやってる人は普通じゃない」と思っている。

　取材の途中で知り合った、ある薬物依存系ボランティア団体の人はこんなことを言っていた。本来なら保健所が、薬物依存から逃れたい人の更生の窓口になっていることを積極的にアピールしてもいいはずなのに、イリーガルのイメージに引っ張られ、消極的になっている、と。

　本稿で書いてきたとおり、覚醒剤はそこらじゅうで売っており、実際、ハマっている人はたくさんいるのだ。

　一方、受験戦争、経済至上主義、路上や電車内など公共の場でのマナーのなさなどに象徴される、人と争ってばかりで、身を引く余裕のない日本人のメンタリティ……これもそうとうにシャブいと言えよう。ひょっとしたら、日本という国は、〝シャブの国〟なのかもしれない。

　最後に、中居さんのこの言葉で締めるとしよう。

「この世はシャブい。だからもともと、シャブい人だけが社会に適応できるのさ。元来シャブくないメンタリティの僕たちは、社会に強要されてシャブを入れてるようなものなんだ。つまり、『覚醒剤入れますか、人間やめますか』なわけ。ドラッグなんて問題外！という人だって、一回射ってみな。きっとハマるから」

未遂男二人衆

カウンセリングより自殺ですっきり!!

自殺未遂を繰り返す人びとがいる。
なぜ彼らは死に向かうのか……なんてのは野暮な質問!
奴らの物語に黙って耳を傾けろ! 面白いんだから!!

今一生
(フリーライター)

僕は九六年二月に、『自殺だヨ、全員集合！』というイベントを東京・渋谷のUP LINK FACTORYで主催した。

これから書く三人の自殺未遂者との出会いは、まさにここから始まっている。

イベントでは、『完全自殺マニュアル』の著者、鶴見済氏らをゲストに呼び、山田花子（飛び降り自殺したマンガ家）のドキュメンタリー・ビデオや、AV監督のバクシーシ山下氏が九三年にインタビューした〝十三回自殺未遂女〟の映像（&現在の撮り下ろし映像）、連続自殺予告FAX事件の記事などを観せた。

僕はその告知チラシに、「当日お話いただける自殺未遂者は入場料を1000円引き（事前に連絡された方のみ）」と書いておいた。

するとイベントの五日前、「未遂者なんですけど、チラシを見ました。割引きで入れますか」という電話がかかってきた。そして僕は、「対人恐怖症」と自称する電話の主と翌日会うことになったのだ。

閉鎖病棟の自殺未遂者

東京駅で待ち合わせたその男は、僕が元気よく「どーも！」と声をかけると、照れたような笑みを浮かべた。本人が電話で言っていたほど、暗い印象はあまり感じられない。

彼は（イベント当日もそうなのだが）、克明に書かれた自らの自殺日記と精神病院の入院日記、そして丁寧にホチキスで綴じられた精神安定剤の領収書を持参し、自殺の経緯を語ってくれた。

彼の名を仮にKと呼ぼう。東京都内のT大学に通う二十四歳の大学生で、九三年十月に銀座のスカラ座で映画『ライジング・サン』を観ながら、トラベルミンシニアを一錠ずつ飲んで死を待ったという。

「対人恐怖症で人と満足に話ができないからバイトも長続きしない。一生こんな状態で生きていくのはつらい。そこで自殺を試みようとしてみたが、動機は悟られたくなかった。

『ライジング・サン』は、東洋人差別を描いた映画だと聞いていたから、自殺したら『抗議の行為だ』なんて、誰か勘違いしてくれる人がいるんじゃないかと思って」

しかし、三～四錠を飲んだところで睡魔に襲われ、「最終の上映時間が終わったところで映画館の人に起こされた」という。

トラベルミンシニアは大衆薬で、体重六〇キロなら三十八錠以上服用しないと致死量に達しない。『完全自殺マニュアル』を買っていた彼はそれを知っていたが、致死量をいっぺんに飲み下していなかったので生き長らえた。

Kは翌九四年十月にも、実家の自室でトラベルミンシニア四十六錠とビール、睡眠薬を飲み、机の上に「お父さん、お母さん、迷惑かけます」とルーズリーフの用紙に書いた遺書を置いて寝た。

「卒論は書けないし、人と会うのも電話が鳴るのも怖くて、まともに就職活動なんかできない。大学のサークルの連中と接触するのや、親から進路の選択を毎日急かされるのがイヤだったし、みんなができて当然のことができないのが、ホントに苦しかったんです」

しかし意識が戻ると、住んでいた実家は千葉なのに、なぜか東京女子医大病院のベッドの上にいた。
「九三年の年末に、父に連れられて相談に来たことがあったんです。父にも先生にも最初の自殺のことは言ってなかったのに。でも父は、なぜその病院を勧めたのかをいまだに教えてくれないんです」

Kの写真　☞現在、同期の退院患者や通院仲間たちを組織して、"精神病院入院日記"の出版化に動いている

翌月、病院の神経科の医者から抑うつ神経症と診断されたKは、一カ月の入院を勧められ、それに従った。Kいわく、「あとで患者たちに聞いたら、断わっても強制的に入院させられたはずだって」。
Kが入ったのは男だけの閉鎖病棟。病室から病室への移動はできるが、外に出るドアはひとつしかなく、なおかつエレベータには鍵が掛かっている。朝十一時のラジオ体操の時間に屋上へ出る以外、病室のある階からは出られなかった。
病室は二人部屋で、最初はよくしゃべる二十歳のうつ病患者と同室になったが、次に入ってきた五十代後半の半ボケ老人にはマイッたという。
「その人、尻の穴の筋肉が弱いのか、〝あっ〟と言った瞬間にクソしちゃうんですよ。しかも同じ階に個室もあって、二十四時間鉄格子の中で縛られてる人もいたから、夜中にドア越しに〝助けてくれ〜！〟なんて声が響き渡るし、狂っちゃいそうでした(笑)」
入院二週間で三人部屋に移れた。
「でも、一人は三十歳の完全な分裂症の患者で、もう一人は二十五歳のてんかん患者。このてんかんの人が、一日中、中村あゆみとチェッカーズをラジカセでかけていて、みんなを追い回して聞かせるんですよ。よく倒れるので、彼はヘッドギアをつけてました」
Kは、予定どおり一カ月で退院できたが、通院が始まって二週間すると、薬の副作用とおぼしきパーキンソン病の症状が出た。
「抗うつ剤を三錠だけ朝昼晩と毎日飲むように渡されて、そのとおり飲んでいたら、上半身の筋肉がいうことを聞かなくなったんです。舌を出したまま歯で噛んだ状態で、眼球も上天したまま動かなくなってしまった」
なんとか自力で症状を克服したものの、さらに二週間後の年末、二度目の症状が出た。病院に行って注射されたKは、一時間半で回復。現在は、カウンセリングのために隔週のペースで通院し、副作用止めの薬と抗不安薬を併用している。

バカバカしきカウンセリング

Kはあるとき、同期の患者にバッタリ会

い、薬代が安くなる〝三十二条〟の存在を教えられた（なぜ病院が教えなかったのか?）。

この三十二条、正しくは精神保健福祉法第三十二条といい、内容をごく簡単に言えば、病院や診療所へ入院せずに精神障害の治療を受ける場合、障害者本人もしくは保護義務者が地元の保健所に申請すれば、費用の一部を都道府県が負担してくれるというもの（Kの場合、申請後一カ月強で適用されたとか）。

「この適用者をあたれば、精神障害者だとすぐバレちゃう。興信所が探れば簡単でしようね」

しかし、それ以上にKが頭を抱えるのは、もっとささいな現実の問題だ。通院しやすい地元の神経科のカウンセラーは、「まるで父親のように『就職活動や卒論もあるんだし、がんばらないと』と励ますだけ」だったそうだ。

九五年一月、彼は「HOPE」という自己啓発セミナーの四日間講習に十一万円を払って参加する。

「精神を患っている人の参加はダメ、という但し書きは事前に読んでましたけど、自分は切羽詰まってましたから行ったんです。でも、みんなが明るく楽しくなっていくのに、僕は最後まで馴染めず、疎外感しか感じなかった」

Kは武道館で催された、宗教団体「生長の家」の集会にも誘われて行ったが、「〇〇県支部は〇人の勧誘を達成しました。おめでとう」という話ばかりで、いったいなんの宗教だか、よくわからなかったという。

その後、催眠療法にもかかってみたが、いまひとつだったらしい。

診療費請求書兼領収書　　東京女子医科大学病院
〒162　東京都新宿区河田町8－1

請求日　7年 10月 18日　登録番号
請求書No.
氏名　　殿
入外 G　部屋番号 －
診療科 シンケイセイシンカ
非課税分合計 450円
課税分合計 0円
税額 0円
請求金額 450円
期間 7年 8月 30日～　日　日間
累積請求金額 450円
費用区分 B3+21　負担割合 5％　1 枚目

項目	点数	金額	備考
トクテイ リョウヨウ ヒ *******			
サイシン, シドウ, カンリ	50	25	
トウヤク	535	268	
ショチ, シュジュツ	320	160	
<< ショウケイ >>	905	450	

診療費請求書兼領収書　　東京女子医科大学病院
〒162　東京都新宿区河田町8－1

請求日　7年 6月 21日　登録番号
請求書No.
氏名　　殿
入外 G　部屋番号
診療科 シンケイセイシンカ
非課税分合計 2,720円
課税分合計 0円
税額 0円
請求金額 2,720円
期間 7年 6月 21日～　日　日間
累積請求金額 2,720円
費用区分 B3　負担割合 30％　1 枚目

項目	点数	金額	備考
トクテイ リョウヨウ ヒ *******			
サイシン, シドウ, カンリ	50	150	
トウヤク	537	1,611	
ショチ, シュジュツ	320	960	
<< ショウケイ >>	907	2,720	

Kの薬の領収書　☞1回あたり2000円以上も安くなっているのは、“三十二条”の恩恵。経費負担の軽減はありがたいが、適用者であることを公言するメリットは他にない

Kはもともと、一回目の自殺以前から、いろいろなカウンセリングを受けて回っている。しかし、「いい先生なんて、なかなかいない」と言う。これは依存症の患者からもよく聞く話だ。

「僕はイヤな先生だとすぐチェンジ」とKは言うが、メンタルヘルスケア産業が巨大化する昨今、患者から見たサービスの面で、日本のそれはフーゾク業界以下なのかも。

「二時間一万円のカウンセリングを二回受けて少しホッとできて、勧められるままに一回五千円のグループ・カウンセリングを受け始めたことがあったんです。二人一組で〝相手に何か頼まれてもイヤと言う〟ゲームをやるんですが、〝大の大人のやることじゃないだろ、特殊学級の生徒みたいに扱うな!〟って言ったら同調者が出てきて、そしたらカウンセラーたちが〝じゃ、山手線ゲームをしましょう〟だって(笑)。(自殺未遂)経験者も来てんのに、それで癒されるのかって思った」

そんなアホな経験を経て、Kは自殺イベントに「人前でしゃべったら気が晴れるかなと思って」参加したのだと言う。

イベント本番中、僕が「とりあえず家を出て、一人暮らしをしたら?」と勧めたところ、Kは一カ月後に実行した。その後、大学もそっちのけでミニコミ誌を出したり、イベントを主催し出したりと、新しい出会いになかなか満足の様子なのだが、「先のことは考えない。暗くなるから」。これはあとの二人からも聞いた台詞だった。

狂言自殺じゃないの?

『自殺だヨ、全員集合!』は、『宝島』誌で事前告知を掲載してもらったおかげで、全国から何件もの問い合わせ電話があった。

その一本が、「広島に住んでるんで当日は行けないんですけど、今さんとFAXのやり取りがしたい」という男からの連絡だった。彼の名は中川小夜子。トランスヴェスタイト(衣装倒錯者)であり、親からもらった名前を嫌う彼は、最近この名前で通している。

「山口小夜子(モデル)、天野小夜子(女王様/ミュージシャン)に続く〝日本三大小夜子〟の一人(笑)」だそうだ。

中川嬢(彼はクン付けを嫌う)は、最初の電話があってから、ほぼ毎日僕にFAXを送ってきた。それによると、彼は自殺未遂を七回経験している。八八年六月、十五歳のときに住んでいた団地にある桜の木で首吊りを試みたが、「顎の下に両手を挟んだまま離せず、そのままやめた」。

翌八九年一月、真夜中に、雪深い広島北部の観光地、三段峡の路線の終点まで行き、峡を少し入ったところの小高い場所に寝床を掘って凍死しようとしたが、「厚着をしていたせいか、朝目が覚めてしまい、足が棒みたいに曲げられないほど痛くなっただけだった」。

その後、高校の三年間で、リストカットを何度もやったそうだが、「本気だったのは三回だけかもしれない」という。

「やるのはだいたい夜中の二時くらい。初めての(リストカットの)ときは、左手首に刃物を向けて、腕を見ずにエイッとバウンドするように切ったんです。血しぶきがスパッと少しだけ飛んで、『あ〜、あ〜』って言いながら両肘を机の上に立てて少し耐えていましたが、あとのことは覚えていま

せん。これがヴァージンカットですね。
あとのマジ・カット二回はカッターと待ち針。カッターは手首を縦にズッ……と刃を入れて抜いたら、いつのまにか気を失ってました。起きてみると、机の上の血の池に自分の頬が沈んでて、顔を上げると〝バリッ〟て乾いた血が頬にひっついてきたので、血の池に頬の分だけの大きな穴が開いてました（笑）。
他にも、十五歳のときに精神安定剤を二十回分、計四十錠を飲んで寝たことがあったのですが、起きたときに頭が割れるように痛くて、立っている自分が自分でないような感覚がありました」
そして九二年四月、十九歳になった中川嬢は最後の自殺未遂をする。
「家出してパール兄弟の渋公ライブを冥土の土産に観た帰りに、代々木公園の中へ立入禁止の柵を乗り越えて入って、木に自転車の荷作り用のロープで輪を作り、首を吊りました。私はちゃんとそのとき〝明日になれば、すごいニュースになるよな〜〟なんて考える余裕さえありました」
まあ、失敗したから現在があるわけだが、ここまで読んで、中川嬢のサービス過剰な話しぶりと、あまりにトホホな失敗談に、「全部狂言自殺じゃないの？」と不審がる人がいるかもしれない。が、彼はこの首吊りのあと、地元の病院のカウンセリングに通い始めている。
「でもそいつは、ちゃんとした県立の、しかも県内では一、二を争う有名な病院の先生のくせして、カウンセリング中に寝やがった！　だからある日約束をスッポかして、それから二度と行っていない。そいつが寝たのは一回二回じゃないよ！」
先生がこんな態度では、情緒不安定な精神を逆撫でするようなものだろう。そのせいかどうかはわからないが、翌九三年七月に『完全自殺マニュアル』が出版されると、中川嬢はすぐさま本屋に注文している。
「半年待たされて買ったんですけど、最初に読んだときから、この本のとおりに自殺する人は、よほど想像力のない人だなあと思ってました。自分は使わないやって」
もっとも、同じ年の四月にすでに一人暮らしを始めた段階で、自殺へのインセンティヴはかなり薄らいでいたらしい。というのも、自殺の直接の動機が彼の家庭環境にあったからだ。

病院よりも衣装倒錯

九歳で親が離婚、十四歳のときに、再婚した母親の連れ子として義父の家に入った彼は、夫婦喧嘩が毎晩続くのを見ることになった。彼が義父の考えに従わなかったり、気に食わなかったりすると、義父はあたり散らし、「自分を育てるのにいくらかかった

中川小夜子の写真　〔彼は「目に墨を入れないでください。入れると意味がなくなりますから」と言った。写真は、マンガ情報誌『コミックボックス』の飲み会に、筆者が、ロングスカートの中川嬢を連れていった際の顛末。コスプレ好きの女性編集者から借りたセーラー服にご満悦の中川嬢

かという計算もさせられたし、〝高い商品じゃ〟と言われたこともある」という。

「父親が教祖みたいな感じで、一から百万まで指図されて、意志を殺された。家族だからこそ脱会が難しい、オウム（真理教）以下の家庭だったんです。それで頭にきまして、自分が死んでやれば面白いんじゃないかと。親に迷惑をかけるのがどんなに快感だったことか……。だから、私の場合、自殺は自分の意志を作るためのよりポジティヴな行為だったんです」

「死ぬより相手を殺せば？」との僕の疑問に、彼はこう答える。

「十六歳のときに包丁片手にクソ物体（＝義父）の部屋に行ったんですが、鍵がないはずなのに開かないなと思っていたら、つっかえ棒がしてあったんですよ」

「自分の存在とは何か？　粘土のようにしか扱われないのだったら、さっさと消えてやる。その方法が自殺か家出かというだけのことで、実行するのが私の意志を作ることだったんです。家出も実際にしましたよ。

中学三年生の正月に、お年玉と親からくすねた六万の金を持って、沖縄の石垣島に渡り、そこから地図で見てもっとも小さいと思った竹富島に永住するつもりで行って宿をとったのに、三週間でバカ（＝義父）が来てしまった。懐かしい話ですが」

そんな彼が決定的に自殺をやめる決心をしたのは、九四年十月の広島アジア大会。彼はそこでモンゴルの選手の母親に出会った。

人間苦しいことに負けちゃあいけないなんて、
そんなことは絶対出来るわけないのさ！
人間苦しいことに負けちゃあいけないなんて、
そんなことは苦しいことを作っている奴等が言う
立ち向かうんじゃない！負け続けるためにある人生。
強い奴等が楽にいきるため…

とうとう親のことを会社の人間に話してしまった。「許す心を持て」という
私がもう2年間も会っていないことに関して、主張する。
でもわたしは、だからこそ会っていないんだと主張する。存在を、関係を、
会う必要もない。もう2度と会いさえしなければいい。
人は、許すということは、怨むを前提にある。
だから存在のないものに対して怨むことをすることはできないから、
必要もない。だから私は親の存在を忘れる。だから私には許す心なんていらないのだ。

中川小夜子のＦＡＸ　☞どうでもいい日記的な内容から、プライベートのディープな悩みまで、筆者のもとへ毎日送られる中川嬢のＦＡＸの一部。筆者宅へ一晩泊めたとき、中川嬢はＦＡＸロールを１本もってきてくれた

「最終日に選手村のパーティーをたまたま覗いていたら、話しかけられたんです。その晩、四時間くらい片言の英語で話し合ったんですが、最後にそのおばさんが言ったんです。あなたがもしモンゴルに来たら、私の娘と結婚してくれないかと。

そのとき、もしかしたら自分の人生は、その人のためにあったのかもしれない、だから、この人と娘のために生きてみようと思ったんです」

奇跡か短絡かはあえて問わないが、彼がこの日を「セカンドバースデイ」と呼び、そのモンゴル人のおばさんの名前をパソ通のハンドルネームにし、結婚を夢見ているのは事実だ。

現在では、彼を自殺に導く要因もかなり減った。昨年までは、自立を強制され、電気屋の社長の下で義父の連れ子二人と一緒に働いており、社長を含む三人から嫌がらせを受けていたそうだが、彼はそこをやめて材木屋、美容室と転々とし、今は地元のベンチャー企業（化粧品メーカー）でテレフォン・アポインターや外回りをやっている。

「面接のときに、最初は本名で入社したいと言ったんですよ。もちろん、ネクタイ&スーツ姿で。そしたら断わられて。それで、今年の年頭から、女装とメイクを始めて女の名前で仕事をしていると面接官に打ち明けてみたんです。

一人暮らしを始めて自分についてゆっくり考えられるようになったのか、人間は努力すればいくつもの自分が持てるんだって思えるようになって、女のコが好きだったから女のコになってみた。スカートを穿いて街を歩いたり、セーラー服を着せてもらったりって。そう言ったら、〝面白いねぇ。オカマ色をもっと出してよ〟って言われて、即採用になったんですよ。それから面接官が、社内のメイク係を呼んできて、私、メイクされてそのまま帰りましたよ（笑）」

彼は今、無農薬栽培の草で育った牛の臓器を使って天然成分で化粧品を作るというその会社の方針に賛同し、啓蒙に東奔西走している。

ヤリマン主婦の七百七十七人目

最後に紹介する自殺未遂者は、今年三月に新宿のロフトプラスワンというライブハウスで僕が主催した『日本一のヤリマン主婦・フミエの777人目はアナタ』というイベントに客として現れた男だ。

このイベントは、エロ雑誌に僕がさんざん書いてきたフミエさん（一年半で五百人以上の男と不倫Hをした四十四歳の主婦）の七百七十七人目のセックスの相手を、立候補するお客さんのなかからフミエさん自身が選ぶというものだった。

このイベントの事前告知は、前述の中川小夜子嬢の協力で日経MIXというパソ通ネットに紹介されたのだが、その下品なタイトルのせいか、金曜の夜に掲示して月曜の朝には消されてしまっていた。

しかし、偶然それを見てやってきた男が、一人だけいた。それがS（二十五歳）だった。しかも、こともあろうにSは、二十人弱の粒揃いのヤリチン立候補者たちのなかからフミエさんに選ばれてしまったのだ。

そう、七百七十七人目の男である。取材に来ていた『FRIDAY』はフラッシュをたき、おまけに新宿の某ホテルで二人の上半身ヌードまで撮って、見開きブチ抜き

で紹介した。しかも、Sの胸にはルージュで書いた「777」の文字。記事では「カイル・マクラクラン似」などと書かれているが、もちろん目は墨で消してある。

そして数カ月後、七百七十七人目の夜がやってきた。「乱交パーティーをやるから来て」と言うフミエさんからの電話を受けたSは、七百七十六人目までが終わるのをホテルで待っていたが、自分の番が回ってきてもフミエさんは何やら電話をしている。

「バクシーシ（山下）さんが写真撮りに来てくれるって」

僕もその日、夜中の十二時過ぎくらいに、フミエさんから同じ依頼の電話を受けている。真夜中に駆けつけさせるなんて、しかも全裸のSを待たせるなんて、フミエさんも罪な人である。

結局、二人は接合シーンをバクシーシ山下氏に撮ってもらったそうだが、Sがフミエさんの得意技＝一一五センチの超巨乳パイズリ亀頭舐めで昇天したかどうかは定かではない。

……などというバカなエロ話を書いたのは、今となっては、この一件がSの健康を目の当たりにできた貴重な時間だったからだ。

Sに自殺未遂経験があるなんて、三月の段階では全然知らなかった。よくしゃべり、エロなギャグも照れながらノッてくるSが、精神障害者だなんて、精神医学の門外漢である僕が知るよしもなかった。

京浜急行に飛び込んで

その事実がわかったのは、四月にまた別のエロ・イベントをやった際、その打ち上げの席で前述のKと中川嬢とSが同じテーブルに座ったときだった（Sはヤリマン・イベント以来、Eメールの交換というものを初めて中川嬢とやり出したのがきっかけで、事前に彼と会っていたのだ。今から思えば、因果な関係である）。

その席で僕は初対面どうしのKと中川嬢に、「おっ、自殺未遂カップルだねぇ」などと囃子たてた。すると「いや、トリオですよ。僕も自殺したことあるんです」とSが話にノッてきたのだ。

僕は俄然色めきたった。「Kと中川嬢の話も濃いが、まさかSはそれ以上では？」という、なんとも言えない興奮があったことを認めよう。正直言って、鬼畜である。

「実は高校二年の秋に、英会話の学校に入るのを親に反対されて、一袋に二週間分入っていた精神安定剤をいっぺんに飲んだんですよ。

そしたら二日後くらいに、突然授業中に

Sの写真　☞筆者の勧めで、Sは自宅のMacで名刺を作り、都内のイベントやライブで挨拶をした相手に配ったが、彼を癒す相手に出会うことはまれだった

首の後ろが固まって動かなくなって気分が悪くなり、三日後に病院でアーテン錠を水で溶いたやつを注射されて、からだ全体がフニャフニャしてきて元に戻ったんです」
その他、ガレージを閉めたうえ車を密閉して排ガスを吸引したり、階段の手摺りからネクタイで首を吊ったり、発売されてすぐ買った『完全自殺マニュアル』に書かれたとおりにトラベルミンのオーバードープ(致死量どおりに飲んだ)を試みたりしたという(ちなみに同書は知らない間に自室から消えていたとか)。
しかし、なんといっても驚いたのは、昨年十二月に京浜急行川崎駅のホームから線路に飛び込んだことだろう。幸いSに大した怪我はなかったが、「バカヤロー!」と怒鳴った列車の運転手に腹を立て、出刃包丁を持って追い回し、逃げられてSがレールにしゃがみこんだところを、二人組の警官に両腕を押さえられて連行されたという。
「千葉に住んでいる友人を殺すつもりだったんで、現地で出刃包丁を買ったんですけど、そいつが帰ってなくて……。結局、危険物所持と営業妨害で十日間拘置所に入りました。この一件は、翌日の新聞の地方版に〝ノイローゼのサラリーマン列車に飛びこむ〟という見出しで記事になりましたよ」
聞けばSは、「障害者基礎年金(二級)を四年前からもらっている」のだとか。
「僕が働きたいって何度も言ってるのに、担当の先生(もちろん学校のではない)は〝働かなくていいよ〟と言って、自立神経失調症の診断書を書いて、社会保険庁に認知させてくれたんです。たぶん自殺するのを心配してたんだと思うんですけどね。
それで二カ月に一度、十三万円ほどが僕の口座に振り込まれるんです。初回は十二万くらいだったんだけど、一年たつごとに一回の支給額が数千円増額されるんですよね」
そもそもSは、中高一貫教育の学校に通う優秀な生徒だったが、中学一年で早くもイジメにあい、いつも護身用にナイフを携帯していたという。
「それで担任にマークされてて、高校二年で映画同好会の会長をやめると、それを聞きつけた中学のときの担任の先生が、突然そのテの病院に僕を連れていったんです。高校を出てからは、会社に四年勤めて辞めて、その後はずっと派遣(人材派遣会社)経由でコンピュータ・エンジニアをやっています。今でも二週に一度通院してますけどね」
Sは最近、超有名なコンピュータ会社のテスティング・オペレーターの職にありつき、「仕事も会社もプライベートも、今がいちばん満足してる」と言うが、「できるだけ人と会うのは避けている」そうだ。
この原稿の取材のために久しぶりに連絡のついたSは、一時間半も遅れてやってきた僕と、待ち合わせの喫茶店が入るビルのエレベータですれちがった。
「ナメてんですか? 自殺って衝動的なんですよ。今日はもう渋谷の街で車に轢かれようかと思ってましたよ」
Sは憮然とした口調で言った。
「いろんな人とたくさん知り合うと混乱するし、人間関係のしがらみが大きくなると、その相手が憎くなっちゃうんですよ。失礼ですけど」
そう言われて、Sが二カ月以上も前から自分で音信不通にしていた理由がわかった。

僕のイベントの常連客だったSは、そのたびごとに新しい人に出会うのが苦手らしかった。増殖する人脈に、名刺入れにあふれる「知らない人」に人酔いし、めまいを起こすような感覚が、彼にはつらかったのだろう。

Sの飲んでいる薬　☞「図版に何か使いたい」と申し出たら、「じゃ、コレ持っていってください。あげますから」とSが差し出したのが、現在飲んでいる薬1回分。「母親も試しに飲んだことがあるんですが、2日間まるまる寝てしまって……。すごく催眠性の強い成分です」とS

今年五月、アメリカに短期留学したSは、エアメールで「早く日本に帰って皆さんとコミュニケーションをとりたいです」と書いてよこしている。

「留学してからポジティヴになったと思います。僕自身のせいで落ちこむということはなくなりましたから。でも、僕以外の誰かのせいで落ちこむのは……今はダメなんですよ」

Sは、中川嬢がしつこくEメールを送ってくるがやめるように言ってほしいと、僕に頼んだ。自分の中の許容量をよくわかっているのは、彼自身なのかもしれない。

最後に、Kが教えてくれた「ダメなカウンセラーの条件」を書いておこう。それは、ここに書いた三人とつき合うための、タブー集としても読めるから（僕自身の戒めとして）。

【ダメなカウンセラーの条件】

①最初は「友達なんていなくていいじゃない」と言いながら、時間の経過とともに「そろそろ友達作ったら?」と言い出す。

②話そうとしていることを考えている最中に「それってこういうことでしょ」と決めてかかる。

③自分の体験をふまえた具体例を出してわかりやすく説明する代わりに、別の患者の例をあげて「もっとヒドイ人がいるよ」と言い出す。

アル中は二度死ぬ

わらわらと姿を現すピンクの少女たち……。〝アル中予備軍〟が見聞きした「地獄絵」の世界とは？……それでも酒は手放せない⁉

浅野恭平
（ルポライター）

ある日、突然、酒が酒を飲み始めた。断片的な光景が脈絡なく甦ってくる。今思い返しても、まるで夢のような出来事だった。

山手線に乗っている。クーラーの効いた車内で目を覚ますと、乗客が遠巻きにして、こちらを睨みつけている。床にはビールの缶が転げ落ち、濡れた新聞紙が広げられていた。

その前は、おそらく上野のガード下にいたのだろう。煙が立ち込める店内で、焼き鳥を頬張り、酎ハイを煽っている。呂律（ろれつ）の回らない舌で、隣合わせた客とオダを上げていたような気がする。

終電がなくなり、終日営業のファミリーレストランで朝を迎えた。気がつくと、テーブルの上には、大ジョッキが置かれ、気の抜けたビールが残っていた。そのあと、たぶん、それを飲み干したのだろう。モーニングサービスのトーストや目玉焼きと一緒に、キリッと冷えたビールが心地よく喉元を過ぎていった。

そこを出ると、コンビニでビールを買い込んで、友達のところに転がり込んだ。ビールがなくなると、勝手に水割りをつくって飲んだ。冷酒を買いに飛び出したところまでは覚えているが、そのあとの記憶がない。

暑さのせいで、ヒューズが飛んでしまったにちがいない。口をきくのもおっくうなくらい、からだがだるく、頭が痺れ切っていたにもかかわらず、気がつくと、震える手でビールや酎ハイを流し込んでいる。そんな状態が三日も続いた。それでも渇きが癒せなかった。

週末で仕事がなかったからいいようなものの、なぜ、あんなに酒を欲したのか、い

photo▶平山法行

まだに、自分でも説明がつかない。飲むか、眠るか、そのいずれかの状態が三日も続くと、肝臓のあたりがパンパンに腫れ上がり、鳩尾(みぞおち)のあたりに痛みが生じて、飲みたくともからだが受けつけなくなった。

しらふに戻って、最初に思ったのは、いよいよアル中の仲間入りかといった意外と冷めた見方だった。酒で死ぬなら本望だと、かねがね吹聴していたこともあって、三日間ぐらいの連続飲酒でうろたえるのはみっともないという気持が強かった。もっと正直にいえば、夕方までに酒の飲めるからだに戻っているかどうかのほうが心配だった。連続飲酒を軽く考えていたのだ。

靄がかった頭のなかで、いろんな言い訳が浮かんでは消えた。そんなに大酒飲みではない。たんに意地汚いだけだ。ピッチは速いが、一定の量を超えると、ストンと意識がなくなる。眠ってしまうから、毎晩飲んでも、からだを壊さないでいられる。

健康診断でも、異常はなかったはずだ。GOT三〇、GPT二一、r－GTP五一。いずれも正常値だ。ただ、r－GTPが六〇に近づきつつあり、脂肪肝の恐れがあるから、週に一日だけ酒を断つよう医師に言われた。まだ実行していないが、やめようと思えば、いつでもやめられる。

だいいち、仲間の飲みっぷりと比べたら、かわいいもんじゃないか。泥鰌(どじょう)屋で七輪をぶん投げた奴、スナックでガラスというガラスを叩き割った奴、寿司屋に入って、ラーメンをしつこく頼み、柳葉包丁で追いかけられた奴……etc。彼らから見れば、いたって単純な酔っぱらいだ。

とにかく眠ってしまったら、髪の毛を剃られようと、パンツの中にカレーを突っ込まれようと、まったく気がつかない。頭から血を流しながら、スナックの床に転げ落ちていたこともある。誰にも迷惑をかけず、一人で酒の世界に遊んでいるだけだから、まだいいほうじゃないか。

ところが、家族はそう思っていなかった。正真正銘のアル中と決めつけて、精神病院に電話をかけ、入院の手続きまで相談して

いた。枕元には、「久里浜式アルコール依存症スクリーニング・テスト」が置いてある。家族の採点だと一六・〇。『今夜、すべてのバーで』を書いた中島らもよりも三・五ポイントも高い。さすがに気が滅入った。

ストッパーのかけら

入院はなんとしても避けたい。そのためには、どうしたらいいか。アル中ではないということを証明するか、あるいは外来で治療の受けられる医療機関を探すしかない。

都内のアルコールセンターに電話をかけた。三日間の連続飲酒を正直に告げて、自分がアル中かどうかを診てほしいと頼んだ。

電話口に出てきたのは、ソーシャルワーカーの女性だった。アル中の扱いに慣れ切った様子で、治療が必要かどうかを見極めるためには、診察の前にカウンセリングを受けたほうがいいと言われた。あまりにも落ち着いた口調だったので、人生経験の豊かな女性だとばかり思い込んでいた。

受付でソーシャルワーカーの名を告げると、妙齢の女性が現れた。えっ、という感じだった。緊張感がいっきにほぐれた。

「カウンセリングの前に、このアンケート用紙に記入してください」

渡された用紙を見ると、生年月日や出身地はもとより、大学の学部学科まで記入するようになっている。急に気恥ずかしくなった。親の言葉が思い出されたからだ。

「なんのために大学へやったんだかわかんないよ。奨学金は飲んじまう。自動車の免許を取るっていうから、なけなしの金を送れば、それも飲んじまう。なんで、こんな酔っぱらいになっちまったのかねえ。お前のことを考えると、死んでも死にきれないよ」

バカ息子のおかげで長生きできていいじゃないかとほざいていたが、実際にアルコールセンターに来てみると、視点が定まらず、顔のこわばった人が多く、自分の行く末を暗示するようで厭な気分になった。

家族に大酒飲みはいませんか——いない。一日にどのくらい飲みますか——一人だと、ビール二〜三本。朝から飲みたくなることはありませんか——ない。警察にやっかいになったことはないですか——ない。内科の治療を受けたことはありますか——ない。内科以外のトラブルは?——骨折四回、歯の損傷、頭部裂傷、顔面打撲、いずれも一回。震顫(しんせん)せん妄(虫ケラがからだの上をはいずり回る感覚)や幻覚、幻聴は?——ない。大汗はかきますか——昔から。酒を断ちたいと思いますか——適度な量だけ飲み続けたい。

アンケート用紙を渡すと、カウンセリングルームに案内された。映画やテレビで見るようなかっこいいシチュエーションではない。どちらかというと、独房に近い。葬儀屋のカレンダーと故障中のビデオデッキが置いてあるのが、かろうじて相談に来たという意識を保たせてくれる。

「三日間の連続飲酒って言いましたよね。初めてですか。そう、初めて。アンケート用紙を見る限りだと、かろうじてストッパーが一枚残っている感じですよ。でも、いつまでもつかわかりません。これがなくなると危ないんじゃないかしら」

次に記入するように言われたのが、例の久里浜病院のアル中テストだった。自分でやってみると一四・二。家族の評価とは違

っていた。
だいたい、答えられない部分が多すぎる。設問が中途半端なのだ。「適量でやめよう」とか、「酒がきれた」「酒を飲まない」といった状態を前提にする質問があるが、アル中にそんなことがあり得るだろうか。
「あのう、すいません。二十年以上、酒を欠かしたことがないもんで、酒のきれたときの状態っていうのがわからないんですよ」
「ああ、いいですよ。空白のままにしておいてください。酒に対するコントロール能力を診るためのテストですから。摂取量や断酒したときの離脱症状（禁断症状）はあまり関係ないんです」

梅酒の梅と同じ脳

ソーシャルワーカーは、若いにもかかわらず、酒飲みの心理をよく心得ている。待合室で、町工場のオヤジや飲み屋の女将から相談を持ちかけられていたのも、なんとなくわかるような気がする。
「失礼ですが、先生は飲まれるんですか」
「ええ、飲みますよ。でも抜くときは抜きますけどね」
毅然として、彼女はこう言い放った。酒も飲まない人間に、自分の心の中のもやもやをいじられたくないという思いが、この一言で吹き飛んでしまった。もう、こうなると、女教師の前に立たされた小学生のようなものだ。小さなからだをさらに丸めて、アル中の初歩的な知識を教えてもらった。
機会飲酒、習慣飲酒、精神依存、身体依存――。ホワイトボードに、こんな言葉を書き出して、習慣飲酒と精神依存の間に横線を引いた。そして、アルコール依存症の怖さを淡々と語り始めた。
「晩酌ぐらいならいいだろうと、よく言いますよね。だけど、からだにいいお酒なんてありません。モルヒネと同じで、耐性ができてしまい、際限なく量が増えていきますから。薬物中毒よりも始末が悪い。一日二合まで、週二日抜くと決めて、それが実行できるようなら、まだ救いがあります。でも、あなたのように、二十年以上も毎晩飲み続けていると、なんらかの拍子に、スッとこちらへ移行する可能性が高い。診察を受けてもらわないとなんとも言えませんが、今の状態は、限りなく精神依存に近いんじゃないかと思います」
飲み出したら止まらないというわけではないが、確かに酒がないと落ち着かない。その意味では、精神面でのコントロール機能が狂い始めているのだろう。
いい例が酒をきらしたときの行動だ。普通の人だったら、諦めて眠るにちがいない。ところが精神依存の段階だと、酒がないというだけで正気を失い、深夜のコンビニへ駆け込んでいく。薬物（アルコール）探索と呼ばれる行動だが、自分の過去を振り返ると、それに近い行動をしばしばとってきた。たとえ飲まなくとも、いつでも口に入れられると思えば安心して眠れるのだ。
精神依存は、酔いの記憶によって引き起こされる。最初に飲んだときの酔い心地を脳が記憶している。そして、無意識のうちに、追体験しようと、からだにアルコールを入れさせる。いい酒を飲んだ奴ほど、深みにはまり、アル中へと、まっしぐらに突き進んでいくことになる。
「ここでやめておけば、元に戻ることも可

能です。だけど、なかなかやめられない。すると、どうなるか。間違いなく、次の身体依存へと移っていく。こうなったら、もう断酒しかありません。完全なアルコール依存症ですから。お酒を上手に飲めない〝心の病〟と言ってもいいでしょう。一滴でも口にすれば、シャブ中以上の苦しみを味わうことになります」

　身体依存の段階に移っているか否かを見極めるには、二日連続で酒を断ってみればわかると言われた。一日目で、イライラしたり、寝つけなかったりすれば、可能性が高い。二日目になると、大汗をかいたり、手が震えたり、足が攣ったりする。全身がガタガタ震えて、幻覚や幻聴に悩まされたりもする。もっとひどい場合には、アルコール性てんかんでぶっ倒れる。これを何回も繰り返すと、廃人になるといわれている。

「これらを離脱症状といいます。これが出れば間違いありません。いちど試してみては、いかがですか」

　恐ろしいことをさらりと言ってのける。もし離脱症状が現れたら、どうすりゃいいんだ。酒なしの人生なんて考えられない。お先、真っ暗じゃないか。

「それでも死ぬよりはましでしょう。アルコール依存症で肝臓を患った人は、平均寿命が五十二歳といわれています。肝臓をやられなくとも脳にくる。三合以上の酒を飲むと、脳が十二時間以上もアルコール漬けの状態になる。それを毎晩繰り返したら、どうなると思いますか。梅酒の梅と同じですよ。脳が萎縮して痴呆状態に陥ってしまいます。肝臓か脳、どちらかで確実に死に至る病なのです」

　連続飲酒が引き金となって、精神依存から身体依存へと向かっていくこともあると脅された。となれば他人事ではない。二日間の断酒を決め、受診の予約を入れることにした。

筋金入りの先輩

　アルコール依存症は、糖尿病と同じで、一度かかったら治らない。遺伝的な体質と飲酒行動によって引き起こされる慢性疾患だからだ。定期診断のときに、一日二合までならいいと医師に言われるが、ソーシャルワーカーによると、適量飲酒もあまり当てにならないらしい。

「アルコール依存症にかかったら、とても二合じゃ収まりません。そのうえに一升がつくくらいの酒量をアッという間に飲み干してしまう。二合以上になると、肝臓がアルコールの分解にフル稼動させられて、どんなに栄養価の高いものを食べても吸収できない。栄養失調になってしまう。からだの隅々にまで、栄養がいきわたらないために、骨がもろくなったり手足が痺れたりするんです」

　ソーシャルワーカーの説明を聞きながら、なぜか、過去に出会った、心優しきアル中たちの顔が浮かんだ。離島の漁師、ラーメン屋の主人、週刊誌の編集者、カメラマン、ガス会社の元社員……ｅｔｃ。朝から一升酒を煽ったり、ポケット瓶をカバンに忍ばせて出社するような輩だが、どういうわけか、酒乱は一人もいなかった。

　ある者は肝硬変で死んだ。また別の者は、若年性アルツハイマーで、頭蓋骨と脳の間に一センチの隙間があるにもかかわらず、病院から脱走して、行方をくらましている。

さらに別の者は、酒を断ったものの同時に気力も失い、なかば生ける屍と化している。

元気なのは、ガス会社の元社員くらいだ。足立区の資産家の息子だが、結婚して間もなく、女房が精神を患い、子どもを施設に預けたとたん、一人暮らしの淋しさを紛らわせるために、夜遊びが始まり、酒量が急激に増えていった。

行きつけの居酒屋が十一時で閉まると、フィリピンパブや台湾クラブへ流れていって、深夜の二時、三時まで踊り狂い、ウィスキーを浴びるように飲む。一時間前に出社して、会社で朝風呂を浴びればシャキッとするというのが、元気な頃の口癖だった。

ところが、しばらくすると週末の連続飲酒が始まり、週明けの無断欠勤が増え、一日が二日、二日が三日と休むようになって、とうとう精神病院に入院する羽目になった。病院に送り届けた職場の仲間がこう語る。

「あそこでやめておけばよかったんだ。会社でも大目に見ると言ってたんだから。それをまた破ったでしょう。前よりもひどい状態でね。会社の連中が様子を見にいったら、部屋の片隅にうずくまって、ピンクの少女が俺を殺しにきたと騒いでいたそうです。あれじゃ、会社にいられるわけがありませんよ」

退院後は、居酒屋の主人が気を遣って、ビールを二本しか飲ませなかった。本人も、それに素直に従っていた。

「いやあ、今回はまいったよ。ヤクザの親分と同じ部屋でさ。夜になると、鉄格子の隙間から紐を垂らして、ワンカップを差し入れてもらう。それをうまそうに飲むんだな。目のやり場に困っちゃったよ」

時間を持て余していたのだろう。アル中特有のむくみのある顔を崩し、舌足らずの口調で、入院中の出来事をおもしろおかしく聞かせてくれた。

「あんたも一度は入ってみたらいいよ。夜になると、やることがないから、花札かチンチロリン。タバコがキャッシュ代わり。若い奴からずいぶん巻き上げたもんだよ」

一年近く安定した状態が続いただろうか。しばらく姿を見かけないなと思っていたら、この七月に再び病院に担ぎ込まれたという。居酒屋の主人が呆れ顔で語る。

「ありゃ、もうだめだよ。三度目だからね。一生出てこられないんじゃないの?」

いったい、どんな闘病生活を送っているのか。アル中の宣告を受ける前に、筋金入りの先輩の話を聞いておこうと思って、病院に足を運んだ。

脳細胞が飛び散る光景

面会所は、精神病院の裏手にある。金網を張り巡らせた隔離病棟の一画だ。面会票に記入して、待つこと数分、トレーナー姿の彼が現れた。

前歯が二本欠けたことを除けば、前よりもずっと血色がいい。目の輝きも違う。口調もしっかりしている。

「もう二カ月になるからね。普通の生活と変わらないよ。一日三回、三〜四種類の薬を飲んでさ。寝る前に睡眠薬を渡される。体調もよくなったから、もう、そろそろ出ようかと思っているんだよ」

とはいっても、病院に担ぎ込まれる前の離脱症状を訊くと、場数を踏むたびに、幻覚や幻聴がひどくなっているように思える。

今回も、ピンクの少女が出てきた。それ

も一人ではない。わらわら、わらわらと、二階から大勢下りてくる。クスクスと笑っている声まで聞こえる。パッと振り返ると、笑い顔が見えることもあれば、姿をくらますこともある。

「誰かが入ってくるから助けてくれ、と警察に電話するんだけど、ちっとも相手にしてくれない。しょうがないから、出刃包丁とかナタで、そいつらを追い払うんだ。階段なんか傷だらけだよ。包丁を持って、外に飛び出したこともある。近所の子どもからヘンなおじさんといった目で見られちゃったけどね」

こうなると、もう錯乱状態だ。一歩間違えば、殺傷沙汰にもなりかねない。庭の草を刈り、家のまわりに灯油を撒いた。ピンクの少女の侵入を阻止するためだ。

「今考えると、ぞっとするね。あのまま放っておかれたら、おそらく火をつけてたと思うよ。とにかく神経が逆撫でされるんだから」

病院に担ぎ込まれたときには、手の震えがひどくて、コップも持てない状態であった。食事が摂れない。食べても吐き出してしまうからだ。栄養補給と血液を浄化する薬を二週間近く点滴で打ち続け、ようやく離脱症状から解放された。

「最初の一週間がとくにきつい。保護室の壁に体当たりをかます奴もいれば、天井に向かって、もしもし、もしもしと呼びかける奴もいる。見えない影と戦ったり、異空間の惑星と交信したりしているんだよ。神の啓示だと言って、幻想的な絵を描く奴もいる。現れ方はさまざまだね」

日本一のアル中男といわれる邦山照彦は、『アル中地獄』(第三書館)のなかで、自分の脳細胞がバラバラに飛び散った光景を記している。助けを求めると、数人の仲間がほうきで掃き集めてくれる。両手で頭を押さえながら廊下へ飛び出し、トイレの前で最後の一片を拾う姿は感動的ですらある。

彼は、散歩の途中で、ベタベタに濡れた黒い花を見つけ、怪しげな匂いを嗅いだ。さらに自分の墓に手を触れた。そして、身近な人間の声で自殺をそそのかされたと述べている。味覚を除いて、四感の幻想を体験したのだ。

シャブ中のようなフラッシュバックはないが、突然襲ってくる飲酒渇望や多種多様な幻覚症状を踏まえると、アル中こそ、病める魂の王者のように思えてくる。

別れ際に、彼に尋ねた。もう、これに懲りて、酒を断つかと。その顔が忘れられない。口元を歪め、半ベソをかきながら、こう言いきった。

「やめられるわけがねえじゃねえか。今だって、外出のときに、こんなちっちゃな缶ビールを一杯ひっかけてくるんだぜ。退院したら、また行くよ。あのオヤジんとこに。よろしく言っといてな」

彼の言葉を聞いて、かなり心が揺らいだ。はたして、二日間も酒を断てるのか。まったく自信がなかった。

手を差し伸べるほどにはまる

断酒を試みる前の晩は、浴びるほど、ビールを飲んだ。仕事場の酒を一掃するためだ。と同時に、すぐ近くの自販機や深夜でも開いているコンビニの誘惑に打ち勝つためには、当分、口にしたくないと思うくらい、酒を飲んでおけばいいだろうと思った

のだ。

それでも自信が持てなかった。かなり緊張した。突発的な飲酒渇望に襲われれば、頭でわかっていても、からだが言うことをきかなくなる。ひどい場合には、ヘアトニックやオーデコロンなど、アルコールの混じったものを口にすると、モノの本に書かれている。精神的なコントロール機能が麻痺し始めているだけに、そうなったら、一巻の終わりだなと覚悟していた。

「心の中で飲みたいと思っても、行動に移さなければいいんです。アルコール依存症にも、健康なものと不健康なものがあるんですよ」

とアドバイスしてくれたのは、東京都立多摩総合精神保健福祉センター地域保健部広報援助課の岩崎正人課長だった。『嗜癖のはなし』（集英社文庫）をまとめた精神科医だ。

「我われのところにかかってくる電話の約一割が、アルコールに関する相談です。九四年度で一千百六十九件。大半が家族からのSOSですね」

本人よりも先に、家族が参ってしまうのが、アル中の大きな特色だ。本人の絶望感や恐怖感もさることながら、彼の世話をする家族の身になってみれば、なんで、あんな悪魔の水で頭を混乱させ、身を焦がすのか、とても理解できない。錯乱状態の主人をなだめ、垂れ流し状態の息子の下の世話をしているうちに、家族のほうが慢性のうつ状態になったり不眠症になったりする。

「そこにエネルギーを注入して、家族を健康な状態にもっていくのが、この病気を防ぐ第一の手だてです。そこまでいけば、あとは、本人がどん底感を味わって、立ち直ろうとする気持が湧き起こるのを待つだけです。最終的には、本人が気づくことしか

ないんです」
　家族のための自助組織、日本アラノン家族グループのビギナーズミーティングでも、同じようなことを言われた。
「私たちは回転木馬から降りようと言ってるんです。遅刻しても、会社に電話をしない。飲み屋のツケも払わない。家族が手を貸せば貸すほど、アルコールの深みにはまるのが、この病気の最も恐ろしいところなんですよ」
　いわば記憶と自覚の闘いなのだ。最初の酔い心地に溺れれば、ズルズルとアル中地獄にはまっていく。かといって、酔った記憶を消し去ることはできない。酒の誘惑を断ち切るためのなんらかの対策を講じるしかない。
　酒なしで、夜を過ごすために、一計を案じた。自宅や仕事場、飲み屋街など、日常の行動半径から身を遠ざけることにした。うってつけなのが、喉がひくつく夕暮れどきに開かれる、AAというアルコール依存症本人の自助グループのミーティングだ。
　会場へ行って驚いた。教会の一室を借りて、それぞれ体験を語り合っているが、どこにも悲愴な様子など感じられない。もっと恬淡と、自分を突き放している。たとえばこんな具合だ。
「今日は、なんとなくもやもやしてきたんで、この集会に参加させてもらいました。久しぶりに伯母から電話がありましてね。東京の局番が四桁になっているのを初めて知ったんです。ずいぶん長い間、宙をさまよっていたな、とつくづく感じますね」(三十代の女性)
「僕は障害者ということに甘えてきました。子どもができてからおかしくなった。朝からサウナに入って、酒を飲んでましてね。今や、このざまです。来月で、ちょうど一年になるので、この際、思い切って、依存から自立へと、人生の指針を転換しようと思ってます」(三十代の男性)
「俺は何も望まんよ。出世も、進歩もいらない。ただ、とにかく今日、酒を抜くだけで精一杯なのさ。それができれば、何もいらん」(五十代の男性)
　アルコール依存症と診断を下された彼らが、酒に対する思いを断ち切っているのに、たった二晩ぐらいでうろたえてどうするか。決意も新たに自宅に戻ってくると、家の者が真っ赤な顔(!)で出迎えてくれた。

病気のアル中、病気でないアル中

　二日間の断酒は成功した。離脱状態は、何も起こらなかった。心も軽く、診察を受けにいった。担当の医師に、受診目的を尋ねられて、自分のアルコール依存度を確認したいと答えた。
「身体的なチェックは、ここですぐわかりますよ。だけど、要は心の問題ですからね。あなたが、どれくらい酒と縁を切りたいのか。あるいは切りたくないのか。それによって、処方はかなり異なってくると思います」
　無実を証明してもらうつもりだったのが、話を聞いていると、なんとなく雲行きが怪しい。担当医の説明を聞きながら、断酒会の会長に言われた言葉が蘇ってきた。
「あんた、そりゃ、もう酒をやめるしかないよ。完全に、こっち側だよ。そのままいったら死ぬよ」
　酒で死ぬのは、さほど怖いとは思わない。

＊AA日本ゼネラルサービスオフィス(JSO)　☎03-3590-5377
＊アラノンジャパン(GSO)　☎03-3495-1667

寿命と思えば、諦めもつく。だが、酒に身を焦がされて、不本意な行動をとるのは意に沿わない。もっとはっきりいえば、病気のアル中なのか、病気でないアル中なのか、その点だけを明確にしたい。

「離脱症状は、誰にでも、すぐわかるんです。だけど、コントロール喪失となると、社会規範や時代背景によって、かなり評価が変わってくる。グレーの部分が、だいぶ多い。酒をやめるつもりがないのなら、うまくつき合う方法を考えたほうがいいですよ」

我が国には二百二十万人のアルコール依存症患者がいるといわれる。糖尿病が四百～五百万人。精神分裂症が一千万人強。それらに比べると、意外と少ない。しかも、病気だという自覚にも乏しいため、実際に治療を受けているのは二万人前後しかない。

「患者の総数は、ここ数年、変わっていません。しかし、質的な変化が著しい。女性や若者向けの酒が大量に出回ってきましたのでね。短期間でアルコール依存症になる人が増えています」(岩崎課長)

ひと昔前まで、アル中になるのは、大半が中年男性だった。二十年、三十年と酒を飲み続け、四十二～三歳で入院する。発病する顕著な要因は見当たらない。

ところが、女性や若者になると、平均十年前後で、アルコール依存症になる。早いと、五年ぐらいでアル中ということもありうる。しかも、女性の場合、夫の浮気や姑との確執、育児ノイローゼなど、家族関係のなかにストレス要因を抱えていることが多い。若者の場合には、非行や不登校、摂食障害などをともなった複合型として症状が現れてくる。こうなってくると、昔のような隔離方式では治療が難しい。家族や行政、ボランティア団体などが連携して、アル中の内面や生活環境を変えていくしかない。チーム医療が叫ばれるのは、そのためだ。

「一応、三年を一つの目安にしています。まず、最初の一年間、医療機関に通って、酒を口にしない習慣を身につける。二年目以降、AAや断酒会に通って、お互いに励まし合う。三年たてば、回復の見込みがあるか否かがはっきりしてきます」(岩崎課長)

三年という歳月が、アル中地獄から脱出できるか否かの一里塚なのだ。回復、死亡、入退院の繰り返しと、だいたい三等分される。回復したからといって、一滴でもアルコール類を口にすれば、またアル中地獄へと堕ちていく。なまじ飲めるだけに悲惨だ。

「ちょっと、おかしいと思ったら、早めに相談にきてもらうのがいちばんです。精神依存の段階であれば、そう苦しまずに酒との関係を断てる。病気なんだという自覚を持ってもらうのが大切ですね」

と語るのは、高田馬場クリニックの米沢宏院長。六年前にオープンしたアルコール依存症専門の医療機関だが、夕暮れどきに院内を見渡すと、いわゆるネクタイ・アル中たちが新聞や週刊誌を広げて、診察の順番を待っている。精神病院に入っているアル中たちとは、顔つきや物腰がまるで違う。酒が飲めないというだけで、それ以外は普通の生活をしている人びとだった。

今のところ、まだ綱渡りの状態だ。だが、AAで聴いた「今日一日を生きる」を自分なりに翻案し、アル中地獄に堕ちなかったのを祝って、今日もまたビールのジョッキを傾けている。

風俗嬢と共依存

殴られても好きな人

なぜ彼女たちはSEXを売るのか？ なぜ彼女たちは三高の客になびかないのか？ ダメな男を求める「愛しすぎる女たち」との交遊録！

本橋信宏（ルポライター）

「だめな男に惚れる女」という伝説が昔から言い伝えられている。

三年前に知り合った自宅出張ホテトル嬢の聖子もそのひとりだ。色白の愛嬌のある顔で、J&Rやアルマーニといった水商売系の女性に人気のある服を好んで着ている、ちょっと男好きするタイプの女性だ。

神奈川のある街で生まれた二十歳の彼女は、幼い頃に両親が離婚して母親のもとで二歳下の妹とともに育てられた。酒と女と競馬にのめり込んでいた父親は、聖子が小学一年生の頃にはもう家庭にいなかった。

聖子の処女喪失年齢は高校二年生というから、風俗業界に入ってくる少女たちに比べれば決して早い方ではない。

「相手の男は私の女友達の父親だったの。そこの家っていうのも、両親が離婚してて母親が再婚したのよ。新しい父親っていうのが渋くて私の好みだったの。ファザコンだからね、私。まわりがみんな処女捨ててるから焦ってたんだけど、するならこの男って思ってた。だから夏休みに、女友達とそこのお母さんがいないときを見計らって、超ミニ穿いて遊びに行ったの」

十七歳の太股を見せられた中年男はたまったもんじゃない。聖子の目論見は成功して興奮しきった友達の義父は、消極的に抵抗する女子高生を強引に押し倒してしまった。

「そいつ、信じらんないけど、私の友達もやっちゃってるんだよ。あとで友達から聞いたんだけど」

つまりその男は、疑似近親相姦もしていたということだ。義父と疑似近親相姦してしまうケースは、僕が知ってるだけでも四件あるが、ここではテーマと離れてしまう

ので割愛しよう。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆ちゃんとしてると不安になる

高校を卒業した聖子は片親というハンディもあって、まともな就職ができず、遊びに行っていた帝都最大の殷賑地帯、歌舞伎町のスナックでアルバイトを始めた。そこで知り合った二歳年上の覚醒剤密売を生業にしている暴力団構成員と同棲をするようになった。

「そいつは紀伊國屋周辺で覚醒剤とコカインを売ってるの。背中に錦鯉の入れ墨が彫ってあるんだけど、私って入れ墨見るとセクシーだなあって思っちゃうのね」

覚醒剤の売人はみずからも中毒者となり、しばしば聖子に暴力を振った。彼女も何度かクスリを使用したけれど、男がクスリを彼女に勧めなかったために中毒になる前にやめることができた。ところが遊びに来ていた妹が、いつの間にか中毒者になっていた。

「あいつはクスリを隠してた。だけど妹は、私たちがいない間にこっそり使ってたみたい。そのうちにだんだんおかしくなってきちゃって、訳のわかんないこと言い出すの。白い粉みたいなクスリ、あれなんなの？覚醒剤じゃないよ、あれやってるうちに廃人みたくなっちゃった。今は精神病院に入ってるけど、私がお見舞いに行っても気づかないの。もうだめなんじゃない……」

白い粉みたいなクスリとは、たぶん最強最悪のドラッグ、ヘロインだろう。

男は覚醒剤取締法違反で逮捕されてしまい、残された聖子は、今度は男と同じ組の構成員と交際するようになった。以前の恋人は、ドラッグ密売という非合法の商売ではあるが、金を稼ごうという気力だけはあった。ところが今度の男は勤労意欲ゼロだったために、聖子は自宅出張ホテトル嬢で稼がなければならなくなる。

「そいつはクスリとかやらなかったけれど、働かないもんだからよく私と喧嘩するの。顔が腫れちゃって仕事に行けないときもあったもん。でも喧嘩以外のときはすごい優しい。それだけが取り柄かな。あとは背中の入れ墨もね」

その男は組から抜けようと行方をくらましてしまったために、聖子はまたひとりになってしまう。そして彼女が再びつき合いだした男は、妻子持ちの中年ヤクザだった。

「私がヤクザを好きだからか、ヤクザが私みたいな女を好きだからかよくわかんないんだけど、つき合う男は本当にヤクザが多いんだよねえ。今度の男はちゃんと東京に大きな瓦葺きの家を持ってるし、奥さんも子どももかわいがってるの。やっぱり背中に鬼みたいな入れ墨してる。それがまたセクシーでいいんだ。仕事が遅くなったと言って私と週に二日間、新宿のホテルに泊まってる。一緒にいるときはセックスしっぱなし。別にクスリやってるわけじゃないんだけど強いの。でもね、やってる最中に突然怖い顔になって私の首を絞めたり、レイプみたいに乱暴する。犯されるっぽいセックスって嫌いじゃないから、私はいいんだけど。あれはたぶん、クスリの後遺症じゃないかなあ。寝ていると、ときどき汗びっしょりかいてガバッと起きあがるんだよ」

中年ヤクザの本音は性欲処理だろうが、彼女は今のところ、男に惚れて週二回の泊まりに満足している。

photo▶山田鎮二

「普通のサラリーマンとつき合えば」と僕が忠告しても、聖子は「相手がちゃんとしてると、私が不安になっちゃう」とつぶやいた。

◆◆◆◆◆◆美少女と野獣◆◆◆◆◆◆

だめな男に女が惚れる例をもうひとつ挙げてみよう。

池袋のあるピンサロで働くゆかりという二十一歳の娘がいる。一年半前までは、同じ街のキャバクラに勤務して常に指名の上位に入っていただけあって、美少女がそのままおとなの女性に成長したような美しさがある。

やはりゆかりの家庭も、彼女が中学生の頃に両親が離婚して母親の手で育てられた。

ゆかりがキャバクラを辞めて、性風俗業界でも一番過酷と言われるピンサロに飛び込んできた理由は、男の問題だった。

「キャバクラ時代に、店に二回来てくれたタクシー運転手のことが好きになっちゃった。お客に惚れるってことはめったにないことだし、前にも大きな商社に勤めてるか

っこいいお客さんとか、外車のディーラーやってる金持の男の人が私とちゃんとつき合いたいって言ってくれたんだけど、ぜんぜん興味わかなかった。運転手は私より四つ年上で、そんなにかっこよくないんだけど優しいの。でもかなり借金があって、ふたりで暮らすにはどうしてもその借金を返さなきゃいけなかったのね。だからキャバクラよりも手っ取り早く稼げるピンサロに移ったわけ」

ゆかりは恋人の借金の理由と総額を教えてはくれなかったが、大方この年代の男の借金はギャンブルと相場が決まっている。

「ふたりで一生懸命働いているから、借金は来年中には返せるはずなの。返し終わったら結婚しようって決めてる」

真面目にタクシー運転手を務めているとはいっても、惚れた女をピンサロで働かせるのは古典的なヒモ的感性の持ち主ではないだろうか。そんな男と交際していて、果たして彼女は幸福なのか尋ねてみると、ゆかりは「好きになったものは仕方がないもん」と言い切った。

彼女もときおり男とささいなことで喧嘩して、殴られることがあるという。

「一緒に暮らして、彼が浮気性だってことに気づいたの。喧嘩になるのはそのことが一番の理由ね」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

借金の行方

アダルトビデオの制作に携わったり、そこに出演する女たちや風俗嬢を取材して十二年になる。この世界でもだめな男に惚れる女の図式がよく見受けられる。青森出身で、デビューしてからもなまりがとれない美人AV女優、桜沢菜々子もそのひとりだ。

前出の聖子とゆかり同様、菜々子の両親もまた離婚している。

「お父さんが飽きやすい性格で、仕事、長続きしなくて、それで私が小学校一年のとき、離婚しちゃった。まだ小学校一年だから離婚したってわかんなかった。お父さんに〝いってらっしゃい〟って言ったら、そのまま三年くらい帰ってこなかったから。それでお母さんと一緒に住んで、小学四年のときから今度はお父さんと暮らすようになった。お父さん、再婚しないで今でもひとり。青春時代をすべて私に捧げたって言ってるけどね。なんかね、私を育てるだけで必死だったらしい」

娘を溺愛するあまり、父親は高校一年生になった娘の日記をのぞいてしまう。初体験のことが書いてあったために菜々子はプライバシーの侵害だと父親をなじり、結果として菜々子ではなく父親が家を飛び出してしまった。

そして空き家になったところに、交際中だった三歳年上の男が転がり込んできた。男は暴力こそ振わなかったが、勤労意欲がまるでなかった。

「彼氏はプータローだった。最初の半年は一緒にパチンコ屋に勤めていたの。だけど彼氏が喧嘩してクビになっちゃって、私は一緒に辞めちゃって、それから私が夜スナックで働いてた。でも彼氏が遊びまくってたからお金がなくて、私がスナックのお客さんを保証人にしてサラ金からお金借りて、彼に渡していたの。お金あげないと彼が去っていっちゃう気がして」

菜々子が稼いだりサラ金から借りた金も、

すべて生活費と男のパチンコ代に消えてしまう。
そのうちに生活費がゼロになり、ガス、水道、電気も止められ、近くの公園で水を汲んで過ごした日々もあった。
「最初の頃は毎日セックス。相手がうまかった。いまだかつてないようなことばっッか、体位から何から。フェラチオも最初はそんなにうまくなかったんだけど、彼氏に磨きをかけられた。ここなめろとかいろいろ言われて」
ここにもだめな男に惚れる女の図式があった。

親の顔が浮かばない

聖子・ゆかり・菜々子のように、どこか欠陥のある男を好きになる女たちにはいくつかの共通項がある。
まず第一に挙げられるのが両親の離婚である。
性風俗やAV女優に多く見られる親の離婚は、彼女たちが成人すると大きな影を落とす。異性やギャンブル、酒といったトラブルで離婚してしまった親に対して、彼女たちは尊敬の念を抱けず、思春期を過ぎる頃になると無意識のうちに反抗を始める。さらには親の肉体の延長線上にある自分の肉体を虐めることで、間接的に親への復讐を果たそうとする。
身近な例で言えば、根性焼きと称する自傷行為である。両腕に無数の一円玉大の火傷痕のある十九歳の性感ヘルス嬢は、中学時代に根性焼きをやり続けたと告白した。やはり彼女も両親が離婚している。
男なら、みずからの男気を示すために、煙草の火を自分の腕に押しつけることもある程度理解はできるが、外見をことのほか気にする十代の娘が、なぜ醜い傷跡が残るような行為をするのかと言えば、それもまた間接的な親への復讐なのだろう。
両親どちらかの不在は、フロイト的に解釈すれば子どもの「超自我」の不完全な形成につながる。つまり「してはならない」

といった道徳的規範が希薄になるのだ。

父親的な力強さと母親的な優しさがともに備わってこそ、子どもの「超自我」が形成されるのに、尊敬されるべき両親が不完全だと「してはならない」という意識が育ちにくい。子どもが行動する際の重石役に、親が成り得なくなってしまうのだ。

一般社会の通念上、やってはいけないことやあまり勧められないことを子どもがしようとして寸前で踏みとどまるのは、「親の顔が浮かぶ」ことが大きな力になっている。

このとき、親の存在は子どもにとって事の善悪を判断する神のような存在になっている。ところが親が素行不良の場合、この役割を期待することはできない。その結果、重石が取れて羞恥心の薄くなった彼女たちは性風俗やAV女優に変身しやすくなる。

ところで幼少期に、決して経済的にも愛情的にも恵まれないで育った彼女たちが成人するにつれてだめな男に惚れていくのは、いったいどういうことなのだろうか。男の価値観から言えば、彼女たちこそ社会的にも経済的にも上位にある男性に惚れることで、幼少期に手に入れられなかった安心感と幸福を得られるはずではないか。

しかし「相手がちゃんとしていると私が不安になっちゃう」と言った聖子のように、彼女たちはだめな男、問題を抱えた男を好きになってしまう。それは、男の勝手な推測からすれば母性本能と定義づけたくなるが、それとは根本的に異なる心理的力学によるものと言っていい。

どんな人間も、生存本能のひとつとして、「自分はこの世に生まれて価値があったんだ」という存在価値の確認行為をする。聖子・ゆかり・菜々子のように、社会的弱者として育った彼女たちは、とりわけこの存在価値の確認を強く望む。みそっかすのような存在に甘んじていた彼女たちが成人するにつれて、「こんな私だって誰かが必要としてくれてるんだ」といった欲求を強く持つようになる。

そのとき、彼女たちにとって最高の相手となるのが「だめな男」なのだ。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆ 共依存の正体

最近になって、アメリカを中心に、アルコール依存症の人間をめぐる人間関係をとらえる精神医学用語「共依存」が注目されている。

この用語はアルコール、薬物などの依存症研究の第一人者として著名な斉藤学氏（東京都精神医学総合研究所研究員）が命名したものである。僕は彼女たちのだめな男への献身ぶりを「自己存在価値の証明欲求」と言ってきたが、じつはこの「共依存」という言葉と出会ったときに、彼女たちの心理がより鮮明に理解できるようになった。

共依存とは、簡単に言えばこういうことである。

だめな男に惚れている女がいる。

だめな男とは、たとえばアルコール依存症の男であり、ギャンブル依存症の男であり、勤労意欲のまるでない男であり、自己中心的ですぐに暴力を振う男である。世間から見れば、こんなだめな男はつき合っている女に依存しているように見える。金の工面から身の回りの面倒まですべて献身的に尽くす女がいなければ、彼は生きていけない。

ところが彼女たちもまた、そんなだめな

男の面倒をみることで「こんな私だって誰かが必要としてくれてるんだ」という法悦の感情に浸りきれるのだ。つまり彼女たちもまた、そんなだめな男がいないとやっていけず、彼女たちもまた、だめな男に依存しているのだ。

こうしてだめな男と献身的な女の強固な結びつきが完成してしまう。

だから聖子がいみじくも言ったように、完璧すぎる男（その多くが堅実で物わかりがよく、女性に迷惑を及ぼさない社会的地位の安定している男性）は彼女にとってつけいる隙がなく、逆に自分が必要とされなくなる不安を誘発させてしまう存在にしかなりえない。

聖子・ゆかり・菜々子のような、幼少期に暗い影を落とした日々を送っていた娘たちは、成人するにつれて幼い頃のトラウマを忘れようとし、依存対象を探し出す。その対象となるものは、酒でありギャンブルであり大麻やシンナー覚醒剤といった薬物であり、そして恋愛である。

とりわけ彼女たちを夢中にさせるのが恋愛である。

男女の痴情のもつれで平凡で堅実なサラリーマンやＯＬが殺したり殺されたりするのだから、まさに恋愛こそ手軽で最強のドラッグとも言えよう。恋愛をしたくてたまらない共依存の彼女たちは、相手の男性を射止めるために追いかける恋愛が大好きだ。

自己存在価値の証明として能動的に男を愛し、献身的に接する。そうしている間、彼女たちは幼い頃のトラウマを忘れ去ることができる。

そんな彼女たちにとっては、物わかりのいい愛してくれる男は物足りない存在でしかなく、どこか問題を抱えただめな男こそ恋愛のやり甲斐があるのだ。

覚醒剤の密売をしたり暴力を振うヤクザの面倒をみ続ける聖子。

ギャンブルで多額の借金をした男のためにみずからピンサロで働き、男の救済に躍起となるゆかり。

勤労意欲のない男が自分から去っていかないように深夜スナックで働き、サラ金から借金してまで相手に金を渡す菜々子。

端から見ると不幸に見える彼女たちだが、男に尽くしている間は、生きている証が得られる至福の時でもあり、安定感を得られる時でもあるのだ。

美人ＡＶ女優として人気のあった浅倉舞もまた、小学五年生のときに両親が離婚してどちらからも引き取ってもらえなかった。彼女が成長して恋愛の相手に選んだのが年下のホストだった。尽くすことで法悦感を

得られることを彼女はこう語っている。

「彼に何かしてあげるのが好きなんです。男から尽くされるのが大嫌い。しょうがないですよね、そうなっちゃってるし変えようがない。だから男がだめになっちゃうんですよね。私、尽くしまくってる。彼にパンツや靴下はかせるときもある」

僕らが生活しているこの社会はよくしたもので、こんな共依存の女性にだめな男が寄りつくものだ。いや、そんなだめな男を彼女たちが追い求めているというのが正しい言い方だろう。

知らず知らずのうちに相手に振り回され、疲れ果てているのに、相手から離れられないでいる彼女たち。殴られ、蹴飛ばされ、金をむしり取られても「しょうがないわね」とこぼしながら、男にとりついていく彼女たち。

共依存の彼女たちは惚れてしまった男にとことん尽くしまくるので、しばしば男にとっては加害者のような存在になってしまう。

そんな関係性をどうにか救済しようとする民間ボランティアの動きもあるが、僕は共依存の関係性は勝手にさせておくのが一番だと思う。端から見れば不幸な関係かもしれないが、当人たちにとってみれば不幸の中の幸福なのだから。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆ 愛しすぎる女たち

三高という打算的な思惑で恋愛相手を鵜の目鷹の目で探そうとしている女たちや、相手の家柄や財産だけで結婚を決めようとする上昇志向の強すぎる女たちよりも、聖子やゆかりや菜々子のほうが愛おしいではないか。だから僕は三高を狙うOLたちよりも、聖子たちのような共依存の女たちに魅力を感じてしまう。

そんな僕はひょっとするとだめな男なのだろうか？　本心ではそうは思わないのだけれど、そう言えば共依存の女性と二度つき合ったことがある。

ひとりは高校を欠席し続けながら、なんとか卒業してＡＶ女優になった娘だった。彼女の父親は、機械会社の社長を務めながらよそに愛人を作って家に寄りつかず、母親はやはり年下の愛人を作り、派手な生活を送っていた。

そんな家庭に育った彼女は「年上の優柔不断な男が好み」と言い、交際していた男たちもみな、そんなタイプだった。

どちらかと言えば、我がままで、優柔不断とは正反対のタイプだと自分で思っていた僕は、彼女とつき合うことでドラッグ体験を強いられてしまった。共依存の女性である彼女がハマっていたのは睡眠薬で、それまでケミカルな薬品を口にすることをいっさい拒否し、酒も飲めなかった僕は、たちまち睡眠薬のトリップ感に身も心も奪われてしまった。

やはり僕はだめな男だったのか。

もうひとりは、やはり小学生の頃に両親が離婚して、母親の手で育てられた娘だった。ファザコンの彼女は「父親に似た包容力のある年上の男性が好み」と言い、どういうわけか包容力があるとは思えない十七歳年上の僕と交際したのだった。

「追いかけられるよりも追いかけるほうが大好き」と言う彼女もまた共依存にありがちな愛しすぎる女で、僕の手帳を盗み見して取材先の女性の連絡先に勝手に電話を入

れてみたり、取材旅行を、他の女と旅行に行くと勘違いして、僕の事務所のドアや車に接着剤を挿入して使用不可能にした。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆母親に似た人生行路◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

ところで、ここまで述べてきた共依存は、離婚家庭に育った娘たちだけに見られるものなのだろうか。幅広く世の中を観察してみると、そればかりではなさそうだ。

財産も豊かで両親がそろっている家庭の娘も、幼少期に両親からの愛情を金で代用されたりして育つと、成人してから共依存の度合いを深めていく。何不自由なく育ったお嬢様たちは成人するにつれ「こんな私だって何か役に立つことがあるのよ」と自己の存在価値の証明を得るために、問題を抱えた男に惚れてしまうことが珍しくない。

お嬢様と地位の低い男の関係といった図式である。

さらに僕の感覚を広げていくと、共依存は美人に多く見受けられる。

美貌の娘に生まれた彼女たちは、幼い頃から周りの男たちに求愛され続けている。幼い頃はそれでも自己満足を得られるので美貌の彼女たちは疑問を持たないが、思春期を過ぎておとなの女に成長するにつれて、求愛されることからは刺激を得られず、求愛を物足りなく感じてしまう。

人間はみずから行動することで存在価値の証明を得られる。相手の男を積極的に評価して、周りの意見を聞き入れず、みずからの存在を確認するために人一倍男を愛そうとする。その対象となるのは離婚歴がある中年男性であり、女癖が悪いと言われるプレイボーイであり、うだつの上がらない仕事をしている芽のでない男である。

美人女優や才色兼備の女性キャスターの恋愛や結婚、そして離婚を見ると、こんなケースがよく転がっているものだ。

＊

最後になるが聖子は今でも自宅出張ホテトル嬢として働き、背中に入れ墨のある新しい男を探している。

ゆかりは男の借金返済をしたはずなのに、いまだにピンサロ嬢として男のペニスを頬張る毎日だ。

菜々子は白血病で死ぬか結婚のどちらかを願っている。

三人ともつき合っていた男とはもう別れ、今では新しい男を探している。そして彼女たちの目の前に現れる男たちは、やはり前と同じような奴らに違いない。

そんな問題を抱えた男たちと結婚する彼女たちの多くは、家庭を持ってからもトラブルを多く抱えることになり、そこで育った娘たちは母親に似た人生行路を歩んでいく。

もっとも、ここに書いたことがすべて当てはまるものではなく、例外も大いにあり得ることを言っておかなければならない。僕は精神分析万能論者でもなく運命論者でもない。風俗嬢やＡＶの取材を長らく続けてきた自分の感覚で、人間関係のひとつの心理的力学として共依存を取り上げてみたまでだ。

ひとつだけ言えるのは、三井物産や通産省の男でなければ、女にもてないわけじゃないということだ。

ひょっとすると聖子やゆかり、菜々子たちは、男たちにささやかな夢を与えてくれる堕天使なのかもしれない。

虚言地獄の少女

双子みたいによく似た姉妹――。恐怖は姉の死から始まった……

岩崎眞美子（フリーライター）

あのときのことは今でもよく覚えている。

当時大学生だった私のもとに、サークルの部長、Sから電話がかかってきた。とりとめもない話をしていたと思う。そのうち話題は、先頃亡くなったあるスタッフの女の子の話になった。葉子ちゃんとみんなに呼ばれていたその女の子は、高三の春にガンを発症、自分の死期を知りつつも、その後K大の医学部を受験し合格。恋人と入籍をし、治療のためアメリカの病院へ向かう直前で、急に亡くなったのだ。

私たちは、彼女が生前に書き残していたという遺書を見て、十八歳という若さで、自分の死を見つめ続けて力いっぱい生きた彼女の生き方に、少なからずショックを受けていた。電話での私は、彼女の死から受けたそんな感動に近い気持を、熱っぽく語っていた。

ところがSの態度が微妙におかしい。昨日までは私と同じように彼女の死にショックを受けていたはずの彼が、妙に無反応なのだ。変に思った私は、話題を中断し、どうかしたのかと尋ねた。彼はひと呼吸間をおいてゆっくりとこう言った。

「なあ……、葉子ちゃんって、本当にいたのかなあ？」

最初はその言葉の意味が分からなかった。「何それ」とつぶやく私に、Sは話を続けた。

「葉子ちゃん、という人間は、マリが作り出した架空の人物じゃないのか、ってことだよ」

この世にいない人間

マリとは、私たちのサークルによく遊びにきていた葉子ちゃんの妹だ。一つ違いとはいえ、風貌は葉子ちゃんとソックリ。〝双子みたいによく似た姉妹〟と言われていた。顔こそ似ているが、医学部受験、恋人との入籍、ガンとの闘いなど波乱万丈の運命を背負った葉子ちゃんに比べ、マリのほうはどちらかというと地味で、平凡な雰囲気の女の子だった。

そう言われてみれば、何よりこの二人、決して一緒にはサークルに顔を出さなかった。わりとマメに来ていたマリに比べ、葉子ちゃんは一カ月に一度来るか来ないか。初めて私が葉子ちゃんに会ったとき、どこを見てもマリそのものの風貌の葉子ちゃんに「えー、ウソ。本当はマリでしょ？」と冗談を言ったのも覚えている。

「今度は二人一緒においでよ」

私たちのリクエストに応えて、彼女たちが一緒に来るはずだったある日。思えばその日だ。急に葉子ちゃんが倒れて来られなくなり、彼女が〝ガン〟であることを知ったのは。考えれば考えるほど、『葉子ちゃん不在説』の疑惑は高まってくる。

『葉子ちゃん不在説』。からだの奥から広がってくる恐怖。仮説が本当ならば、マリは二人の人格を演じ続けていたことになる。そして、当たり前のように存在する、と思ってきた人間が〝この世に存在しなかった〟ことになる。

この『仮説』はあっという間にスタッフの間に広がった。最初に疑いを持ったのは、OBのY氏だった。葉子ちゃんは夫と家族と、アメリカの病院に飛び立つ途中、成田空港で亡くなった。だが、まがりなりにも空港で人が死んだとなれば、どんなに小さくとも新聞記事になるのではないか、というわけだ。そもそも急にアメリカに発つことになったのも、私たちが、入院しているという彼女を見舞おう、と計画しているのをマリが知ってからのことだった。

恋の結末

当然行われるべき葬式もない、という。なぜなら、実は葉子ちゃんは父親が妻（マリの母）ではない女に産ませた私生児であり、親戚のなかでは日陰者扱いだったからだという。

私たちは、こちらから葉子ちゃんに連絡を取ることはできなかった。私生児で日陰の身だから、遊び仲間から電話がかかってきてはマズイ、というわかったようなわからないような事情があったから

だ。その他にもK大に合格したと言っているのに、週刊誌に発表されている合格者リストに名前がなかったりと、思いあたるふしは次から次へと出てくる。

何より哀れなのは、マリとつき合っていたHだった。お調子者だが、人がよくて情に厚い性格のHは、「葉子ちゃんから最初にガンであることを打ち明けられた男」だった。つらい運命を背負った葉子ちゃんに、彼がどんどん惹かれていったのは無理もない。当時まだ恋人と入籍をしていなかった彼女に、Hは自分の思いを告白したという。彼女の心の支えになりたかったのだろう。だがそのとき、葉子ちゃんは彼にこう言ったのだ。

「気持はうれしいわ。だけど、実はマリがずっと前からあなたのことを好きなの。あの子は心の優しい、いい子だわ。私よりもマリの支えになってあげてほしいの」

そして案の定、Hはマリとつき合うことになった。だがその後も彼は、葉子ちゃんともよく電話で話をしていたらしく、マリとのつき合いにまつわる悩みなどを相談していたという。

葉子ちゃんが亡くなって、一番ショックを受けていたのも彼だった。涙ぐみながら〝知られざる〟葉子ちゃんのエピソードを私たちに語る彼は、哀しげではあったが、同時にどこか誇らしげでもあった。

「誰か言ってやれよ」。すでに『疑惑』を確信的なものとしていた私たちは、その一番イヤな役目をお互いに押しつけあった。どちらにしろHは、その春に卒業予定だったため、いつのまにかサークルから姿を消していたのだが。

マリの反応

葉子ちゃんの死後もしばらく、マリは〝葉子ちゃんの秘話〟を切々と語っていたが、それに反応する私たちの変化に、彼女も気づきだしたようだった。私自身、彼女がその話をし始めると、いたたまれなくなり、なんとか話題を変えたものだ。みんなはっきりとは言わないものの、スタッフの多くはかなりあからさまに冷たく反応していたようだ。

そんなある日、私の家にマリから電話がかかってきた。泣きながら彼女が言うのだ。

「ひどいの。Sさんが葉子ちゃんの話はウソだって、みんなに言ってるらしいの。そんなこと言うなんて、私、Sさんに裏切られた！」

追いつめられた彼女は、最後の望みの綱として私に電話してきたのだ。困惑した私は、はっきり言えるはずもなく、こんな答え方をした。

「でもSさんが本当に、葉子ちゃんの話がウソだと信じこんでるとしたら、彼は彼で、マリに裏切られた、と思ってるかもしれないよ」

そしてそれっきり、マリは電話をよこさず、サークルにも顔を出さなくなった。

ウソの血

思えば、マリは葉子ちゃんの話がなければ、とりたててかわいいわけでも、個性的なわけでもない、存在感の薄いタイプの女の子だった。サークルには数多くの女子高生が遊びにきていた。それだけに、よほど積極的か、存在感があるキャラクターでないとスタッフに覚えてもらえないのだ。

彼女はなんとかして、自分の方に目を向けてほしかったのだろう。そして、日常の自分とはまったく違うドラマチックな人生を生きる、華やかなもうひとりの自分をつくりあげたのだ。最初は気軽なウソだったかもしれない。だが彼女が自分でもうひとりの自分を語るたびに、からだにしだいに〝ウソ〟の血が流れ、肉がつき、ひとり歩きをしだした。そのもうひとりの自分は、いつしか本家本元の彼女の手に負えない行動を起こすようになる……。それを止めるには、「葉子ちゃん」を殺すしかなかったのだ。

その後もたまに、当時のスタッフで同窓会のような集りを開く。マリもときおり顔を見せるが、誰も葉子ちゃんの話は口にしない。葉子ちゃんという人などこの世に存在しなかったかのように。

来年の三月三十一日は葉子ちゃんの十年目の命日だ。

ドキュメント・ザ・尾行

ギャンブル依存ファミリーを追跡しろ!!

そこは小田原競輪場。「近藤、くたばれ！　馬鹿！　オラー！」渦巻く罵声のなか、ぶっ壊れたオヤジを標的に、それは開始された

塔島ひろみ
（ミニコミ誌『車掌』主宰）

私は、お裁縫も珠算もお習字も社交ダンスもみんな苦手、下手だけど、尾行は得意。といっても探偵や刑事ではなく、変態でも（たぶん）ない、主婦である。探偵や変態でなくては尾行しちゃいけない、なんて決まりはないので、理由も目的もない尾行を、かれこれ八年続けている（尾行の記録は『ドキュメント　ザ・尾行』というカッコいいタイトルがついて、私の主宰するミニコミ誌『車掌』に連載されています）。

さて、そんな私にこのたび、「競輪場の壊れたアッパー系オヤジを尾行せよ」と、編集部から命令が下ったのだった。

八月十五日 小田原駅西口の素晴らしい眺め

八月十五日、正午過ぎの小田原。かまぼこみたいな家族連れが、かまぼこを食べるためにひしめいている。我われは、それを横目にかまぼこと反対口の西口へ行った。するとものすごい光景だ。一目で「こいつは危ない」とわかる汚いオヤジが数百人、ずらーっと恐竜の尻尾のような太く長い列を作り、並んでいる。小田原競輪場への、無料サービスバスを待つ列だった。ひやーと思い、オヤジの顔を一つずつ覗いてみる。どの顔も汚く危ない、という点で一様だ。そしてどの顔もものすごく個性的、という点で一様だ。

編集部からの依頼を受けて本日ここに来たのは、私と『車掌』スタッフのI氏とF嬢の三名。「標的にふさわしい、壊れたアッパー系オヤジを見つけてきてよ」とI氏に頼むと、数分後「どの人もそれなので、選びようがない」と戻ってきた。昔、陸中海岸沿いの民宿で、ずらーっと海の幸が並ん

だお膳を見て、「うわー、嬉しいけど、とても食べきれないよー」と、目がハートになりながら困ったことがあったけれど、これはその日以来の、心わき立つ光景だった。

特にやばそうなオヤジ

すえた臭いのする超満員のバスを降り、初めて競輪場に足を踏み入れた。スタンドに上る。コース中央部に広がる芝生の緑と、それを取り囲むオヤジたちの薄汚さは、気持ちいいくらいに対照的だ。やばそうなオヤジしかいないなか、そのなかでも特にやばそうなオヤジを見つけ、尾行を始めた。この暑いのに長袖の黄色いポロシャツを着て、ポロシャツの背中に瘤みたいにタオルを詰め込んで、目つきがとろ～とした死体みたいな顔のデブ。よろよろと亡霊のように移動しては見上げるモニターに、6R締め切り八分前のオッズが出ている。

死体男はそのままよろよろと階段を怪談のように下り、売店へ。そして百五十円の鯵（あじ）フライを一匹買い、立ったまま、手摑みで約三十秒間で食べた。鯵フライの方も、こんなオヤジに食べられるのはゾ～、って感じだろう。それから梅ジュースとかコーヒーとかがただで飲めるサービススタンドへよろよろと進み、冷水を飲み、備えつけの鉛筆削りで赤鉛筆を、それはそれは気持ち悪い様子（見ているこちらが）で削るのだった。

というところまで観察して吐きそうになったとき、(このオヤジは壊れているけどアッパー系じゃない）と都合よく気がついた。で、尾行停止。

新聞の数が多いオヤジ

まだ出走前なのに、一人で柵に張りついている、やる気満々のオヤジを見つけた。左手に新聞をたくさん、五種類くらい持っている。全部同時に見られるよう段重ねにしているから、新聞はソフトクリームのようにオヤジの手から高く高く、空に向かってそびえている。目を見ると、焦点が定まっていないのに血走っていて真剣、危険な目だ。こいつはアッパーなので、この人の尾行開始。

レースが始まると、オヤジたちがいっせいに脱獄囚のように柵によじ登り、声を上げる。意味不明の唸り声、叫び声、野次、罵声。摂氏三五度を超す小田原競輪場スタンドは、かまぼこを百個食べても味わえない、素晴らしい熱気だ。

新聞オヤジも柵に張りついて声を出す。でもなんだかこのオヤジったら、せっかく選手が一生懸命走っているのに、皆さん盛り上がっているのに、レースをあまり見ないで、適当にウオーとか声を出しながら、新聞ばかり見つめている。レースが終わり皆さん引き上げた後も、柵に張りついたまま、口を半開きにして新聞を見つめている。

オヤジ、喜ぶ

それからオヤジは車券を買った。1―2、1―5、2―6、2―4、それぞれ二百円ずつと、可愛らしい買い方だ。が、オヤジの目は真剣で、とても怖い。そしてトイレへ行き、オヤジは用を足しながらも、新聞をじっと見続けていたということだ。そして手を洗わずにトイレを出たということだ

illustration▶東陽片岡

（I氏の観察）。
トイレのどさくさで一時オヤジを見失い、二十分後、七レースの途中でやっと見つけた。「これ行け、こらー」と怒っている。そしてレースが終わると、今度は何か喜んでいる。「二十四倍のが当たったとか言ってましたよ」と、ずっと尾行を続けていたI氏が教えてくれた。「この間に、オヤジの持ってる新聞は買ったものではなく、ゴミ箱から拾ったものであることがわかりました」とも教えてくれた。「7R　1―5、払戻金額2490円」と、電光掲示板に大きく表示される。

オヤジ、カレーを食い、アイスを買う

新聞オヤジには連れがいた。連れというより、ここでよく会う仲間かもしれない。麦藁帽子を被り、女物のスカーフを首に巻いた入れ墨の老人。それから、まだたぶん二十代のへらへらした、入れ墨の子分みたいな男の子。「トシ、何か食うか」。払戻しを終えて四千円儲かった新聞オヤジが、その若いのに聞いている。「ビール買ってくるか、アイスか」。新聞オヤジが二人に言うその声は、別に怖くもなく、なんだか、わりと普通だ。このオヤジは、少なくとも人に物を尋ねたり、会話をするだけの知性は持っている。暑いときはビールやアイスという常識も持っている。

オヤジが場内の食堂でトシと一緒にカレーライスをかき込む間、我われは百円の焼きおにぎりを飲み込むように、立ったまま食べた。「なんておいしいおにぎりでしょう！」と私は思う。でもオヤジは、「なんておいしいカレーでしょう！」とは、ちっと

も思っていない様子で、ゴミ箱から拾い足したのでさらに増えた新聞に没頭しながら、あっという間に食べ終わった。そしてかき氷を買って帰った。何か食い、アイスを買ってくる。新聞オヤジは約束を守る、という良識も持っている。

ゴミ箱をあさる

八レースは買わず、九レースへ。オヤジは七種類くらいの新聞を、穴のあくほど見つめている。ない頭を、雑巾を絞るように絞り、オヤジは真剣に考えている。そして口は半開きだけど、スックと音が聞こえるような、強い決意が伝わってくる立ち方で立ち上がり、車券を買いに行った。そして賭け方は、またさっきと同じ二百円が四つと、可愛いのだった。小銭入れを大事そうにビニール袋に入れている。

買い終えると、スタンドの外へ出た。そしてゴミ箱をあさるのだった。ゴミ箱に手を突っ込んで、捨ててある新聞を全部調べている。ゴミ箱を十個以上はしごする。こんなに堂々と、郵便屋さんみたいにゴミ箱をはしごしてあさっているのは、数多いオヤジのなかでもこの人だけだ。つまりこのオヤジは、金がない。だからどうしても当たりたい。だからすべての新聞を読んで情報を集めたい。だが新聞を買う金がない。だからゴミ箱をはしごする。

白い硬い新聞を拾って少し満足し、トイレに入った新聞オヤジの一連の行動は、だから充分に筋の通ったものだった。

結論。オヤジは壊れていない

九レースが始まった。ピタゴラスの積木のように色鮮やかな、そして軽やかな選手たち。それに向かい、入れ墨オヤジが「近藤、くたばれ！　馬鹿！」とどなり倒している。「馬鹿、畜生め、オラー！」と新聞オヤジも叫ぶけど、身が入っていない。身は新聞の方に入っている。

6―2ではずれ。ドッとフェンスに押し寄せたオヤジたちが、ドッと移動を始めるなか、オヤジは移動にも身が入らない様子で、新聞研究に没頭し続ける。口が半開き。目の焦点が定まらず、しかし真剣。最初このオヤジを見つけて、見るからに危なさそう、と思ったときと、同じ光景だ。

でも今は、それは気が狂っているからではなく、次のレースで何を買うかを、もう今からない頭を痛めて（頭はきっと悪い）考えているからだと、納得できた。そしてつまり、こんな納得できるオヤジはちっとも壊れてないから、こんな人を尾行していちゃダメなのだ、と気がついた。せっかくこんなに観察したのにもったいないけど、このオヤジの尾行中断。

そして気がつくと、みんな普通だ

あと二レースしか残っていないので、慌てて標的を捜す。壊れたオヤジを求めて、三人で首をぐるぐる回す。すると驚いたことに、壊れた人が見つからない。ただの競輪好きのオヤジが、そこにいる、ここにいる、かしこにいる。「何か目が慣れちゃうと、みんな普通に見えますね」と、I氏が的確な感想を述べる。隣ではオヤジを見飽きたF嬢が、大きな欠伸（あくび）をする。

「しょうがない、アッパー系は諦めて、確

実に壊れた最初の死体男に戻ろう！」と、まだそのへんをうろうろ幽霊のようにうろついている、最初に尾行した人に目を戻した。死体男は階段を下りてモニターをちらっと見ると、腰を下ろして煙草を吸い始めた。どうせ気違いだから、「尾行」なんていうハイレベルな行為の存在を知るわけないだから、尾行に気づかれる心配がない。そばに寄ってって間近で、まるで死体写真を撮る捜査官みたいに見下ろして、写真を撮る。

と、撮られたことに気がついて、私の方を見るのだった。その目は、「怪しい奴がいる」と疑う目で、そして「見ず知らずの女が自分の写真を撮るというのは異常な行為だ」と感じる、理性的な目だ。胸ポケットに眼鏡と煙草とライターが入っている。しゃがんで煙草を吸い続ける死体男はすでに死体男でなく、ただの不細工なデブだった。だからすでに尾行する必要はないのだった。

ファンキーモンキーなオヤジ

理性あるオヤジたちに囲まれて困り果て

た我われの前に、突如救世主が現れた。ファンキーモンキーベイビーなオヤジである。見るからにいかれているので、「この人にしよう!」と、この人の目の前でこの人を指差して叫んだけど、まるで無頓着なので今度こそ本当にいかれている。
　踊っているようなファンキーな髪型、緑色のファンキーなコーラのTシャツ、薄紫のファンキーなラッパズボンに、真っ赤なファンキーな靴下とファンキーな黒い革靴。六十歳くらいのチビ。
　ヨチヨチと、強そうなオヤジ連を掻き分けて、一生懸命な様子で窓口へ行き車券を買う、ファンキーオヤジ。右耳にチビた赤鉛筆を挟んでいるのもファンキーで、ズボンに小田原提灯のうちわをピンと差し込んでいるのもファンキーだ。振り返るとTシャツの胸には、動物キャラクターがサッカーボールをポイン!と蹴っている、実に可愛らしいプリントが見える。

合計一万三千円は買った

こんなオヤジにも仲間のようなものがあり、席へ戻ると隣のオヤジと話している。隣のオヤジに何か教わって、もう一度買いに行く。金銭感覚もないからだろう、一度に四千円も買っている。そして戻り、また隣のオヤジに教わって、また買いに行く。そんな繰り返しが七回もあって、合計一万三千円も買った。有り金を使い果たし、最後はお財布を席に置いたまま買いに行った。そして冷水を二杯飲むと、最終レースが始まった。
　走り始めた選手たちに向かい、まずオヤジ。「ガンバレヨ!」と、ファンキーな野次を飛ばす。二周目、「ガンバレョォー」と間延び。三周目、「ソレーイ、ガンバレーイ!」と民謡調。四周目は五十音表記で表せない音で「———!」。だんだん怖い顔になってきて、五周目は歯を剥いて「——!」「———!」。最後は立ち上がり、遠くの選手を指差して「———!!」「———!!」。
　初めて見る競輪は、速くて小さいので、何が何だかよくわからない。スタンドのおっさんたち全員にわかってることがわからない。そしてわからないけどスタンド中すごく盛り上がって、最後の市長賞が終わり、確定した。オヤジは二十種類ぐらい買っているので一万三千二百円の当たり。つまり二百円の儲け。

不思議な三人

　払戻しを終えるファンキーモンキーベイビーを、隣のオヤジとそのまた隣の若者が待っていた。一緒に帰るようだ。つまりだいぶ親しい仲間のようだ。「へーんなの!だって、あの若い人、普通のただの若者じゃん!」と我われは言い合い、首をかしげる。
　隣のオヤジは四十代ぐらいのチェックのシャツを着た、円形ハゲオヤジ。競輪場にいてもおかしくはないが、豊島園の温水プールにいてもおかしくはない、平凡なオヤジだ。そしてもう一人の若いのが、本当にただの若者だ。競輪場よりは彼女とディズニーランドにいる方が似合っている二十代。それが競輪場にいるのはまだいいとしても、なんでよりによってこんなファンキーに壊れたオヤジとつるんでいるのか。
　優勝選手インタビューを流すモニター画

面を、三人が立って眺めている。平凡な二人は背が高く、異常なオヤジだけ低い。平凡な二人は平凡な地味な服装で、異常なオヤジだけファンキーだ。
帰りはファンサービスのバスはなく、皆、競輪帰りの人専用みたいな道をとぼとぼと歩き、小田原城を見ることもなく、帰るのだった。

息子は円形にハゲ、ラッキーだった

もう使う必要のない赤鉛筆を、まだ右耳の上に挟むオヤジ。まだ小田原提灯のうちわを後ろズボンに差し込むオヤジ。そしてチビで足が短いから、すぐ二人に遅れ、遅れてはチョコチョコと走る様子が、親鳥の後をくっついて歩くアヒルのようで、とても微笑ましく可愛らしい。そのまた後をくっついて歩く我われも、孫鳥のように可愛らしく微笑ましいことだろう。
そして微笑みながら、円形ハゲと並んだファンキーオヤジの珍しい後頭部を見ていると、発見があった。ファンキーオヤジの円周髪の毛は、縮れている。円形オヤジの円周

囲の髪の毛も、縮れている。円形オヤジの円内部にもし毛があったら、ファンキーオヤジと同じ髪型になるのではないか。つまり円形オヤジは禿げてることで珍しい髪型を免れているのではないか。つまり円形オヤジとファンキーオヤジは、同じ髪質を持っている。つまり二人は親子ではないか。そして、そうなるともう一人の若者も家族、ファンキーオヤジの孫ではないか。

　こんな異常なオヤジから普通の息子が生まれるか？など、納得できない点は多々あるものの、家族ならば仲良しでなくても一緒に帰る必然がある。そうだ、三人は家族なのだ！

もう一つの大きな発見

　小田原駅に帰ってきた。東のかまぼこ口に戻ってきた連中は、行きとはずいぶん違う顔つきになって、かまぼこと同化しようと努めていた。競輪場では思い切ったことができる人も、世俗に戻ると小市民、競輪場では気違いの人も、世俗に戻るとただのうすのろ、という世の中なのだ。

　そんななかでファンキーオヤジだけは、一人変わらなかった。同じファンキーモンキーなベイビーな服装で、うちわを差し立て、臆面もなく歩いている。あっぱれだと思う。そしてまた、オヤジから瓢簞（ひょうたん）から駒みたくして生まれたできのいい子や孫が、こんな格好のオヤジと歩くことが恥ずかしくないのはとても変だ、とも思う。にもかかわらず、三人は何恥ずることなく歩いていて、あっぱれな家族だ。

　五時二分、三人は駅前を通り過ぎ、「庄屋」に入った。この服装で庄屋に入るのは、恥ずかしいことである。が、何恥ずることなく堂々と入っていく三人はあっぱれだ。

　座敷に座った三人が見える席を取り、私たちもコップ一杯だけビールを飲んだ。そして平凡な息子や孫と陽気に生ビールを飲み、おかずをつまむオヤジを見て、「この人は服装だけを除けば、まったくまともだ」という発見を、今さらのようにしたのだった。

　つまりそれは、お盆休みで帰ってきた息子（若者）を迎えて、親と祖父が「ガンバレヨ！」とジョッキを傾ける光景だった。あるいは孝行息子と孫が久々におじいさんを街中に連れ出し、慰労している光景だった。

そして三人は二宮へ帰る

　三人とも次々とビールをお代わりし、とてもよく飲んだ。三人とも、顔がキムチみたいに真っ赤っかだ。にもかかわらず、「——！」と指差して怒った競輪場でのオヤジの狂気は、どこにもない。あのひたむきな一寸法師のような迫力は、どこにもない。ほろ酔い気分で静かに語り合う、ほのぼの家族。

　六時三十分頃、店を出た。三人とも赤くて陽気な感じだけど、歌を歌うとか、吐くとか、叫ぶとか、そんなありがちな異常行動はしないで、しっかりとした足取りで駅へ戻る。それを尾行する我われの目に、彼らはもはや平和で平凡な一家族でしかあり得なかった。相変わらずのファンキーな服装は、それにもはや「微笑ましい」という形容詞しかつけ足さない。

　だけど我われはついていった。ここまで来たからには、もうどこまでもついて行っ

てしまいましょう。東海道線に乗り、一緒に「二宮」という駅へ着く。もはや世間的に見て異常なのは、「微笑ましい家族を尾行する怪しい三人組」の我われの方で、微笑ましい三人組にとっても、競輪場にいた我われが庄屋でも一緒になり、着いた駅まで一緒というのは、実に怪しむべき事態であり、実際怪しみ始める気配だった。
　三人がバスを待つ間、植え込みの陰で我われは変装し、別人になった。

ところが三人は帰らないのだった

「井ノ口駐在所前」という、名前からして田舎臭いすごい田舎のバス停で、三人が降りた。駐在所がポツンとあり、遠くから盆踊りの音楽が聞こえてくる。道を歩いている人もいなければ、車もほとんど走っていない。バス通りから逸れると、外灯もない田舎道が続いている。何も見えない。這うようにして、息を殺してついていく。道沿いの家から漏れる光が、ときどき三人の仲睦まじい後ろ姿を映し出す。
　そしてだいぶ歩いて、ようやく彼らが家に入ったので駆け寄ってみると、それは家でなく、「志乃」という小料理屋だ。三人は帰らないのだった。庄屋で一時間半も飲んだけど、まだ飽き足らず続きを飲むのだ。調理場の窓から覗くと、派手なコーラのTシャツとファンキーな髪が、ちょこんと上機嫌に、カウンターに座っている。
　七時四十分。彼らにとってはまだ宵の口かもしれないけれど、今夜中に東京へ帰るつもりの我われにとっては、結構な時間だ。

だいたい、ここがどれほど東京から離れた場所なのかさえ、わからない。
でも彼らが帰らないので我われも帰らない。カラオケの歌声が聞こえてくる。覗くと歌っているのはオヤジでも息子でも孫でもない。が、オヤジとも息子とも孫とも親しい、村のオヤジであるようだ。店はそんな村のオヤジたちで賑わっていた。だから村の者でない我われは、ちょっと入るわけにはいかなかった。

ファンキーオヤジ、ついに踊る

入れば怪しまれる。でも入らないで何もない田舎の道にポツンと突っ立っているのもとても変で、志乃の二階窓から我われを見つけた客が、身を乗り出して我われの動向を探っている。窓にペタンと顔をくっつけて変なつぶれた顔になり、我われをすごくすごく怪しんでいる。見たことのない顔、理解できない行動。我われヨソ者は村人にとってあまりに異端で、それに引き換え、一見気違いなオヤジは即座に受け入れられ、すでに他の客と同化している。

怪しまれながらもときどき小窓から様子を覗くと、オヤジは歌っている人に肩を組まれ、左右に揺れている。田舎の人は歌がうまく、歌手みたいに、笑っちゃうほどうまい。ワンフレーズごとに「イエーー！」「ヒューー！」という掛け声と、「ワッハッハ！」という、もう楽しくってしょうがないってな笑い声。店全体が、暗闇の中で「ワッハッハ！」と笑い揺れ、踊っている。何がそんなに楽しいんでしょう。店の中には、競輪場とは違うけど同じ、狂気があった。

ファンキーオヤジ、我われを追い払う

九時二十分頃、オヤジが出てきた。一人で先に帰宅するようだ。まだうちわを尻に挟んだままだろう。だからたぶん鉛筆も耳に挟んで差している。競輪場で燃え、庄屋でとことん飲み、志乃で踊った六十代は、もうくたんくたんでべろんべろんなはずだけど、とてもしっかりした足取りだ。そして暗くてなんにも見えない田舎の道を、右に左にくねくね曲がり、帰っていく。
戸を開ける音がした。それから犬の鳴き声と、「よしよし」とか言うオヤジの声。着いたようだ。静かになってから様子を見に行く。オヤジの家は、ぼろい平屋である。中から薄青い、ちょっと気持ち悪い光がチカチカと、漏れている。暗くてよくわからないけど、オヤジは中に入らず犬を散歩に連れていったようで、先の方に人影と犬影がぼんやりと見える。その影の方に行ってみる。
そのとき、恐ろしいことが起こった。「ワンワンワンワンワン！！！」という、ライオンのような獰猛な犬の声が、すごい速さでこちらへ近づいてくるのである。「オヤジが犬を放ったのだ、殺される！」と我われは即座に気づき、止まりそうな心臓を抱えてスタコラ逃げる。命からがら道に出てホッとしたのも束の間、今の犬の声につられてか、一帯の犬がいっせいに吠え騒ぎ、大変なことになる。その騒ぎのなか、オヤジの方向からサーチライトの灯りが何かを、たぶん我われを、ヨソ者を、捜している。
村中の人だけでなく、犬にも望まれていないようなので、これで尾行を終え、我われは足早にオヤジをあとにした。

Part 3 パラノイア観光

マルチ商法の人びと

金のなる木と誇大妄想

マルチってのは、トップに置くのはキチガイ、幹部はスマートで計算上手な奴、下は馬鹿で固める。これが鉄則……

夏原武（フリーライター）

「不法行為・犯罪によってその権利その他の侵害・脅威をうけた者。民事上は損害賠償請求権を有し、刑事訴訟法上は告訴権を有する」（広辞苑・第四版）。

一読してお分かりのように、これは広辞苑による「被害者」の定義である。巷には、この定義に当てはまる人たちがたくさんいる。たとえば、詐欺や脅迫、強盗、殺人などで、明らかな被害を被った人たちである。彼らが被害者であることに異論をさしはさむ人は、まずいないだろう。

では、同じように被害者と呼ばれる、こんな人たちについてはどうだろう。一家離散、自殺といった悲劇的結末を迎える点では同情すべきだが、その発端に「欲」を持った人間、たとえばマルチ商法の被害者たちだ。

いずれも、文字面はまったく同じ「被害者」だが、はたしてその内実まで同じなのだろうか。いや、そもそもマルチ商法に引っかかるというのはどういうことなのか、その心理状態・精神状態とはいかなるものなのか。それを勘案もせず、マス報道に見られがちな「騙される人」「騙す人」といった単純な二分法で「被害／加害」の区分けをしたところで、マルチにとり憑かれてしまう人たちは後を絶たない。

このレポートでは、マルチにどっぷりと浸かった人たち——「マルチのコンサルタント屋」「騙されても騙されても、三十年近くにわたってマルチにはまり続けている人間」「ハーバード大学出身のマルチのボス」「小売店からのし上がった人物」から話を聞くことで、マルチの世界の狂態ぶりを解きほぐしてみようと思う。

ちなみに、彼らの話を追っていく前に、

illustration▶安芸良

簡単ではあるがマルチ商法について触れておきたい。

マルチはよくネズミ講と同類視される。マルチとネズミ講の最大の違いをあげるとすれば、内実はどうあれ、マルチが表面上はあくまでも「商取引」のかたちをとっていることだ。そこが、法律によって禁止されているネズミ講との違いである。

マルチは、総販売元↓問屋↓小売店といった商品の流通経路を敷くが、このシステムに参加する際、最初に総販売元に支払う金が多ければ多いほど優位なポジションに立てる。それ以降は勧誘した人間の数によって地位が上昇していき、上の地位に行けば行くほど儲かるのはネズミ講同様である。末端の小売店の数は無尽蔵に広がるわけではない。世の中の人間の数が有限であるように、いずれ限界は訪れる。だから、組織が完成する前に参加しないかぎり、絶対に儲からないシステムになっていることを肝に銘じておくべきだ。

ボスは誇大妄想狂!?

狂言回しではないが、マルチというシステム自体を巧みに利用し、自身はマルチに直接手を染めず、コンサルティングやブローキングで巨額の利益を得ているT氏にまず口火を切ってもらう。

T氏は現在四十一歳。精力的な容貌、上品な身のこなしで、どこから見ても「まっとうな社会人」であり、企業の中堅幹部といった感じを受ける人物だ。

「最初にマルチというものを知ったのは、

私がまだN証券に勤務してた頃です。ええ、いちおう日本でいちばん難しいと言われている大学を出まして、将来的なことを考えて入社したんですよ。もう二十年くらい前の話になりますか。当然ですが営業をやらされましてね、飛び込みもずいぶんやりました。そりゃ昔のように『株屋』なんて蔑まされる時代じゃありませんでしたけど、株に手を出すのは怖いというイメージが、まだ強かったですね。なかなかうまくいかなかったんです。

ところがある日、正確に言いますと、昭和五十八年の夏なんですけどね、いつものように営業してたんですが、東京の東高円寺で豪壮な邸宅を見つけましてね、ダメもとで訪問してみたんです。そしたら、どういうわけか、相手に気に入られて、投資してもらえるようになった。相手ですか？ 四十歳くらいでしたか。まあ、いかにもの成金風でしたよ。最初は地主か何かかと思ってたんですが、家は新しく買ったものだと言うし、会社に行ってるふうでもなし。で、いろいろとつき合いが深まるうちに、ようやく相手が教えてくれたんですよ。これが、マルチの総販売元の幹部だというんです。当時はマルチといっても、今ほどの規模じゃなかったですがね。

で、結局会社をやめてマルチを手伝うようになっちゃったんですけどね、そのときに、ようやく相手がボスに会わせてくれたんですよ。これが外人なんですけど、日本語もまあ話せるし、なかなか如才ないといった印象だった。ところが、なんのことはない、私が幹部だと思ってたのがじつはボスで、この外人は押し出し（煽り役）だけで使ってたわけです。しかし、この男――仮にAさんとでも言っときますか――彼はかなり特異な人間でしたね。

彼が考え出したマルチというのは、海外の一流商品を販売する代理店を募集して、定価の一割引で販売する権利を与えるわけですよ。で、代理店の人間が別の人間を代理店に勧誘して、十人勧誘すると卸しになるわけです。卸しになったら今度は、その上を目指していく。まあ、典型的なマルチですよね。

ところが、彼はこれを考えてもの凄く金が儲かったものですから、自分を天才だと思ってるわけですよ。これだけのことを考えついたのは、自分が天才であるからだ。自分が天才であるのは、この考えで成功していることで証明されている。こういうわけです（笑）。完全な循環論法になってるんですが、本人は気づいていない。世の中でマルチのボスになるような人間はこの手が多いですよ、誇大妄想狂ね（笑）。騙される奴らもこの傾向があって、あとで騒ぐのが被害妄想狂ってとこですか（笑）。

それで、まあその大天才であるA氏は、金が儲かっていることを大変な誇りに思ってるんですが、それ以上に誇りにしてることがあったんですよ。なんだと思います？ それは、自分が善行をなしているということですよ。いや、笑っちゃいけませんよ、本人は真面目なんですから。

ある日ね、私も幹部のポジションになっていた頃のことなんですけど、こう言うんですよ。『Tさん、私はね、確かに金儲けもしてるけど、これは当然なんですよ』と。私が『当然と言いますと……』と聞き返すと、『いいことをしてるから』ですもん（笑）。あれ？ こいつキ印の気でもあるの

かな、と思いましたよ、正直言って。

で、こうも言いましたね。『私はね、現在の商慣習や資本主義の欠陥を克服した最初の人間なんですよ。見なさい、私は無店舗商法を編み出し、さらに人を勧誘して幸せを広げ、いたずらに物資を浪費することなくみんなを豊かにしているでしょう』。あ、やっぱりキ印だ、そう思いました（笑）。

すべての人間が豊かになるわけでもなければ、幸せを広げてるわけでもない。だいたい代理店になる人間はみんな借金してるんですからね。でも、本人は大真面目なんです。社会の矛盾を正し、多くの人を救ってるというんですから。ようするに教祖なんです。同じですよ、まったく。私は宗教関係も手がけたことがありますけどね、トップはこういったキチガイがいちばんです。幹部に利口なのが揃ってればいいんですから（笑）」

T氏には後ほどまた登場していただくことになるが、彼の言葉で覚えておいてほしいのは、世間では悪質な商法、あるいはインチキと思われているようなマルチでも、上座に置かれる人物は確信犯ではなく、むしろ盲目的に自分を信じている人間だということだ。我われの目から見れば、つまり自分のことを、神であるとか天皇であるとか自称しているビョーキの人たちと、ひょっとしたら同じ病質を有しているかもしれないということである。

踏ん張ってしまうビョーキ

次に登場してもらうのは、世間でいう被害者。騙され騙され、資産のほとんどを失っている。彼の名を仮にK氏としておこう。年齢は五十五歳、現在は横浜市にある1DKのマンションに一人で暮らしている。

「いやあ、どうも。Tさんのご紹介だっていうんで。ええ、私の知ってることならなんでも話しますよ。何から話したらいいですかねえ。え？　最初のマルチですか。いや、最初はマルチじゃないんですよ、私は。ネズミ講ですわ、ははは。国利民福の会ってご存じですか。ええ、その昔事件になったやつです。あれですよ。今でも券を持ってますよ。いや、私は訴えには加わらなかったですね。いい目を見たから？　いやいや、損しましたよ。このときに初めて土地売ったんですから」

K氏はもともと、東京の世田谷区にかなりの土地を持つ地主だった。一人っ子で親が早く死んだため、二十歳ぐらいから仕事もせずに暮らしていたという。金の使い道を知らない典型的な人物だ。こういう人間は、カモネギどころか鍋に入って待っている具の類なのだろう。

「私ね、自慢するわけじゃないんですけど、家も五軒ほどあったし、別荘も三軒ありましたよ。車だってね、ベンツからポルシェ、フェラーリなんかまであったんですから。バブルの頃じゃないですからね、そりゃ目立ちましたよ。今ですか？　いやあ、それ言われると困るんだけど、今は何もないですよ。そのうちまた昔と同じになりますけどね。

ネズミ講（国利民福の会）もね、あと一年もってくれれば、私のところにもドンと金が入ってくるところだったんですよ。惜しかったですわ。で、次があれですよ、アムウェイ系ね。これはマルチじゃないと向こうさんが言ってるんですけど、私としては

どっちでもいいんです。最初に一千万円払ってね、いきなり卸してですから。いや、こういうことはね、最初に投資する金を惜しんじゃいかんのですよ。ドンといかなきゃ、ドンと儲からない。本当ですよ。でも、こもねえ、あと半年ってとこでだめになってねえ。その後もいくつかやったんですけど、いちばん損したのが、例の豊田商事です。

いや私はね、これ（豊田商事）はいいと思ったんですよ。日本もいよいよ金の先物の時代だと。そういうことには目端が利くんですよ、私。いやあ、情報収集力でしょうね。ところが、これもだめになりましたわ。う〜ん、要するにね、我慢のできない馬鹿な貧乏人がいるからいかんのですよ。投資してすぐ回収できると思い込んだり、上がまとめてドカンと動かしてるのに、それを自分たちの金が盗まれたみたいに騒ぐでしょ。これがいかんのです。

いや私のようにね、ちゃんと待てる人間だっているんですよ。そりゃ、みんな今は苦労してますけどね、ある程度の期間さえ耐えぬけば、必ず春は来るんですから」

筆者は話を聞き続けるのに嫌気がさした。春が来ているのは、この人の頭のほうではないのか。マルチにしろネズミ講にしろ豊田商事にしろ、すべて正しいシステムだと思っている。ちょうど、組織の中心の人間が自分の論理に酔っているのと同じで、この人は自分の選択肢や情報収集力（笑）に絶大な自信を持っている。

「家族ですか。これもようするに、馬鹿な貧乏人なんですよ。私がいくら説明しても理解できなくてね。家だの別荘だのは、あとでもっと大きいのが買えるのに、一時的に我慢することすらできないんだから。ビンボーニンなんですよ、しょせん。離婚してやりました」

親から譲り受けた資産をすべてパーにし、無一文同然になり、家族にも捨てられたわけだが、彼自身はそう思っていない。自分は正しく、家族や周囲が間違っていると考えている。

前述したように、彼は1DKとはいえマンションに住んでいる。無一文同然なのだが、そのカラクリも彼の言葉で言うとこうだ。

「じつはね、Tさんの紹介で今、ある商売を手伝ってるんです。ここはその会社が提供してくれてるんですよ。私の仕事ですか？　うん、簡単に言えば、我慢できない貧乏人どもを説得する役目ですよ。えっ？　私がこんな状況じゃあ逆効果じゃないかって？　いやあ、そうでもないんですよ。だってそこの会社は、いまだに被害者がどうとか騒ぎになってませんもん。やっぱりね、あなたにも言っとくけど、人間は自信を持って話すことが大切なんです。私はべつに嘘ついてるわけでもないし、正しいことを理解させてあげるだけですからね」

泥沼に肩まで沈んでいる人間が、まだ腰までしか浸かっていない人間に対して、ここは肩まで浸かっても大丈夫なんだと教える。ポンチ絵のような話だ。話している間の彼の態度は、確かに堂々としているし、自信も持っているようだった。

大理論誕生の秘密

後日、再びT氏に会った。

「ハハハハ、どうでした？Kに会ったんで

しょ。ああいうのが、けっこういるんですよ。つまりね、システムが完成しているのだから、ある程度苦しい時期を乗り越えれば、必ず儲かると信じてる奴ね。Kは確かにちょっと極端かもしれないけど、マルチなんて、覚めてる人間は一握りで、上も下もカッカと燃えてるんですよ。なかには、自分はこのシステムを利用してデカくなるんだ、なんてのもいるけど、気がつくとみんな『ここが踏んばりどこだ』になっちゃうんだよね、なぜか（笑）」

そのとおりかもしれない。

「だってね、被害者でございと訴える連中ね、あれらだって、ようするに儲かると思ったから参加したわけでしょ。子どもじゃあるまいし、配当が予想どおりない、あるいは勧誘がうまくいかない、だから騙されたはないでしょ。うまくいけば儲けて、失敗したら騙されたと訴える。こういうの『やらずぼったくり』と言うんじゃないですかね。他には誰に会いますか？　極めつきの末端を見たんだから、今、私が手がけてる、極めつきのトップにでも会いますか？」

T氏の紹介で、彼がコンサルティングを

しているというマルチのボスに会うことができた。詳しく書くわけにはいかないが、浄水器や布団関連のマルチと書けば、ピンとくる人もいるだろう。

このボスはまだ若く、三十代前半。国立大学を卒業し、アメリカのハーバード大学に留学、そこでこの画期的商売を思いついたそうだ。

「ああ、Tさんの紹介の方ですね。まあ、どうぞ。彼は、私の論理を最初に理解してくれた人でね、私の次ではあるけれども、頭のいい人ですよ、うん。いやあ最初ね、これを思いついたときには、叫びそうになってしまいましたよ。うんうん、エウレカね、エウレカ(笑)。だってそうでしょ、たかが大学生が、世の中の経済の仕組みを変えてしまうようなシステムを考えついてしまったんですよ。マルクスやエンゲルスなんてもんじゃないですからね。

当時は学生でしたから、これは論理として完成され、発表されることがいちばんだと思ったんですよ。幸い私は、向こうでビジネスや経済学を学んでましたしね。ただ、ちょっと怖かったんですよ。これだけ素晴らしいものを発表すれば、当然ノーベル賞でしょ? 世間は騒ぐし、既存の企業家たちは私を憎みますよ。一般の人びとは私を神のように崇めるかもしれませんが、権力者たちに睨まれる、いや、場合によっては抹殺されるな、と正直怯えましたよ」

彼は世界を救うためにと決断し、論文を発表した。だが、マルチ商法をアレンジした程度にしかすぎないその論文は一笑に付され、教授からは真面目に勉強するよう叱責された。彼はもちろん、そうは受け取らなかった。

「圧力ですね。予測されうる最悪の事態ですよ。つまり、これが発表されてしまえば、私の正しさは世界が認めるところとなります。ですが、これを世に出さなければ、押さえがきく、そう判断したわけでしょう。まさか、教授までがあちら側の人間だったとはね」

UFO信者は、MIBという組織に怯えるそうだ。「メン・イン・ブラック」=「黒い服の男」と呼ばれるこの謎の集団は、UFO存在の証拠を消し去り、存在証明をしようとする人間の側につきまとうのだそうだ。彼の言うあちら側というのも、これと似たようなものなのだろう。

「私は、今は安全ですから言いますけどね、当時は、得体の知れない人間がうろついてましたね。ひどいことに、ゼミで仲良くしていた助手までもが、一度病院に行くといい、なんて言うんですよ。呆れましたね」

おそらく、周囲は彼の言動を察知してセラピストの世話になることを勧めたのだろうが、得てしてこういうことは逆効果を招く。彼は、自分の周囲が「あちら側」に取り込まれていることを察知し、急きょ論文をアメリカの新聞社や雑誌社に次々と送った。

しかし、なかには物好きな編集者がいるもので、「今世紀最後の経済論理」などと称して、その論文を掲載した雑誌があったのだ。もちろん……お笑い記事として紹介された。「馬鹿なジャップ」という侮蔑がこめられていたのだろう。記事のコピーを見せてもらったが、メガネに出っ歯の日本人が、マルクスやエンゲルスに金の数え方を教えている稚拙なイラストが添えられていた。

ところが彼はこれで自信をつけ、アメリ

カの銀行などに融資してもらおうとした。
確かにアメリカには、映画の脚本を見せるだけでも金が借りられる、といった土壌があるにはあるが、三流雑誌のお笑いコーナーに載った電波人間に金を出すほど酔狂ではない。
ただ、論文の掲載は、彼に大いなる自信を与えてしまう結果になった。
「あちら側も完璧じゃなかったということでしょう。それでもう、アメリカでは資金調達が難しいと思って、日本で出資者を募っていくことにして帰国しまして（放校に近かったらしい）、親に話したんですね。ところが、これがもうぜんぜんだめ、論理を理解できない。そんなとき、Tさんに会いましてね、私がこの図を見せると、一発で理解できたんですよ。あなたも頭が悪いわけじゃないんだろうから、理解できますよ。よく見てください」
そして、模造紙を何枚つなげたのか分からないが、畳み四枚分はあるのではないかと思われる図を持ち出してきた。そこには、「市場経済の崩壊」「流通経路の新機軸」「無店舗による画期的市場形成」などという言

葉とともに、フローチャートが描かれている。どう見てもマルチでしかなく、別に驚くような理屈ではないが、辟易したのは、彼がまるで信者に教えを説く教祖のように、私にえんえんと説明を始めたことだ。

次は宗教団体

「いいでしょう、あれ。教祖だよねえ、彼は。私がこの道に入ることになったきっかけのAさんに比べると、何より若いし、情熱がある。自分の考え出した論理を完璧に信じることができる人間は、そうそういるわけじゃないですからね。もしかしたら、とか、あるいは、なんていう疑義を持つ奴はだめ。一二〇%信じてる必要があるんだよね」

ボスからようやく逃げ出し、翌日再会したT氏はこう語った。

「だからね、マルチっていうのは、トップに置くのはキチガイ、幹部はスマートで計算上手な奴、下は馬鹿で固める。これが鉄則。周囲が辟易するくらい自分の論理を信じて、自分を天才だと思い、世界を変える力があると思い込んでる人間をトップに置く。昔のシステムなら、こいつにほとんどの金が流れてしまうわけですよ、Aのように。でも、今はそうはいかない。利益はすべて我われのところに来て、リスクだけが彼のところに行くわけ（笑）。

それから、下部、末端はね、Kみたいな馬鹿がいいの（笑）。あれはキチガイじゃなくてね、単なる馬鹿。無知無教養のくせにプライドが高くてインテリに憧れている、誰かから自分の見識の高さを褒められたがってる間抜けだよね。こういうのを下部にどの程度持てるかで決まるんですよ、組織は」

T氏はこうやってマルチ組織を作り、危なくなると、トップに責任を押しつけ、自分はさっさと姿を消すというやり方で渡り歩いているが、おそらく今手がけているマルチを最後に、この世界からは足を洗うという。なぜならば、やはりマルチの場合は破綻までのスピードが早すぎること、またそれを遅らせるには、組織を巨大化しなければならず、巨大化すればライバルと戦わなければならない。そんな無駄な労力は使いたくないというのだ。

次に手がけるのは、おそらく宗教団体になるだろうと語っていた。オウム真理教の事件があった後だからこそ、狙い目なのだそうだ。人は神をつねに求めている、そして、自分が誰かに選ばれることも望んでいる。こうした脆弱なメンタリティを持つ人間は、オウムの一件があったからといって、なくなるわけではない。

T氏はこう言っていた。

「なに、またキチガイ探すだけですから（笑）」

『天才』と『馬鹿』のパイプ役

最後に小売店からのし上がり、現在、あるマルチで問屋をやっているP氏の話を紹介しておきたい。

彼は元地方公務員。相場で失敗して背負った借金をマルチで返済したという変わり種だ。マルチをやって成功する人間の典型とも言えるだろう。

「小豆相場でやられましてね、退職金全部払っても足りなくて、借金が残りましたよ。

女房は子ども連れて実家に帰っちゃうしね、さんざんでしたね、あの頃は。そんなときに、わずかな開業資金で代理店になれるという広告を見まして。その集会に行ってみたら、大きなホールに大勢集まって、そりゃ凄かったですね。その後、もう一回親戚中に頭を下げて金を借りました。

百五十万円用意して代理店になりましたよ。最初に扱ったのが痩身クリーム。クリームを塗ってラップで巻くと痩せるというやつです。これを販売すると、それだけで数千円のリベートが入るんですが、それだけじゃ儲からない。新しく代理店になろうという人間を見つけなければ儲かりませんからね。

この商法は、確かに世間では悪徳商法のように言われてますよ。でも、そんなことはないんです。だってね、最終的にですよ、日本人全員が小売店になることはないですからね（ここのシステムでは小売店になる数が決まっている）。小売店の数が一杯になったとして、次々と魅力的な商品が本部から送られてきますからね、その利益だけでも充分に商売になるんですよ」

盲信、狂信というのはこうやって始まるのかもしれない。

ここのシステムはやや複雑で、扱う商品によって、総販売元と呼ばれる本部が別組織になっている。彼が言う魅力的な商品も、それぞれ扱いが違う。うち一つが扱っていた浄水器は、欠陥商品として一時期話題になった。

「だから、このシステムがいかに優れているかを相手にちゃんと伝えるんです。そりゃ私の仲間にも、これは金儲けシステムだから、相手にハンコ押させればいいんだ、なんてのがいますけどね、言語道断ですね。こういう連中はいずれ脱落していきますよ。やはりね、自分が信念を持って、このシステムを理解し推進し、この道を邁進するというのがいちばんです。そして、基本にあるのは『愛』です」

いやはや、愛などという言葉が出てくるとは驚かされた。システムを愛し、仲間を愛し、犠牲者を愛すというわけだろうか。

「犠牲者なんてのはいないんです。自分の努力が足りなかったり、情熱が足りないから、途中で行き詰まるんですよ、まったく」

馬鹿なビンボーニン、と強調していたK氏を思い出す論理ではあるが、彼はすでに問屋として、何もしなくとも利益の上がる身分になっている。

さて、ここまで話を聞いてくると、いったい誰が加害者で誰が被害者なのか分からなくなってくる。私見だが、唯一加害者と呼べそうなのはT氏および、その同類であろう。大手のマルチ商法では、今やT氏に類した幹部たちが事実上トップに君臨しているため、昔ほどエキセントリックな人間は必要なくなっている。もちろん、集会などで煽動するときには、オーバーアクションが得手な外人幹部は絶対必要だろうが。

「マルチ商法の根幹はだいたいそういうことですよ。システムは、ほぼ完成されてます。あとは、魅力的な商品を見つけること。それから、責任をしょってくれるキチガイというか、マッドサイエンティストのような『天才』を見つけること。そうすれば『馬鹿』のほうは自然に集まってきますよ（笑）」

大笑いするT氏だが、彼もある意味では病んでいるのではないか。そう思うのは、あまりにも穿ちすぎだろうか。

発見

発明王さん、あなたに神のお恵みを

人間の記憶はヘソから訪れる。
人間はUFOで移住してきた……。
人類をこよなく愛する人びとの、誰も知らないこの世の真実！

田中聡（フリーライター）

「リベラルとは愛」のスローガンを掲げる鳩山由紀夫氏は、「宇宙意識」とか「共生」なんて言葉も使ったりするけど、そんな言葉を愛用する人種が今の世の中にはごまんといる。その極北にあるのが、宇宙の「原理」や「真理」を説く人びとの界隈、さしずめハイパーワールドである。そこには、超科学理論を唱え、また数々の発明をなし遂げたハイパーサイエンティストたちもいる。彼らはなぜそのような道を歩むことになったのだろうか？　そんな疑問を抱きつつ、日本を代表するハイパー・サイエンティストを訪ねてまわった。

植物からの福音、養護学校での経験

三上晃さん（日本相対磁波研究所所長）

三上晃さんは、リーフ・バイオ・センサー（LBS）という、植物と対話できる装置を発明し、〝植物さん〟と長年にわたって共同研究を続けてきた。大正十年生まれの民間研究者だ。ちなみに植物さんとは、我われの知るすべての植物のことである。

広島駅から可部線に乗り、終点の可部駅から車で四十分ほど走った山あいの美しい風景のなかに、三上さんの家はあった。旧家らしい、萱ぶき屋根の大きな家だ。そこに「日本相対磁波研究所」と記された立派な木の看板が掲げられている。

訪問したのは、O―157の感染源がカイワレ大根である可能性を厚生省が発表し

てすぐの頃だった。
「今（世間が）カッカ燃えてますからね、いろんなこと言えないけども。これはね、空気伝染的なこともあろうと。いや、わしが思うんじゃないですよ。植物さんが、まあ、そういうふうな見方をしてるわけね。いくら手を消毒しようとね、コチラと思えばまたアチラでしょ。カイワレ大根ですか、ありゃ、いずれ損害賠償を請求されますぞ。
カイワレは無実だから。ああいう種類の菌で空気伝染ということは、学問的にはないですよ。だから新しい細菌ができたんじゃなかろうかと。こりゃ大変なことです。早急に医学界あげて研究機関あげて、集中的な研究が行われねばならん」

三上晃さん

三上さんは、植物さんに判断を委ねて真理を得ている。植物さんは人間よりも正確な判断ができるのだそうだ。
三上さんによれば、植物も人間も「宇宙意識」が形をなしたものである。したがって、どちらも本来は正しい判断ができる。しかし、人間は衣服をまとい鉄筋建築に住むなど、文明によって宇宙と隔絶してしまっているため、正しい判断ができなくなっている。だから三上さんは、LBSという装置を用い、植物さんに正しい判断を仰ぐのである。その装置に電卓を接触すれば、「健康指数」や「電子指数」などという未知のエネルギー数値も、たちまちはじき出せる。「宇宙意識」に通底している植物さんは、なんでもわかるのである。
たとえば、植物さんの判断によると、アインシュタインは間違っているという。
「光速の原理なんて、そんなバカなことはない。それより速く連絡できるんですよ。衛星が飛んでもね、交信はもう、トンいえばツーですから」
LBSは、嘘発見器を応用した装置である。ただ、その使用法は独特で、嘘発見器の原理にならって、植物の電気的な抵抗値の変化を計測しているわけではない。植物間の交信エネルギーを増幅して、答えを得ているそうである。センサーと呼ばれる嘘発見器の端子らしき部分は、それぞれ写真の上に置かれたり、電卓の上に置かれたりする。理屈はよくわからないが、なにはともあれ、赤ランプがつくかどうかで植物さんの「イエース」か「ノー」かの答えを知ることができるのだ。また、リーフ・バイオ・コンピュータというパソコンを接続したタイプの装置もあり、写真をフロッピー代わりに挿入できる。写真から読み取れる

これが植物と対話できるという装置LBSだ!

ように改造されているわけではないが、写真もデータなのだから、通常のディスクドライブに突っ込めばいい!のだ。

▼人の記憶はヘソから訪れる

三上さんの言う「宇宙意識」は、宇宙に充満する「絶対素粒子」のことでもある。

「いわゆるエーテルですね。アインシュタインが否定しましたけれども、そんなバカなことはない。ちょうどゼリーのようなものです。それに天体が埋め込まれて、動いておる。そのゼリーそのものが動いておる」

また、人間は脳で記憶するのではないという。なぜなら、頭のいい人は何冊もの辞書が頭に入っているというが、こんな小さなところに、そんなに多くの記憶が入るとは思えないからである。

「わしは前からおヘソだと思っていた。だって、お母さんとつながっていたところなんだから。母親からの情報はみな、ヘソから入ってきたんだから。腸というのは記憶しているのかもわからん。ヘソの穴から電磁波的に(情報が)入ってくるのかもわからん。腸が、電磁波的な情報をつかまえて、それを脊髄を通じて脳へね(送る)。脳は肉体を支配するから、『はい、ペンを持って』と命令して、(肉体が)ペンを持つと。脳は、命じて肉体を動かしているにすぎない。情報は外にあるんだと。だから、どんな大きな辞書だって、このへん(ヘソのまわりを手で示し)に集めることができる。それなら、容れ物が大きいも小さいもない」

――辞書の内容が、電磁波的な形でおヘソのまわりに集まってるんですか?

「集めようと思ったものしか集まってないわけですよ」

――集めようと思えば、そこに集まるんですか?

「集めようと思ったら努力が必要なんです。一生懸命勉強しなきゃいかん。そうすると、この(ヘソの)あたりに集まっておると。絶対素粒子がそういう情報をつかまえて、この近くに集まってくる。必要に応じて、こちらが天という字を書こうと思えば、天と思うから、絶対素粒子のなかにある天という字の情報も、こちらからそういう意識を発動することによって、それに呼応して電磁波的に入ってくる。それが脊髄を昇って脳にいくから、はいペンを持ってこう書きなさいってスラスラと、間髪を入れず。だから、人間の組織は驚異的なものだと思いますね」

驚異的なのは、その理論のほうかもしれない。

▼話しかけるようになった訳

それにしても、三上さんがこのように植物さんとの共同研究に没頭するようになったのはなぜだろう。その理由は、生いたちにあった。

三上さんは生後二カ月のとき父親を亡くし、母親の実家で育てられたが、三歳のときに母親が再婚、以後は現在住んでいる父親の家で祖母に育てられた。祖母が亡くなってからは親戚に預けられたが、それまでの家の周囲にはまったく隣家がなく、遊ぶ友達もいなかった。

ボードには三上さんの思考の断片がびっしり

そこで庭にあった木々を相手に時を送るようになり、とくに樹齢三百年という五葉松とは親しくなった。

「それに登ったり下りたり、向こうの雲を見て、その形から両親を想像したりしながら大きくなった。まあ寂しい状態だった。したがって、自然のなかに没入した生活と言いますか、それを父親代わり母親代わりに大きくなったので、松の木は友達だと、俺の親だと、そういうのがあるんですよ。だから、木に話しかけるということは、当時からあったんですね」

松の木を親と慕った三上さんだったが、それでも父親に会いたいという思慕の念は募った。

「幸い、父親は写真をいっぱい残してたんです。この写真が手がかりだと。(父親は今)地中だろうか、あるいは昇天するいうんだから星だろうか、という疑問は子どもの頃から持っとった。それで写真とは何かということをずっと考えとった」

写真は光を写す。物体に当たった光は、その物体の情報をつかんで反射し、写真はその情報をキャッチしている。レントゲン写真のように、物体内部の情報が写るというものもある。では、人間に見えるのは、レントゲン写真の骨までが限度でも、じつはもっと見えないでいる情報まで、写真には写されているのではないか。そう、三上さんは考えた。

「しかしながら、それを感知するだけの機械がないじゃないか。レントゲンがせいぜいだと。そうすると、光の大先生は誰だと。犬は人間の何千倍という嗅覚を持っておる。鯰は予知力を持っておる。そうすると、植物さんいうたら何やと。これは光合成をする。すると光の大家じゃないか。光合成してるんだから、光には非常に詳しい。これで生きとるんやから。光の大家である植物さんに訊くのがいい。では植物さんに訊いてみる機械を作ろうと。そうしないと、テレパシーなんかで私がわかると言ったところで誰も信用しない」

幼い頃から植物さんと親しくしてきた三上さんは、じつは装置を使わずともテレパシーで心を通わせることができたという。

「言葉が返ってはこないですよ。向こうは言葉を知らんのだから。だから、朝顔が咲いておると、きれいだねえ、いいねえって言ったらね、向こうから、ありがとう、しっかり見てね、というのが聞こえてくるような気持。ようするに、意識をこっちから持っていくと、向こうから意識で答えてくる。

我われは宇宙意識がだんだん固まって、絶対素粒子的なものが固まって、細胞になり、いろんな器官になりして、からだができてるんだと。朝顔さんもそうなんです。同じなんですよ、どっちも。個性があるから見かけが違うだけで、掘り下げてみれば宇宙意識は同じなんだから、通ずるはずなんです。きれいだねって言ったら、向こうもきれいだねって答えたような気がする、でいいんですね。それが答えである」

三上邸は立派な門構え

しかし、それでは他人は納得しない。そこで最初は振子を使い、次にLBSを作って、植物さんに写真情報を判断してもらうよう工夫したのだという。

▼今度はイルカさんと

ところで、この研究を世に問うたのには、今ひとつの動機があった。三上さんは長年学校教師として暮らしてきたが、最後の三年間は、養護学校の校長を務めた。その経験が重要な契期となったのである。

「知恵遅れの子らに、神の心とはこういうものかと感じたんです。人の足を引っぱるじゃなし、いじめるじゃなし、自己主張するでもなしね。その子らのために私は養護大学を作ってやりたいと思ってね。大学といっても、一生面倒を見てやるような、そういう学校ですね。農園も持ってね。もちろん私立じゃないとできんから、金がいると。十兆円ほど欲しいと。道路ばたで募金して集まるもんじゃない。よし、三井三菱、財閥からもらおうと。そのためには金鉱脈を発見するに限ると。最初の『木の葉のテレパシー』という本はそれで出したんです。それで反響があればいいと」

その本は、実際、ある企業の課長の興味を引き、その協力でLBSが生まれたのであった。そうして研究生活に入った三上さんだが、今では金鉱探しはやらないという。

「私は自分のためにやりだしたんだし、世の中を救おうとか、偉くなろうとか、ノーベル賞でももらおうとか、そういうことでやったんじゃないんです。さっき言いましたように、父親に会うためにやった。そして人間死んだらどうなるか、心とは何か、意識とは何か。そういうことを追求して、これ、始めたわけです。そしたら、父親の写真をインプットし、天体写真でセンサー動かしてスイッチを入れてくと、パッと反応がある。琴座のベータ星に転生しておると。肉体があるかどうかはわかりません。超素粒子の状態かもしらん。でも、どこの星へ行くかはわかった。私の転生先も、調

べたら同じなんですよ。
ようするに、自分の宗教をつかむためにやったんです。父親に会うためにやったんです。だから、自分はもうこれでいいんです、と思った頃から、これ調べてくれ、あれ調べてくれっていう人が来るようになった。金鉱脈調べてくれとか。そういう相談には私はいっさい応じないんです。ただ、私の転生先はどこですか——それは答えましょう。私に適した薬草は何ですか——それは教えましょうと」
もう金鉱脈を探さないということは、養護学校の資金の件を諦めたということなのか？　残念ながら、尋ねるのを忘れた。
現在は、自分の転生先を教えてくれといった類の相談の手紙が毎日届いているという。市民講座や大学、諸団体からの講演依頼も続いているそうだ。
さまざまな業者も、三上さんに商品の検査依頼をしてくる。特殊なパワーを発する製品の、普通の科学では数値化できないような効果を、三上さんはわけなく数値化してくれるからである。
最近売り出されたものには、植物さんと共同開発した「有害電磁波瞬間無害化シール」や「治癒シール」「健康パイプ」などがある。健康パイプは、その広告チラシによれば、煙草の臭いが消えたりヤニで歯が汚れなくなるばかりか、「両耳にパイプの先端を軽くさし込むと長年苦しんだ頭痛が消えた」など「不思議な力」がある！という。
「世の中の役に立つんなら、それはやりましょうと。それから、こういうところ（企業）は、何がしか支援してくださいますからね。私も、支援団体がないとやっていけませんから。本はお金にはなりませんわ。まあ今さらお金をためようとも思いませんよ。自分の宗教をつかんだということが最高なんです。非常に精神が安定しましたよ。次のアパート（転生先）が予約してありますから。みんなこれで苦しむんだろうと思いますね。これがわかればね、しっかり、地球のために、みんな仲良くしようと、そういうことにつながってくると思います」
今、三上さんには新たに取り組みたいテーマがある。
「植物さんとの共同研究は卒業させていただいて、今度はイルカさんと共同研究してみたいですね」
僕はカピバラと共同研究してみたい、なんつってやら（©蛭子）。

「健康パイプ」（左）と「有害電磁波瞬間無害化シール」

霊界ラジオへの挑戦！

橋本健さん（アルファコイル研究会会長・日本超科学会会長）

日本のハイパーサイエンティスト史を語るうえで欠かせない人物が、橋本健さんであろう。三上さんと同じく、植物とお話しする装置「４Ｄメーター」を発明、また「アルファコイル」の発明によって、いわばアルファ波信仰を日本に広めた、その道のパイオニアである。東京・恵比寿にある橋本さんの会社、（株）アルファコイルを訪ねた。

橋本さんは、大正十三年生まれ。昭和二十年の終戦直前、「日本の光輝ある歴史のために新兵器を発明しよう」と、東京大学の電気工学科に入学。「殺人光線の発明」を考えていたが、あえなく敗戦となる。人生の目的を失った橋本さんは、失意のあまり肺を病み、病床に伏しながら「神よ、人生の目的を与えたまえ、光を私に与えたまえ」と祈りつつ、日々を過ごしていた。そして、「生長の家」を興した谷口雅春の著『生命の実相』に出会う。

橋本健さん

「それを読むと、人生の目的が満ち満ちて、心に喜びが湧いてきたわけですね。それで病気が治っちゃった。心が変わったんですね。宗教的な奇跡が起こりうるということを体験したんです。キリストが病気を治して歩いたとか、みんな嘘だと思っていたんです。それが、自分の病気が三日三晩で治っちゃった。それからですね、円滑現象って言ってますけど、非常に人生が円滑にいくんですよ。欲しいなと思うものは誰かが持ってきてくれる。朝買ったものが晩には十倍ぐらいで売れる。だから金が入る。発明のヒントも浮かんでくる」

この奇跡の謎を解こうと、橋本さんは超心理学の研究を始めた。大学では「皆さん、神様はあるんですよって言ったら、お前はパーかって、さんざん叩かれた」が、「自分で体験したことだから、これは嘘じゃない」との確信を持って、研究を続けた。

午前三時頃には目が覚め、インスピレーションが湧くようになった橋本さんは、発明をつぎつぎと思いつく。やがてアイデアが百ほども貯まったとき、「神様にお願いして、資本金を百万円与えたまえと祈ってお

りますとね、おじさんが三百万円ぐらい出してやろうと言ってくれたんですね。そのときは、やることなすこと、トントン拍子。欲しいなと思うと、持ってきてくれるんですよ」

▼四次元波受信機

大学を出てから、生長の家に入信。そこで「幸福科学研究所」を作り、「宗教と科学の関係」を研究した。「サイメーター」という装置を発明し、信者らの協力によって超心理学実験を行った。

サイメーターとは、交流電気のサイクルを利用した装置で、任意にスイッチを押すと、その瞬間の電流の方向によってメーターが左右のいずれかに振れた状態で停止する。その結果は左右五〇％ずつになるはずだが、ボタンを押すときに、いずれかになるよう念じていると、そちらに偏った結果が出るという、超能力を実証するための装置である。実験は環境に恵まれ、うまくいった。

「彼ら（信者）は信じてるから、ものすごくいい成績が出る。実験環境が非常に影響するんです。（疑いの意識が強い）大学ではなかなかいい成績が出ない」

そして昭和二十五年、電気学会に「確率的事象の個々の決定に対する精神の影響」という論文を提出。良くも悪くも大反響を呼び、以後、橋本さんはテレビの心霊番組にたびたび出演するようになった。

そして、『11PM』に出演した際、矢追純一氏から、アメリカのバクスターという嘘発見器の技術者が、サボテンに嘘発見器をつなぎ、人間の意志や感情に反応することを発見したので、実験してみてくれと言われた。

「最初は、嘘発見器をサボテンにつけてね、火をつけたりいろんなことをやったけど、ちっとも針は動かなかったんですね。ですけども、家内が植物をかわいがってましてね、家内がサボテンに『これから研究するけど、イジメルわけじゃありません。植物の世界を人類に紹介したいのです。よろしいですか』って言ったら、針がワッと動いたんです。『よく動いてくれました』って言うと、また動いた。それから会話ができるようになったんです」

この嘘発見器を欲しいという人が多くなったことから、波形を描くペンレコーダー部は高価なため省き、代わりに音が出るようにした装置を発明、それを「4Dメーター」すなわち「四次元波受信機」と名づけた。最初は、その音を録音して送ってくれれば、波形に変換して返送する予定だったが、買った人たちは「音が出るだけで満足」してしまったという。

「音だと、植物の感情が出るんですよ。怖がってるのか、喜んでるのかね。音にしたことは、嘘発見器に比べれば、数段の進歩だったと思います。歌も歌ってくれるんです。『サボテンさん、歌を歌いましょうね』

画期的な四次元波受信機

なんて言うと、メロディーが出るんです」

たしかに、植物の反応を感情的、擬人的にとらえやすい音にしたことは、この実験が世にウケたキーポイントだったろう。

橋本さんは、このように植物が反応することについて、次のように考えている。

「我われは三次元世界に住んでいるけども、これは四次元世界の影であると思うんですね。四次元世界においては、すべての生物が一つになってるんだと。本当は生物だけじゃないんですが。そこを通じてテレパシーがつながる。よく人の心を氷山にたとえるでしょ。上の部分が顕在意識で、下の部分が潜在意識だと。だけど、そうじゃなくて、僕は島のように、奥底で、四次元以上の世界でつながっているんだと考えています」

高次元世界の構造

心は氷山のようなもので、水面上の部分が現在意識、海面下の部分が潜在意識であると言われていますが、事実はむしろ氷山より島に似ています。識閾という線が海面のようなもので、海面から上のほうに出ている部分が心でいうと現在意識ですが、島のように、A君、B君、C君と、みな奥底の潜在意識では一つにつながっていますから、潜在意識を通じてテレパシーなど可能なのです。　物質も三次元的な部分（海の上に出ている部分）と海中にある部分とがあり、海中にある部分がすなわち物質の心です。物質にも心があるのです。　発明家の中には、物質とテレパシー的に話し合って、物質の性質を知り、発明することができる人もいます。　透視のように、ESPカードの模様を直接知るのは、物質の模様をX線で透視するように物理的に見るのではなく、物質の心の部分と人間の潜在意識の部分とが、互いに知り合うのです。ですから、ESPの現象には、従来の物理学の法則はあてはまりません。高次元世界にだけあって、通常三次元世界に出てこないものに、霊があります。

研究所の応接間に展示されていた

▼ヘッドギアと同じじゃないか

橋本さんは、ユリ・ゲラーが来日して話題になった頃、日本超科学会を発足した。

「僕は電気学会で発表したけども、当時はそんなことは駄目だという人もずいぶんいたわけです。賞賛ばかりではなくて。で、堂々と発表できる場がないから、作ろうと。最近は他にもいくつか学会ができてきました。でも超科学会のように進んでるところはないんですね」

それは、他団体では霊という言葉がタブーとされているからだという。

その日本超科学会も、当初はそれほど伸びはしなかった。その会員数がいっきに拡大したのは、「アルファコイル」の発明がきっかけだったという。それは、橋本さんの「円滑現象」が起きなくなったところから生まれた発明品である。信仰を得た当初にくらべて「いろいろ欲が出てきて」、「祈りがきかれなく」なってしまった橋本さんは、「これはアルファ波が出てないから駄目なんだ」と考え、「アルファ波が（脳から）出れば音がする『アルファトーン』という機械を作った」。バイオフィードバック装置である。

しかし、これでは「アルファ波が出れば音がするんだけど、どうやれば出るかはよくわからない」。そこで「強制的にアルファ波の周波数をコイルでパルスにして頭に載せてやれば簡単じゃないか」と考えた。そして生まれたのが、アルファコイルだった。

「それを枕にして、三十分だけパルスが出るようにして寝たんです。それをやると、午前三時に目が覚めて、発明のヒントが満ち満ちているんですよ。眠くないんです。眠くないっていうと嘘になるんですけど。昼間は眠くなっちゃうから。ただ、目覚めたときは張り切ってね、意欲に満ちてね、

本を書いてもパーッと書いちゃうんですね。昔『生命の実相』を読んで感激したときと同じような状態になったんです」

その装置を日本超科学会の会員に薦めてみると、つぎつぎと病気が治ったとか、円滑現象が起きたという報告が届いた。そして、『11PM』に出演するや、鎌倉の家に問い合わせの電話が殺到。そこで、東京に事務所をオープンした。

アルファ波が測定できるという「アルファトーン」

「アルファコイルを欲しいという方は、日本超科学会の会員にならなきゃ駄目だって言ったら、会員が非常に増えたんですね。何万人にもなって、現在にいたっているんです」

オウム事件の影響を尋ねたら、「ヘッドギアと同じじゃないか」と冗談まじりに人から言われたりして、複雑な心境になったというお答えだった。

▼霊界人の協力乞う!?

橋本さんの発明は、特許になったもので三百ほどという。有名なのは、野球場のマンモステレビ、電子式電光掲示板など。ただし大部分は、以前に勤めていた会社の名義になっているそうだ。

橋本さんの現在の課題は、「霊界ラジオ」である。植物の言葉を聞く、4Dメーターを発展させた装置だ。しかし、今のところ研究は行き詰まってるという。まず母音だけが出る装置は作った。

「非常によく植物と話ができる霊能者がいましてね、『私はOさんだよ。私は誰かね』って言うと、『オー』って答えるんです。それからね、『これはウエ。これはシタ。こっちは?』と訊くと『ウエ』と」

子音の出る装置も作ったという。しかし、植物との接続が問題になる。4Dメーターの場合、一つの回路の中の二つの電極を植物につなぎ、抑揚、つまり周波数と音量とをコントロールすればよかった。

「ところが母音とか子音というと、もっとコントロールするところが増えちゃうんですね。鍵盤みたいなものでしてね、いくつかのキーがある。それを植物に全部振り分けなければならないのを、どうするかで行き詰まってるんです。理論的にここにつなげばいいというふうにはいかないんですね。植物をそのように訓練すればいいのかもしれませんけどね。いきなりつないだって駄目ですからね。今はアイデアを醸成しているところです。

霊界人の協力があるといいんですが、こういうものができると、人類は霊界の存在を強制的に信じなくてはならなくなります。神様はそういうことをお嫌いになるんです

ね。神は神の存在を否定する自由さえも人類に与えているんです。だから、人類がお互いに切差琢磨して、人類の意識が高まったときに、霊界ラジオができるんじゃないかと思うんですね」

信仰から始まった橋本さんの発明が、霊界との交流装置に向かっているのは、当然の成り行きと言えるだろう。

発明の天才は生命体からの信号を聞く！

政木和三さん（林原生物化学研究所参与）

現代のハイパーサイエンス界で最も人気が高いのは、政木和三さんだろう。政木さんの研究室は、岡山の林原生物化学研究所内にある。同研究所は、インターフェロンの開発と独特の経営理念でも有名な会社だが、政木さんはその参与という立場にある。

発明品は、脳波をシータ波にする「アルファシータ」「神経波磁力線発生器」、常識破りに明るい電気スタンド「バイタライト」など多数。ベストセラーを含めて著書も多く、講演も人気が高い。宮家方面から政治家、実業家、芸能人、スポーツマンなど、さまざまなジャンルに政木ファンは多い。

政木さんは、大正五年、兵庫県の山村に生まれた。小学生の頃から「電気少年」で、科学雑誌を参考にして扇風機を作ったりしていたという。胃腸が弱かったことから、腹式呼吸を毎晩一時間行う習慣をつけ、その頃にはすでに脳波がシータ波になれたという。政木さんの理論によれば、脳波がシータ波になると、人は自らの内部の「生命体」の声を聞くことができるようになる。生命体とは、霊魂のようなもので、輪廻転生する本質的存在だそうだ。

「九十歳で私の母が亡くなったんです。その一日前に母のところに行きましたらね、私が小学三年生のときに、日蓮宗のお寺でもらってきたお経の本にどんなことが書いてあるか、（子どもの頃の自分が）説明してくれたのでありがたかったと言うんですよ。シータ波になっていたから、内容を思い出したんですね。じつはそれは、自分で作ったお経の本だったんです」

政木ワールドのエキスたっぷりの著書

信じればどんな病も治る「神経波磁力線発生器」

——自分で書いたということですか？

「六十一歳のときに分かったんですがね、私は日蓮だったんです」

▼私はアトランティスの神官である

政木さんは、大阪大学工学部のほとんどの学科を渡り歩き、さらに医学部で神経エレクトロニクスの研究に携わったという。十七歳のとき瞬間湯沸かし器や嘘発見器などを発明して以来、一件を除き、すべて特許取得と同時に無効手続きをとって開放してきた。そして工学部の工作センター長として定年を迎え、以後は林原生物科学研究所の参与として過ごしている。

「ここへ来ましたらね、日本の一番大きな五つの家電メーカーのトップが五人揃って来られましてね、『政木先生、長年お世話になりました。ありがとうございました』って。なんのことかわかんないでしょう。もし特許料を取っていたら、四千億から五千億はあったんですよって言われました」

——林原社長とはどのようなことから知り合ったんですか？

380年前に演奏したという曲を自身の演奏で再現したCD

「もう一万二千年前から、ずっと一緒にいますからね」

政木さんは、一万二千年前にはアトランティスの神官だった。そのとき、社長はクリスタル大王という王様だったという。ちなみに政木さんの前世は、四千年前には八幡大菩薩、千六百年前には誉田和気命、そして八百十年前には日蓮、六百五十年前は畑時能、三百八十年前には熊沢藩山だった。いっぽう、林原社長は南朝の天皇だったり、岡山城主だったりして、政木さんはいつも社長に仕えてきたという。

政木さんは、熊沢藩山だった三百八十年前に琵琶で演奏した曲を思い出し、習ったこともないピアノで、ただ脳波をシータ波にするだけで、何も考えずに弾くことができる。その曲は本人の演奏でCDにもなっている。民族派の現代音楽のような曲だ。

だが以前の政木さんは、物理科学こそ絶対と考えていたという。ユリ・ゲラーが来日したときにも、テレビを見て、「そんなバカなことはない」とテレビ局に批判の電話をかけた。そのとき、それなら実験してくれと逆に出演依頼を受け、自らの発明品で

ある十万分の一の金属歪みを検出できるストレーンメーターを用意して、超能力者と対決。このときスプーン曲げはうまくいかなかったが、一万分の三の歪みをメーターは検出した。その衝撃から、政木さんは超能力研究に没頭してゆく。

——大学で反発はされなかったんですか?

「そりゃもう、ものすごくありました。しかし私は強情ですからね。私は子どもの頃から命令に一度も従ったことがないんです」

政木さんの知人が自動書記した宇宙からの伝言。政木さんには意味がわかる!!

超能力の数々をまのあたりにし、自分でもスプーンが曲がるようになり、さらに霊能力者との出会いを経て、目の前に仏像が突然出現するなどという不思議にも繰り返し遭遇しながら、「そんなバカなことはない」と、なお政木さんは物理科学を信じつづけたという。

——仏像は、誰かが置いたと思ったのですか?

「いや、目の前で現れたんだから、誰かが持ってくるなんて、そんなことは思わないですよ。それでも物理科学的にありえないと思っていたんです。それが全部(六体)出現してからね、成分を調べたら、空気を圧縮してくれてるんですよ。びっくりしたですよね。現在の物理科学では作ることのできないものであることがわかったわけです。空気を圧縮して一億度まで上げると、できるんです。でも今の人間の科学では不可能」

結局、ある正夢をきっかけに、政木さんは精神世界の住人となる。その結果、発明件数も飛躍的に増え、一週間に三つというペースで特許申請するようなことが続いた。天才発明家と新聞に書かれた昭和四十二年には八十七件しかなかったのが、現在では千件とも三千件ともいう(資料によって違う)。まだ製品化されていない発明が千はあるといい、着々と商品開発が進められている(現在は特許は会社が管理しているとのこと)。

▼人間はUFOで移住してきた

精神世界の人となった政木さんは、「信号」を受けるようになった。発明もその声に従って行っているのだ。その声は、神仏、すなわち政木さんの言う生命体からのメッセージである。

「はっきりと言葉になって鮮明に聞こえるんです。脳がシータ波になると、なかにいる生命体がね、ちゃんと教えてくれるんですよ」

とはいえ、長年、工学部の多分野と医学部にわたって、人の何倍も仕事をしてきた

ことで身につけた知識があればこそ発明ができるのだという。

「サイババさんは不幸ですよ。けっこう力があるんやけど。物理科学の勉強してれば、発明がいくらでもできるんですよ。あんなことやってもしかたないでしょ。若い頃に物理科学の勉強してれば発明がいくらでもできるのに、もったいないなあ言うてるんです」

多くのハイパーサイエンティストと同じく、政木さんも、微細な粒子が真空を構成していると考え、その粒子をバクトロンと呼んでいる。エーテルと意味は同じという。そのバクトロンと精神波との関係で、超能力などの現象も説明できるという。

――今も発明は続けてるんですか？

「何もしてないですよ。しなくてもね、なかにいる生命体が〝これをせよ〟と言うてきますからね、自分からは何もしないんです。生命体が、必要なときに〝これをせえ〟ってきますから。昭和十八年に、私は結婚したわけでしょ。それで家内がね、ご飯炊けるのをじっと待ってるわけでしょ、かまどの前でね。そしたらパッと信号が来るんですよ。こうせえって。だから作ったんですよ。自動的にポンと切れるの（自動炊飯器）をね」

政木さんによれば、人間は、三億六千万年前、木星の内側にあった惑星が木っ端微塵となったため、UFOで移住してきたのだという。それ以来、何度も高度な文明を築いては滅びることを繰り返して、生命体は何億年も生きつづけてきた。

「三億六千万年前に地球に送ったのはいい人間だけだったんです。ところがね、地球ではまだ人間は生活できなかったんです。肉体はみんな滅びてしまった。生命体だけでは進歩も向上も何もない。それで、そこにおった動物のなかに入った。そのころは、恐龍ぐらいがおっただけでしょ。その生活が長かったためにね、一五％だけがまともな人間であって、残りの八五％は動物のような霊になってしまった。私の講演が素直にわかるのは一五％だけであるから、その人だけに講演せよという信号がありましたね。安定が続くと人間性のレベルが上がってくんですけど、相当に年数がかからないとね、できないんですね」

シータ波になることで、なんでもでき、なんでもわかるかのような政木さんだが、一つ苦手なものがある。

「私は昔からね、人を見る目は全然ないんです。来る人、みんないい人だと思うから」

政木さんを利用して悪どい金儲けをしようとたくらむ人もいるのである。最近も、政木さんの名を冠した組織をでっちあげ詐欺めいたことをしていた人たちが現われ、まもなく裁判があるという。ハイパーサイエンス界も裾野が広がり、商売としてうまみが増しているらしい。

▼船井教と大衆選民思想

今回取材した三人はそれぞれに、独自な科学を選びとる根拠を自らの人生のうちに持っていたようには思う。だから、なんだか嫌いじゃない。

三人に共通しているのは、人間の内なる「宇宙意識」や「生命体」、つまりは霊的実体の能力を生かすテクノロジーをめざしていることだ。植物を通じて、あるいは脳の特殊状態を通じて、宇宙――全体性に「主体」

を融解させ、「真理」を獲得しようとしているわけである。その構図自体は、とくに新鮮でも特殊でもなく、ありふれたものと言えるが、科学主義に淫し、とりわけ「脳」のテクノロジーとして語られるレトリックに、現代的なテイストがある。

　それは最近の「波動」や「気」などの言葉とともに流通しているハイパーサイエンス、またその応用ないし類縁の健康法や成功哲学とも共通する。もちろんそれらは、ニューサイエンスやニューエイジ思想の影響を受けたものだが、そうしたハイパー系思想書は、おもにビジネス書として流通している。そのリーダー役を果たしているのが船井幸雄氏である。氏の影響力によってハイパー系思想は、もはや大衆化してしまっている。

　ハイパーワールドで最近とくに目立ってきたのが、「波動」理論だ。万物は固有の振動数を持っており、その波動の調和や相互の影響という観点から、さまざまな現象が理解できるとする理論で、その振動数を検査したり転写したりするという装置や、「波動をよくする」グッズ類も、多く出回っている。

　そうした世界の一端を知りたくて、この道の「権威」の一人、形態波動エネルギー研究所の足立育朗氏に取材を申し込んだのだが、先方のマネージャーらしき方が僕の名前を元に「チューニング」（同調して波動レベルを調べること？）してみた結果、こいつはよろしくないという結論が出てしまい、取材を断られてしまった。著書を読んでウンザリしていたことがバレたのか？

　しかし、講演だけは聞かせてもらった。会場となった東京有楽町の読売ホールはほぼ満員。暮らしに余裕のありそうな中年男女が多い。効きすぎた冷房に震えながらの四時間。前に座っているオバサンは身を縮こまらせて、それでもウンウン頷きながら聞いている。

　話は、最近出た著書の内容そのままだった。ただ公演の最初に、聴衆の「集合意識」の「振動波」を、足立氏の「本質」が計測する。結果は、十の五五乗。現在の地球人の平均的な数字だとのこと。四時間の話が終わって、改めて計測したら、今度は十の十万×七八乗。むろん振動波が高いほど、意識のステージが高い。その数字を足立氏がボードに書くや、歓声と拍手が会場に満ちた。……寒い。

　こうして聴衆は、一般人の意識のレベルをはるかに超えてしまったのだった。足立氏によれば、いずれ地球全体の振動波が高まって次のステージへ進化するとき、振動波の低い人間は宇宙の藻屑と消えてしまうそうな。おお逆ハルマゲドンの選民思想！

「波動」の流行の一因は、このように人の意識レベルをはじめとする、万物の優劣を数値化して語れるわかりやすさ、点数主義にある。会場になんとなく漂っていた卑しい印象にも納得がいくというものだ。

　こんな世界観が、もはやカルトとは呼べない、大衆のものになっているのである。

アインシュタインは間違っている！
トンデモさんの逆襲！

ベストセラー本『トンデモ本の世界』に寄せられた、奇怪な手紙の数かず。まだ懲りないのか？「エーテル病」に憑かれた人びとへの処方箋！

山本弘（と学会会長）

九五年に洋泉社から出版された『トンデモ本の世界』、およびその続編の『トンデモ本の逆襲』の反響は予想外に大きく、多くの読者から熱心なお手紙をいただいた。大半は好意的な感想だったが、なかには変な手紙もちょくちょくあった――そう、いわゆる「トンデモさん」たちである。

なかでも多いのは、「現代科学（特にアインシュタインの相対性理論）は間違っている」「私はアインシュタインを超える理論を発見した」と主張する人たちからの手紙だ。すでに十通近くも来ている。

こうした手紙攻撃を受けているのは僕だけではないらしい。以前、ある科学雑誌の編集部を訪れた際、編集者に「うちに来た変な手紙を見ますか」と言われた。ほんの数通だろうと思っていたら、大きな箱いっぱいにドーンと出てきたので驚いた。宗教がかったもの、支離滅裂なものも多いが、特に相対論に関する特集をやった時など、「相対論は間違っている」とか「私が発見した理論を紹介してくれ」とか主張する手紙がよく来るらしい。

海外でも事情は変わらないようだ。SF作家で優れた科学解説者でもあったアイザック・アシモフは、エッセイ集『わが惑星、そは汝のもの』（ハヤカワ文庫）の中で、「風変わりな問題について書く私の職業からすれば、親愛なる読者諸君が、ありとあらゆる風変わりな手紙やパンフレットや書物を送ってくることは不可避である」と書いている。

アシモフは一例として、ある人物から送られてきた本について言及している。添えられていた手紙によれば、その本は宇宙の起源についての真実を明らかにし、ニュー

トンやアインシュタインをペテン師だと告発する内容であったという。だが、アシモフは本の折り返しの解説を読んだだけで、その本を投げ捨てた。なぜなら、著者は宇宙膨張について論じているにもかかわらず、赤方偏移が何なのかを理解していなかったからだ。

アシモフはこう述べる。

「チェスを知らない者が名人を負かせるという幻想を持つことなどないのに、科学の素養がほとんど、またはまったくない正真正銘のアマチュアで、アインシュタインの理論に〝明白な〟欠陥を指摘できると思いこむ者がこんなに多いとは、奇妙なことである」

まったく同感である。彼らの生態は本当に奇妙なのだ。

筆者に送られてきた小野博史氏の自著と手紙

笑われてもいいから

うちに来る手紙のなかにも、自分の著書を同封してくる人がいる。

たとえば『崩壊！アインシュタイン神話』（発売／星雲社・発行／創栄出版）という本を送ってきた小野博史氏。内容は例によって例のごとく、「相対性理論に重大な矛盾を発見した」と主張するものだ。クイズや試験問題が挿入されていたり、最後のほうは先生と生徒の会話形式になっていたり、全体として受験参考書風の構成になっているのが面白い。

もっとも、内容はまったくの的はずれ、間違いだらけである。たとえば「まだ『光速不変』を信じていますか？」という章を読むと、小野氏は相対論の基本中の基本である「同時の相対性」の概念を忘れていることが分かる。これでは矛盾が出るのは当たり前だ。たとえて言うなら、コンセントが入っていないのに気づかずにテレビをつけようとして、「このテレビは故障している」と腹を立てるようなものである。その

後の章も同様で、次から次に初歩的なミスが続出する。
おまけに内容の薄さをごまかそうとしてか、しょーもない小説でページを水増ししているのが、さらに情けない。小説のラストでは、著者の主張を神様から教えられた天国の「アイン君」と「マイケル君」が、「ふ〜む。私達はまだ、主の出されたパズルを、完全に解いてはいなかったのかもしれないなあ」と言って、勉強し直すために地上に戻ってゆくところで終わる。
勉強し直す必要があるのは著者のほうだと、僕は思う。
実はこの本、本人から送られる前に、僕は書店で買って読んでしまっていた。その時は著者の正体を知らなかったので（本には著者略歴が載っていない）、あまりに稚拙な内容にあきれ、「高校生が書いた本ではないか」と疑っていたほどである。ところが著者からの手紙を読んで驚いた。小野氏の本職は私立高校の講師、つまり高校生を教える側だったのだ！　なるほど、参考書風の構成はそのせいだったのか（まさか生徒に「相対性理論は間違っている」なんて教えてるんじゃないだろうな？）。
それにしても、『トンデモ本の世界』を読んだのなら、僕のところにこんな本を送ってきたって、おちょくられるだけだと分かりそうなものだ。それでもなぜ送ってきたのか。手紙には「普通の専門家なら無視するような本でも、と学会の先生方ならちゃんと読んで批判して下さると思い、私の初めての著書を同封いたしました」とある。どうやら、批判されてもいい、笑われてもいいから、とにかく私の説を世間に広く紹介してくれ、ということらしい。いかなる手段を用いてでもいいから、相対論が間違っていることを世間に知らせなくてはならない、という固い信念が感じられる。
ちなみに、発売元の星雲社というのは、自費出版物が書店の流通ルートに乗るのを代行してくれる会社である。つまり、これは著者が自腹を切って出した本だと思われる。

私を病気から救ってください

もう一人、自分の本を送ってきたのは、尾股良章という人である。こちらは年齢も職業も不明だ。
同封の手紙にはこうある。
「（前略）実は、私はどうしようもなくエーテルが好きなのです。エーテルがあれば、相対性理論は絶対性理論になり（私の思い込み）、分かり易くなります。これでは、多分エーテル病と思います。
（中略）
このようにエーテルから逃れられないでいます。詳しい病状を本にしましたので、私をエーテル病から救って下さるようお願い申し上げます」
うーむ、「エーテル病」とは言い得て妙だ。実際、エーテル（真空を満たし、光を伝播する媒体と考えられていた仮想物質。特殊相対論によって否定された）の実在を信じ、相対論が間違いだと唱える人たちの心理は、一種の心の病気である。
同封されてきた『真空と光の正体』（近代文藝社）という本を読んだのだが、この手の本にありがちな、科学者を馬鹿にした傲慢な態度（それは小野氏の本にも顕著に見られる）が感じられず、僕は好感を持った。

科学をまったく知らないおじさん（繰り返すが、年齢は不明である）が、物理学の解説書を読んだがさっぱり理解できず、それでも懸命に勉強しながら自分なりに理論を構築し、こんなものでいかがでしょうかとおそるおそる自分の考えを提示している……という感じなのだ。

もっとも、著者の人格と、その知識や主張が正しいかどうかは、まったく別問題である。実際、この『真空と光の正体』の内容は、小野氏の本以上にデタラメで、驚くべき無知や初歩的な誤解であふれかえっている。先のアシモフの比喩に従えば、ナイトがどう動くかも知らない人間がチェス理論の本を書いているようなものだ。

僕がいちばん笑ったのは、人工衛星の速度を計算した箇所だ。なんと、著者は静止衛星が高度三万六〇〇〇キロでしか静止できないことを知らず、高度をゼロとして計算しているのだ！　著者が考える静止衛星は、重力を遮断して地表近くにふわふわ浮かんでいるものらしい（たしか『ドラえもん』にそういうの、出てきたっけな）。

相対論について勉強する前に、まずニュートン力学を勉強して欲しいと思う。

それにしても、小野氏の場合と同様、僕のところに本を送ってきた心理がよく分からない。「私をエーテル病から救って下さるようお願い申し上げます」というのは、自分の理論を論破してくれという意味なのか？

尾股良章氏の手紙には切実な⁉訴えが込められていた

無知なのはどっちだ？

尾股氏のように礼儀正しい人物ばかりではない。なかにはかなり無礼な手紙もある。先日、「事象研究団体キリュウ総合研究所」の副所長だという渡口伸なる人物から来た手紙など、その典型だ。この団体、説明によると、「物理学・医学・音楽から始まり人気アイドル・アニメ・風俗本と、とにかくあらゆることを研究する組織」なのだそう

だ（何だ、と学会と変わんないじゃん）。
渡口氏はこう豪語する。
「『と学会』という組織は実にくだらない組織だと思う。我々キリュウ総合研究所は、その点『と学会』の何千倍、いや何万倍も優れている組織であろう」
いやー、参ったね。こんな傲慢な台詞、僕にはとても吐けない。
渡口氏は「日夜、相対性理論が、いかにでたらめな理論であるかを人びとに説いて」いるのだそうで、『トンデモ本の逆襲』の中で僕が相対論の正しさを説明していたのを読んで腹が立ったらしく、僕のことを「自然科学全体をなめている」「単なる馬鹿」「量子力学に対してまったくの無知」「相対性理論を理解していない」などと、さんざん罵倒してくれている。
では、そう言う渡口氏自身は、相対論を理解しているのだろうか？ 例として、氏の主張の一部を抜粋しよう。
「アインシュタインの局所原因の原理（素粒子間の相互影響は光速を超えられない）はすでにアスペクトらの実験で誤っているということが立証されているのだよ。ちゃんと現代物理学を勉強しようね!! 山本君」
出た出た、「アスペの実験」だあ！ この手の反相対論者たちが持ち出す、定番とも呼ぶべき誤解の典型例である。
どうやら渡口氏は、僕がアスペの実験を知らないと思っているらしい。残念でした。もう十年も前から知っているし（厳密に言うと、物理学誌『パリティ』一九八六年五月号で読んだのが最初である）、小説の中で何度もネタに使っているのである。
ちなみにAlain Aspectはパリ大学理論・応用光学研究所に勤める科学者。この人はフランス人なので、フランス風に「アスペ」と発音しなくてはいけない。「アスペクト」と表記するのは誤りなんですよ、渡口さん。
こうした反相対論者たちが相対論に対して抱いている誤解のひとつに、「相対論は超光速現象をすべて禁じている」というものがある。だから超光速現象が発見されたと知ると、すぐさま「相対論の誤りが証明された！」と早トチリしてしまうのだ。
むろん、相対論を正しく学んだ方なら誰でもご存知のように、相対論は超光速現象を禁じているわけではない。質量を有した物体を光速まで加速するには無限大のエネルギーが必要である、と述べているだけなのだ。つまり、物体が移動しないのなら、無限大のエネルギーも必要ではなく、超光速は許されるのである。
実際、相対論に矛盾しない超光速現象はいくらでも存在する。身近な例で言うなら、電光掲示板上を移動する文字の速度は、光速には制限されない。幅が何光年もある巨大な電光掲示板上を、文字が一瞬で横切ったとしても、物体が移動したわけではないので、相対論を破ったことにはならないのだ。
電離層などのイオン化した気体の中を伝わる電波の位相速度が光より速くなることも、昔からよく知られている。僕も高校時代に初めてこの事実を知り、「どういうこっちゃ？」と首を傾げたものだ。理科の教師に訊ねたが、納得のいく答えは得られなかった（教師も分からなかったのだろう）。位相速度と光速度Cは別物であり、なんら物質や情報を伝達しないことを知ったのは、何年も後のことである。

量子力学の世界でも、ある種の相互作用が光より速く伝わることは、以前から予言されていた。「量子結合」または「EPR相関」と呼ばれる現象で、その存在を確認したのが、八〇年代初頭に行われたアスペらのグループの一連の実験なのである。

だが、この実験でも、実体を持った物体が光より速く移動したわけではなく、また意味のある情報は決して伝達することはできないので、相対論にはまったく矛盾しない。実験を行った当のアスペをはじめとして、世界中の物理学者は誰一人として、この実験が相対論に反しているとは考えていないのだ。

アスペの実験が相対論の誤りを証明したと考えているのは、（渡口氏のように）相対論を理解していないド素人だけである。彼らの情報源はたいてい他の著者のトンデモ本であり、まともに物理学誌を読んで勉強しようと思う者は少ない。

根気がないから妄想になる!?

僕の部屋の本棚には、この手の人物の書いた本が何十冊も並んでいる。コンノケンイチ『死後の世界を突きとめた量子力学』（徳間書店）、窪田登司『アインシュタインの相対性理論は間違っていた』（徳間書店）、千代島雅『世界を欺いた科学10大理論』（徳間書店）、大橋正雄『波動性科学入門』（たま出版）、浜岡泰治『全宇宙解明の詩―ビッグバン理論征伐記―』（近代文藝社）、藤原恒雄『新物理学原理』（新風書房）、坂元邁『自然科学の革命「マイナスの科学」』（自費出版）……これでもまだ、日本で出版されている擬似科学本、反相対論本の半数もフォローしていまい。本の内容はさまざまだが、共通しているのは、著者の中に本職の物理学者は一人もいないということだ。

相対論には矛盾のように見える問題があるのは事実である。最も有名なのは「双子のパラドックス」だが、その他にも「橋のパラドックス」「車庫入れのパラドックス」といったものがある。

だが、これらは厳密に言うとパラドックスでもなんでもない。矛盾しているように見えるのは、相対論をよく理解していないからで、きちんと理解していれば正しい解答が導かれるのである。

僕も二十歳ぐらいの頃、こんな問題に悩まされたことがある。

「特殊相対論によれば、光速の九九・五%の速度で移動する物体は、十分の一の長さに縮む。

全長十光年もある巨大な宇宙船があるとする。今、この宇宙船が静止した状態から一日で光速の九九・五%まで加速したとすると、宇宙船の長さは一光年に縮む。宇宙船が中央を中心として縮むとすると、船首は一日で約四・五光年後退し、船尾は同じく約四・五光年前進する。すなわち、光より速く動くことになる」

ねっ、矛盾のように見えるでしょ？

僕はこの問題をずいぶん考えた。確か一年ぐらい悩んだと思う。だが結局、ふとしたことがきっかけで解けた。分かってみればバカバカしいほど単純なことで、やはり矛盾はなかったのだ（正解はあえて書かない。みなさんも考えてみて欲しい）。

だが、大半の反相対論者は、僕ほど根気がよくない。先の小野氏の例のように、ちょっとでも矛盾のように見えるものを見つ

けたとたん、「相対論は間違っている!」という結論に飛びついてしまうのだ。

そもそも、もし本当に、素人が簡単に見つけられるような重大な欠陥が相対論の中にあるなら、世界中の何万人という物理学者が一世紀近くもそれに気づかないなどということがあるわけがない。しかし、反相対論者は、次のように言い逃れる。

「物理学者はみんな『アインシュタインの説に間違いなどあるはずがない』と盲信しており、相対論が正しいかどうか検証しようともしない。だから私の画期的な理論を認めようとしないのだ」

これもまた妄想である。彼ら反相対論者たちは、物理学の歴史に関して、徹底的に無知である。光速度の不変性がどれほど高い精度で検証されてきたか、相対論の検証実験がどれだけたくさん行われてきたか、まったく知らない。また、一般相対論が多数のライバル理論との何十年にもわたる戦いを勝ち抜いてきた歴史など、知ろうともしない。

なぜアインシュタインは標的になるのか?

たとえば、一九二二年に発表されたホワイトヘッドの理論は大変によくできており、五十年にもわたって一般相対論の有力なライバルであり続けたが、一箇所だけ観測事実と合わない部分が発見され、敗れ去った。ブランス=ディッケの理論は、一般相対論と同じく、水星の近日点移動を予言していたが、その数値は実測値と約四秒(九百分の一度)だけ合わなかった。どうしてもその誤差を説明できなかったため、ブランス=ディッケの理論は敗退した。

それに対し、今のところ一般相対論に反する観測結果は何ひとつ見当たらない。だから物理学者の多くは一般相対論を信頼しているわけだが、それでもなお完璧を期するため、頻繁に検証実験が行われている。

物理学の世界は九百分の一度の誤差さえ許されないシビアな世界なのだ。窪田登司氏のように、「水星の近日点が移動するのは太陽からの風のせいだ」などというお粗末な理論など、相手にされないのは当然である。

電脳空間の中のトンデモさんたち

こうした反相対論者（エーテル病患者）は日本中にどれぐらいいるのだろうか。本を出したり手紙を送ってきたりする人物が氷山の一角であることは間違いない。コンノケンイチ氏や窪田登司氏の著書が何万部も売れていることから考えて、おそらく潜在的には数万人いるはずである。

最近では、わざわざ本など出さなくても、自分の説を手軽に多くの人に披露できるようになった。パソコン通信の出現である。

ニフティ・サーブのFSCI（サイエンス・フォーラム）の物理会議室には、毎年必ず一人か二人、「私の考えた理論を聞いてください」と乱入してくる素人さんがいる。むろん、この会議室に出入りしているのは本職の物理学者や物理を学ぶ学生ばかりなので、たちまち初歩的な間違いを指摘され、すごすご去ってゆくのがパターンだった。

だが、九五年の夏頃から異変が起きた。物理会議室にトンデモさんたちの発言が急増したのだ。しかも、なかなかしぶとい連中で、いくら間違いを指摘されても引き下がらない。やむなく、「相対論にもの申す」という特別会議室を作り、そちらに議論を移すことになった（隔離した、と言うべきか）。

この「相対論にもの申す」、当初は短期の臨時会議室の予定だったのだが、議論が決着するどころか、次から次に新しいトンデモさんが参入してくるので、発言数はいっこうに減る様子がない。九六年八月現在、まだ存続している。一年間で発言数は千四百を超えた。

先の小野博史氏も、「あまのじゃく」というハンドルネームで熱心に書きこんでいた。彼の発言数は一カ月に三十近くになったこともある。例によって、自説を披露しては、専門家にその誤りを訂正される、というパターンの繰り返しだった。九六年の四月を境に発言がぴたりと止まったが、自分の間違いを悟ったのか、何か別の事情があるのか、定かではない。

もっとも、小野氏の場合は、専門家とまともに議論しようという姿勢があっただけ、まだ健全なほうだ。もっと手に負えない奴も何人かいる。

たとえば「J」というハンドルネームの男は、「J理論」なるものをたびたびアップしている。理論といっても数式や具体的証拠があるわけではなく、単に夢想を書き並べたような代物だ。質問に対しても、間違いを指摘する声に対しても、Jはまともに答えようとはせず、自分の理論の素晴らしさを一方的に自慢するばかり。

他の発言者も「こいつは相手にしても無駄だ」と悟ったらしく、ついにはコメントもつかなくなった。だがJはいっこうにへこたれた様子はなく、今や誰も読まなくなった文章をこつこつとアップし続けている。

トンデモさんたちの跳梁はFSCIだけではない。FMISTY（超常現象フォーラム）のほうには、「サーバス」という名物男がいる。彼の得意技は、もっともらしい科

illustration▶高橋製作

学用語をちりばめた理論を連発することだ。もっとも、彼自身はその用語の意味を理解していないことが多い。

たとえば「超伝導はペロブスカイト結晶の角度によって起きる」といった説を吹聴する。科学に無知な人ならうっかり騙されてしまうかもしれないが、結晶に詳しい人がツッコミを入れたら、たちまちボロが出た。サーバスは「ペロブスカイト」という言葉の定義すら知らなかった！

また、「地磁気は地殻を流れる電流によって起きる」と唱えたこともある。ある人が、地殻の主成分である二酸化珪素は不導体だと指摘すると、サーバスは嘲笑した。実際に確かめもせずに批判するとはけしからん。地面にテスターのプローブを挿して電気抵抗を測定すれば、大地は良導体だということがすぐに分かるはずだ、と言うのだ。別の人が、さっそくテスターで地面の抵抗を測定し、抵抗値が大きすぎてとても良導体とは言えない（当たり前だ）、と報告したが、サーバスはまったく動じなかった（ちなみに彼は、地磁気のNとSの方向を間違えていた！）。

彼がわざと嘘をついて人を騙そうとしているとは思えない。彼は本当に自分が天才で博識だと思いこんでいるらしい。そして、現代科学をひっくり返す画期的理論を次々に発見する自分に酔っているのだ。たまに科学用語の使い方を間違えるなど些細なことだ、と彼は言ってのける（ぜんぜん些細なことじゃないんだけどね……）。

世界は「こんなもの」でしかないのだよ

彼ら反相対論者の言動を、単に「無知」という言葉で退けるのは簡単である。しかし、それでは彼らのアインシュタイン攻撃にかける過激なまでの執念を説明したことにはならない。

最初の疑問に戻ろう。チェス名人の手にイチャモンをつける素人はいないのに、なぜアインシュタインの理論にイチャモンをつける素人はこれほど多いのか？

私見だが、この裏にはおそらく、「世界の姿がこんなものであるはずがない」という想いがひそんでいると思われる。

僕自身、高校生の頃、「なぜ世界はこんなにつまらない姿なのか」「なぜ僕は平凡な人間にすぎないのか」という、やり場のない不満に苛まれていた時期がある。ＳＦ小説の主人公たちはエキサイティングな出来事に次々に遭遇しているというのに、僕の前にはＵＦＯが降りてくる気配も、異次元への扉が開く気配もない……それがひどく不条理に感じられたものだ。

しかし、いつかは現実を認めなくてはならない時が来る。世界は「こんなもの」でしかないことを、自分という存在はそのつまらない世界の法則の中で生きるしかない平凡な一個人にすぎないことを、しぶしぶながら納得しなくてはならなくなる。

だが――それがどうしても我慢ならない人たちがいる。「世界はこんなものであるはずがない」「自分が平凡な人間であるはずがない」と思いたがる人間が。

彼らのあせりは憎悪を生み、この世界を律する法則を発見した人物に攻撃の矛先を向ける――アインシュタインに。

アインシュタインの誤りを発見したと思いこんだ時、彼らの平凡な人生は一変する。世界の姿が人びとが信じている姿と違ったことを、自分がアインシュタインを超える天才だったことを知り、長年苦しめられてきた呪縛から解放される。そして、この事実を世間に知らしめるのが自分の義務だと思いこむようになる。

むろん、それは本当の解放ではない。彼らが何を信じ、何を唱えようが、信念によって世界の本質が変わることはない。

彼らは「エーテル病」という別の呪縛に囚われたにすぎないのだ。

孤独な宇宙戦争

お前はM42星雲から来たスパイだったんだよ……？

鵜飼潤（フリーライター）

「今、宇宙戦争はとんでもない局面を迎えている。オレたち第6十字軍を信じて、お前はどこか安全なところへ避難してくれ」

八年ぶりに電話をしてきて、いきなりわけのわからないことを言うのは、中学時代の同級生A（28歳）である。Aが精神病院に入っているということは以前から知っていたが、発病して以降、話をするのは初めてだった。

「病院？　ああ、いずれ奴らにも探し出されるだろうからお前だけには教えてやるけど、あそこは第6十字軍の本部だ。奴らについては、CIAとモサドの宇宙支局が、今徹底的に調べあげているから大丈夫だ」

もともとおかしなことを言う奴には違いなかったが、ここまで聞かされると、本当に宇宙戦争が起きているような気になってくる。しかし、「第6十字軍」というのは、いったい何なのだ。「奴ら」というのは、誰のことなのだ。そして、Aはどこから電話をかけてきているのだろうか。僕のそんな思いをよそに、子機の向こうでは、まだAが意味不明なことを熱く語っていた。

お前は生命を狙われている

Aと出会ったのは、中学一年の冬のことだった。当時の僕は、たいして勉強ができたわけでもないのに、なぜか地元の国立大学の附属校に通っており、その学校には、一クラスだけ随時募集の帰国子女クラスがあった。Aはそこへ編入してきたのだ。父親の仕事の関係で、Aは小学生時代の半分をアメリカで過ごしており、授業で英語を習いはじめたばかりの中学生にとって、彼のネイティヴな発音は、とてつもなくカルチャーショックだった。Aにとっても、アメリカに住んでいたことは、それだけでかなりのプライドになっているようだった。

「マリファナ？　そんなもん、向こう行きゃ小学生でもやってるぜ。オレも毎朝、起きたらすぐにキメて、それから学校に行ってたね」

Aは同級生を相手に、よくこんな話をした。それが嘘か本当かは別にして、話を聞いていた誰もが、Aからアメリカの匂いを感じながら、彼に対してある種の憧れを抱いていた。それは、ちょっと偏差値の低い片岡義男の世界のようだった。

高校は別々になったが（Aはそのまま附属高校に進学したが、僕は成績不振のため、私立高校に進学した。偏差値が低いのは僕の方かもしれない）、以降、予備校へ通うために上京してからも、特別に親しい間柄というわけではないものの、つき合いは続いた。

Aが再びアメリカへ行くことになったのは、僕らが二十歳になる

photo▶山田鎮二

年のことだった。
「サンフランシスコにある専門学校に入るんだけどね。ま、オレはもともとアメリカ人みたいなもんだし、日本で働くのは向いてないからさ。落ち着いたら連絡するよ」

Aはそう言い残して、日本を後にした。

今考えれば、その段階でかなりの無理があった。Aは自分のことをアメリカ人みたいなものだと思っているようだったが、彼は小学生時代に、たったの三年間アメリカにいただけなのである。発音はネイティヴかもしれないが、バイリンガルだったわけではないのだ。学力的にも、僕とたいして変わらなかったはずである。その証拠に、僕らはふたりとも東京で遊び過ぎて二浪もしたうえに、誰でも入れるような大学をことごとく落ちていたのだ。

案の定、半年後にAは帰ってきた。しかし、バツが悪かったのか、僕には何の連絡もなく、実家に引きこもってしまった。そのときすでに、Aは精神にかなりの異常をきたしていたらしい。Aが成田から実家に戻る際に、ただひとりだけ連絡を取ったと思われる、中学時代の同級生Kは、そのときの様子をあとでこう話してくれた。

「左腕がやけに赤くなっててさ。どうしたんだって訊いたら、奴らが出てくるから、つねって潰してるって言ったんだよ。異常だろ？帰るときに、お前の部屋は盗聴されてるとも言ってたね。気持ち悪くなっちゃったよ」

Kによると、Aは、なぜか僕に会いたがろうとはせず、
「オレがあいつに会うのはマズイ。あいつは生命を狙われてるんだ」
などと口走っていたらしいのだ。

その日のうちにKからその話を聞いた僕は、当時、生活に困窮して情緒不安定になっていたせいか、やたらと背筋に冷たいものを感じたことを憶えている。

僕の記憶は消えている

――で、「第6十字軍」って何なんだよ？

「それは、宇宙戦争でオレが指揮を執る軍隊の名前だ。地球警備隊のようなものだと思ってくれればいい」

――「第6」ってのは、なぜ「6」なの？

「オレが参戦した宇宙戦争が、これで六回目だからだ。今のところ、

すべて地球の安全を保持してきている」

——で、なぜオレが生命を狙われてるんだ？

「……お前は記憶を消されているから分からないかもしれないが、お前はもともと地球人ではないんだ。M42星雲から来たスパイだったんだよ。オレがお前の記憶を消したんだ。これまでの宇宙戦争は、すべてお前を口封じするために起こされてきている」

——その宇宙戦争は、いつ終わるんだよ？

「今回で六回目だが、今回は長引きそうなんだ。NASAが開発したミサイルに、とんでもない欠陥が見つかってな。大変なことになってるんだ。だから、お前も自分の立場をわきまえて、しばらく避難していてくれ」

——オレに何か起きるわけ？

「これだけ言えばわかるだろ。今日は放射能を浴び過ぎたから、シャワーで早く落としたいんだ。そっちとは時差もあるし。またかけるから、くれぐれも気をつけろよ」

Aによると、僕は地球人ではなく、オリオン座の三ツ星の下にある、肉眼で見えるか見えないかほどの星雲からやってきた、スパイだというのだ。Aが僕の記憶を消したと言ったとおり、僕にそんな記憶はまったくない。そのうえ、Aが頭の中で宇宙戦争を繰り広げている理由が、この僕にあるというではないか。

いい加減にしてもらいたい。宇宙人に生命を狙われているのに、無理して生きながらえようなどという気持は、僕には毛頭ない。そこまでされたら、もう死んでも仕方がないではないか。

それに、Aが言った「時差」というのは、いったい何なのだろう。国際電話でもないのに、時差などあるはずがないではないか。Aはまだ、アメリカにでもいるつもりなのだろうか。まったく不可解である。

気がすむまでやればいい

Aが精神に異常をきたした原因は、どう考えてみてもアメリカにあるようだ。子どもの頃に夢を育んだアメリカに再び渡り、夢打ち砕かれ、アメリカの病んだ部分をすべて背負い込んで帰ってきてしまったように思えてならないのだ。それは、ドラッグに手を染めたからかもしれないし、ゲイにレイプされたからかもしれないが、いずれにせよ、相当な精神的ダメージを受けたことは間違いない。

第6十字軍というのは、間違いなく精神病院のことではないかと思う。実際にAもそう言っているし、病院と軍隊の施設は似ているといえば似ている。数字は、入院した回数だろう。宇宙戦争が始まるというのは、イコール精神的にヤバくなってくることで、治ってシャバに出てくることを終戦と捉えているのではないだろうか。

となると、Aはまだ精神病院に入院していることになる。調べてみると、決められた日だけは、外に電話をかけても良いらしいのだ。それを確認するために、Aの実家に電話をかけてみた。お母さんが寂しそうな声で、

「出かけています。しばらく戻りません」

と言っていた。

Aはまだ、病院のベッドの上で、宇宙のそこかしこにミサイルをぶっ放している最中なのだ。他人事だからではなく、本気で僕は、気がすむまでやればいい、と思う。中途半端な形で社会復帰したとしても、同じことを何度も繰り返すだけだろう。

ただ気になるのは、冒頭で「今回の宇宙戦争はとんでもない局面を迎えている」と言っていたことだ。「今回は長引きそうだ」とも言っていた。精神に異常をきたしても、無意識がそういったことを察知するのだろうか。

会わなくなって八年が経過していた。その間、僕にはさまざまな出来事があったのに、Aは、頭の中で宇宙戦争をずっと繰り返していたのだ。精神科医が患者に触発されるという話がある。今、この原稿を書いていて、誰かに生命を狙われているような気が、していないでもない。

題
ドヤ系サイコの渦
人生解毒波止場マンガ版スペシャル!!
根本敬
ジャイアント馬場そっくりなのに身長が150センチしかない親父
ホテルまつかさ
誠
犬はいつでも友達だ
この本の物言いに倣えば「サイコ」ですが、そのサイコとしての「イイ顔」の親父の特にレベルの高い人らの渦がドヤ街なのであります
「文盲」が悔しいので自分で字を発明した親父
ドシャ降りの雨の中、水たまりに顔を半分沈めながら熟睡する親父
ガーゴー
ザー
ブツブツブツ
熟睡の名人
え、江川の野郎許せねえ いつまでもたってても
20年間ずっと江川小林問題を怒り続ける親父
GIANTS 30
本人にしかわからぬ文字がビッシリ 日記び?
何やら書き込まれたノートはすでに数10冊
コクヨ NOTE BOOK
※この人達は実在します

宮崎俊次郎さん(52歳・土工・埼玉県出身)

世間には、これらドヤ系サイコの親父らを「社会の底辺に生きる気の毒な人々。酒びたりの生活で頭が変になったのね」と憐憫と差別の合わさった目で見る人が圧倒的多数だが、しかし親父らはそれなりに「妄想」という「宇宙」の中で案外幸福(のんき)に暮らしてたりもするのだ

若かりし日の武勇談の証しである背中の傷は自慢。酔うとヒトに見せる。

半端で稚拙な刺青はもちろん筋彫り止まり

左手ケガしちまった

酔うと天下国家を語る一方、どっちが「右」でどっちが「左」かよく解らない

家族は10年以上前に故郷とともに捨てたが風の便りでは「去年、娘が初の孫を産んだ」という。

小指がない。若い頃、極道で指詰めたと思いきや酔ってからかった犬に食いちぎられただけだったりする

ガブッ

女は口説くものでなく買うものという認識

喋る事の大半は眉唾だが、それが本当だろうと嘘だろうと大した問題ではない!

←この人は一応架空ですが、でも殆んど同じという人はクサるほど実在します→ここをシタリ顔で突っ込んでイイ気になってる奴こそサイコだ。実はよくいるわかりやすい(サイコとして)じじい達

←はなし、ちょっと飛びました

だからといって、言動や行動が突飛だったり過激だったりすりゃあ、いいってもんじゃないのであるが

オラんとこにゃア時々UFOが来てよォ ラム星さつれてってくれんだア

わしゃア前科32犯や。人殺し? おう、殺ったで13人

あたしゃ実は明治天皇のかくし子じゃ

ホテル きよた

めし

どんな親父が「サイコ」として望ましいかといいやァ、例えば其風画伯
通天閣近辺路上にて
にがお絵
男子千五百円
女子供五百円
刺青
七転八起
サイダー
言動はたしかにおかしいが、妄想世界の色とかタッチとか、センスがよい
私はね、軍隊に行ってた時にね
新井白石先生に画を習いました
ハァ
※画伯は3年前の冬、路上で倒れ西成のとあるかの病院に運ばれてそれっきり消息不明。
私には戸籍がないんです
カマキョウ（釜協?）の稲垣釜太郎という男に騙しとられたんだがね、その男は坂上田村麻呂の息子なんです
というとアレが、征夷大将軍!?
七転
結局はサイコったって、その人ならではのプラスアルファーというか、何ンかがないと…まァようするに、人柄ですよ、サイコったって結局は
これは私のお母さんと私が一緒に描いた絵でしてな、お母さんも画家で上野の美術館にも絵がかざられてます
ハァ、お母さんのおなまえ画号は何ンと…?
……お台所其風です
他人の絵を売りつけてきたところ
七転八起
例えばこの、お母さんイコールお台所という連想がよいではないか。

でまっその人柄からにじみ出るシュールな人情や誠にふれたくて某ドヤ街の夏祭りへと先日、おもむいた…

解放

団結

盆踊り

（のど自慢大会）

ス－ンマヘン、わしゃァこの歌の題名よォ知らんのや。

でも唄てええか？

えーから早う唄えや

—と、一番に登場した親父がいうのでどんなマイナーな曲かと思たら

ほんじゃァ行くでぇ

春椿 咲く〜〜 なのに あなたは帰らない たたずむ…

メチャクチャ有名なあの「釜山港へ帰れ」であった。しかも親父はフルコーラス全部ソラで唄ったのである。題名より歌詞をおぼえる方が大変だと思うが…。

親父角力（スモウ）大会

強いのはハッケヨイ

毎日ちゃんと仕事に出ている土方系の親父。さすがだ。

それにしても酔った勢いで出場する顔の赤い力士も多かった。

フラフラなのに何度も出ようとしてその度に止められるアル中の老人

やめい！

次わしや

「さァこれから優勝決定戦」が始まりといってるそばから「わし出てええか」と土俵に上ってくる親父

「靴下脱いだ方がええで」という注意も耳に入らず、はいたまま斗い親父負ける

親父続出

賞品のスイカ

土俵はゴザ

ところで盆踊りの終盤、根本のところに寄って来た親父がいるのだがよく見ると頭が陥没していでる。

アン…

あっ

わしゃアもう帰るで 写真撮ってくれておおきにな

1等というのである。

え、あ、ハア？

ほんじゃアで

「写真なんか撮ったおまえはないのに」と根本は思った…

とらせて下さい

カシャ

で、これは後からわかったのだが、同行したカメラマンの直崎君が実はその親父の写真を撮っていたのだった。根本と直崎君では骨格も体格も顔の造りや大きさも全く違うのだがカメラを持ってたので同一人物と思ったのだろう

まア、この街では自分を見ても自分とわからない親父もいるのでそれを思えばまだ上等というものだ

やきとり

つくね

うどん

あっ、おっちゃん映っとるで

えっ、めっ？ 誰がァ？

？

ドヤを撮ったテレビのドキュメント

ところで、ドヤ街には、路上で寝ている人が多いが、どうしてだか最近わかった。

実はこうして寿(横浜)山谷(東京)新宿西口 釜ヶ崎(大阪)等々、仲間同士で交信しているのだ。彼らこそイーるーえっさんの魁(さきがけ)である

実は寝ながらネット・サーフィン中

それはそうと、最近気付いた事。よく産まれたての赤ちゃんを猿に似てるというが、猿というよりアレはむしろドヤ系の親父そのものである。
オギャー!
50年間顔のかわらないじじい
で、祭りだが、盆踊りや各イベントに参加する親父も良いのだが、
ワー
行けや
左や
右や
このじじい達だって昔は全員赤ちゃんだったのだ。凄すぎる事実だ!!
絶対にそういうもんに参加せず、関心も持たないで、隅で悪だくみしてる親父の方がイイ顔としてのレベルが高いのである。
ほんでよーオラよー
キヒヒ
ビール
モルツ
↑ちょっと不良の入った元・赤ちゃんなかけ
でもって私は、そんな中の一人、特に元・赤ちゃん度の高い親父が凄く気に入ってしまいました
この絵じゃ伝わらんかもし
だから、その日はずっとその赤ちゃん親父に注目していた
ところが夕暮れ時つい見失ってしまったのです
さぁこれからつなひきやるでぇ

そうこうするうちに、その日のメインイベント親父綱引き大会が始まった

ヨイッサー

ウオォー

オー

ウグァー

そして…

ハイ、もう遅くなったさかい、今年は3対3の引きわけや、決着はまた来年 ほな終りや

ちえっ

なんや

皆さんがそれぞれの方向へ散って行ったあと、地面に何やら…

さあ帰ろ

ん!?

よく見たら何ンと、あの赤ちゃん親父が寝ていたのであった

オーエス オーエス

すげえ この親父 皆んなが綱引してる足元でずっと寝てたんだ

こいつこそMr.元赤ちゃんだ!

ガァアー ゴォーガァ

もちろん作り話でなく実話だ

エビスさんの夢日記

シュールレアリスムか？・それともたんなる狂気の夢か？

蛭子能収（漫画家・特殊タレント）

佐良直美の巻

○月△日

わりと空いている電車に私は乗っていた。ポツンポツンと立っている人がいて、私もその一人だった。私は吊革に手を掛け、倒れそうになるからだを支えていた。この電車は傾いて走っているのである。

ゴトンゴトンと音を立てて電車は走る。右に傾いていて、もう少しでからだが倒れそうになっているのである。

「だめだ、このままでは倒れてしまう」と私は思った。他の乗客もおそらく危険を感じているにちがいない。

そのうち電車の走るスピードが遅くなった。ゆっくりゆっくりになり、やがて電車は停まった。

傾いて停まった電車から乗客がぞろりぞろりと降りた。私も降りた。傾いた電車から降りてホッとした。降りた乗客もホッとしたのであろう。皆、歩いている。本来なら電車が進むはずの方向に歩いているのであった。

私も歩いた。皆と同じように歩いた。歩いていると私の二、三人先を佐良直美が歩いていたのである。佐良直美というのは皆さんご存知だろうか。私が十八歳の頃にヒット曲をガンガン飛ばしていたアイドル歌手なのだ。「世界は二人のために」が大ヒット。その後、「私が好きなもの」とボサノバ調の歌をヒットさせた。そしてさらに「いいじゃないの幸せならば」で、たしかレコード大賞を取っている。私が大好きな憧れの歌手だったのである。

ちょっと大人になった佐良直美が私のすぐ前を歩いていたので、私はドキドキした。ドキドキすると同時に、私は佐良直美に接近したくなった。

私も今はテレビに出ている身である。佐良直美はテレビを見ているだろうか？　テレビにときどき出ている私のことを知っているであろうか？　そのことを聞きに、私は佐良直美のところへ向かって急ぎ足で歩いた。

私は佐良直美の真横に来た。横から見ると佐良直美は中年で少し太ってはいるけれど、顔は「世界は二人のために」を歌っている頃とほとんど変わりはなかった。

私は恥ずかしかったけれど、佐良直美に顔を向けて「あのー、昔からファンでした。私もときどきテレビに出てるんですけど、私のこと知ってるでしょうか？」と言った。

すると佐良直美はニコッと笑って頷いたのであった。「そうですか、どうも」と言って、私は後に続く言葉がなく、そのまま佐良直美の顔を見ていると、彼女は正面に向き直って歩いていった。私も

歩いたが、少しずつ佐良直美から離れていくのであった。
このままどこまで歩くのか分からないけど、大勢のサラリーマンに交ざってずっとずっと歩き続けるのである。

片岡鶴太郎の巻

○月○日

沼があって、私は歩いていた。小さな沼だったのだが、真ん中にあぜ道があった。そのあぜ道を沼に落っこちないように私は歩いていたのである。

私の前を片岡鶴太郎が歩いていた。片岡鶴太郎が私に言った。「蛭子さん暑いね。泳ごうよ」と言った。私はなぜか逆らえなかった。「ええ泳ぎましょう」と言った。それも満面の笑みを浮かべて言った。

私はその場で服を脱ぐと、パンツ一丁で沼に飛び込んだのであった。ズルズルと入り込んでいった。失敗したと思った。泳ぐというより沼底に沈むという感じだった。もがいていると片岡鶴太郎の顔が見えた。片岡鶴太郎はぜんぜん泳いでいなかった。あぜ道に、服を着たまま立っていた。

「助けて!!」と私は叫んだ。すると片岡鶴太郎が言った。「蛭子さん、早く行こうよ」って。私はもがきながらどんどん沈んでいった。

毒魚の巻

○月×日

私はいつもの道を歩いていた。もう何度も何度も通った道である。だけど何度歩いてもその道を通るのは怖かった。道幅が三〇センチくらいしかなく、右側には壁があり左側は崖になっているのである。

崖といっても二メートルくらいしかないのだが、それでも落ちるのは怖かった。なぜいつもその道を通るのか私にはさっぱり分からなかったが、今日も私はその道を恐る恐る歩いていたのである。

隣に住んでいるサラリーマンの安田さんと一緒だった。私は安田さんと何も喋ることなく、恐る恐る歩いていた。

しばらく歩いていると造船所へ行ける木のドアがあった。安田さんはドアを開け「そいじゃ」と言って造船所へ行ってしまった。

私は一人ぼっちになり、そのまま歩いていると海へ出た。砂浜はきれいとは言えず、あちこちに廃材が

散らばっている。船を造る油の臭いまで私の鼻に染み込んでしまった。

私は廃材の中にいい物がないか探して歩いた。黒い固まりがあったので、座ってよく見ると魚が死んでいた。猫くらいの大きさの黒い魚がアチコチで死んでいるのである。

私は一匹の魚の死体の横に寝っ転がって息を吹きかけた。

「生きろ、生きろ」

心の中で念力を使ったのだ。ふう、ふう、と魚に向かって息を吹きかけた。かけ続けると魚がピクッと動いたのである。そして砂の上を飛び跳ねた。私は自分の念力で魚が生き返ったので嬉しくなり魚をつかみ、海に戻してやることにした。

海にはボートが浮かんでおり安田さんが乗っていた。私が魚を海に放してあげると、安田さんがオールでその魚をバシッと叩き殺したのである。何回も何回も安田さんはオールで魚を叩いた。

「安田さん、かわいそうじゃないですか」と私が言うと「毒だから」と言う。魚は毒だからと言うのである。

せっかく私が助けた魚を安田さんが殺してしまったので、私は安田さんを信用できない人だと思った。しかし安田さんは、「家まで送りますよ」と私に言い、私は安田さんのボートに乗り込んでいたのである。

安田さんはオールを漕ぎ、静かに静かに海の中へ入っていった。もう私はこの人に身を任せるしかないと思った。悪い方向へ進んでも、オールを握っているのは安田さんなのだからと。私は観念してしまった。

鈴沼二郎の巻

○月□日

廊下が騒がしく、なんだろうと思って出てみると、競艇選手の鈴木美幸が引っ越しをしていた。廊下に荷物をズラリと並べて、ちんたらちんたら運んでいる。私は鈴木美幸に近づいて「引っ越すんですか？」と聞いた。「ええ」と鈴木美幸が言って、さらに「蛭子さんに本を貸していましたよね」と言った。「あっ、そうだ」と私は言い、さらに「すぐ持ってきます」と言って自分の部屋へ戻ってきた。

机の横に平積みしてた本のなかから菅沼二郎が作者となっている本を取り出し、それを再び持って廊下へ出た。そして鈴木美幸のところへ行き「これですね、どうもすみませんでした」と言うと、鈴木美幸は黙ってその本を受け取り、廊下に置いてある本棚の中のズラッと並んだ本の群れの中に、その一冊を差し込んだのであった。

私は差し込んだその本を見ていたのだが、菅沼二郎という作者名が、差し込んだ途端に鈴沼二郎という作者名に変わってしまったのだ。これはおかしいと思った。菅沼が鈴沼に変わった。菅が鈴。鈴は鈴木美幸の鈴である。鈴沼二郎。作者が鈴沼二郎である。鈴木美幸と関係があるんだろうか？と考えながら本棚の中にある他の本を見ると、なんと作者の名前が皆、鈴沼二郎ではないか。『都市博物館』『黒いリンゴ』『やさしい部長』『名もなく貧しく美しく』。小説だかエッセイだか分からないけど、すべての本の作者が鈴沼二郎なのだ。

鈴沼二郎って鈴木美幸のことなのだろうか？　私は、ゆっくりと電気スタンドを運んでいる鈴木美幸に聞いた。

「あの鈴沼二郎って鈴木さんのことですか？」。すると鈴木美幸はニヤッと笑った。笑っただけで何も言わない。そしてゆっくり電気スタンドを上に持ち上げてスイッチを入れると、黄色い明かりが鈴木美幸の顔を照らした。

明かりで照らされた顔は、もう鈴木美幸の顔ではなくなっていた。坂上二郎の顔だった。坂上二郎は電気スタンドを持ち上げたまま、ゆっくりゆっくり階段を下りていった。私も坂上二郎の後ろから階段を下りた。手には鈴沼二郎の本を持っていた。

階段を下りると黒塗りの乗用車が停まっていて、その乗用車に坂上二郎は乗った。私も続けて乗ろうとしたのだが、手に持っていた鈴沼二郎の本が手から滑り地面に落ちてしまったので、私が拾おうとしていると、黒塗りの乗用車は

発車してしまった。
坂上二郎は後ろを振り向き笑っているので、私はそばにあった競艇用ボートで追っかけた。ハンドルを片手で握り、もう一方の手はスロットルレバーを握っていた。水しぶきが上がり、私は猛スピードで追っかけた。自分がこんなに上手にモーターボートを乗りこなせるとは思ってなかったので、自分で自分の運転に驚いてしまっていた。ビルとビルの谷間を得意になって運転していたら、ターンに失敗して全速でコンクリートのビルにぶつかってしまった。

踏切りでポンの巻

○月◇日
前を若い男がふらふらしながら歩いている。私はこの男の歩き方がおかしいと思い、後をつけていった。
男は顔を少し左右に振りながら、足取りは酔っぱらいのようにふらついていた。
この男の歩き方は、真っ昼間にしては尋常ではないと思ったので、私はこの男を追い抜いて男の前に出た。そして振り返り男の顔を見ると、その若い男は顔に面をつけていたのである。しかも自分で作った手作りのお面である。そのお面には鼻も口もなく、ただ赤いマジックで子どものいたずら書きのような落書きがされていた。何を書いているのかさっぱり分からない。まるで何かにとりつかれて書いたようなマジックの線である。私はそれ以上にその男の顔を見ることはできなかった。
私はすぐに前を見ると急ぎ足で歩きはじめた。歩くと踏切りが鳴った。遮断機が降りてきた。そこへ自転車に乗ったおじさんがやってきた。このおじさんもふらふらしている。酔っ払っているようだった。そして降りてきた遮断機を自分の手で上げると、自転車ごと線路の中へ入ってしまった。しかもふらふらしているので、線路の上でバタンと自転車ごと倒れてしまったのだ。
「危ない」と私は思った。しかし助けにいこうにも、からだが動かなかったのだ。

自転車のおじさんはふらふらしながらも起き上がり、自転車のハンドルを持って、サドルにまたがろうとした。しかしそこへ黄色い西武電車がピーッと警笛を鳴らして走ってきた。電車は止まらずに自転車のおじさんと自転車をポンと跳ねて進んだ。

ああ!! だめだと思う私の隣にさっきの面をつけた若い男が頭をふりふり立っていた。

電車が通り過ぎ、遮断機が上がると、男はふらふらしながら私の前を歩いていった。

小便を口に含むの巻

○月□日

日本テレビのスタジオで、私はクイズの解答者として座っていた。テレビカメラの前で渡辺正行がパンツを下ろしてウンコしている。しかも長いのが尻からぶら下がっているのである。私は解答者席で小便を口いっぱいほおばっていた。この小便が私の口の中に含まれている間中、解答権があるらしい。

司会者は誰だか分からない。見たことのない普通の通りがかりの人のようでもある。くたびれた背広を着た、その司会者が問題を読んだ。

「富士山の下にある小屋は何の小屋でしょうか？」

私はすぐに分かった。早押しボタンを押した。しかし、押せども押せどもランプが灯かない。口から小便がこぼれないように気をつけながら、私はボタンを押し続けた。そしてようやくランプが灯いた。

司会者が「はいエビスさん」と言った。

「ガイコツをひまわりの葉っぱでふくところ」と答えようとしたのだが、小便を口の中に含んでいるのでうまく言葉にならない。その様子を見て観客席から笑いが起こった。

客が笑うので私は得意になって「ガイコツを……」と喋り続けた。喋り続けていると口の中の小便が少しずつこぼれてしまう。小便はこぼれてしまい、私の口の中はすっきりしたが、服が小便でグジョグジョになった。

お客がまたいっそう激しく笑った。クイズの解答権は失ってしまったが、お客が笑うのを見ていると私もそんなにガッカリするということはなかった。

日本一あぶないホラ話

異常な土方集団のなかで唯一まともだった山岡さん。さて、頭の中はいかに……

宮地光（フリー編集&ライター）

「九秒七九か。ベン・ジョンソンなんかたいしたことねぇな」

ボソボソと山岡さんがつぶやいた。スポーツ新聞の一面には、右腕を誇らしげに高く突き上げて走り抜けるベン・ジョンソンが大写しになっている。

八年前の夏、東麻布にあるマンション建設現場の詰め所。三時の休憩時間に、土方仲間が缶コーヒーを片手に三々五々くつろいでいる。その日はたまたま、僕の前に山岡さんが座っていた。これまで言葉を交わしたことはない。ソウル・オリンピックも佳境に入り、前日の男子一〇〇メートル決勝でベン・ジョンソンがカール・ルイスを破って優勝したばかり。このときは、まだ筋肉増強剤によるドーピングが明るみに出ていなかった。

「たいしたことないったって、世界新記録だよ」

「ワシが東京オリンピックに出た頃はなあ、もっと凄い選手がいっぱいいたんだよ」

「えっ、山岡さんて東京オリンピックに出たの？」

「出たよ。予選で負けて決勝には出られんかったけどよ」

彼はショボくれた目を僕に向けた。東京オリンピックなら五十絡みの山岡さんも二十代だったろうから年齢的にはべつに変じゃないが、身長一六〇センチ余り、ただの短足のおっさんである。しかもガニ股だ。ほんとかよ……僕は、もっさりと口ひげを生やした彼の口元をながめた。

「あの頃は、一〇〇メートルを八秒台で走る奴が千二百人はいたなあ……それに比べたらベン・ジョンソンなんかクズだな」

八秒台。千二百人。おいおい、この人、ちょっとヤバイよ……僕の頭の中でアラームが鳴りはじめた。

選手生命を断たれた理由

その頃、僕はT建設傘下のビル建設現場で土方として働いていた。長期のインド旅行から帰ったばかりで頭は完全に旅行ボケ、まともに大学に行けないでいた。これといってなすこともなく、友達に誘われるままこのアルバイトをしていたのだ。

ビルの建設現場は、土木・設備・内装関係の中小さまざまな業者が入れ替わり立ち替わり出入りする、職人たちの寄り合い所帯である。そのなかで土方は、建築基礎の穴を掘る根切りに始まって、建設工程で生じるガラ（不要物）の片付けに至るまで雑用のいっさいを行う気楽な単純労働だ。そのぶん、出ヅラ（日当）も八千～一万円で他の専門職よりかなり安い。人生の吹き溜まり的イメージのあるとおり、それぞれに〝ワケアリ〟の人ばかりで、どこかしらダルな空

気が流れている。だから土方はどの現場でも影の薄い存在と相場が決まっているのだが、なぜかここに限って押し出しの強い個性的な輩が揃い、土方がいちばん威張っていた。
　親方は新宿のフーテン出身で如才のないイノクマさんで、この人の下にひと癖もふた癖もありそうな面々が顔を揃えていた。身長一四〇センチ足らずで、排水管の中を腰をかがめずに走れると噂されていた古株でやぶにらみのリョウさん。学生運動の幹部クラスの闘士だったが、味方の投石が頭を直撃して以来ちょっとネジのゆるんだというお人好しのムラさん。強度の薬物中毒で、つねに十数種類の錠剤をカバンに入れて持ち歩くクレさん。同じくシャブ中で、チンポに真珠をネックレスのごとく数十個入れているヤマさん（酔っ払うと、それを剥き出しにして追いかけてくる）。家系は由緒正しいのだが、むちゃくちゃな酒乱のため代議士秘書をクビになったイケさん。女子学生に手をつけて大学を追放された仏文学者崩れのオカさん。土方で食いつなぎながら漫画家をめざすカズさん……など、ろくでもないが愉快な連中である。そもそも半数以上が大学出というのも、妙な土方集団だった。
　そうした濃い人びとのなかにあって、寡黙でまじめに仕事をこなす山岡さんは、唯一〝まとも〟な雰囲気の人だったのだ。
「俺はなあ、金メダル最有力って言われとったんだが、ある事件に巻き込まれてオリンピックに出られんかったんだよ。ストックホルムの競技会でな、スタートと同時に飛び出したワシは先頭を走っとった。そしたらな、ゴール直前で誰かがワシの足をピストルで撃ちおったんだ。ワシがあんまり速いもんで、他の国から恨みを買っとったからなあ……。そのせいで、ワシはそのまま日が暮れるまで放っておかれたんだよ。出血多量で半分死にかけてなあ。それで選手生命を断たれたんだよ」
　遠い目をしながら、山岡さんは訥々と話す。さっきは予選で負けたと言ってなかったっけ？　とも思ったが、話がここまでデカイとそんな矛盾は些細なものだ。ホラなのはすぐにわかるが、本人はいたって真剣である。不安というか、恐怖感もないではなかったが、怖いもの見たさの感情が僕の中で急速にふくらんだ。
　休憩時間が終わる頃、ひとしきりしゃべった山岡さんは「今でもときどき、撃たれた傷痕が痛むんだよ」と満足げに太ももをさすってみせた。

元大リーガー、ドーバー海峡横断す！

　否定もせずに話を聞くせいか、山岡さんは僕が気に入ったみたいで、休憩時間になるとさりげなくそばに座ってくるようになった。
　数日後、彼の手にしたスポーツ新聞には、日本人女性による「ドーバー海峡、遊泳横断に成功」の記事があった。
「ドーバー海峡か。懐かしいなあ。ここは海流がキツくてなあ……」
「山岡さんは、ドーバー海峡も横断したことあるわけ？」
「ああ、三回ほどな」
「だけど、あそこって距離はそれほどでもないんでしょ」
「そうだなあ、やっぱりいちばん大変だったのは太平洋を横断したときかなあ」
　ワハハハ、太平洋遊泳横断！　スケールがデケエ。
「日本からアメリカの西海岸まで渡ったんだがな、まるまる三週間かかったよ」
「食事はどうしたの？」
「握り飯と水筒を布で包んでな、頭に載せてヒモで縛りつけたんだよ。そしたらアゴの下がヒモでこすれてなあ……塩水が滲みて痛くて痛くて、それに往生したよ」
　握り飯を頭に載せて！　ディテールの細かいところが泣かせるぜ。
「だけどさあ、鮫がいるでしょ。怖くなかった？」
「それなんだよ。棍棒を背中に担いでな、鮫が出るたびに殴り殺したんだが、しまいに棍棒を食いちぎられてなあ……海岸にたどり着いたときには、右足のふくらはぎが半分えぐりとられとったよ」
　僕が適当に合いの手を入れれば入れるほど、山岡さんのホラ話は気宇壮大なものへと広がっていっ

た。まるでオデッセイの冒険譚のようだ。僕が聞くことのできた山岡さんの物語群を分類すると、次の三つに大きく分けられる。

①スポーツ・ヒーローもの
②未知の世界の冒険もの
③科学的大発明もの

ストックホルムで狙撃された話は①の典型だろう。この他に、元大リーガーだった彼がエースで四番バッターとしてワールドシリーズで大暴れした話がある（どのチームに在籍していたかは決して教えてくれない）。いちど、新しくバイトにやってきたモヒカン頭の兄ちゃんに「山岡さんって昔、大リーガーだったんですってねえ」と真顔で話しかけられて困ったことがあった。

握り飯と棍棒を担いでの太平洋遊泳横断は、①と②の中間型か。②にすっぽり収まる物語としては、ボルネオの原住民に請われて人食い大蛇を退治したお話（あんたは快傑ハリマオか）、それとアフリカのジャングルで巨大な吠え猿（これも人食い）を退治したお話がある。

感染するホラ話

さて③のカテゴリーだが、これを話しだすのにはパターンがあって、決まって〝コンクリート打ち〟のときだ。

〝コンクリート打ち〟は、ビルの外壁や内部の間仕切りをつくるために、いっきに生コンを打ち込む大掛かりな作業である。各階ごとに、ポンプ車を使って型枠に大量の生コンを流し込むのだ。このとき生コンの圧力で型枠が外れてしまい、何トンもの生コンが室内に溢れ出すことがある。これをシャベルですくって片づけなければならないのだが、生コンはドロドロだから作業がはかどらず難渋する。

ここで真打ち登場である。

「ワシがすぐに固まるコンクリを発明したときは、世界中から科学者や建築関係者が訪ねてきてなあ……。みんな、『お願いだから、その技術を教えてくれ』言うてな、もう血まなこになっとったよ」

山岡さんは建築工学の権威でもあった。

最高に傑作だったのは、T建設の若手現場監督の一人、吉村クンがストレスのせいで頭が少しテンパッたときのことだ。型枠が外れて大量に溢れた生コンを僕たちはシャベルですくっていた。しばらくどこかに姿を消していた吉村クンが、コンビニの買い物袋を手に提げて現れた。そして、おもむろにスプーン印の砂糖を取り出し、目の前の生コンの山にふりかけはじめたのだ。

唖然と見守る僕らに、彼が説明する。

「いやあ、コンクリに塩を混ぜるとなかなか固まらないっていうから、砂糖を混ぜるとすぐに固まると思って」

何トンもの生コンの山に、ひと袋の砂糖。吉村クンもついに頭にきちゃったか、と思ったそのときだ。

「ワシがすぐに固まるコンクリを発明したときはなあ……」

山岡さんと吉村クンはしばらく建築工学の将来について熱く語りあっていた。

山岡さんの消息

それからしばらくして土方のバイトを辞め、就職して三年ほどたった頃のこと。新宿の酒場で偶然、元全共闘幹部のムラさんに出くわした。当時の現場を懐かしんで酒を酌み交わすうち、話題は山岡さんの消息へと向かった。

「ああ、山岡さんね。あの人、こないだコンクリート打ちのときにバイブレータを使ってたんだけど、痔が破裂しちゃってさあ……もう下半身血だらけだよ。そのまま病院に行ったけど、それから現場に来てないなあ」

バイブレータというのは生コンをならすために使う巨大な電動コケシのようなものだが、その振動で痔が裂けたらしい。

その後の山岡さんの行方は杳として知れない。今もどこかの建設現場で壮大なホラ話を語って聞かせてくれていることを願ってやまない。

暴走海峡ミステリーツアー

part 4

宅八郎インタビュー！

復讐山脈!!

前略。宅八郎さま。
その後いかがお過ごしでしょうか？
近況を知りたく、また復讐のノウハウをご教示いただきたく、
取材を申し込みました。
なぜマスコミ人は、あなたに恐怖を感じるのでしょうか？

取材▼大泉実成（ノンフィクション・ライター）

photo▶山田鎮二

宅八郎とは、ときどき長い話をする。その時、僕がどうしても思ってしまうことが一つある。それは、プロレスのメインイベンターと、永遠にメインイベンターになれない人間のことだ。もちろん、前者は宅君で、後者は僕である。まあ僕はプロレスのオールドファンにすぎないから、こういう認識は今の格闘技ファンにはもの笑いの種にすぎないのかもしれないが。

もちろん、僕は自己卑下でこういうことを書いているわけではない。延々と前座で試合を続けるように、こういう文章をシャーペンでコリコリ書き続ける作業を、何のかんのグチリながら、結局僕は好きなのだ。しかし、宅君は、そこにある場が形成されると、いっきに主役に踊り出る。ときには思い切りのヒールに、ときには思い切りの善玉になる。ときにはプロの芸人すら楽々と喰ってしまう。最高だ。しかし、しんどい。メインイベンターは皆、ものすごい努力家だから。このインタビューでも彼の努力(笑)の一端が紹介されている。

宅八郎が初めて僕に会いにきたのは、一九八九年も終わる頃だった。その頃彼は、無署名で、雑誌『SPA!』のライターをしていて、後に編集長になった鶴師一彦がいっしょだった。

それは「'90年代の90人」という特集記事で、何を勘違いしたのか宅君はその中に僕を入れてしまい、しかも延々四時間にわたってインタビューしていったのだ。後で彼の取材ノートを見せてもらって驚天したのだが、彼はそのインタビューテープを全部自分で起こし、しかもあちこちに赤線が引っぱってあったり、青い波線が踊っていたりした。たかが四百字一枚程度の紹介記事を書くのに、ここまでやるライターはまずいない。しかも記事は、インタビューの内容とはほぼ何の関係もない、読者向けの完全な紹介記事になっていたのだ。こいつはとんでもないパラノイアだな、と僕は思った。しかも、恐ろしく社会性の高いパラノイアだ。

この時僕は宅君に、当時取材していた豊田商事事件や、エホバの証人輸血拒否事件の話をしたと思う。メディアの取材がどれだけ杜撰でいいかげんか。物語を作ることと誰かを血祭りに上げることに腐心して、それ以外にはいかに興味がないか。

しばらくして、彼から「今度、宅八郎っていうペンネームにしようと思うんだけど」という電話がかかってきた。『宅八郎』である。なんて趣味の悪いペンネームなんだ。僕はあきれ果てたが、黙っていた。何というか、僕はそういう性格なのである。

しかし、僕の予感に反し、宅八郎はメディアで大暴れをやりはじめた。『SPA!』での連載は、常に「最もつまらなかった記事」の堂々一位を走り続け、TV局の楽屋で小峯隆生(当時『週刊プレイボーイ』編集者)に脅されたとなれば、番組本番で『週プレ』を破ってみせ、下半身スキャンダルを『週刊ポスト』に書かれれば、その記事を書かせた編集者、小牧三平のプライバシーをとことん暴き、ゴールデンタイムのTV番組のレギュラーになり、頭の固ってしまった小林よしのりに公開討論の決闘状を叩きつけ、やはり頭の固まってしまった切通理作(評論家)をからかいつづけた。まったく、宅八郎の何がそんなに恐いのだろう。ただの、筋を通しすぎる男に過ぎないのに。ああ、だから恐いのか。

その間、僕はずっとこういうところで、シャーペンでコリコリと原稿を書きつづけていたのだが、宅君の行動で、一つだけよ

くわからないことがあった。それは、大量の時間と金をかけてまで、バカな編集者を追いつめるという作業である。
　フリーで仕事をしていれば、組織の奴隷か出世欲の固まりみたいな、組織エゴと自分のエゴむき出しの大バカな編集者には何人も会う。こういうバカと仕事をしても何もいいことはない。無視して、話のわかる編集者と楽しんで仕事をすればいいのに、なんて無駄なことをやってるんだろう。
　ところが、後にそれが彼の手によって「作品化」(『処刑宣告』宅八郎著・太田出版)されて初めてわかったのだが、結果的にそうした無駄の堆積が、巨大出版社の傲慢な体質を暴き出したり、TVメディアの本当に腐った部分を見せてくれたりしたのである。「報道犯罪の原点がどこにあるのか」。彼はそれを、独自の視点で切り開いて見せたのだ。なるほど、やってることは俺と同じだけど、こいつの方が俺より面白れえな、とつくづく思ったものだった。
　オウム事件のお祭り騒ぎも終わり、宅八郎は休息をとっているように見える。僕は『SPA!』で「小林VS宅」の尻拭いみたいなオウムリポートを現場から送り続けている。コリコリとシャーペンで。しかし、また何か起こればメインイベンターはリングに上がるのだろう。なんというか、宅君と僕はそういう関係みたいである。
　インタビューは、寝静まったかのような宅君を叩き起こし、いきなり自分の行動原理を分析させるところから始まった。

宅八郎氏

宅八郎の行動原理

宅　ボクの、「復讐」や「処刑」といった一連の行動のキーワードは「責任」かな。ボ

クは自分の「責任」も、人の「責任」も、どこまでも追及し続けていっちゃうところがあると思う。自分が復讐なり処刑をする権利・資格があるか、そして、相手は処刑されても仕方ないのかどうかを考える。ボクは、義務とか権利、責任、資格とかには非常に誠実です。

だからこそ、実は自分自身をすごく追い込んでしまっていると思う。ボクが最も処刑したいのはボク自身なのかもしれない。

大泉　『噂の真相』の連載の中でも、宅君は実は自己責任をちゃんと書いてるよね。そのへんは、すごく正直だと思った。

宅　それは正直にやりたいと思うよ。『処刑宣告』に、大泉さんは、業界フリーの人間のルサンチマンを何らかのかたちで宅八郎が果たしている、という文章を寄稿してくれてるよね。

基本的に、ボクが相手をしてきたのはメディア関係者。ヤツらのエリート意識、高慢ちきさはスゴイ。芸能リポーターでも出版社でも、報じた後の責任まで考えてはいない。しかも、てめえは書き放題だけど、逆に書かれることは一度もないと思ってる。人様の家庭にずけずけと土足で入っていくような真似してる人間はさ、何やられたって、文句、言える筋じゃないだろう。

大泉　オウムの記者会見の時に、あまりにも気持ち悪くて、頭、叩き割ってやろうと思った須藤ってレポーターがいるんだよ。

宅　須藤甚一郎だろ。あいつは、女性にインタビューする時に口調が変わるんで、たぶんね、SMマニアじゃないかと、ボクはニラんでるんだ(笑)。

大泉　そういう匂いがするね。

宅　何か、女の芸能人を責めていく時がいやらしいんだ。卑劣さ、ズル賢さなら梨元勝が一番悪質だけど。梨元は嬉々として人を陥れるよね。須藤は性的倒錯(笑)。

それで、たとえば小学館でも宝島社でもいい。何か、ボクがアンフェアなかたちで書かれたとします。この場合、まず抗議をし、反論の場を要求するでしょう。ところが、ここでラチがあかなければ、極端な話、弁護士を介していくしかない。場合によっては裁判までという段階になります。しかし、その場合、会社の顧問弁護士が出てきて弁護士同士の話になる。それだけだよね。

ボクはもともと、メディアの中でのルール違反が許せないところがある。しかし、顧問弁護士同士が話をつけても、実感がまったくそこにない。その時に、何かを「裁いた」ことになるとは、とても思えない。

あえてハードな言い方をすれば、「罪」を背負った人間は裁かれるべきだと思っている。それなら、ボクがこの手で裁く!

もちろん、ボクは違法、脱法行為でガンガンいきますとは言わないよ(笑)。

大泉　逆に筋にこだわりすぎるから、苦労するんじゃないの。

宅　うん。タブーは犯しても、ボクはルールをすごく守る人間だから。誠実さには自信があるなあ(笑)。

恐怖の演出コントロール

宅　被害者意識、被害妄想とは逆に(笑)、ボクは加害者意識のほうが強いんだと思う。相手に責任、取れるのかとか……。「加害妄想」というか……。

大泉　メディアに一番必要なことだね。

宅　でもボクは、そこまで内省を加えたうえで、復讐・処刑をしてるつもりだよ。

ただ、ボクが暴走するとしたら、徹底的ではあるよね。徹底的に調べるとか、徹底

的に追うとか。ほんとに完全主義。

大泉　過剰なわけでしょ、やっぱり。パラノイア（偏執狂的）でもあるでしょ。

宅　でも、スキゾ（分裂病的）っぽくもあるよ。

大泉　スキパラなんだ。能力としてはパラノイアを発揮できるということなんだね。

宅　うん。必要になった時には、ボク、最大限のパラノイアになる。

大泉　相手を追尾したり、待ち伏せしたりとか、ありとあらゆることを戦略的にずーっと考えてるわけでしょ、その時は。

宅　他のことも考えてるけどね（笑）。女の子のことやいろいろ考えてますよ（笑）。

大泉　それは考えてるだろう（笑）。でも、白日夢みたいなイメージの中でも、それが続くことがあるって以前言ってたよね。

宅　ボクの悪夢は、昔からすごいから。失恋した時、二年ぐらい、毎日、夢見ちゃったり、すごいよ。そういう話をすると、ストーカーみたいで怖がられそうだけど。

大泉　宅君はストーカーじゃないよ。でも、追いつめる時のやり方が誤解されそうだ。

宅　それは、ボクが人間の恐怖ということを直感的に知ってるからだと思う。人が嫌がることをボクはよく知っている。人の弱点も見逃さない。でも、ボクはいたずらに人を追いつめたりはしない。

大泉　宅君が動く時には、必ず必然的理由があるからね。だから、パラノイアの時は、とことんパラでいく。そのへん、自分でコントロールできてることは、俺も認めるよ。でも、他人の恐怖の壺がなぜわかるのかな。

宅　それは、ボクが悪夢に苛まれたり、自分が思い悩む人間だから。嫌な思いとか、痛みみたいなものに敏感なんだよ。被害者意識の過剰さとは違うんだけど。

大泉　それが逆に戦闘能力に転化されているんだね。

宅　人はなぜ、追われること、調べられることを恐れるのか。かなり昔から情報化社会と言われている。あらゆる情報が世の中に氾濫している。だからこそ、個人情報を摑まれることを、人は一番恐れると思う。

　調べること、追うこと自体は罪にならないんだけど。あとは、復讐処刑の作業なら、恐怖の演出コントロールに入るよ。情報を、徐々に相手に伝えていく。それは、いっきに伝えるんじゃなく、リズムを創る。

　不安感の創出。まるで精神科医の「治療と逆の作用」を与えていく。それが、ボクにはできる。ボクは『羊たちの沈黙』のレクター博士だよ（笑）。これは、以前、二十歳の女の子に言われた言葉なんだけど、「ボクはものすごく常識はあるけど普通じゃない」人間なんだよ（笑）。

追っていく快楽

大泉　何か具体的なトラウマでもあるの？

宅　いや。むしろ、追う者、追われる者——犯罪を描いた推理小説や映画が好きだったとは思うね。そうした影響はあるかもしれない。追跡、尾行、逃亡あるいは愉快犯みたいなイメージがある。それを現実行動で表現にしていく感じ。確かにそうした快楽はあるんだ。

　もう一つ。ボクの場合、「追う」ことは「調べる」ことの集合の中に入ってるように思う。人の現在と過去をボクは追う。

　人の時間と空間。人間関係というような空間的な広がりと、その人が生きてきた時間的な背景をすごく知りたい。

　それは、フロイト的作業だし、哲学者ヴィトゲンシュタインの言う、生のコンテキ

スト「生きてきた文脈」を見てみたい気がするんだよ。その過程、情報を紡ぎあわせていくことで、何かを組み立てたい。

大泉　少しずつ調査でわかっていくと、ゾクゾクするの？

宅　ゾクゾクする。それで、推理を組み立て出す。一個ずつ情報が繋がっていく。ただ、仮説がどうしても結びつかない場合やひっくり返ることがある。そういう意外性を発見した時にも、非常に快感がある。

大泉　ノンフィクション・ライターの快感だよ、それは。オレも、ゾクゾクするもん。あと君は、いいカンしてる。

宅　そのとおり。直感と直観に尽きる。推理の紡ぎ合わせ方もね。で、調査運がいい。

それと、これは特殊能力だと思うけど、ものすごいよ、ボクの記憶力って。

大泉　それは視覚記憶、聴覚記憶？

宅　ボクは両方かもしれないなあ。だから、すべてに関しての記憶とか、辻褄っていうのは、絶対に見逃さないよね。

ただ、ボクはものすごい精神的、時間的、金銭的エネルギーを使う。以前、大泉さんは「宅君はオレの五倍は才能がある」と言ってたけど、エネルギーなら百倍くらいだよ(笑)。本当に相手に身を捧げんばかりのエネルギーを使う。

大泉　あなたのほうが強迫観念が強いと思うよ。完璧に、こうしたいという……。

宅　三代先まで遡って家系を調べたり(笑)。心理的内面までは調べることはできないけれども、手がかりがいくつかあれば、自宅であれ、家族関係であれ、発表していない電話番号もわかるし……。

大泉　それはすごいな。

宅　でも、大泉さんの調べ方とボクの調べ方というのは、また違うんだろうね。

大泉　違う、違う。

宅　ボクは「犯罪的」なんだ(笑)。

大泉　でも、もし犯罪的な方法でしか調べられなくて、どうしても知りたければ、潜入でもなんでもやるけどね、俺も結局は。

宅　でも、尾行、監視は大変だよ。

大泉　やるよ、もし、それが必要なら。

宅　法に触れない範囲の調べ方というのは、ボクはほとんど知ってると思う。興信所がやってる程度の、厳密に言ったら法に触れることも知ってますけど……。

　ただし、よほどのことがなければ、恨みにせよ愛にせよ、人のこと調べないよ、ボク。だって、調べ出すと、終わりなき迷宮に入っていく部分はあるから。

大泉　小峯さんの場合は、小峯さんが大仰にビビッて終わったんでしょ。

宅　ただ、小峯さんの時は、いわゆる調査だけじゃなくてさ、隣人化計画というとんでもない計画を考えちゃった。

　ボクの場合、ある才能があるんだとしたら、人が思いつかないことを思いつく才能、そして実行に移す行動力、この二つに尽きる。キリストの「汝の隣人を愛せよ」って言葉から、パッと小峯の隣に住む隣人化計画を思いついたんだけど(爆笑)。

大泉　でも、そいつをほんとに知りたかったら、そばに住むしかないもんね。うん、オレと宅君が似てるのがよくわかった。似てるよ、ほんと(笑)。オレが切れると、宅君みたいなことをやるんだろうね、きっと。エホバ（エホバの証人輸血拒否事件。大泉氏は舞台となった病院に潜入取材している）の時は、ほんと、そんな感じだったけど。ときには法も超えていいと思っちゃうけどね、そう思える事件の時は。

宅　本当はボクより大泉さんのほうが犯罪的なんじゃないか(笑)。

大泉　オレは、もっと宅君を見習わないといけないかもな。相手に対して一番効くことをやらなきゃいけない。ただ、相手をバカと思っちゃうと、こんなバカ相手にしてるより、他のことをやったほうがいいやと思っちゃうんだ。

宅　でも、『処刑宣告』の寄稿文で、後になって、宅君がバカどもを相手にしていく行為の真の意味がわかってきたって……。

大泉　うん、書いた。

宅　あと、快楽でいえば、車での尾行は、追っていくこと自体がドライブ気分で楽しいの(笑)。すぐビデオの撮影したりしますからね、ボク。あとで確認、追憶が可能なように。その時は、非常にリアルで、自己陶酔していることを感じるよ。

　最近じゃ、そんなビデオばかり家で見てて、TV番組なんか全然見てない(笑)。

大泉　待ち伏せでもなんでも、車が一台あると全然違うよね。楽だよ、やっぱり。俺もビデオカメラ、使う時はある。宅君とは使い方は違うみたいだけど(笑)。

宅　無人監視にも便利だよね。ボクは、撮影自体が面白い。高速道路を追っていく時なんか、綺麗なんだよね。で、映像が揺れるんだよ、がっくん、がっくんってさ(笑)。ボクが追っていく時には、もう悪霊に取り憑かれているよ。ほんとに悪霊。ボクは、ビデオカメラをファインダーから見ているけど、ボク自身を撮ってたら、佐野四郎どころじゃない、ものすごい恐い顔してると思うよ。

知能指数の高い気狂い

宅　この本は気狂い扱いされてる人を集めたら面白い本になるわけだから、ボクもそのなかの一人だと思われても、いいんだよ。ただ、ボク、百回や二百回は言われた言

葉がある。「宅さん、会ってみるといい人ですね、意外に」って(笑)。
——同じ言葉が出かかってました(笑)(宅氏とは初対面の本誌担当編集者)

宅 でしょ。それは逆説で言ったら、世の中が、ボクをいかに気狂いだと思ってるかということだよ(笑)。「外人」なんだよね。「異物」というかさ。

大泉 メディアでの取り上げられ方がということでしょ。

宅 いや、存在としても。日本って世間体社会だよね。社会の側に自分をどう合わせていくかを学校教育でも、会社教育でも教えてる。ところが、ボクは、そこからはみ出してるじゃない、明らかに。

その意味では、ボクはマスコミ真理教一億人と戦ってるよ。ボクは孤独な絶望の挑戦者だよ。

大泉 「責任」を求めていくわけだからね。

宅 うん。そこは恐怖されてるだろうね。「気狂いは恐いよ。でも知能指数が高い気狂いの本当の恐ろしさを思い知らせてやる!」(笑)。支離滅裂、非論理の気狂いの恐怖よりも、やっぱり論理的な、自己の論理に忠実な気狂いのほうが、恐いんじゃないのかなあ。それはボクです(笑)。

もう一つ。宅八郎が気狂いファンをどう呼ぶかというと、体質とか芸風、霊風だね。メディアの宗教性について考えると、人気、不人気とかと違うんだよ、気狂いを呼びやすい体質ってあるんだよ。

大泉 筒井康隆なんかもそうだね。

宅 平井和正とか。ボクにも、危ない人間が押し寄せてきました。ボクはけっこう呼びやすい体質だから。で、集まってくるヤツらの共通項としては、手紙にこう書いてある。「宅さんなら、私のことがわかってくれるハズだ」って(笑)。これは、一個のキーワードになってるなと思った。

大泉 自殺した漫画家の山田花子も宅君に会いたかったみたいで……。

宅 親交があって、かなり信頼されてた。やはり「宅さんなら私を理解してくれる」って意識が、彼女にもあったんだろうな。

気狂いっていう言葉は、本人が問題だと考えるか、世間が問題だと考えるか、どっちかなんだと思う。世間が問題だと考える場合、強制入院とかの方向へ行く。けれど、本人が自分を問題だと考える場合は、自分をわかってくれる人を探しているんだよ。

あと、宅八郎の場合はさ、どこまでが本気で、どこまでが演出なのか読めないところがある。それで、より複雑にこじれたファンがくる気がする。

大泉 で、そいつらは「宅八郎」をわかってるの?

宅 そうきたか。そういえば、ボクも自分自身がわからないところがあるな(笑)。

大泉 まあ、その人なりの宅八郎像で寄ってくるわけだね。

人生が〝復讐山脈〟

宅 ところで、ライターにもノンフィクション・ライターというジャンルがあったり、作家やコラムニストがいる。けれど、ボクの場合は一人一芸、ワン・ジャンル、ボク一人。〝行動が表現になっている〟という、すごく特殊な例だと思うんだ。

それで、快感、快楽ということについて言えば、自分の行動が表現とクロスしている時、行動が表現になった時には快感があるね。すごく、あるよ。行動文学みたいな。

ボク自身がどこまで本気か演出かわからないところがある。そして、今、ボクは、

小説に向かっている。やはり小説も、ノンフィクションとフィクションの境界が読めない、読ませないようなものなんだけれど。『Kの器』という小説をね、今、書いてるんです(笑)。この小説では「調査技術」を解説してあるんだけど。これ、連作になってるの。第一部、二部、三部って続いていく。『幻魔大戦』みたいに脈々とした話になっちゃう。ところで、小峯、小牧、切通、小林って共通点ない?(笑)。

大泉 そういえば、全員、頭文字がKだね。

宅 Kじゃない処刑相手もいたけど。あと、九四年に未完で終わってる(『噂の真相』連載「業界恐怖新聞」中断のため)小説『復讐山脈』もあるんだよね。『復讐山脈』の続編のタイトルも決めてあって『処刑海峡』っていうんだけど(笑)。宝島社では出してくれないだろうけど(笑)。でも、ボクは新しい文学だと思ってるよ。

で、『Kの器』、第一部に関して言うとね、ものすごく特殊な構造にしているのが、その小説を読んだ人間は、誰でも、Kという人間を調べたり殺せるように書いてある。殺し方のパターンが書いてある。そんな構造を持った特殊小説なんだよ。

かなりリスキーで、たぶん、一般の出版社から出版できないだろうから、フリーペーパーとして希望者には配布してます。

ところでボクね、実は十年くらい前、かなり長い間、尾行を趣味にしてたことがある。それは、恨みでも、何でもなくて、街歩いている女を尾行したりしてたことがある。それは趣味的でね。散歩のようなというか、文学的な追い方だった、昔は。

その時は異常心理で、巨大なゴミ箱の中に入って、ビデオカメラ回したことあるよ。まるで安部公房の『箱男』だよな(笑)。

ボク、尾行も短編オムニバス小説にしたいと思ってて。そのタイトルもね、考えたんだ。『ビコウズ』っていうんだ(爆笑)。

事実は小説より奇なり。ボクの場合、ある運命の待ち受け方というのを考えるとさ、すごく、数奇なことが起きやすいの。ものすごく何かを呼び寄せちゃうの。

まるでドラマを生きているような感じさえあるよな。ボクがドラマの演出と主演と両方やらせてもらったら、とんでもないものができるだろうね、はっきり言って。

大泉 実際、それが人生なわけでしょ。

宅 うん。人生、ドラマだらけでさ、大変だもん、よく生きてるなと思って。ボクの人生そのものが〝復讐山脈〟だよ。

大泉 はっはっ(笑)。『ビコウズ』も『Kの器』も早く読みたいね(笑)。

宅 でも『復讐山脈』『処刑海峡』、何でもいいけど、文芸編集者は怒るよ(笑)。

大泉 文学そのものが死に体だからいいんだよ。

宅 ボクがね、影響を受けたというか、パクった作家っていうと二人いて、安部公房と大藪春彦だよ。その二つが繋がって宅八郎になったんだね(笑)。読むほうはそうは思わないかもしれないけど。

恐怖、ネズミ人間の部屋!

宅 ボクは何にでも取り組むんだよ、真剣に。女性に関してもさ、ボク、家出少女を二人、保護して親元まで送り届けるとこまでやったこともある、徹夜で説得して。

あと、六本木で行き倒れてたクラバーの女の子(急性アルコール中毒)の面倒もみちゃったな。救急車呼んで、保護者というかたちにして警察には通報させずに、救急病院に運んで、入院から翌夕の退院まで。

これはべつに、ボクがその子のからだを求めたわけでも、何でもない話なんだけど。結局、その子の名前も聞いてない(笑)。

大泉　エロスなのかな。

宅　女ばっかりですよね。まあ、男の行き倒れは、意味が違うと思うけど(笑)。

さっき、安部と大薮の名をあげたじゃない。サイコな話をサービスしますよ。

ボクは実を言うと、今、都内に三軒の部屋を借りているんです。それぞれの名義は変えてね。ピンとこない？

大泉　まるで、大薮春彦の……。

宅　そうアジトを持っているわけです。大薮犯罪小説の主人公は、たいていアジトを複数持っていて、犯行・殺人・逃走を繰り返していくじゃないですか。

大泉　隠れ家だね。

宅　ところが、実は三軒のうち、一番最近になって借りたのが、古い小さな倉庫なんです。コンクリート打ちっぱなしで、と言っても、オシャレなものじゃない。格安だったんだけど、その理由は、古いことと場所柄ヤバイ地下室みたいな感じなの。

大泉　どのくらいの広さがあるの？

宅　二十畳くらいかなあ？　隔離されたコンクリートの不条理空間。そこをこの夏、まさに大薮世界に改造しちゃったんですよ。

大泉　どういうこと？

宅　ずっと、この一カ月くらいかなあ、毎日、渋谷の東急ハンズへ行って、自分で内装、配管工事して、シャワーや電気が使えるようにしたり。まるで、拷問・殺人・死体解体までやれる空間なんですよ(笑)。

大泉　ギニーピック空間か。

宅　ボクは「ネズミ人間の部屋」(宮崎勤にならって)と呼んでいます(爆笑)。不条理性でいえば安部公房、犯罪性でいえば大薮春彦……。

大泉　何でまた？　誰か殺すつもりか？

宅　いや、現時点での予定はないよ(笑)。これは小説執筆のうえでの欲望とも言えるし、行動を表現にしていくボクならではの、虚実入り交じった改造実行でしたね。でも、理由は他にもあるんです。

SMです。

大泉　SMぅ？

宅　ちょっと前に、マゾ性の強い女の子に関わってしまったのね、ボク。それでサービス精神発揮しちゃって。結局、その子には逃げられちゃったんだけど(笑)。

SMではもう一つ、ボクの攻撃性を考えれば納得するかもしれないけど、どちらかといえば、性的にはSだと思うんだ。ただし、SMクラブどころか、だいたいボクは風俗って今までに行ったことないしね。本格的なSMプレイの経験もないし、いわゆるSMマニアじゃないんだ。

ところが、本当になぜか、なんですが、ボクにはSMの女王の友人が、たくさんいるんだよ。元と現役の女王たち。彼女たちは純粋な友人なんだけど。

で、その女王たち何人からも、しかも何度も「宅さんはSの天才的素質がある」「天才だ」とホメられてるんだよね……。

大泉　君のサービス精神、おだてに乗りやすい性格は知ってるよ(笑)。

宅　で、それらが複合してネズミ人間の部屋を創り出しちゃったんだ。

倉庫の改造と同時に、女王たちを講師に「夏のSMセミナー」が始まったわけ。

今日は亀甲縛りの時間です(笑)とか。ボクは器用だから。初めて縛りも教えてもらって、できるようになったし。それに、ボクは完全主義者だから、どんどんエスカレートしていった。ロープ、ムチ、ロウソク、

手錠、浣腸器……、ありとあらゆるSMグッズはそろえたよ。あとはバイブレーターも各種何本も。医療器具や薬品類も全部そろえちゃった。

大泉　ないものはないんだね。

宅　問屋に問い合わせたんだけど、さすがに産婦人科の分娩台は、高額で買えなかった。でも、代わりになる椅子はある。アメリカ製の大きめのビニールプールも置いたでしょ。それから、工事現場で材木がくるまれているような青いビニールシートをシーツにして敷いたベッドも置いて、災害時用の簡易トイレも用意した。

大泉　配管はどうしたの？

宅　水道と電気自体は来ていたんだけど、何十メートルかのワイヤー入りゴムホースやら電気ケーブルなどが無機質にのびている。その壁から鎖がぶら下がってて、錠前もいくつか用意したもん、ボク。首輪や手錠や足輪につないで、監禁、飼えるわけ、何年でもね。なかにはテレビもあれば、ビデオデッキも二台置いてある。要は、住むことのできる倉庫だよ。

大泉　一度、寝てみたいね。くっくっくっ(笑)。

宅　工事が進んでから、女王たちが来てみたら、ビックリしてるの。怖がっちゃって。それで女王たちに「ドラム缶とセメントも用意したほうがいいかな」と言ったら、「絶対にやめてくださいよ、それ。SMじゃないですよ」だって(笑)。

SMというよりは犯罪のニオイが漂っているわけだからね。しかも、元が古い倉庫なんで、クルマが横付けできるから、そのまま東京湾か富士の樹海へ直行コースで行けるんだもん(笑)。

ボクは行ったことがないんだけど、都内にある有名なSM専門ホテルの、何て名前だったけな、そう、アルファ・インどころじゃないっていうわけ。この怖さは。

大泉　守られた場所じゃないし。

宅　内装もプロじゃなくて、ボクがこつこつやったじゃないですか。その間に合わせの感じがとてつもなくリアルなわけ。ケーブルを固定する黒いガムテープがベタベタ貼ってあって。コンクリートといっても、もう十年も前に白いペンキで塗られたような壁がはげかけてたり、シミが広がってたりするから。照明も恐いし。

ただ、女王いわく、これは本当に恐いけど、Mの女の子は猛烈に興奮する空間なんじゃないですか、だって。結局、女の子に逃げられて、未使用のままなんだけど。

大泉　一回も使ってないんだ。でも、壊すつもりないでしょ、そこ。

宅　何も知らない人間がそこを見たら、人を殺そうとしているように見えるかもしれないね(笑)、リアル過ぎて。SMって、スタートがあってエンドがあるじゃない。それを感じないんだもん、もう。

大泉　日常なんだね、二十四時間三百六十五日SMなんだね(笑)。でも、どうするの、そこ。もったいないじゃん。

宅　そうなの。使いたいんだけどさ(笑)。

――相手を募集したらどうですか。

大泉　それは、面白いんじゃない。その部屋は宅君の作品だよ。ある種、オマージュみたいに思えるね。

宅　じゃあ、最後に。この本の読者で、殺されてもいい(笑)、ボクにどんな実験でもさせてくれる実験台女性を大募集(*)するよ。本気だよ。待ってマ～♡

*付記　要写真同封。『別冊宝島281号隣のサイコさん』編集部宛郵送のこと

Part 5 人権サイコパス！

大江光あるいは『フォレスト・ガンプ』症候群の猖獗

聖なる白痴の零落

人間は「聖の真空状態」に耐え得るほど強くはない。
大江光はなぜ祭りあげられたのか？『フォレスト・ガンプ』はなぜ感動されなければならなかったのか？

呉智英（評論家）

精薄、低能、白痴……、これら不幸な人たちについて語り論じるとき、まず踏まえなければならないのは人権論だと、我われは何の根拠もなく思い込んでいる。いや、人権真理教のマインドコントロールによって、そう思い込まされている。しかし、マインドコントロールから目覚め、思想史・文化史を通覧してみれば、これら不幸な人たちを論じるのにまず必要なのは、人権論ではなく馬鹿論だと気づくはずだ。

こう言うと、もうそれだけで人権真理教信者たちの反発を招くだろう。精薄、低能、白痴たちを馬鹿というカテゴリーに括ると は何事か、と。

しかし、馬鹿に関する古典的名著と評されるホルスト・ガイヤー『馬鹿について』（邦訳、創元社）は、知能の欠陥から話が始められる。第一章に、こうある。

「世間によくある馬鹿は医学上習慣的に病気とよばれている精神薄弱に連続的に移行している」

もっとも、この引用文には括弧内に注記して「これを世間でよくいう馬鹿と混同しないこと」とある。つまり、ガイヤーは、精薄を含む「世間によくある馬鹿」とそれとは微妙に異なる「世間でよくいう馬鹿」を、同じく「馬鹿」としながら区別しているのだ。しかし、今我われには、精薄を含む馬鹿とそうではない馬鹿に差異を認めつつ統一的に論じようとするガイヤーの人文主義的教養はない。そういう教養が自己解体し、しかし新たな教養が未だ出現しない教養の大空位の時代に現代は入っているからである。

いささか先を急ぎすぎた。人文主義云々の前に、ガイヤーの『馬鹿について』をも

う少し見ておこう。今なら絶対に書けない面白い話が散見するからだ。例えば、こんな話である。

「知恵のおくれた子を持つ親は、きまって体裁のよいことをいって神経科へやってくる。『私の息子はどうも臆病者で、殊に数学なんかやらすと、ひどく尻込みするんです』などと言って」

私は、これを読んでクスクス笑った。しかし、次の話にはゲラゲラ笑った。

「グルタミン酸は、実験的研究によると、脳の新陳代謝上、大切な役目をつとめている。この物質が子供の知恵おくれに有効だということが専門誌に発表された」「私自身もこれをためしてみたが、これをのませると鈍感な子が亢奮しやすくなり、したがって活潑に動き始めることが多い。親というものは自分の子供をひいき目に見るものだから、これだけでもう賢くなりかけた、と大よろこびする。だが精神科医の立場から見れば、薬の効き目で、おとなしい馬鹿がさわがしい馬鹿にかわっただけである」

邦訳初版は一九五八年

今なら絶対に書けない。言論が抑圧されていた昔なら絶対に書けなかったことも今なら書ける――ではない。昔なら書けたことが、今だからこそ書けないのだ。しかし、『馬鹿について』は邦訳初版が一九五八年の刊行である。当時は人権真理教のマインドコントロールも、人権団体が繰り返し強要する差別への〝二分間憎悪〟も、今ほどひどくはなかった。版を重ね、現在第二十五刷になる『馬鹿について』は、初版刊行が今から四十年ほど前であったが故に、古典の特例として、今なら決して書けないことが書いてあっても許されているのだ。

では、ガイヤーは『馬鹿について』で何が言いたかったのか。それは、本書の中に出てくる次のようなアホリズムに容易に読み取れるだろう。

・人間は愚鈍という実り豊かなひざに抱かれている。
・ただ愚鈍だけがこの人生の守り神である。
・愚行は、人間的な、あまりに人間的なものであり、それだけに憎めない。

愚かである人間への頌歌(しょうか)である。本書にもしばしば言及される人文主義者エラスムスの『痴愚神礼讃』に通じる人間への讃歌である。人間を祝福し、人間性を賞讃するために、馬鹿を論じ、馬鹿を語ったのだ。だが、これはそのままでは現代に通用しなくなっている。

平成之大馬鹿門の馬鹿騒動

今年春、京都で馬鹿騒動があった。京都市にある浄土宗系の仏教大学の正門に、香川県の彫刻家・空充秋の制作になる「平成之大馬鹿門」という門柱が設置されたはいいが、猛反発が生じ、結局撤去されることになった。制作者の意図は明瞭である。小賢しくあるな。すべてを放下(ほうげ)しすべてを受け容れる大いなる馬鹿であれ。これこそが仏教大学で学ぶべき真理だ、ということ

だろう。同大の奉ずる浄土宗の宗祖法然の弟子であり、後に浄土真宗の宗祖となる親鸞も、自ら「愚禿（ぐとく）」すなわち剃髪した馬鹿と称した。大馬鹿門に通じる精神がある。

しかし、この大馬鹿門は、制作を依頼した大学には予想外のものであった。仏教大学の建学の本旨に大馬鹿門が合致するとしても、それは抽象的・理念的にそうであるにすぎない。仏教大学は、現実には大学という近代的な教育機関なのである。それは、国民国家における教養ある市民を作り出す公的な装置なのであって、馬鹿を作り出す装置ではない。そもそも、馬鹿よ来たれ、と正門に大書された大学に、はたして学生が来るものかどうか。大学として成立しなくなってしまうではないか。大学当局は、そう判断し、「平成之大馬鹿門」は撤去された。

この馬鹿騒動は、ただの馬鹿馬鹿しい騒動ではない。実は、この馬鹿馬鹿しさが人文主義的理想の非喜劇的な運命をも象徴している。宗教改革を準備しながら宗教改革の狂信化さえ批判した人文主義者エラスムス、そして、そういう人文主義的教養を継承し得た最後の世代であるガイヤー、また、中世日本において凡愚としての人間に注目し一種の宗教改革を成し遂げた法然・親鸞、こうした先人たちの理想は、その理想を広く青年たちに身につけさせるための近代的大学において理想たり得ないのである。大学は単に専門職を養成する機関ではない。ルネサンス期に始まる人文主義的教養を身につけた高度の専門人を教育する機関である。だが、その理想を愚直なまでに明言した大馬鹿門柱は、世人の嘲笑のなか、撤去されたのだ。

人文主義的理想は、その始源から数百年を経て、近代社会・近代イデオロギーとして実現し、実現したことによって自ら解体したのである。そして、これに気づかない、あるいは気づいていながらそれを隠蔽しようとする時代の司祭たちが、エラスムスの痛罵した偽善を繰り返している。

○作曲家大江七光デビュー

今から四年前の一九九二年九月、『朝日新聞』の社会面のほぼ半分を占めるような大記事が載った。「知的障害をもつ我が子よ、音楽で深く生きろ」と大見出しがあり、中見出しが「大江健三郎さんの長男光さん、作曲家デビュー」「今秋、ＣＤ発表」とある。

記事を読んだ私は、不気味なものを見た時の恐怖に近い不快感を覚えた。譬えてみれば、その翌々年、金日成死去の際に、北朝鮮の平壌で何万人という群衆が例外なく激しい悲しみを表わすのを報じたニュースを見た時の不快感である。

大江光のデビュー記事は美談仕立てである。私は実は美談が嫌いではない。小さなラーメン屋をやっていた老夫婦が、少しずつ貯めた金を福祉施設に寄付した、という話などを聞くと、素直に感動する。ほんのわずかでも施設の設備は現実によくなるのだし、何よりも、ささやかな善意がささやかであるだけ快い。それに、ラーメン屋の老夫婦をからかうことさえ許されている。せっかく貯めた金を寄付して何が楽しいんだか、と。

しかし、この記事の美談は美談に似て美談ではない。つまりは、大作家大江健三郎

大江健三郎と光（左）

の威光を着た二世作曲家誕生のチョーチン記事にすぎない。しかも、その批判が許されないようになっている。

実際に大江光の曲を聞いてみれば、美しいと言えなくはないが、それは彼のお気に入りのモーツァルトやショパンの美しさに迫るようなものではない。モネを愛好する日曜画家が描いた水蓮の絵が応接間に飾られる程度には美しいというだけの話だ。記事に芬々と匂う俗流啓蒙臭に反して、大江光の作曲家デビューが知的障害者の社会進出を扶けるわけでも、もちろんない。大会社の社長が知的障害のある息子を関連会社の重役の職に就かせたとしよう。『朝日新聞』は、これを知的障害者の社会進出だと称讃するだろうか。

ここは、「作曲家大江七光デビュー」とでも言ってみたいところだ。だが、常日頃歯に衣着せぬ批評をする辛口の評論家でも、そうは書けない。なぜならば、その批評は音楽に対する批評ではなく、魂に対する批評、それも無垢なる魂に対する批評と見なされてしまうからである。事実、この記事には「純粋」という言葉が繰り返し使われ、

「安らぎ」や「無垢」が強調されている。

いわば、この記事には「無垢という権力」が成立しているのである。

無垢という権力。この言葉は私の造語ではない。現在アメリカで最も著名な黒人作家であり英文学者であるシェルビー・スティールの黒人問題についてのエッセイ集『黒い憂鬱』（邦訳、五月書房）の中に、キーワードのように出てくる言葉である。豊かではないが勤勉な黒人の家庭で育ったスティールは、一九六〇年代に大学に進学した。ほどなくして、公民権運動が高揚するようになる。彼はそこでブラックパワーに鼓舞され、ブラックアイデンティティを精神的支柱とする。

しかし、やがてスティールは、少しずつ前進しつつある人種差別解消政策と反比例するように、黒人が自閉と腐敗の泥濘（でいねい）にはまり込んでゆく現実を見る。アファーマティブ・アクション（差別解消措置）が進めば進むほど、黒人大学生の中途退学率は上がり、黒人の犯罪者数も増大したのだ。こうした事実は、黒人にますます劣等感を抱かせるようになる。なぜならば、黒人は人種差別主義者が言うとおりの本当に劣った人種だと思えてくるからである。一方、良識ある白人は、この憂鬱な現実をもたらした歴史的原罪が自分たちにあることを知っているだけに、黒人自らの責任には口をつぐむ。なぜならば、自分たちも「無垢の側」に立ちたいからである。

ここには無垢という権力が成立している。政教分離の原則に表れているように、近代において公的権力は世俗の原理のみで成立するはずだった。ところが、無垢という聖なる原理は、公的権力の命運を左右するほどの権力を自ら形成させているのである。

このことについては、最後にもう一度触れなければならない。今ここで言っておくべきは、スティールの憂鬱にもかかわらず、泥濘にはまり込んでいる黒人問題にはいずれ曙光が見えるだろう、ということである。スティールの著作が全米で高く評価されたという事実もそうだが、もっと本質的に、黒人問題は人類の長い歴史から見ればほんの一幕の悲劇にすぎないからだ。アメリカにおける黒人差別は、一六一九年の奴隷貿易開始以後、四百年足らずの歴史しかない。贖罪感を基礎とする無垢という権力も、いずれその力を衰微させてゆくだろう。

しかし、同じ無垢という権力でも、黒人と白痴とでは事情が黒と白ほど全然異なる。黒人の無垢が歴史的所産なのに対し、白痴の無垢は歴史のはるか彼方に淵源がある。人文主義が歴史の舞台に登場するずっと前から、人間は白痴に対して蔑みとともに宗教的な畏怖の念を抱いてきたのだ。すなわち、「聖なる白痴」である。

フール・オン・ザ・ヒル

聖なる白痴という観念をいったいどのよ

『朝日新聞』（92年9月3日）より

うにして人類は持つようになったのか。おそらく、そこにはいくつもの要素が複雑にからみあっているだろう。

サヴァン症候群という病気がある。D・A・トレッファート『なぜかれらは天才的能力を示すのか』（邦訳、草思社）に詳しく紹介されているが、一世紀ほど前、ダウン症の研究で有名なJ・ダウンが命名した病気、というより、むしろ才能だろうか。原名はイディオ・サヴァン idiot savant（知恵ある白痴）という。その名のとおり、日常生活も独りでは満足にできないほどの白痴が、計算、音楽、美術などでは常人の及ばぬ能力を発揮するのだ。同書の表紙カバーに使われているあるサヴァン症者の制作した疾駆する馬の彫像など、その躍動感はとても白痴の手になるものとは思えない。イディオであることとサヴァンであることの落差は、まさに神秘的としか表現できない。精神医学が未発達であった古代の人びとがサヴァン症候群に接した時、そこに神の御業を見たであろう。

また、白痴のなかに、濁世に染まらぬ本来の人間を見るという宗教的心性も、聖なる白痴という観念の成立に関係がある。仏教大学の「平成之大馬鹿門」もこれだし、ガイヤーの『馬鹿について』には、J・フスの「おお、聖なる素朴単純よ」という言葉が巻頭に置かれている。晩年ロシア正教に傾斜していったドストエフスキーには、その名も『白痴』という長遍小説がある。

こうした聖なる白痴の観念は「諷刺する愚者」あるいは「佯狂」という存在を生む。愚者や狂者の言動によって、世の過ちを正し、時には王に諫言することは、洋の東西を問わず古来から行われてきた。fool に「道化」と「馬鹿」の二つの意味があるのは偶然ではない。馬鹿を演じながら、あるいは狂と佯りながら、政道批判・社会批評をするのである。古代ギリシャでは、奴隷出身のイソップが、滑稽で辛辣な寓話によって社会を批評した。古代支那では、楚の国の狂 接輿が町を彷徨しながら世を諷諭したことが『論語』や『荘子』に見える。日本では、半ば伝説中の曽呂利新左衛門がこれに近い。

注意しなければならないのは、これら諷刺する愚者あるいは佯狂が、常に社会秩序外の存在であることだ。

諷刺する愚者は、現在も形を変えて芸術の中に描かれている。ビートルズの『丘の上の馬鹿 The fool on the hill』も、その一つだ。

丘の上の馬鹿

来る日も来る日も　丘の上で独り
静かに馬鹿のような笑いを浮かべる
彼を誰も知りたいと思わない
ただの馬鹿にしか見えないから
彼もまた何も答えようとしない
しかし　丘の上の馬鹿は
陽の沈むのを見ている
彼の心の眼は
世界が回るのを見ている

馬鹿は村の秩序から外れた丘の上にいる。秩序から外れなければ、諷刺する愚者は成り立たないのだ。秩序から外れ、村人から差別され、そのことによって聖なる白痴は政道を批判し、社会を批評する特権を授かる。この特権は蔑みと畏怖の対価である。

しかし、今、馬鹿は本当に丘の上にいる

だろうか。国民国家という村の秩序から外れた場所にいるだろうか。民主主義思想、人権イデオロギーが、それを許すだろうか。

　近代の平準化社会は、人間が人間を蔑み、人間が人間を畏怖することを許さない。なぜならば国民は、市民は、皆平等だからである。馬鹿が、村から外れた丘の上でただ一人、蔑みと畏怖の眼差しにさらされていることを、福祉社会は許しはしない。

　何百年も前に人文主義者たちが準備した人間讃歌の社会は、このように実現しつつある。かくて、近代社会は、丘の上の馬鹿を村外れから市民社会の中へ追放したのだ。そうして、聖なる白痴への渇望と諷刺する愚者への期待だけが、宙に浮いたように残った。

聖の真空化と『フォレスト・ガンプ』

　人間は「聖の真空状態」に耐え得るほど強くはない。フランス革命の時、旧来の神に代わる新たな神が提唱された。理神論である。我われはこれをあたかも物理学者が抽象的な真理に漠然とした敬意を抱くようなものだと思っている。しかし、実際はそうではない。聖なる理神の前にひれ伏すまごうことなき宗教であった。フランス革命の指導者ロベスピエールは、人工神「最高存在」を発案し、四十日もの祭日を法例で定め、巨大な祭壇を築いて讃美歌を奏でさせた。

　近代国家において公的権力は国民にのみ依拠しているはずだった。聖なるものは個人の心の片隅にのみ生きながらえているはずだった。しかし、聖の真空は新しい宗教を呼びよせる。人権真理教、そして「無垢という権力」、あるいはオウム真理教もその徒花の一つかもしれない。

　昨年、『フォレスト・ガンプ』というアメリカ映画が評判になった。アメリカでは大人気となり、アカデミー賞も六部門で受賞している。フォレスト・ガンプという名の白痴の青年が、神の恩寵があるわけでもないのに、次々に人生に成功してゆく御伽話のような物語である。そして、青年の周囲の人とこの映画を観ている何百万の人は、この白痴の青年の恩寵のごとく、心が癒されたような気になるらしい。

　日本でもかなり人気が出たが、邦題には御丁寧にも『フォレスト・ガンプ　一期一会』と、宗教的な副題がついている。

　アメリカでは『フォレスト・ガンプ』が流行し、日本では大江光がもてはやされる。蔑みも畏怖もない脱色・脱臭された市民宗教として。

　その陰で、市民原理に還元できないおぞましさは黙殺されてゆく。重度の知能障害児を持つある母親は、こんなことを言った。今は私も主人も力を合わせて頑張っています。この子も可愛いし。でも、この子が性に目覚めた時のことを思うと、憂鬱になります。ソープランドへ連れて行ってやりたいとも思います。しかし、女性差別、性の商品化に対する批判もあることだし。

　畏怖することを忘れ、蔑むことを忘れ、おぞましさを忘れ、聖なる白痴を忘れ、人権真理教に一元的に支配された世紀末の近代社会は、それでも愚かなことに聖に餓えている。

精神医療のパラドックス

人格障害に「クスリ」は効かない

境界型人格障害──はたしてこれを「病」と呼んでいいのか？
安易な治療を行わないことも、また精神医療のサービスである

小山田進一（精神科医）

少し前から、境界型人格障害という存在が精神科医の間で取り沙汰されるようになってきた。簡単にいえば、神経症ともいえず、さりとて精神病でもない「病名」のことである。アメリカ精神医学の診断基準によると、気分屋で、こらえ性がなくて、怒りだすと暴力的で、他人への配慮がまるでなく、しかも人から愛されたいために無駄な努力をする、といった傾向の強い人をいうことになっている。しかし、こういった人は、世の中にいくらでもいそうである。それに、いったい精神医学によって、このような人間をこの世の行儀の良いおとなたちに変身させられるのであろうか。

病人は「普通の人」がいい

最近、精神科医と称する人びとがあまり精神病患者を診なくなる傾向が生じている。精神科医が精神病の患者を診なくても、食えるような状況が生じていることが主たる理由である。

精神医学はかつてよりも広く人びとに認知されるようになり、精神科へ行くことの抵抗感が薄れた。これ自体は歓迎すべきことであり、東京などでは、若い女性が精神科に行くことがブーム化しているという話すら、聞くことがある。精神科医はなかなか良い商売ではないか。

精神科の客筋が増したのだ。かつては、もっぱらつき合うのに骨が折れ、治療も楽とはいえない重症の精神病の患者を精神科医は相手としていた。最近はどこが病気かわからないような、おまけにかわいい顔立ちの若い娘が外来に来て、それほど深刻とも思えない悩みをいろいろと訴えるのだ。

日本の保険医療制度は提供する医療の質をあまり重視せず、治療回数で金を支払うようになっている。ならば、なるべく治療

が楽で、つき合うのに楽しい患者を数多く診たくなるのは当然かもしれない。できれば、なるべく普通の人が来てほしい。幸い、そういった人を相手にしていても、なんとか生計が立つようになった。

市中の大学病院も、大型の総合病院も精神病者を敬遠するようになり（だいたい、精神科の外来はあっても、入院を必要とするような重症患者は診たくないので、入院ベッドを置かない）、もっぱら軽いうつ病や神経症の患者を相手にするようになった。クリニックの多くも、精神病の診療をしないところが少なくない。

こんなわけで、精神科が認知されるにつれ、精神病を精神科医が治療したがらなくなり、当然、きちんと治療できる医者も減ってきている。実はこれは、アメリカがすでにそうであって、「アメリカ人は弁護士と精神科医を友人にする」という話があるが、そのことを注意深く考察すれば、アメリカの精神科医が相手としているのは大半が普通の人で、残りのほとんどが神経症的人びとであると予想できそうではないか。

だいたい、本格的な精神病になれば、長い療養期間が必要となり、経済力も当然失われやすい。金のない精神病患者を相手とするより、社会的な自立をなしとげていることの多い、神経症者や軽いうつ病の患者の相談相手のほうが、実入りは多くなろうというものである。

ただ、アメリカ人が一時間一万円から数万円もするカウンセリングを受けに行くのは、アメリカが基本的にファミリーの力が弱く、歴史も浅く、相互に助け合うというカルチャーがないからである。要するに、個を重んじるけれど孤独であるということである。だから、さまざまな悩みを、金を支払ってでも聞いてもらえる誰かが必要となってくるのである。

しかし、普通の人であったり、軽い病態であれば、少々の悩みも我慢すればいいし、すてきな恋人がいたり、頼りになる友人を見つけたり、ときには宗教団体に入ってみることで、それはほとんど解決することにもなる。おまけに、景気が悪化してフトコロ具合が寂しくなれば、人びとはノコノコ精神分析医のところへ悩みを打ち明けになど行かない。こうしたことから、アメリカ精神医学の市場は必ずしも安定していないのだ。

「病名」の発明と多重人格障害

一九八〇年代あたりから、アメリカの景気は決して良いとはいえなくなっていた。精神科医や精神分析医の実入りもその影響を受けたであろうことは、容易に想像できよう。

市場経済はとにかく売り物になるものを見つけることが不可欠だから、精神医療の対象となる人びとを発掘せねば生活にかかわる。しかし、すでに述べたように、精神病者はどうしても経済的力が弱いから、その治療が売り物にはなりにくい。

そこで考えついたのが、金持のドラ息子や娘たち相手の商売である。気に入らないと親に暴力をふるったり（不安的な感情を有し）、学校へ行かずまとまったことは何もせず（慢性的な空虚感があり）、浪費癖があったり性的に抑制がきかなかったり無茶食いしたり（つまりは衝動性が高く）、そういったことに制限を受けると自殺行為に及ん

DSM-Ⅳによる境界性人格障害の診断基準

"Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders Fourth Edition"の、人格障害についての章の中に、境界性人格障害の診断基準がある。

境界性人格障害　　Borderline Personality Disorder

対人関係、自己像、感情の不安定および著しい衝動性の広範な様式で、成人期早期に始まり、種々の状況で明らかになる。以下のうち５つ（またはそれ以上）で示される。

⑴現実に、または想像の中で見捨てられることを避けようとする気違いじみた努力。
　注基準５で取り上げられる自殺行為または自傷行為は含めないこと。
⑵理想化とこき下ろしとの両極端を揺れ動くことによって特徴づけられる不安定で激しい対人関係様式。
⑶同一性障害：著名で持続的な不安定な自己像または自己感。
⑷自己を傷つける可能性のある衝動性で、少なくとも２つの領域にわたるもの（例：浪費、性行為、物質乱用、無謀な運転、むちゃ喰い）。
　注基準５で取り上げられる自殺行為または自傷行為は含めないこと。
⑸自殺の行動、そぶり、脅し、または自傷行為の繰り返し。
⑹顕著な気分反応性による感情不安定性（例：通常は２、３時間持続することはまれな、エピソード的に起こる強い不快気分、いらいら、または不安）。
⑺慢性的な空虚感。
⑻不適切で激しい怒り、または怒りの制御の困難（例：しばしばかんしゃくを起こす、いつも怒っている、取っ組み合いの喧嘩を繰り返す）。
⑼一過性のストレス関連性の妄想様観念または重要な解離性症状。

出典：「DSM-Ⅳ　精神疾患の分類と診断の手引」
（1996年２月15日発行、第１版・第４刷、医学書院）

筆者追記　なお、DSM-Ⅳの日本語訳には若干問題があることが指摘されている。例えば「気違いじみた努力」という表現は、精神医学書としては適切でないと言われている。

で要求を通そうとしたり（自殺行為のそぶり、脅しの繰り返し）するような青少年。彼らを治療するシステムが作られたのである。

治療する以上病気でなくてはならない。そこで、境界型人格障害という「病名」が発明されたのだろう。境界型人格障害の定義は、以上に述べたカッコの中の内容に、ひどい寂しがり屋であることと、子どもっぽさをつけ加えたものであることが、DSM―Ⅳ[4]という、アメリカの精神医学の診断基準を見ればわかる。

もちろん、彼らの治療システムがきわめて有効であればよいのだが、とてもうまくいったという話は聞いたことがない。少数の若者が一定の矯正効果のおかげで、おとなしく親元に戻ったかもしれないが、その程度なら戸塚ヨットスクールとか軍隊のようなところの矯正効果に勝っているとも思えない。熱心なカウンセリングで連中がおとなしくなるなら、アメリカからとうの昔に若者のドラッグやバイオレンスの問題はなくなっているはずである。

多重人格障害というものも、似たようなな

経過で発明された病名であるように思えてならない。かかる仰々しい名前など使わず、解離性ヒステリー（＊1）といえばすむはずである。

この病態は、精神分析治療（金のかかることに注意）の経過のなかで、操作的に引き出されたものだと発言しているアメリカの精神科医もかなりいる。日本に紹介されたビリー・ミリガンという多重人格障害者の話を注意深く読むと、ビリー・ミリガンは精神分裂病であることも記載されている。つまり、精神分裂病にして多重人格というわけである。これは精神病にして神経症といっていることで、医学的には意味がない。それに精神分裂病は、同一の人格水準を常に維持するとは限らないので、多重人格的な印象を与える症状を示すことが珍しくない。

そもそも多重人格障害は、精神病ではなく神経症の一種（ヒステリーの一種）として定義されているのだから、れっきとした精神病であるビリー・ミリガンの話を典型的症例として示すことには、いかがわしさがあると思えないだろうか。それに、私は解離性ヒステリーの典型例は何人も知っているが、多重人格障害といえる患者にお目にかかったことは一度もない。どうも、ビリー・ミリガンの話もアメリカの一部の精神医療関係者たちの、新しい商品開発（新しい病気開発）のためのキャンペーンではなかったかと疑いたくなるのである。

ともあれ、境界型人格障害も多重人格障害も、人格障害という言葉がついていて、かなり似かよったところがありそうである。その発生の理由も、ともにアメリカ社会の病理に由来するとされているのだ。

ある「人格障害」の大学生

精神医療の対象となる人びとは、大きく分けて二種類いる。精神病群と神経症群である。精神病は、精神の機能の明確な破綻と定義される。神経症は、もともと有している性格特性によって、環境によって変化するストレスをうまく処理できない状態になり、苦痛を感じるまでになったことをいう。精神病という状態は、実は医学的に定義を要さないほど先見的なもので、たいていの人間が気がふれている状態として認知できるものである。

したがって、精神病状態、つまり気のふれた状態は、普遍的かつ客観的な認識としてあり、その輪郭は曖昧ではない。しかし、神経症となると、むしろ主観的な訴えが病気の定義に入っているから、きわめて輪郭は曖昧である。どこからどこまでを病気とするかの厳密な基準はないといってよい。

日本の精神科医は、昔は精神病者を診ることを常としてきたことは、すでに述べた。今や多数の神経症者が外来に来るようになった。もっぱら神経症を診ることの多い精神科医のなかで言われ始めたのが、境界型人格障害の存在である。

通常、神経症の患者は礼儀正しく、少し依存的なところを除けば、めったに医者に暴言を吐くことはない。精神病の患者だって、具合の悪いときはともかくも、平生は医者に対して礼儀正しくふるまうのが普通である。

しかし、なかに精神病の悪化した状態でもなく、もちろん幻覚も妄想もないのに、診療の態度が悪く、薬も効く様子がなく、

そのくせ世話をしてやらないと死んでやるなどと言ってみたり、暴れたりする患者の報告が出始めている。
　たいていは、治療の始めの頃は神妙にしているが、何回目かの面接あたりから豹変して、要求を通そうとする。しかも、そのやり方が常識的でないというわけである。
　ある十九歳の大学生が大学の授業に出ず、家でゴロゴロしていた。ときどき気に入らなくなると、家具などを壊すまで暴れる。本人が、ある病院の外来にカウンセリングを求めて両親に連れられて来た。睡眠は取れているし、被害的な幻覚や妄想もない。表情は暗いが、妙に身だしなみはスッキリしている。そこで彼を診察した医師は、安易に若い女性の心理カウンセラーをその患者につけた。彼の生育歴のなかに、高校時代、一方的に好きになった女生徒につきまとい、断られるとひどい嫌がらせをして一度退学になったことがあったが、その医師は無視した。大学生は、カウンセラーから何回か長時間の丁寧な面接を受けた。彼はそのとき、これだけ丁寧に話を聞いてくれるのだから、このカウンセラーは自分のことを好きなのだと思ったにちがいない（こういうのを陽性転移と精神分析ではいうらしい）。
　ある日突然、カウンセラーに言った。
「病院で話するばかりでなく、外の喫茶店で一度話したい」
　こういった要求はきちんと断るのが医療者としての正しい対応だが、まだ慣れていない女性カウンセラーは相手に応じてしまった。
　彼は喫茶店で、つき合ってほしいと要求した。もちろんそれは拒否されたのだが、彼はその後何度も、電話でも外来に来ても要求した。住所や電話番号も知りたがり、拒絶されると、病院の外来でタバコ盆をひっくり返し暴れるようになった（これを精神分析では行動化というらしい）。
　ついには、カウンセラーを病院の玄関で待ち伏せ、家路につこうとする彼女を尾行しようともした（これを精神分析ではなんというのだろう?）。ただ、彼は少々物を壊したが、明白な触法行為をしていないし、まだ未成年である。
　何よりも、彼は精神科に通っている通院患者である。病院のほうで「病気」だと言ってしまっているのだ。よほどのことがなければ、警察だって動きはしないのである。もちろん、彼はそういうことを読んで行動できる頭脳の持ち主だった。なかなか難しい大学に、ちゃんと入っているのだ。結局、カウンセラーの住まいがわからなかったために、どうしても捜すよう両親に迫った。両親はむろん従えるわけはないが、彼は暴れまわり、家具をあらかた壊してしまった。
　こんなわけで、この病院の医師は、彼を他の精神病院に入院させてくれるよう依頼した。紹介状には、「境界型人格障害で入院を要する」と書いてあった。
　本来なら、医師は大学生を病気と診断したのだから、自分が入院治療も請け負うべきなのだが、「うちは外来しかないから頼む」というわけである。

君は病気ではない

　受け取るほうの病院の医師には、治療の失敗の尻拭いをしてくれと言っているようにしか思えない。かといって、入院の対象

ではないと思いつつも、前の主治医の意見も無視できない。強制的入院の対象であることが常に成立するのは、急性の精神病状態にあるとき、つまり、誰が見たって気がふれているとしか言いようのない状態のときである。神経症の範囲では、強制的入院は原則的にできない。

頼まれたほうの医師は、しかたなく仮入院(＊2)ということで一週間の入院措置をとった。そして一週間後、強制的入院を継続できるような精神病的所見を欠くという理由で、退院させた。

両親は、なぜ入院による治療をしてもらえないのかと食い下がったが、医師は「強制的入院は、ただ、彼の反発を招くだけだろう」と言った。では、本人が望んだら入院させるかと、なおも両親は食い下がった。

医師は、「周囲を自分の思いどおりにしないと気のすまないという人格上の問題がある。であれば、自分から入院しても、病院の規律に従わせようとすれば、すぐ自分から退院すると言うだろう。また、人格上の問題は、その人間の人となりであるから、病気ではない。病気ではないので治せない」と回答した。

一般的に、精神病状態になければ責任能力があるとするのが刑法の規定である。その大学生が何かしでかせば、刑法の規定で裁かれるのが筋である。実際、その大学生は、自分がまだ未成年だというので、軽微な触法行為はあらかた許されることを計算していたようであった。ただし、彼の我がままを引き出し、強化したのは、彼の我がままを彼の責任ではなく病気のせいとしたところにあったのである。病気だから我がままは彼の責任ではない。彼はのびのびと我がままになれる。彼はいつまでも病気でありつづけるだろう。

両親は言う。いったい、どうしたらいいのだ。この子は家に連れて帰れば、また些細なことで暴れるだろう、と途方にくれた。

精神科医は両親に答えた。

「今、私は、彼に君は病気ではないと言いました。君はこれから行うすべてのことに責任を問われることになる。あと少しで十九歳が終わるからと、言ってやりました。私の予想では、彼は二十歳になったら、おとなしくなっていくはずです。その可能性はあると思います」

「でも、もし暴れたら？」

「彼に何がフェアな行為で、何がフェアでない行為か教えてやる必要があります。それには、彼をご両親が告発することも含まれます。理不尽なことをしたら罰せられるというこの世の現実原則に従わせることは、彼にとって悪いことではありません。アメリカ人の親ならそうすると思われます」

半端な人びとの受けⅢ

精神病をきちんと治療せず、神経症という曖昧な概念の病気ばかりを相手に仕事をしている医師は、しばしば、境界型人格障害という診断を用いたがる。彼らの外来に、つき合いやすい神経症の患者にまぎれ込んでやってくるからだ。たいてい、彼らは最初おとなしくしていろいろ悩みだけを訴えるから、医師も相手をしてカウンセリング料を得ることができる。しかし、間もなく、医師の言うとおりには動かなくなり、手に負えなくなっていく。

彼らは、それなりにプロなのだから、最

初から予想はつきそうなものだが、神経症の治療技術のなかにあるフロイト流了解心理学が災いして、診損じを起こしやすいと思えるのだ。

　精神分析学の体系は、人間の心は必ず一定の病理性があるとする。その病理性には軽い人から重い人までの程度差があるが、原則的に著しい質的な差はないとされている。そして、その病理的な心理過程を了解可能なものとして示すことを目的としている。そうすれば治療可能になる、という仮説である。

　病理は程度差の問題で、誰にも少しは変なところがあるとする姿勢は、どこからどこまでを病気とするか、その基準が曖昧とならざるを得ない宿命にある。普通の人が病気なら、誰だって病気というふうに病理の概念は広がる。だから、なんの抵抗もなく、普通の人でも診療する。

　はた迷惑で、ひどく我がままなだけの人間も、やはりその心理を了解しようと努め、幼年期の両親の育て方が悪いせいだなどといったところに落ち着けば、もう充分病気としてしまう（了解できない心理があるから病気というのであって、了解できてしまったらもはや病気ではないのだと、私は思うのだが）。

　こんなわけで、神経症をもっぱら治療する医師たちは、たんなる我がままと神経症との区別を充分つけられない傾向に陥りやすい。

　結局、治療できそうもないのに（人格上の問題は治療できない）、治療を始めてしまうものだから、今さら病理性はないと言いはれない。手に負えなくなったとき、すこぶる都合の良い命名をアメリカ医学が用意していたことに気づく。神経症でもなく、さりとて精神病でもない。その境界にあるらしいから、境界型人格障害ということになる。ただし、アメリカのかかる診断名が経済原則に基づいて出現している面があることは、日本ではあまり気づかれていない。

　この世に半端な人というしかない人びとがいることは確かである。たとえば、精神病院には、よく覚醒剤精神病にかかったヤクザ崩れの五十歳前後の男が入院してくる。からだにイレズミが入っている男も少なくない。しかし、いずれも、完成されていないのである。青い墨で輪郭は描かれているが、朱が入っていないことが多い（こういう男たちを筋（スジ）者という）。未完成の半端なイレズミは、彼らがヤクザの構成員としても定着できなかったことを示している。結局、住所不定で、うろうろと飯場などを渡り歩くことがほとんどである。兄弟は七、八人いても誰も彼を助けたがらない。すでに十代の初めの頃から家を出るか、追い出されるかしている。彼らと話してみると、ひどく寂しがり屋であることが多いのだ。

　彼らのような人びとは、良好な家庭が用意されることでその出現を防げることができるのだろうか。そうだと簡単には言い切れないだろう。他の兄弟たちだって同じ境遇にいたのだ。そして、兄弟たちは言う。「こいつだけがヤクザになった。他は皆まともにやってるのに」。

　今や貧乏人の子だくさんはなくなった。誰もが一人息子、一人娘である。親にはかなり薄情者（ハクジョウモノ）もいるし、勝手な考えを子どもに押しつける者もいるが、四半世紀前の日本の子どもたちより恵まれていることは確かである。それでも、やはり、人とうま

く協調できず、こらえ性がなく、気に入らないと情動的に不安定になり、そのくせ、人からひたすら愛されたいと願う寂しがり屋は出現する。

彼らは昔のように家から叩き出されることがないので、ずっと家の中に居つづけるはずである。彼らのすべてが暴れるわけではない。ただ、親が何もしない息子をたくましい人間に変身させようと、ノルマを課したり、好みに合わない作業を強いたときに暴れだすのである。そして、病院にやってくるのだ。

精神医学の本分

どうやら、日本がアメリカ社会に似てきたから、こういった人びとが多く出現してきたというのは間違いである。こういった人びとは昔から、たくさんいたと思えるのである。ただ、いつの時代か定かではないが、彼らのような人格特性を持った人間たちがなんらかの役割を果たしたときはあったはずである。

しかし、この百年か二百年、小綺麗さと目の前の合理性のみを美徳とする近代市民社会では、彼らの居場所はなくなってきた。はたして精神医学は、彼らのような半端な人びとを今日の市民社会に適応できるようにさせ得るであろうか。

熱心な人間が相当の努力をすれば、ある程度の矯正は見込まれるかもしれないが、精神医学は、そもそも近代市民社会を支える目的で発達したものである。結局は彼らを、行儀良くして、地道な努力を重ねる方向へ導こうとする。しかし、そのこと自体が彼らを疎外するはずであるから、努力はかえってマイナスに働くことも少なくない。

精神医学は基本に戻って、本当の精神病者を良く治療することに専念すべきである。

精神病の治療とは、まず患者について医師が関与できることは何であるかを見極める作業からスタートする。それは神経症の治療においても同様であるが、精神病の治療の成否はほとんどその見極めにかかっているから、治療者は精神病の場合、全力を投入する。そうしておくと、以後の治療はずっとスムースにいくのだ。

やはり、精神科医は精神病の患者としっかりつき合うべきである。その訓練があって初めて、さまざまな精神科受診者たちに自分の力に見合ったサービスを行えるはずなのだ。そうしていれば、むろん人格障害と言われるような人びとに対しても、安易な治療を行わない（これもサービスである）という勘も養えるはずなのである。

（注）

＊1 **解離性ヒステリー** 困難な場面や特殊な状況に遭遇すると、それまでと異なる人格に変容する。しかし、あとで元の人格に戻ったとき、変容していた間のことを覚えていない。

＊2 **仮入院** 精神保健福祉法第三十四条にある。一週間以内に限り、家族などの同意で強制的に入院させて、病気か否かの診断を行える。

小倉十五人刺傷事件と精神鑑定報道

通り魔たちの「完全なる世界」

なぜ走りだしたのか？
紙一重のところで自らを「現実」につないでいる人びとに、彼らは何を語りかけたのか？

朝倉喬司（犯罪評論家）

何年ぶりかで小倉駅に降りたって、駅前を見わたしながら、

「おい、これ小倉かよ」

と、となりに知り合いでもいれば話しかけたくなった。一瞬、降りる駅を間違えたのではないのかと思った。

建て込んだビル、やたら幅の広い歩道橋、さらには工事中のモノレールの橋架。家並の向こうに特徴のある形をした山がいくつか見えたはずの見通しはすっかりふさがれ、小倉名代の、あの無法松の胴間声の幻聴が耳にたしかに響いた、私の記憶の中の小倉はすっかり消されてしまっていた。

「祇園大鼓の銅像がたしか駅前にあったはずだが……」

それも見えない。おいおい、どうしてくれるんだ。私は半ば意地になって銅像を探しにかかった。すると、歩道橋の陰のところに、まさしく片隅にはきよせられた格好で、銅像はあるにはあった。鉢巻きにハッピ姿の子ども三人が大鼓を叩いている銅像が。けなげに以前どおり。あるにはあっても、それを四周から眺めるべき視座が、したがって、モニュメントとしての意味が消失してしまっていた。

歩道橋は、真向かいのデパート、「そごう」に直結しており、その下のロータリーには客待ちのタクシーがざっと数十台、ひしめくように溜まっている。光景はそのまま、この街の経済の停滞を象徴しているように見えた。あとで運転手の一人に聞くと、状況はほぼそのとおり。タクシーは、街で客を拾えないのをボヤきながら、仕方なく駅前に群れをなしているのだった。

小倉十五人刺傷事件！

今年の七月六日、溜まったタクシーのボンネットの上をぽんぽん飛び移りながら、ロータリーを「そごう」の方へ駆け抜けようとした男がいる。

「そいつは裸足だったよ。そりゃびっくりしたよ。改札口のとこ何気なく見とったら、キャーッとかワーッとか大声あげて人波が押し出してきたもんな。何事(なんごと)の起きたと、あれあれ？と思うとったら、若い男が走り出してきよった」

男は手にナイフを持っていた。

「それが、ポーンとわしらの車のボンネットに飛びのった。五、六台くらいかな、飛び移って、ほれ、そこの車道へ出たわけよ。あとでボンネットを見たら血が点々とついとったね。うん、ナイフやからだから落ちた血だな。で、車道へ降りたとこで、そいつ、ナイフをシャツの下に隠しよった。わしは、こりゃ覚醒剤でボケとると思って、危ないぞ、ナイフ隠しよったぞと大声あげようとしたけど、声も出んかった」

駅で拾ったタクシー運転手の目撃談。「そごう」の前はバス停になっており、バス待ちの行列ができていた。サイレンを鳴らしたパトカーが、男の前方に急角度でまわりこみながら、行列に向かって、

「〝早く逃げて！〟〝危ない、危ない！〟とおらび（叫び）よった。バス停の人は、まだ何のことかようわからんで、きょとんとしとる。男はそっちの方へ歩いていく。ようやく警官が五、六人、バラバラッと男に追いついたんだが、とっさに手も出せん。男がナイフ構えてジリッと前へ進むと、警官も一歩後へ下がる。にらみあいみたいになっとるうちに警官の数も増えてきて、長い警棒持った一人が、それで男の足をパーンて叩きよった。そしたら男はその場にぐらっと倒れかけて、警官がもうバンバン、棒でメッタ打ちだよ。猪だか熊だか、狩りでケモノ捕まえよるみたいやった」

そうやって男は逮捕された。六日の正午過ぎのこと。飛びかかって押さえつけた警官がナイフをもぎとろうとしたが、

「よほどしっかり掌にくいこんだごとなっとったんやろね……」

ナイフはなかなか男の手から離れなかったのだという。

逮捕された男はA・K。無職の二十一歳。小倉駅前へ現れるまでに、自分の父親から始まって、他十四人の、行きずりの通行人を登山用ナイフで刺していた。

ナイフを、そんな具合に使った以上、容疑は単なる傷害ではなく、殺人未遂ということになる。

完全な世界が実現されつつある

A・Kは小倉北署へ連行され、被疑事実の告知のあと、弁護士の選任をどうするか尋ねられた。型どおりの手続きである。それに対するA・Kの返事は、

「弁護士？　弁護士というのは、神ですか」

というものだった。

「…………？」

刑事は思わず顔を見合わせた。

「神ってお前……」

結局、当番弁護士が接見した。

弁護士の面前に座るなり、A・Kは深々と頭を下げた。顔をあげ、真っすぐな視線

photo▶平山法行

を、「神」だと思っていたのかどうか、とにかく弁護士の方へ向けた。

「新聞記者からあとで〝目はうつろだったか〟とか聞かれましたけど、うつろどころじゃなかったですよ。しっかりとこっちを見ましてね、口調も、考え考え、真面目そのものでした」

と、弁護士は言う。そして、口をついて出る言葉はというと、

「いよいよ、完璧です。完全な世界が実現されつつあるんです。そうです。世界を完璧なものにするにはですね、邪魔はとり除かなければいけないんです」

A・Kの口調は、教師の質問に自信たっぷりに答える生徒のようだった。自分がしでかした事態については、ただ光景として記憶していた。

「いろんな人が倒れたり、逃げまわったりしていたのは見ました。ええ」

「大変なことだったよねぇ」

「……ええ、大変でした」

しかし、それを自分がやったという自覚はなかった。少なくとも、言葉の上にそれは全く現れなかった。人が倒れたり、逃げ

るのを何時、どこで見たのかという話になると、
「たしかに見たんですけど、何時っていうか……」
と、しばらく考えに沈む様子のあと、
「何か、自分の中の他人が見てたみたいで……何か、よくわからないんです」
と、こんな調子だった。何度念を押しても、返ってくる答えは同じ。
「完全な世界」云々の言葉は、出来事への彼の係わりについてのやりとりのなかでではなく、話を変えた、いわば雑談のなかで発せられたものだった。それをA・Kは、世間話に花でも咲かせるように話した。
「雑談になると、彼が信仰していた『エホバの証人』の教義だか何だか、それを一生懸命述べたてるわけですよ。私にはどうも内容はチンプンカンプンでしたが、本人は滔々と、やってましたね」
適当なところで切りあげて、弁護士が席を立つと、A・Kはまた深々とお辞儀をした。接見室のドアに手をかけて、ふと後ろを見ると、まだ頭を下げたままだった。

取調官のぼやき

取調べは難航した。というより、ほとんど取調べにならなかった。
当初は、名前と住所を聞かれても、
「わかりません」
と、繰り返すばかりだった。とぼけている様子はなく、じっと考えて、やっと結論が出たように言うのである。
「神のお告げがあったんです」
と、ポツリともらすので、
「それであんなことをやったのか。やれというお告げだったのか？」
と、突っ込んでも、黙って取調官の目を見るばかり。事件の当事者であることを自覚させようと、
「ここは警察だ、わかるな？ そして君は今警察にこうしている。何で警察にいるのかわかるか？」
と聞いても、答えはやはり、
「わかりません」
そのくせ、宗教の話になると一転饒舌になって、神や世界の終わりなどについての〝御高説〟を刑事は聞かされるばかり。凶器になったナイフの入手先ひとつ解明できないまま日は過ぎていった。A・Kの知覚は、「宗教」の言葉以外は全く受けつけなくなっているとしか考えられなかった。
「向こう側へ片足突っ込んどる者だったら、力ずくでもこっちへ引き戻してみせるけどな。Aみたいに両足だと、わしらにはもう手のほどこしようもないわ」
刑事の一人は、すっかりやる気をなくした様子で新聞記者に言った。事件から約二週間後の七月十九日、A・Kは精神鑑定にまわされ、身柄を同年小倉南区の城野医療刑務所に移された。

「あなたは虚無ですか」

事件当日の午前中、A・Kは小倉駅近くの、ある人材派遣会社のオフィスで就職の面接を受けた。面接には、その会社からの派遣で電気部品工場に勤めている彼の父親がつきそっていた。この父親は、もとは証券会社の社員だったが、リストラで退職。再就職先をひとつしくじった後、人材派遣

瀬戸の女高生

通り魔容疑者に逮捕状

採用試験直後の犯行

小倉の刺傷
けが15人に

容疑者を逮捕
精神鑑定検討

15人がけがをした現場
西日本総合展示場
リーガロイヤルホテル小倉
国道199号
JR小倉駅
逮捕
平和通り
小倉そごう
浅香通り

北九州市小倉北区のJR小倉駅などで六日正午ごろ、列車の乗降客らが登山ナイフで刺された事件で、福岡県警小倉北署は福岡県……などの容疑で……た。けが人は……た。同署の調……の日受けた会……がうまくゆか……

画びょうで？連続刺傷

府中・多摩 小中学生被……

東京都府中市と多摩市の……
府中署と多摩中央署の調……められ、背中を画びょうのよろなもので十二カ所刺さ……
両署によると、い……二十歳から三十歳く……外国人風の男性で、……

会社に登録して現在の職を得ていた。その勤め先に一人欠員ができ、「息子を後釜に」と、面接に連れてきたのだった。

父親とソファーに並んで座り、人事担当者と顔合わせめいた面談をやっている間は、A・Kに何の異常もなかった。このときはもっぱら父親がしゃべり、A・Kは黙ってそれを聞いていた。ずいぶん熱心な父親の口調だったが、どこか息子に気を遣っている様子もうかがえた。

「それじゃ、これから適性試験を受けてもらいますから」

と、担当者がA・Kを促し、父親と離れて別室へ。目の前に試験用紙が置かれたときから、彼の素振りがおかしくなった。用紙をひきよせ、視線をあわただしく字面のあちこちに走らせたが、彼が決して文字を読んでいるのではないことが、担当者には一目でわかった。

「何でこんなことしなきゃいけないんですか？」

突然、顔をあげてA・Kが言った。担当者はあっけにとられたが、気をとりなおし、会社の仕事の内容とからめた試験の趣旨に

ついて説明を始めた。聞かれなくても、ひととおりは言おうとしていたことだった。しかしA・Kに聞く様子はなく、名前を書く欄を指差しながら、

「何で名前を書かなきゃいけないいんですか?」

と、半オクターブほどは上がった声で言いつのった。事態がのみこめないまま、

「試験で名前書くのは当然のことでしょう」

と、担当者が言うと、

「ぼくの名前は〝一(いち)〟、父の名前は〝太(ふと)い〟です」

と、意味不明のことを口走り、あとは「宗教」。早口で、さらに意味のとれない言葉を並べはじめた。あとで見当をつけると、〝一〟も〝太い〟も、二人の名前のなかの一字を指したものらしかった。

「ちょっと待てよ、君」

「いいえ、待ちません……」

会話が言い争いめいてきて、社員が何人か部屋にかけつけてきた。立って、担当者にくいさがろうとするA・Kを、とにかく席につかせようとすると、それを振り払い、

「あなたは虚無ですか」

と、じっと、まばたきもせずに目を見て言う。父親が顔を出し、そんなA・Kをしきりになだめ、

「申し訳ありません。ちょっと外へ出て頭冷やさせますから。おいK、行こう」

と、息子と二人、部屋を出た。A・Kはこのとき、父親には全く反抗的な素振りは見せず、素直にその言葉に従ったのだという。

妄想のエネルギー

A・Kが試験を受けた人材派遣会社は駅の北側の、八階建ての大きなオフィスビルの中にある。そこから父子二人は駅の反対側の、港近くの岸壁まで歩いていった。距離にして約一キロ。私は今回、この道筋を歩いてみて、父親はずいぶん長いこと、息子を歩かせたものだと思った。

二人は、A・Kが小学生のころから別居している。A・Kの母親が、早くから「エホバの証人」の信者で、おそらくそれも一因をなしたのだろう、両親は離婚。A・Kは母親と二人、福岡県築城町の家を出て、山口県下関市に住んだ。

A・Kは最初は母親の影響で、やがて母親以上に熱心な「エホバの証人」の信奉者になった。中学から職業訓練学校を経て木工会社に就職したが、職場でも「宗教」をむき出しにする彼は孤立した。同僚と話は嚙みあわず、休み時間には工場の外をグルグル歩きまわるなど、異様な行動が目立つようになった。職場だけではなく、信者の間でも、彼らにすれば独りよがりの「教理」を振りかざして論争したがるA・Kは、煙たがられた。

そして退職。そんな息子に母親の方が参ってしまい、ノイローゼで入院。去年の暮れごろから両親は「子どものために」ヨリを戻す形になり、A・Kは父親が引きとった。父親は、「息子は自分が立ち直らせる」と親類に言い、医者に相談することもなかった。父親にすれば、別々に暮らす状態をつくったことへの後ろめたさや、ブランクを埋めて息子となんとかコミュニケートしようという焦りがあったのだろう。就職の件にしても、急に自分で話を決めてA・K

を会社へ連れてきたものだった。会社から岸壁までの、二人が歩いた距離の長さは、そんな父親の、とまどいや焦りを表しているように見えた。

　歩きながら、二人が何を話したのかははっきりしない。倉庫や工場の並ぶ、人気の少ない、海の見える場所までやってきて、Ａ・Ｋは「ウー、ウー」と唸り声を出しはじめ、突然走り出した。父親はなすすべもなく立ちつくし、五、六分ほどあとに戻ってきたＡ・Ｋは、登山ナイフを振りかざして父親の脇腹を刺した。そして彼の走行はとまらなくなった。岸壁近くの運送会社の事務所へ駆け込んで、事務員の女性の背中を刺し、次に道路を走って、途中の電話ボックスで電話中の男性一人、信号待ちの女性二人を、こちらは植え込みに突き倒しながらナイフを一閃、二閃。この場所から小倉駅の建物は目と鼻の先に見える。Ａ・Ｋは、駅に何らかの暗示を読みとったものらしく、一直線に構内へ。在来線が発着する五、六番線ホームへ、階段を駆け上り、ホームから停車中の電車の中にまで入り込んで、手当たり次第に刺しまくった。

駅構内は悲鳴渦巻くパニックの空間と化した。ここで鉄道警察隊の警官一人を含む十人が血祭りにあげられ、駅を反対側へ走り抜けたところで、Ａ・Ｋは取り押さえられたのである。

当人にしか、あるいは当人にもわからない理由による動機の暴発があって、唐突に街路を走り出し、通行人を無差別に次々と殺傷する犯罪の一類型があり、一般に「通り魔事件」と称される。この類型には、何らかの妄想がつきまとい、妄想のエネルギーが犯人を〝走らせ〟たとしか考えられないケースが多い。そして、走るのはこの場合、今の場所（境遇）からとにかく脱出したいという、犯人の激烈な意思表示と見てよかろう。

川俣軍司と「電波」

数ある通り魔事件の代表と見なされるのが、一九八一年六月十六日、東京・深川で起きた、寿司職人・川俣軍司（当時29歳）の通行人連続殺傷である。一歳と三歳の幼児を含む四人を死なせ、二人に大ケガを負わせて、川俣は近くの中華料理店にたてこもった末、逮捕された。この事件にも、やはり「妄想」は強く介在していて、川俣は初公判で、自分の犯罪の動機について自ら記した、次のような書状を読みあげている。

「私が事件を引き起したのは、とても世間一般の常識では考えることのできない非人間的な、人間に対して絶対におこなうべきではない、ふつうの人たちであったら一週間ももたないうちに神経衰弱になるだろう、心理的電波・テープによる男と女のキチガイのような声に、何年ものあいだ計画的に毎日毎晩、昼夜の区別なく、一瞬の休みもなく、この世のものとは思えない壮絶な大声でいじめられ続けたことが、原因なのであります」

このありさまは、正確にいうと妄想ではなくて幻覚である。しかし幻覚は妄想と入り組みあうのが常で、検察側の依頼で川俣を精神鑑定した精神医学者・福島章は、彼の幻覚は「幻聴を主とし、異常身体感覚をともなって」おり「妄想は体系化した被害妄想、関係妄想を主とし、これは犯行の動機の形成に、重要な役割をもっている」と、鑑定書で述べている。

異常身体感覚というのは、川俣が法廷証言で述べている「電波」の身体への作用、「頭、それから耳からくるやつ、顔の表面から流れてくるやつなどありますけれども、頭皮全体を引きはがすように流れてくることもあります」といった〝自覚症状〟を指している。そうした電波が「計画的に」送られ続けていると考えるのがすなわち妄想で、大元の発信源は「法務省かどこかの高級役人」（法廷証言）と、川俣は信じ続けてきた。

その役人（黒幕という言い方も、川俣は別のところでしている）が、自分が転々とした寿司屋の経営者に指図して、陰口などで居づらくさせた。また、「計画的に」解雇させた。自分は「働く職場があれば、がんばれると思った」のに、それをこんな形で妨害され、将来に絶望したのが犯行の動機だと、川俣は述べた。

彼は人質をとって立てこもったとき、「役人の家族」と「寿司店の夫婦」ら「全員」をここへ連れてこい、というメッセージを警察に渡しており、「黒幕」の暴露と、彼ら

による迫害への復讐が主要な動機だったと見られるのだが、書状において川俣はそれを後ろへ退け、「絶望」を前面に押し出している。

「殺された町人も幸せだろう」

川俣はその年の四月末、府中刑務所を出所して犯行までの一カ月半ばかりの期間に、何と八軒もの寿司店（うち一軒は大衆割烹店）を転々としている。長いところで約二週間、あとは二日とか三日でお払い箱。いずれも言葉や素振りの粗暴さが主たる原因だった。逮捕時、川俣の尿からは覚醒剤の反応が出た（本人は使用を否認）。

十数年前のこの事件と小倉のケースを比べてみると、形態はとてもよく似ているが、ひとつ著しい相違点がある。「事件」は自分が引き起こしたものだという自覚が、前者にはあって、後者にはない（か、きわめて稀薄）。

人が心を病むについて、当然そこに生じる病状の差異といってしまえばそれまでのことだが、この「相違」は、八〇年代この方、人の社会的な存在様態に広く生じた断層の露頭であるように、私には見える。

川俣は逮捕直後の取調べで、

「死んだ人間は、これも運命だ。おれはサムライだから、殺された町人も幸せだろう」

などと口走っている。虚勢を張らないともたないところまで、彼の自我は追いつめられ、犯行は、「虚勢」の爆発でもあった。

対して、小倉の二十一歳の逮捕後の態度は前述のとおり。自分が引き起こした事態を、自分は、ぼんやり眺めている。そんな自分の名前すら、とっさには、

「わからない」

状態。

川俣の狂気は、彼の不器用きわまる人生遍歴、同じパターンによる失敗の反復から直接生じている。つまりは、生の具体性にいやというほど媒介されている。職場さえ与えられれば、「がんばって働こうとした」という彼の言葉は、おそらくウソではなく、現にある寿司店では、解雇されそうになって、「悪いところがあったら言ってください、一生懸命直しますから」と、頭を下げたりしている。彼が犯行に使った柳刃包丁

は、出所直後、板前としてやっていく決意を固めるために買ったものだったのである。

小倉の青年の場合、就職のトバ口のところで精神に変調をきたし、凶器のナイフをいったいどこで手に入れたのか、どのようなモチーフでそれを所持していたのかも不明のままである。面接に現れたとき、青年はウエストポーチを身につけていたといい、あるいはその中に隠し持っていたとも考えられるのだが、彼のナイフは、この現実のどこからでもなく、いっそ虚空から取り出されたみたいである。

父親を刺して走り出すとき、彼はそのナイフで自分のズボンを膝のあたりで切り落として、半ズボン状にしている。そして上着や靴を脱ぎ捨て、やおら小倉市街の中心部を目指している。

川俣は、自分が悪意によって包囲されていると感じ、そこに「自分」がむき出しになった状態をどうすることもできず、ついには妄想領域に突入したのだが、そのあたり、小倉の青年の場合はどうだったのだろうか。

裸の自分vs次元が違う

少なくとも、川俣のような、犯行と強くからみあった、やみくもな自己主張は彼にはない。

過程において「自分」は、むき出しになるどころか消失しかかっている、というより、私の印象からすると、どこかに手つかずのまま「保存」されている。おそらくは、宗教の言葉がもたらす自足の領域が、その保存場所である。たとえば彼は、木工工場で働いていた当時、仕事上の手違いを注意されたりすると、はかばかしい返事もせず、ときに自分は、

「次元が違う（ところにいる?）んだから」

と、相手にしない素振りを見せた。川俣が、職場で「悪いところがあったら直しますから」と、頭を下げ（しかし信用してもらえなかった）たのとは正反対の態度。双方とも、現実というものに強い違和感を抱いていたことに変わりはないのだろうが、違和のよってきたる所以が全く異なっていることがこれでわかる。

一方は、むき出しにされた「自分」と現実とのきしみあいであり、他方は、現にここにいる自分と、そこから分離せしめられ「次元の違う」場所に保存された「自分」とのズレに対する不快感の、現実への投影である。そこで分離を励起したのは、いうまでもなく「神」であり、神は分離された「もうひとつの自分」「ホントの自分」への幻想に、ただひたすら強度をもたらす力の源泉でもある。強度は幻想を確信に転化させ、この確信のバリアーの内側に「自分」は自足的に保存される。

小倉の事件で、狂気の発動の軸をなしたのは他ならぬこの確信だったが、川俣の場合には確信の位置に「感情」があった。川俣は、電波がからだにやってくる状態を、「ひっつく」と随所で言い表している。

「ひっつきの内容は、耳から電波をおくってイライラさせたり、メソメソさせたり、不安にさせたり」（供述調書）

「ほんらいの自分」という自己イメージが彼にもある。本当は、イライラしたり、メソメソしたり、不安になったりする「自分」ではないのにという彼の思いが、そこで電

波に託して述べられている。彼に「ひっついている」のは感情である。本当の「自分」に確信をもとうとしても、彼は感情にひっつかれてそれができない。感情が「自分」に覆いかぶさり、密着して身動きもできない苦しさを、彼は訴えている。そして、そんな状態からの脱出方法として彼に残されたのは、妄想のスクリーンに「元凶」をしつらえ、凶器片手にその方向へ走り出すとしかなかった。

からだに埋め込まれた「回転体」

ここでもうひとつのケースをもち出すと、九四年十月二十五日、東京・品川区の京浜急行青物横丁駅で起きた医師射殺事件。こちらも、ある一人の男によって、苦の「元凶」が仕立てあげられた末の犯罪だったが、それが実在の人物に擬せられたことで、「通り魔」の形にはならなかった。そして犯人が、「元凶」に向けて発射した弾丸の速度が、走行の代理をなした趣である。

犯人・野本正巳（当時36歳）は、都立台頭病院のO医師に、かつて鼠蹊ヘルニアの手術を受けたが、その後の体調がすぐれず、自分はO医師によって生体実験の材料にされたと信じこんだ。野本は犯行後、都内のテレビ局をまわって、実験による被害の「詳細」を記した「アピール」を配った。彼はそのなかで、自分はO医師に、からだの中にいくつもの「回転体」を埋め込まれ、「筋肉と骨上層部肉」に「血液でない物（液体）を循環させ」られていると訴えている。

「その各回転体が回る流れる径路は全て流体的に継っており回転体はシリコンゴムの様な風せん状でふくらみ、その中で流体が流れる事により回転する」

「〔液体を循環させている大元のエネルギーは〕

腹部、大動脈と大静脈の循環エネルギーでちょうどへその下で回転を感じる（高速な）

血管の中で回転している様に感じる（心臓ポンプのエネルギーをまともに受ける）

（中略）腹部大動脈静脈を経由している為その回転（流体）止める事は不可能な事である」

と、こんな具合に、自分のからだに対して行われた「工作」についての、臨床報告書めいたこまごまとした記述が延々と続く。実験は、そのような「工作」「操作」のあと、「その人間が何年後に死亡するかを計る」ためのものだというのだが、文章からは、彼が自分のからだを、機械として再編成されたもののように感じている、特異な身体感覚がうかがえる。「工作」「操作」、あるいは「回転体」といった用語の選び方に、そのことが強く表れている。

本来なら何かを「工作」する主体であるはずなのに、「工作」をただ受けているだけの、機械自体の死への時間を測定するためだけにつくられた不思議な機械。それが「自分」なのだと、彼は言っているように見える。しかもこの機械は、憂うつな感情をもっている。メランコリー（憂うつ症）という用語はもともと「黒い胆汁」を意味し、西洋の古い精神医学では、この液体がからだに広がることが憂うつ症の病因だと考えられていた。

野本が言うには、やはり彼も、何らかの「液体」をからだに流し込まれた。野本は、この流し込み「工作」によって自分が極度

の憂うつに落とし込まれたのだと言おうとしているように見えるが、彼自身の言及は「精神」ではなく、もっぱら臓器の変調についての事柄ばかりである。「ぼうこう、胃、食道」などの「筋肉の変性」、「その液体の量が大量に増え、それを循環させている為に心臓に負担がかかり心臓がいたむ」「水圧が横隔膜部に強く、呼吸が苦しい」等々。

ひしめく「紙一重」たちへ

現実を超越した、「神」に近い場所へ「いってしまって」いる小倉のA・Kと、この野本のケースを目の前に並べてみると、妄想や狂気の二極分化とでもいうべき、現代の一状況がその背後に立ち現れる。一方は「超越」へ、他方は「身体」への二極分化。そして、二つの極の中間地帯には、リアリティがすっかり蒸発した、私たちの「現実」の空漠たる広がりが見える。この広がりを、「超越」と「身体」との二極をやおらスパークさせたような、血の色をした稲妻が走ったのは、つい先頃のことである（オウム真理教のことです）。ひょっとすると、この「現実」の真っただ中を、柳刃包丁を振りかざして走り抜けた川俣軍司、彼の所業によって「現実」は切り裂かれ、その切れ目こそ、狂気の二極分化の兆候だったのかもしれない。

モニュメントとしての意味を喪失した銅像の建つ駅前を走ったA・Kの狂気の発動に決定的だったのは、父親の（彼にすれば唐突な）登場だったのだと思う。「神」という絶対の存在に向かって「保存」されていた「自分」が、もうひとつの、動かしようもなく自分と係わる存在の出現によって、ゆらぎが生じ、ゆらぎが激烈な反応を呼び起こしたのだと、私には見える。

「完全な世界が実現されつつある」

というA・Kの言葉は、父親を刺すことによって、自足の領域での「保存」の続行にひとまずメドがついたことへの、彼の確信の表れだろう。

「自分」とは別個の、受動性に彩られた機械のような自分を走らせた野本ともども、彼は、分化の残余のように広がる「現実」に、すっかり不安定、不規則に浮遊するばかりになった無数の「自分」の、ひとつに過ぎない。

彼らは走り出したことによって、由々しき犯罪の「主体」になってしまったのだが、走り出しかけた「自分」を、紙一重のところで「現実」につないでいる存在もまた、無数に、今ここに、ひしめいているはずである。

「こちらの世界」に対する想像力

さて私は、この文中で、「目はうつろ」「意味不明のこと（言葉）」という語句を、それぞれ一回ずつ使った。二つの語句を、こうやって並べられると、読者の眼前に、既視感を伴った「出来事の面」とでもいうべき、ぼんやりした情景が浮かぶはずだ。

新聞を丹念に読む習慣のある読者ならすでにお気づきだろうが、この二つの語句は、ある事件が起きて、犯人の精神に異状があるようだと判断された場合に、記事面に登場する、いわば二大常套句なのである。

「あれ」という指示代名詞が、頻繁な使用のまにまに、たとえばセックスにまつわる諸事情のサインとして、なんの打ち合わせ

もなしに通用しているのと同じように、この二つの常套句も、情報の空間におけるサインの役割を果たすようになっている。

「目はうつろ」

ああそうなのか。

「意味不明の言葉を口走っている」

なるほど、そういうことなのか。

と、それとは名ざされず、送り手と受け手の間に了解が成立する仕組み。そして、その少しあとに「精神鑑定」という、当局の処置を示す用語が登場して、異状の兆候についての物言いは、精神医学の言葉の領域に、やおら移しかえられる。言うまでもなく、犯行時の責任能力の有無についての確認の作業がそこで始まるわけだが、この時点で、報道の言葉の表面に、著名な精神医学者、心理学者等が登場して、早々と病名の推測などが行われるのが常である。

サインめいた言葉による、あいまいな了解から、精神医学の、いわば閉域へ、犯行の「主体」はたくしこまれ、たとえば「意味不明」ではあっても、それが言葉である以上、彼の犯罪がもつ、時代との深刻な係わりだとかそうした言葉のみが、ひょっとしたらかろうじて言い表しているかもしれない、「こちらの世界」の断面などに対する想像力は、なかなか育っていきにくい。

この小文は、「不明」として消されてしまいがちな言葉の意味を、なんとか手さぐりでさぐってみたいと思い立って書かれたものである。

作業がうまくいったかどうか、私自身にはよくわからないが、とにかく。

強制入院の未来を語る

真摯な医者のジレンマ

「人権擁護派」と「野放し反対派」のはざまからの告白

取材・構成▼成田毅（フリー編集＆ライター）

「強制入院」という制度がある。これは、患者本人の意志に関わりなく、強制的に彼らを入院させることのできる法律にのっとった制度だ。入院が必要かどうかは、精神保健指定医の資格をもつ精神科医が判断をくだすことになっているが、この入院形態、人権擁護の立場から常に糾弾にさらされてきた。反面、精神障害者野放し反対論者からは、制度の徹底運用が叫ばれてもきた。はたして指定医たちは、その狭間に立たされ、どのような日常を送っているのか？強制入院の実情について、ある指定医が告白する。

指定医とは何か

指定医というのは、たとえば巷で精神障害の疑いのある人がいたとします、その存在を知った第三者が、保健所や警察になんとかしてくれと通報した場合、その人間を診察して、異常ありとなったら病院に強制的に入院させられる職権をもった精神科医のことです。私人が行ったら、逮捕監禁になることが職業上できるわけですよ。

もちろん、仕事はそれだけじゃありません。病棟の中に不穏な患者がいて、他人に危害を与える危険性や自殺する危険性（自傷他害）が推測できた場合に、身体拘束をしたり、保護室（隔離室）に入れたりする権限もある。

指定医の診察が必要になるのは、大雑把に言えば、措置入院、医療保護入院で、強制入院というのは、この二つを総称した呼称なんです。それぞれ意味合いが違ってて、まず措置入院というのは、自傷他害の恐れがある精神障害者を、二人以上の指定医が

診察して強制的に入院させるシステムのことで、入院期間は無制限。医療保護入院は、自傷他害の恐れはないけれど医療の必要があるとき、保護者の同意をとって本人を入院させるシステムです。後者の場合も指定医の診察はもちろん必要で、こちらも入院期間は制限されてないですね。

あとは任意入院というシステムがありますが、これは、あらかじめ本人が入院に同意している場合です。だから強制じゃない。この場合も入院期間はとくに制限されてませんが、本人の病状が良くなれば退院できます。ただ、どの入院システムでも、各都道府県の精神医療審議会で退院できるかどうかの審査を受けなければなりません。

通報システム

たとえば、「どこそこの場所でおかしな人間が暴れている」と警察に通報があった場合、まずその連絡は地域の保健所(精神保健福祉課)に回って、保健所が審議をした後、都道府県の精神保健福祉センターに連絡が入る。そこから許可が下りると初めて、保健所の職員が指定医を探して一緒に診察に行くんです。

現場はさまざまで、仮に街で暴れていたら、まず警察が身柄を拘束してますから留置所の場合もあるし、自宅にこもっているのなら自宅まで行きます。警察官と保健所の職員各二人、指定医二人の六人で。ただ、自宅に乗り込むときは、家宅侵入することになるから、慎重になりますけど。

判断までの時間ですか? たとえば都内だったら、保健所も、審議会でかなり慎重に話し合うみたいで、場合によっては結論が出るまでに一~二週間かかることだってあります。でも、自宅に直接乗り込むなんてことは、今はよっぽどのことがない限りありませんね。誰が見ても明らかに精神障害だとわかるような状況以外は。だって、どこで人権問題が噴出するかわかりませんから。

ただ、地方ではあまりそのへん、うるさくないみたいで、わりと行われているようです。連絡があったら即、現場へ直行することもあるそうですよ。審議は事後承諾なんでしょうけど、審議に時間がかかればかかるほど、逆に地域から「野放し」と言われかねないですからね。

退院した後でも、保健所はその精神障害者の生活をけっこう把握しようとして、たまに訪ねたりします。生活保護を受けてる障害者も多いですから。そのあたりは福祉事務所と連携をとっているんです。我われに保健所から連絡が入ることもありますよ。「こういう人がいますが、今度、訪問したときどう扱ったらいいんですか?」って。

措置入院の現場へ

これまでいくつものケースを診てきましたが、診察にまでなるようなのは、基本的に病状が重いとか軽いとかよりも、援助してくれる家族や周囲の人たちがいない場合が圧倒的なんです。周りでしっかり援助してれば、事前に治療ができるし、早い時期に病院にかかれるんですから。ほとんどが、放置されてそこまで病状が悪化してしまったケースです。

たとえば、分裂病の場合だって、最初から暴れるわけじゃない。親がしっかりして

ればいいんだけど、兄弟みんなが独立してアパートから出ていってしまい、そのうちに親も老いて死んでしまう。一人残された本人は、最初は閉じこもって家から出てこないとか、おとなしくじっとしてるんですが、やがて壁を叩きはじめたり、病状が昂じて隣の住人に被害妄想をもってしまい、怒鳴り込むようになったりする。あるいは、真夜中に外で「ギャァー」っと叫びだしたりして通報される。

数年前、家から出てこないというので、自宅まで診察に行ったことがあったんです。びっくりしたのは、その家というのが、昔あったような〝文化住宅〟そのままなんですね。木造の、本当に古い三軒長屋みたいなアパートで、それこそ、昭和三十年代に経験した世界ですよ。ミカン箱を机代わりにしてるような生活というんですか、洗濯機だって、昔あったような二本のロールで脱水するタイプのをいまだに使ってたんですから。

本人は、病弱で年老いた母親との二人暮らしでした。母親にはもう彼を入院させる経済的な能力がない。本人は三十代半ばくらいの男性で、以前精神病院に入院していたこともあった。周囲の人間や警察が、その母親の事情や彼の異常な行動を見て、保健所に通報してきたわけです。

ドアをノックしたら、本人が玄関から出てきたんです。終始眉をひそめて、怪訝そうな表情で立っている。とにかく、「精神保健福祉法第二十四条の警察官通報」(診察のため立ち入る権利が認められている)で来たと告げてから、部屋の中で診察しました。暴れたりはしませんでしたけど、病状はかなり悪化してましたね。妄想に支配されてたから。

だけど本人は、自分はおかしくなんかないし、入院したくない、絶対ここから出ないと言い張る。そんな応酬があったんですが、最終的には、保健所の職員の説得に応じましたから、スムースに事が運んで、保健所の車で病院に連れていきました。

もちろん、なかには入院をとことん拒否して暴れてしまうことだってあります。警察官も、直接手を下すのを避けるみたいで、最初は遠巻きにやりとりを眺めてるんですが、だめなときは両腕を押さえつけて、パトカーに押し込むことだってあります。現場はそんなものなんです。

こう話すと、なんだか障害者狩りをやってるように聞こえるかもしれませんが、先ほどのケースだって、普通なら母親が彼の入院に同意して本人が病院に来てくれれば、措置にせず、医療保護入院にできるんです。ただ、本人の強い治療拒否の態度もあって措置にした面が強かったんですよ。措置になれば、医療費はすべて公費でまかなえますしね。措置入院=監禁と言われることが多いんですが、同時に社会福祉的な側面もあるわけですから。

ただ、家に直接立ち入るようなケースは、すでに措置入院にしようということが、ある程度決まってますね。保健所も、内偵というんですか、あらかじめ目星をつけたうえで、我われに打診してきますから。

もちろん、自宅まで行って、措置入院にならなかったケースもありますよ。とうに成人した息子が、親に暴力ばかり振って、家は壊すしもう家中めちゃくちゃになっていたんですが、本人は冷静に物事を考える力もあるし、病的状態は認められないんで

す。いわゆる人格障害といった程度なんです。その暴力も家族以外には及ぶ可能性はないし、家庭内に別の問題があったみたいで、措置入院にはしなかった。家庭内暴力がすべて措置入院になってしまったら、これはこれで大変な問題に発展しますから。

■入院形態一覧

入院形態	任意入院	措置入院	緊急措置入院	医療保護入院	応急入院	仮入院
対象者	入院について同意する精神障害者	自傷他害のおそれのある精神障害者	急速な入院を必要とする自傷他害のおそれが著しい精神障害者	入院の必要のある精神障害者であって、保護者等の同意のある者	入院の必要のある精神障害者であって、急速を要し、保護者の同意を得ることができない者	精神障害者の疑いがありその診断に時日を要する者であって、その後見人等の同意がある者
要件等	○本人の同意	○２名以上の精神保健指定医の診察 ○指定医は厚生大臣の定める基準に従い判定	○精神保健指定医の診察	○精神保健指定医の診察 ○保護者（又は扶養義務者）の同意	○精神保健指定医の診察	○精神保健指定医の診察 ○後見人等の同意
入院期間	——	——	72時間以内	扶養義務者による同意の場合、４週間以内	72時間以内	1週間以内
入院施設	○精神病院	○国・都道府県立精神病院 ○指定病院	○国・都道府県立精神病院 ○指定病院	○精神病院	○応急入院指定精神病院	○精神病院
行政機関への病状報告等	なし	○６カ月ごとに病状報告	なし	○入院後10日以内に届出 ○12カ月ごとに病状報告	○入院後直ちに届出	○入院後10日以内に届出

外国人と〝経済措置〟

最近は、外国人の措置入院が多いようですね。これも経済的な問題がやっぱり大きいんですが。

フィリピンから来ていた女性ダンサーが、覚醒剤でおかしくなったといって自分から警察にかけ込んできたんです。それで警察で保護されて、緊急措置入院（入院は七十二時間以内に限定される）ということで病院に収容された。彼女には、フィリピン人の仲間も日本にいたし、内縁の日本人の夫もいるようでしたが、保険が使えるわけじゃない。だからどうしても、入院費などのお金の支払いが問題になってしまう。かといって、すぐに退院させるわけにもいかない。治療が必要でしたし、そのためには入院を継続するしか方法がなかったわけです。

その彼女、ちょっと変だったのは、どこにも覚醒剤を打ったような注射の跡がなかったんですね。今は、鼻から吸うのが主流みたいで、これはかなり危険なんです。それをやってる可能性もあるだろうし、ある

いはコカインの疑いもある。
病院に収容されているときは覚醒剤特有の症状は認められなかったんだけど、ただ、本人も覚醒剤をやっていると言ってるし、周囲もそんなことを言ってましたから、覚醒剤精神病ということにしたわけです。自傷他害の可能性についても、危険があるというよりは、可能性がないこともないということにして、措置の要件を満たした。実際に彼女の精神状態は、意識障害(*)が出ていてあまりよくなかったですからね。
とにかく、配偶者がはっきりしないし、親権者も外国にいるわけですから医療保護にできない。こんな場合は、措置の制度もそんなに悪いことじゃないと思います。別名〝経済措置〟と言われてるくらいですから。おそらく、これが日本人だったら、措置は難しかったでしょうね。よっぽど生活に困窮してないかぎり、お金の出所がはっきりしているんですから。

*意識障害　通常、統合された精神状態がいろいろな原因によって異常性を帯びる場合を総じていう。精神活動全般にわたって低下する意識混濁などがある。

医療保護入院の曖昧さ

医療保護入院というのは、要するに、本人の意志と関わりなく、病院と家族の契約で入院させるものなんです。つまり家族が保護義務者になるわけですね。これは、外国からいつも叩かれている日本独特のシステムなんです。海外では、自由入院と強制入院にはっきりと分けていて、日本も将来こういった方向に向かっていくんじゃないでしょうか。資料を見ると、昭和四十年代には約九割だった医療保護入院が、現在では三割程度になっている。今は任意入院が六割以上なんです。
医療保護入院は、言ってみれば家族による監禁ですから、やはり問題がある。治療を勧めても本人が拒否したり、そのうち症状が悪くなって周りでも手に負えなくなって、家族が困るといったことももちろんあります。でもなかには、アルコール中毒ということで禁治産者にしてしまい、入院中に本人抜きで遺産を分けて裁判にまでなったケースもありますからね。実際、アル中まで行ってなくて、ちゃんとした判断だってできるのに、ときどき酔っ払って家族に対して凄むという理由だけで、病院に入れるんですから。
インフォームド・コンセントをする場合でも、医療保護入院が必ず問題になるんです。要するにパターナリズムですよ。医者のほうが病気についての知識や経験が豊富ですから、どうしても決定権をもってしまう。それに家族のほうも、「お医者様がこういう治療がいいっておっしゃっているのだから、あなたもこれに従いなさい」と言う。親や配偶者からの強制もしやすい。本人には自由裁量権がまったくないシステムというので、外国の人権団体からやり玉にあげられるんです。
もちろん、精神科の患者は自分が病気だという認識がない人も多いですよ。任意入院だけではなかなか治療が進まないし、それだったら任意入院と強制入院を明確に分けたほうがいいんじゃないかというふうに、お上も考えはじめてるようです。
最近こういうことがあるようですね。警

■入院のプロセス一覧

精神障害者か

精神障害でない（精神神経症等）

精神障害の疑い

精神障害者

精神保健法に定める入院形態の適応なし（自由入院）

措置症状があるか

あり

なし

入院の必要があるか

あり

なし

入院の必要があるか

なし

あり

本人の同意があるか

なし

あり

市町村長以外の保護者がいるか

あり

なし・不明

保護者の同意があるか

なし

あり

扶養義務者がいるか

不明

あり

なし

急速を要するか

要する

要しない

扶養義務者の同意があるか

なし

あり

保護者の再確認

あり

なし

市町村長の同意があるか

あり

なし

扶養義務者の再確認

あり

なし

仮入院

応急入院

医療保護入院（法第33条２項）

医療保護入院（市町村長同意）

医療保護入院（法第33条１項）

入院不可

任意入院

措置入院

備会社のガードマンが依頼を受けて、患者さんを病院に連れてくるそうです。病状が悪いから家族が本人に入院を勧めるんですが、本人がどうしても入院しようとしない。困った家族が、警備会社に依頼して、一応本人の同意をとったと言って連れてくるんです。でも、実際には同意なんかとってないでしょう。ガードマンは〝ガード〟ではなく〝拘禁〟でしょう。一応、形態としては医療保護入院ですが、実質は措置入院です。これが仮に措置だったら、警察が連れてこられるんですが、医療保護入院ですから、警察も手は出せませんし、病院側もそのへんの事情にうすうす気づいてるみたいですね。

任意入院の難点

昨年、精神保健法が精神保健福祉法に改正されて、法律そのものは障害者をどんどん社会復帰させようという考え方に変わってきたんですが、これはこれで、また問題を抱えている。

改正された法律には、任意入院の比率を高めようという意図があるんです。本人の自由意志を尊重しよう、という考え方ですね。そうなると、基本的には病院からの外出も自由です。もちろん、病状が悪いようなら行動を医者が制限する場合もあるし、症状を診ながら外出させたりと、まちまちなんですが、外で何か問題を起こしたら、病院に責任がないわけじゃない。裁判になったら負けますよ、今までの判例でもそうなんですから。これは病院のジレンマです。

病院の過失が問われるのは、病状が悪かったのにそれを見逃して外出させたから、という点です。医者も、本音を言えば、そうとう怖がってますね。患者さんだって、知識もありますし、自我の能力だってかなり高い人がいるわけですから、医者の前である程度病状が良くなっているように装うこともできるんです。

実際は病状が悪いんだけれど、医者にはいいように見せておいて、外出しているときに問題を起こしてしまったことだってありましたから。正直言って、そこまでの予測が今の精神医学にできるかと言えば、それは不可能です。病院や医者に過失ありという判例もあるから、医者も慎重にならざるをえない。慎重になったらなったで、今度は過剰監禁だと言われる。精神病院も医者も、今、難しい状況に立たされているんです。人権、人権と批判するのは簡単ですけど、社会防衛とのバランスをとっていかなくちゃいけない。

だから、任意入院の患者に外出させないようにしようかっていう議論が出たこともあるんですよ。たとえば、任意入院の患者さんが外で問題を起こしたとする。任意入院は、患者本人と病院との契約で入院するわけですから、病院側にだけ過失が残る。しかし、医療保護入院なら外出させよう。というのも、これは家族と病院の契約ですから、「これこれの危険性もありますが、もし外出して何か事故を起こしたらそのときは責任を取ってくださいね」という旨で家族に一筆書いてもらえば、何かあっても、家族の依頼で外出させたのだからという言い訳ができるんです。そういう意味で、任意入院は外出させられないんじゃないか、っていう変な議論はありましたよ。

精神医学は、教科書があってないような

もので、教科書の版が変われば、診断名ががらっと変わってしまうし、精神医学界のボスが変われば診断基準も変わることだってある。それに、精神分裂病を認めていない医者だっているんですよ、なかには。それは極端な例だけど、病気かそうでないかの判断は、微妙なところになると、医者の考え方によって変わってくるのも確かなんですね。

医者自身にも、かなり危ない人がいますから(笑)。そういう医者は精神病というものを狭くとらえるでしょうね。精神科医は精神というものを秤にかけるわけですから、医者も社会の一員である以上、社会の秤によって、診断結果が変わることだってありえます。絶対的な尺度がもてない。我われが精神科医になりたてのころ、「自分で自分の教科書をつくれ」とよく言われましたから。

さらなるジレンマ

指定医というのは、医者なら誰でもなれるかというとそうじゃないんです。まず、医者としての経験が五年以上あって、なおかつ精神科の実務経験が三年以上必要なんです。それに、実務を経験している証として、八例以上のケースレポートを厚生省に提出しなければいけない。精神分裂病圏(*)で三例、躁うつ病圏(*)、中毒性精神障害(覚醒剤やアル中など)、児童・思春期精神障害(*)、症状性または器質性精神障害(*)、老年期痴呆をそれぞれ一例。どれも措置入院か医療保護入院の患者でなければならない。精神分裂病圏の場合は、三例中措置入院を必ず一例はレポートに入れなくてはならない。

ただ、このレポートを書くためには、措置入院や医療保護入院の患者さんを現実に診る機会をもたなければいけません。じゃあ、どこの病院でそうした患者さんを受け入れているかというと、県から指定された指定病院なんです。わりと大きな病院が多くて、病院の医師募集も要指定医資格が多いようですが、指定医になりたい若い医者は、こういった大きな病院に集まることになる。

逆に、中小の病院では、若い医者が勤めにこないので、どうしてもベテランの医者に偏る。それで、人件費がかなりかさんで

＊精神分裂病圏　現実からひきこもったり、思考過程に障害をもったり、感情的な不調和を示す。副症状としては、幻覚や妄想が現れたりする。分裂病という本態があるわけではなく、スペクトラムでとらえるので、症候群という意味合いで「圏」という言い方をしている。

＊躁うつ病圏　感情の障害。躁状態とうつ状態、あるいはこれらが混合した状態が周期的に生じる。「圏」という言い方は、分裂病と同じく、本態ではなく横断面でみているため。

＊児童・思春期精神障害　思春期にわりと多くみられる病像で、自己臭恐怖症などがある。指定医になるためのケースレポートでは、十八歳未満のケースを診ればいいことになっている。

＊器質性精神障害　脳の疾患が基本となる慢性の精神病。梅毒による進行麻痺や頭部外傷、脳炎など経過、症状ともにさまざまである。

いるのが現状です。だから、中小の病院は、若い医者の人気を集めるため、病院自体の格を底上げするために、指定病院になりたがるんです。

でも実際は、そうやって指定病院になっても、措置入院を面倒臭がるところがけっこうあるんですね。措置入院の患者は危ないから、病院から逃げ出したり、外出許可で外に出しても何か問題を起こすから、とリスクを避けたがる。このあたりは、病院経営に関わる話ですから、いろいろとジレンマが多いんです。

医学か法律か

今、精神神経学会の認定で、精神科専門医の制度をつくろうという動きがあります。これは、たとえば内科なら内科専門医、小児科なら小児科専門医という制度が他の診療科目にならあるんですが、精神科にだけない。指定医がその役割を肩代わりしているのが現実なんですが、ただ指定医は、極端な話、学問的な資質はそれほど問われない。法律の知識があるかどうかが中心になりますから、リーガル（法律）モデルなんですよ。精神科専門医は、メディカル（医学）モデルで、ちゃんと診断をくだせるかどうか、つまり診たての力量が当然問題になってくる。だから本来、メディカルモデルをしっかりしたうえで、リーガルモデルを確立していけばいいのに、実際には別々のカテゴリーで同時進行してしまって、バランスが非常に悪いんですね。

たとえば、精神科の医者だって、外科手術をしてもいいんですよ。医者ですからね。逆に言えば、外科医も精神科の真似をしてもいいし、治療ということで患者を監禁したっていいんです。ただ、それはあまりに問題があって、精神科の専門知識がなくても監禁していいのか？とか、あるいはトラブルが起きたらどうするのか？といった矛盾が出てくる。医者って、「私人」なんですよ。国家から資格を与えられているけど、他人に対して監禁する資格を与えられているわけじゃないんです。ところが、宇都宮病院のような事件（＊）が発生したことで精神保健法ができ、同時に「精神科指定医」という制度もできた。「指定医」は、まったくのリーガルモデルなんです。

＊宇都宮病院　昭和五十九年三月に明るみになった事件。入院患者二名に対する障害致死容疑で、職員が暴行の事実を認めた。当時の石川院長は、このことにより裁判で有罪判決を受けた。

それから、精神科的な症状や病理というのはさまざまなんですが、リーガルモデルではこれに対応できない。たとえば、精神分裂病だって症状はさまざまだし、それと覚醒剤精神病を同じ単一のものさしではかるのはどうか。分裂病と覚醒剤精神病は、それぞれ違った病気ですから、一定の経過を辿るわけでもなければ予後の予想だって違うんです。それこそ、人それぞれに違った顔があるように、症状にだってさまざまな顔があるんですから。それを、措置入院や医療保護入院でいっしょくたに扱ってしまっていいのか、ということですよ。

電気ショックの復活

措置入院の場合、ずっと入院しているか

ら病状が悪いままというわけでもないんですよ。逆に、早く措置解除になったほうが病状が悪くなることもある。病院内で非常に粗暴な患者がいたんですが、他のきちんと治療を受けている患者さんを守る義務も病院にはありますから、暴れてしまって他の患者さんを傷つけられたら大変なことになるというんで、しかたなく措置解除したこともありました。もちろん、落ち着くまで保護室に入れておけばいいんですが、入れっぱなしにするなんてできませんしね。

日本では、精神病院に入院している期間が長いとよく言われたり、長期にわたって監禁しているとか、一度病院へ入れられたらなかなか出てこれないというイメージがどうも強いようですね。精神科の病気というのは、風邪とは違って二、三日で治るわけではなくて、ちょっと悪くなったり良くなったりを繰り返しながら、経過を経ていくものなんです。我われもそれに沿った治療計画を立てていくんですが、非常に短期的にとらえている家族が多い。一時的に悪くなったからといって、あの病院は患者を悪くしてしまったなどと大騒ぎされたんじゃ、たまらないですよ。

実際、なかなか退院させない病院もあるようですが、これは制度上の欠点が大きいと言えば大きい。日本では、精神科の治療は薬と精神療法が併用されて行われるんですが、わりと長期間かかる精神療法(絵画療法等)の保険の点数が低いんですよ。だから、どうしても一見早く効果が出る薬中心の治療に頼らざるをえない。ただ、薬による治療は、患者さんのそのときの精神状態によっても量の調整や配分の具合だってかなり変わってくる。薬も患者さんもデリケートですから、ヘタをしたら症状を悪くしてしまうことだってあるんですよ。

その点は医療先進国と言われるアメリカも事情は同じなんですが、薬の場合副作用の危険性がありますし、すぐに訴訟問題に発展しますから、安全でお金のかからない治療方法を積極的に研究している。向こうでは、保険制度上、たとえばうつ病を治療する場合、どんな治療をしてもうつ病に対する治療ということで、病院に対して一定の額のお金しか国から支払われない。逆にいうと、これだけのお金で治せということになる。安く治療しようが高く治療しようが病院の力次第だと。だから、経費がかからない方法が盛んに模索されていく。

そのうつ病に効くのが電気ショック療法なんです。アメリカではだいぶ盛んで、薬のような副作用の心配もありませんし、適応さえ間違えなければ早く効果が出る。費用も薬に比べればはるかに安いし、病院の利益にもつながる。治療に長い期間かかろうが短い時間ですもうが、治せば国から病院にお金が入るわけですし……。日本では、普通の精神療法のほかには、薬以外の治療法の研究なんてほとんどされていないでしょう。

ちなみに、この電気ショック療法ですが、日本では人権問題とのからみもあって、六〇年代後半から研究論文として専門誌に登場することがほとんどなくなった。書くこと自体がタブーになった。科学的ではないということや、非常に残酷な治療法であるというのが理由です。電気ショックという言葉のイメージがどうもよくない。今では、麻酔を施したうえでからだに負担をかけない無痙攣の電気ショックもあるわけですか

ら。

電気ショックも精神病に効く薬も、じつはなぜ効くのかはっきりしてないんです。精神病薬だって、症状に効くからつくられたんじゃなくて、始まりは偶然の産物だった。なぜ効果が出るのかわからない。使ってみたら症状が軽くなった。それで、使った薬がどうのような働きをしているのかを研究していったら、神経伝達物質を遮断していることがわかった。それで興奮が収まる。電気ショックも、なぜ効くのかわからない。けれども、実際に効くんです。効いたから研究が始まる。常に事後的に原因がわかってくる、これが精神医学の皮肉な歴史なんです。

受け皿のゆくえ

精神病者が事件を起こすと、「精神病者野放し」といった話になることがあります。でも実際、ほとんどの患者はむしろおとなしい。犯罪なんかとても起こしそうにないような人たちなんです。分裂病のなかには、かなり危なそうなケースもあることはありますが、分裂病にしたってほとんどが危険じゃない。ただそれを一〇〇％予測しろといっても、難しいんです。

やっぱり社会の中に、否定的な感情があるんでしょうね。臨終の場面が家庭から病院に移っていったように、精神病者は精神病院へ入れる。見たくないものは見ないという感情が強く働いているとしか思えません。せっかく患者さんの症状も良くなって退院させようとしても、戻ってこられては困るということで家族が引き取ろうとしないとか、ひどい場合は議員とかを使って退院させないよう、病院に圧力をかけてくることだってありましたから。精神科医が監禁者のように叩かれるいっぽうで、やっかい者を病院に押し付ける人たちがいるわけです。

精神病者にいちばん必要なのは、彼ら自身の生き方で生きていくということですね。それしかない。我われの暮らす社会は、とても強迫観念が強いから、ある意味では、我われも強迫者なんですよ。

それを患者に向かって、会社に入って出世しろとかノルマをこなせとか、他の人と同じように生きていけというのは無理な話で、もしそんなことを言ったら彼らは破綻してしまいます。だから、我われ治療者は、彼らの自己実現を模索していくわけです。排除の論理が強い世間を、あまり気にしないようにと、共に歩いていくしかないですね。

彼らは、ある意味で感性が非常に突出してる人たちなんです。感性が突出しているがゆえに、社会では生活していきにくい敏感な人たちです。鈍い人とは違うんですよ。病気といっても、一〇〇％病気というわけではなくて、現実に適応していく能力はもちろんかなり保たれているのですから、他人とだってつき合えるわけです。ただ、過敏なぶんだけ現在の社会の中では、彼らは非常に混乱しやすいし、生活に適応するのも難しい。彼らの生活するスペースが少ないんです。ですから、適応していく能力を伸ばしていきながら、自分の独自の世界の中で自分の目標を達成してもらうということを、我われは期待するんです。

そういう意味でも、我われは、常に患者の治療と社会の安全の間で揺れ動いている存在なんですよ。

巻末資料

妄想百科事典

本書を100倍理解するための知識群!!

春日武彦(精神科医)

つげ義春の漫画に「コマツ岬の生活」という小品がある。夢をそのまま漫画化したとおぼしき作品で、それについて漫画家の久住昌之は「ボクは一読して、弟と爆笑し、／『夢っぽーい!!』／と声をそろえていた。ボクが二十歳前後の頃だ。そんな夢は見たことがないにもかかわらず、つげさんの絵には、まさに夢のリアリズムのようなものがあった」と、書いている(『夢蔵』情報センター出版局)。

たしかに夢なんて「なんでもあり」のはずであるが、にもかかわらず、夢の内容を聞かされて、それがいかにも眠りの中で見られたであろうと実感させるものと、嘘なんじゃないかと疑いたくなるようなものとがある。夢には夢独特の肌触りとでもいったものが、確実に存在するような気がする。

ところで妄想にもやはり特有のトーンというか「妄想のリアリズム」が存在しているようである。妄想の定義というのはあんがい難しく、たとえば『精神医学大事典』(講談社)を引くと、「高度の確信に裏打ちされて、周囲の人々がいかに熱心にその非現実性やまちがいを説いても、断じて受け入れないほど(訂正不能)の、偏った、独断的な思考ないし判断である」と記してある。

ただし、宗教的信念だとか独善的な思いつきと妄想との区別は困難であるとも書き添えられており、そこが問題となる。迷信や差別的偏見、ある種の風変わりな健康法だとか特殊な信条、馬鹿げた思い込み、インスピレーション、誤った常識といったものはどうなのか?

妄想は、共感する者が数多く出現すれば(広い意味での)宗教として認知され得るだろう。ならば妄想はたんに多数決の問題なのか？　精神医学用語としての妄想は、独創的な考えや前代未聞のアイデアを踏みにじってしまいかねない危険なレッテルなのか?

妄想はキッチュである

ここで「妄想っぽい」という独特の肌触りについて語る必要が出てくる。妄想といえば、これは夢

photo▶平山法行

と同様に「なんでもあり」となるはずである。にもかかわらず精神科医は、患者の語る内容から、「ああ、これはいかにも分裂病の妄想だな。おなじみのアレだな」と直観的に判断のつく場合が多いのである（もちろん判断に困るケースとてある。しかし分裂病の診断は、その妄想の内容のみによってなされるわけではない）。なぜなら分裂病における妄想は存外にメニューが少なく（躁うつ病の妄想はもっとメニューが少ない）、トーンも特有で、慣れればおおむねその「妄想っぽさ」が診断に結びつくからなのである。

　ひとくちにいえば、分裂病すなわち「狂気」の妄想は野暮ったい。おまけに、構図も道具立ても似たり寄ったりのものばかりである。最新のコンピュータが妄想に取り込まれていたとしても、その新奇さはいかにも取ってつけたようにしか見えない。

　病者の語る妄想は、日本画の絵師が描く「洋服姿の現代人」のように、どこか時代錯誤的な垢抜けぬ雰囲気を帯びている。それは妄想が因襲的な世界観の反映であり、固定観念に根ざし、排他的な心情に支配され、旧態依然とした価値観を背負っているからである。妄想はうんざりするほど凡俗で、キッチュである。ある種の泥臭さが、妄想にはいつもつきまとう。

誤解だらけの狂気礼賛

　狂気の基本は、被害妄想にある。被害妄想は、①不安感や恐れ、②「なぜこんな目に遭うんだ?」「どうしてこんなことをされるんだ?」という不条理感や怒り、③加害者や敵の措定、④些細なことを自分に結びつけて「やっぱり」と独り合点してしまうような「思い過ごし」の傾向――以上の四つを要素とする。これらをベースにして、さまざまな非現実的な物語が膨らんでいく。

　①のみが病的に突出したものが**妄想気分**である。②は、③と一緒になって**スパイ組織**だとか黒幕、秘密結社、CIA、地下組織といった匿名性を帯び、しかも強大な力を秘めた加害者を思い描きがちになる（そんな荒唐無稽としかいいようがないものを短絡的に思い描いてしまうところが、まさに分裂病なのである）。そしてその関連として、**盗聴器**や監視カメラ、尾行、追跡、脅し、ほのめかし、暗号や**電波**、脳波、テレパシーといった通俗小説もどきの仕掛けが登場してくる。④が目立てば関係妄想と呼ばれ、あらゆることに不穏な意味づけがなされ、妄想は自己増殖的に発展していく。

　誇大妄想は、しばしば病的不安に対する逃避や居直りであったり、あるいは不条理感から思いついた「こんなにひどい目に遭うのは、きっと自分が天皇の隠し子であるからにちがいない」といった突飛な解釈であったりする。そして途方もない解釈においては、**替え玉妄想**に見られるように、ヒトに潜在的に備わっている普遍的イメージのパターンがあざといかたちで炙り出されてきたように感じられる場合があり、そんなときには「妄想にこそ魂のピュアな姿がある」といった類の狂気礼賛が生じかねない。

　妄想のなかには「タレントの某が、いつもテレビ画面を通して私に恋のサインを送ってくる」とか「私は毎日子どもを一人産みます。それがもう九十九年続いています」といった調子の、脳天気だか「でまかせ」だか分からないようなものがある。これも誇大妄想の延長線上に位置づけることができるかもしれないが、それにしてもこの類の訴えがやはり似たような話ばかりなのである。「なんでもあり」ということになると、ヒトはあんがい貧困な発想しかできないらしいことがよく分かる。

妄想と幻覚の境界

　ところで妄想と幻覚（分裂病では視覚的な幻覚は稀で、大部分は幻聴である）とを、精神科医はあまり区別しない。以下に示した**体感幻覚**の項でも分かるとおり、幻覚と妄想とは表裏一体である。妄想のみが出現してくることもあるけれど、幻覚がある場合には、それに対して患者がストーリーや解釈を与えることで、妄想が立ち上

がってくる。したがって、分裂病の治療では「抗幻覚妄想剤」と称して、双方に共通した薬剤が使用される。

なお、妄想は分裂病でのみ生じるわけではない。躁病では誇大妄想が生じるし、うつ病では**永遠妄想**や**罪業妄想**、**貧困妄想**などが生じる。これらは分裂病性のものと違って、その経緯にどこか納得がいく。躁病で気持がハイになっていれば誇大妄想的になるのも無理のないことだし、うつ病ですっかりいじけた気分でいれば、貧困妄想が現れても不思議はない、といった具合に。したがって、分裂病性の現実離れした妄想とはニュアンスが大きく異なるし、治療にしても、妄想を標的として薬が処方されることはない。

妄想百科事典

【葦原将軍】 五十六年間にわたって松沢病院に入院していた有名な誇大妄想患者。本名、葦原金次郎（一八五〇〜一九三七）。

「征夷大将軍に任ぜられた」などと言いながら二重橋をうろついていたところを入院させられたのが明治十年。以後、院内では他の患者を部下に従え、天下の将軍として大言壮語を発し、トリックスターとして君臨した。荒唐無稽なりにミもフタもない正論を口にするところが面白がられたわけで、山下清や旧日本兵・横井庄一などに大事件へのコメントを求めるマスコミの手口はここに端を発する。

墨痕鮮やかに「勅語」をしたため、それを見学者に売っては小遣いとしたり、玩具の勲章を胸に飾ったり、乃木大将と会見して「ねぎらいの言葉」を与えたり、病院の運動会にはハリボテの大砲を作って大礼服姿で参加する等、話題には事欠かなかった。診断については諸説があり、分裂病よりは慢性躁病とする意見が有力らしい。

遺体解剖の結果によると、脳重量は一一八〇グラム、特別な異常は発見されなかった。墓は豪徳寺にあり、戒名は「至天院高風談玄居士」。

【一次妄想】 分裂病に特徴的。いきなり天啓のごとく「私は救世主だ！　私を王として国家が建設されるべきだ」などと閃いてしまうのが妄想着想、煙草のホープの意匠を見たとたんに「私はウイリアムテルの生まれ変わりだ」などと途方もない意味づけを感じ取ってしまうのが妄想知覚で、両者をもって一次妄想とする。

邪推や執念や思いつめた気持が嵩じた挙げ句、といったそれなりの経緯が透けて見える妄想は二次妄想という。

【永遠妄想】 最も精神的苦痛を伴う妄想が永遠妄想である。初老〜老年期のうつ病患者は、身体の違和感を皮切りに、ときとして胃や腸が腐ってなくなってしまったなどと奇怪な煩悶をなし、ついには「もはや自分は死ぬこともできぬまま、罰として未来永劫この苦しみを味わいつづけねばならない」といった神話レベルの妄想（永遠妄想）へ至る。これをコタール症候群と称し、そのシジフォス的苦悶ゆえに自殺率も高い。

【オセロ症候群】 シェイクスピアの戯曲に由来し、別名を嫉妬妄想という。配偶者や愛人が不貞をなしていると確信するもので、分裂病症状の一環として現れる場合もあれば、老年期に至って正常なはずの人物がいきなり嫉妬妄想のみを示す場合もある。筆者の知る症例では、定年退職した夫がある日、カルチャーセンターへ通う妻と講師が浮気をしていると思いはじめ、「何よりの証拠はセックスがよそよそしくなったことだ」と主張した例があった。根底には、溌剌と過ごす妻への劣等感や積年の不満が伏在しており、二次妄想と考えられる。

アル中では妻に嫉妬妄想を抱くケースが多く、これは性的不能や見捨てられ不安、自信欠如といった要因の反映とされる。

【替え玉妄想】 親しい人物（配偶者や両親、同胞など）が偽者と入れ替わっている、と信ずる妄想。顔つきや動作がいつもと違うとか、雰囲気が異なるとか、そのような些細な直感を「替え玉」という荒唐無稽な存在に結びつけてしまうのである。偽者を「破邪」しようと尊属殺人に及んだケースもある。フセインだの金正日には影武者がいるらしいといった類の風聞と、目の前の相手に覚えた違和感とを同列に置いてしまうような奇矯さがあり、周囲の者は誰もが当惑させられる。

　分裂病のみならずシンナーや覚醒剤中毒、脳炎、てんかん、痴呆などでも出現し、原因疾患がそのように多彩なのは、もしかすると人間にとって「替え玉」とは意識下に横たわる普遍的イメージだからなのかもしれない。報告者にちなみ、別名をカプグラ症状という。

　なお、対象は人物のみならず、日常の品々や動物、道路標識、家そのものなどの場合もある。筆者の経験した症例では、中東の某国の「国名」が陰謀によってすり替えられ、そのために紛争が起きていると主張する患者がいた。

【感応精神病】 狂気は、伝染する場合がある。孤立した小集団において、影響力の強い人物の妄想や異常行動が、他の（正常なはずの）メンバーをも取り込み、共振してしまうのである。内容は被害妄想に類したものが多い。

　家族内や、ときには宗教集団などで生じる。**盗聴器**を恐れ互いに筆談を交わしていた夫婦とか、窓をすべて塞いで立てこもった老姉妹とか、憑きものを叩き出そうと折檻をして殺人に至った狂信者グループなど、劇的なケースが散見される。

【忌避妄想】 目つき、顔かたちの醜さ、体臭、性癖、しぐさや雰囲気などが周囲へ不快感を与え、その結果として自分が他人に敬遠されたり避けられていると思い込むもの。いわば自信欠如と自意識過剰、さらには対人恐怖といった要素が、妄想のかたちで突出した状態を指す。神経症の範疇から分裂病の範疇まで、幅広い病態で見られる。実は筆者にもこの傾向が認められるが、どんな内容なのかは秘密である。

【好訴妄想】 権利が侵害されたとか法的に不利益を被ったと主張し、常識を超越した「こだわり」をもって裁判へ訴える人びとがいる。損得感情は二の次となり、意地と被害者意識とが熱情を駆り立てる。感情は昂り、ますます易刺激性を強め、しかし主張する内容はしだいに形骸化しつつ、彼らは倦むことなく闘争を続ける。**パラノイア**患者に多い。最も不毛な形態をとった自己主張がここにある。

【罪業妄想】 自分は道徳的な罪を犯した、倫理に反した、と思い込んで自分を責めるもの。うつ病で見られる。キリスト教的なトーンの強い妄想であり、日本においてはむしろ「病気のために仕事をこなせず、職場の仲間や家族に申しわけない」といった自責感のかたちをとりやすい。日本人は、神に謝らずに会社や家族へ謝るのである。

【醜形恐怖】 自分の容姿がグロテスクなほどに醜いとか、嫌悪感をもよおすようなフリーク性を持っていると信じ込み、それがために他人から疎まれたり軽蔑されると感じ、重症の対人恐怖へと陥るものを指す。サングラスやマスクを着用したり前髪を垂らして顔を隠したりして、そのためかえって不自然で異様な姿に映ったりする。

　もちろん客観的に醜悪な顔をしているわけではない。自意識が高まり、また異性の目を気にするようになる思春期においては似たような心性を示すケースは珍しくないが、年単位で家に閉じこもってしまったり、「人並みの顔にしてくれ」と美容整形を訪れたりするようになると、もはや妄想のレベルとなる。

　たんなる目鼻だちといったものよりも、「顔の皮膚が厚い」「鼻の大きさが異常で、奇形のようだ」「顔が腫れていて毛深く、ふた目と見られぬ顔だちだ」「顔全体が老人のようで、周囲の雰囲気を暗くしてしまう」など、いささか奇異なイメージを抱いている場合が多い。**忌避妄想**として捉えることもできよう。

【神経症】　つまりノイローゼである。ストレスに由来する心の中の葛藤が、性格や体質と結びつき、その結果として「意外な」かたちで症状として出現するもの。「意外な」症状としては、多重人格とか記憶喪失が最たるものであろう。その他、脅迫状態、心気状態、不安状態、抑うつ状態、パニック状態などさまざまな状態を招来する。自分が神経症であるという自覚を持つことが可能ゆえに、原則的には妄想は生じない。カウンセリングや精神分析、森田療法などが行われるが、精神安定剤も有効。ただし生育歴や性格との関連が深いため、そう簡単に治せるものではないと覚悟をしておくべきだろう。

【スパイ組織】　分裂病者たちはスパイ組織というものを引き合いに出したがる。それは彼らにとって、陰謀史観におけるユダヤ人同盟やフリーメーソンと同じ役割を「スパイ組織」が担っているからである。

　すなわち、**妄想気分**に囚われた彼らが感じている病的不安、胸騒ぎ、疑念、脅威、不気味さといった、曖昧で得体の知れぬものを一挙に意味づけてくれる万能の言葉こそが「スパイ組織」なのである。

　なにしろスパイたちは人知れず暗躍する。平気で市民を巻き込む。ごく身近な、親しいはずの人物の正体がスパイであったりする。**盗聴器**や無線装置を駆使し、尾行や追跡、変装、情報操作、洗脳、ときには殺人すらも容易にやってのける。彼らは秘密工作の痕跡を残さぬどころか、目をつけた相手を「狂人」であると周囲に思わせてしまうことさえ可能なのだ――と、これが分裂病者にとってのスパイ組織のイメージである。

　あまりにもチープで短絡的な発想であるが、そういったものにすがらざるを得ないほどに追いつめられた患者の心情が「キッチュ」と映ってしまうところに、狂気の哀しさがある。

【精神分裂病】　狂気とほぼイコール。脳内の生化学的異常が関与していることは事実だが、今もって原因や本態は不明。本症は精神の「分裂」というよりはむしろ「断片化」と捉えたほうが適切であろう。

　精神が断片化していくとき、それはジグソー・パズルの隙間がゆるんで、絵がばらばらになっていくプロセスに喩えられる。心に映る現実は日常性を失い、違和感や不安感ばかりが際立ってくる。時間的・空間的な連続性が断ち切られ、当たり前のことが謎めいて感じられたり、他人には理解の及ばないような連想や類推をするようになる。ひび割れた心の隙間から、深層に潜んでいた欲望や「こだわり」が滲み出し、それを埋め合わせるかのように陳腐で「気違いじみた」インスピレーションが閃いたり、必然性を欠いたイメージが思考にまぎれ込み、妄想の胚芽が生じるようになる。

　適切な治療がなされないと、活性化されていた幻覚や妄想は遅かれ早かれ形骸化し、患者は覇気を失い無為な生活に陥り、やがて瑞々しい感性を欠いた不自然でぎこちない人物へと変貌してしまいがちとなる。分裂病の真の恐ろしさは、幻覚や妄想の出現などではなく、実はこのような後遺症としての人格変化にある。

【躁うつ病】　分裂病と同様、脳内の生化学的異常を介して出現する病態。躁病においては、気分は高揚してやたらと攻撃的かつエネルギッシュになり、誇大妄想を伴いやすい。ブレーキが効かなくなり、性的な逸脱だとか浪費、無分別かつ無謀な言動を示しがちで、そのため「しらふ」に戻ったときに青ざめることになる。

　うつ病では、気分が沈み物事を悲観的に捉えることとなる。取り越し苦労が目立ち、自責的となり、身体的不調（不眠、だるさ、自律神経失調症など）を伴いがちとなり、自殺をしてしまうことも決して珍しくない。**永遠妄想**や**罪業妄想**が生じる場合もある。

　精神分裂病との最も大きな違いは、後遺症としての人格変化がないことであろう。そういった意味で、精神病院に一生閉じ込められたままの躁うつ病患者は基本的にあり得ない（葦原将軍の病名である「慢性躁病」については、ここでは論じる紙幅がない）。

なお、うつ病のみが生じるタイプ（これが最も多い）と、躁病とうつ病とが交互に出現するタイプがあり、躁病のみが出現するタイプは稀である。我われは基本的にペシミスティックな存在である証拠なのかもしれない。

【想像妊娠】　受胎しているわけでもないのに月経が止まり、悪阻や腹部膨満感、さらには乳首の着色や胎動の自覚などの妊娠兆候が出現するもの。妊娠したと思い込むのみならず、実際にその身体的兆候が出現するところがミソである。ヒステリーにおいて見られ、妊娠願望や妊娠恐怖の裏返しとして出現するのだという。

　慢性の分裂病患者では、ときに「妊娠妄想」が出現し、これは身体兆候を伴わないのが普通であるが、皇族の子どもを宿したとか、テレパシーで妊娠させられた等、荒唐無稽な内容が多い。子どもを産むという事象がリアリティーを欠いた記号と化し、それが誇大妄想や被害妄想と絡まってキッチュなトーンを帯びることになるのであろう。筆者の子どもを、過去に三人ほどの患者が妄想の中で妊娠している。

【体感幻覚】　性器をテレパシーでいじられるのが分かるとか、電波を当てられて身体に電気が走るといった類の訴えを体感幻覚と呼ぶ。痛覚、温覚、圧覚、運動感覚、平衡感覚などに働きかける幻覚であり、通常は感じることのないような奇妙なイメージを伴って出現しがちである。

　平成六年十月二十五日朝、都立台東病院の泌尿器科医師がトカレフで射殺されるという、通称「青物横丁医師射殺事件」が起きた。犯人は鼠蹊ヘルニアの手術を受けた際に、被害者の医師によって体内へ「回転体」なる怪しげな器具を埋め込まれて人体実験をされた、と信じての復讐であった。それはまったくの妄想であるが、犯人（精神分裂病患者）にとってはある種の体感幻覚がありありと実在しており、それゆえに妄想をますます確信していった挙げ句の犯行なのであった。

【タラソフ判決】　妄想に駆られて患者が殺人を企てていることがカウンセリングの過程で判明したとき、医療者は、未然に事件を防ぐべく警察や「可能的被害者」へ通報をすべきか、それとも患者に対する守秘義務を貫くべきか？　そのような葛藤に対するカリフォルニア州最高裁の判断を指す。

　事件は一九六九年十月二十七日に起きた。被害者はカリフォルニア州立大の学生タチアナ・タラソフ。彼女へ恋愛妄想を抱くインド人留学生によって射殺されたのである。

　この留学生は大学病院で精神療法を受けており、タラソフに対する妄執および殺害の空想をカウンセラーへ打ち明けていた。しかも留学生が銃器を購入した事実が伝わっていたにもかかわらず、彼は野放しとなっていたのである。そして事件後、カウンセラーを含む関係者を、タラソフの両親が告訴したのであった。

　裁判の結果は、守秘義務よりも警告や通報など「可能的被害者を保護する義務」を優先すべしというものであった。いかにも正論のように聞こえる判決であるが、実際には「妄想に基づく殺人計画」にどこまで実現性があるか判断するのは容易ではない。過剰な人命尊重主義から、むやみに警告や通報がなされれば患者と医師の関係は中断してしまう。患者のほうは警戒して医療者へ本心を明かさなくなるだろうし、面倒を避けるために医療者はやっかいな患者を遠ざけるといった風潮を招きかねない。

　医療者サイドの反対にもかかわらず、現在、アメリカの多くの州でタラソフ判決は規範とすべき判断と見なされている。

【注察妄想】　超現実派の画家が「狂気」の心象風景をテーマとすれば、おそらく彼らは画面のあちこちに「目」を描き込むことだろう。充血した巨大な目によって、狂った心に渦巻く疑惑や不安、抗えない運命を暗示しようとするだろう。

　分裂病においては、他人の視線がまるで秘密を見透かすかのように、あるいは見張ったり咎め立てするかのように感じられることが多い。それは自意識過剰といった

香気なものに由来する感情ではなく、もはや誰もがスパイであり刺客であるといった確信に近い。そのように、見知らぬ他者の視線が自分に注がれていると実感し、しかもそれへ不安に満ちた異常な意味づけがなされるとき、注察妄想という言葉が該当するようになる。

狂気の心象風景に巨大な目が登場してくるのは、あながち的外れなイメージではないのである。

【追跡妄想】「尾行されている」「つけ狙われている」「探りを入れられている」など、自分が奸計（かんけい）の標的にされ、つきまとわれていると信じ込むこと。「道を歩くと、何くわぬ顔をして後をつけてくる者がいた。振り返ると慌てて電柱の陰に隠れたのが何よりの証拠だ」「奴らは互いに合図しあって連携プレーで追ってくるらしい」「家の前に停まっていた黒塗りの車が怪しい」等、猜疑心から生み出された邪推に端を発している。分裂病でしばしば見られ、通常は**注察妄想**を伴う。やがて**盗聴器**だとか**電波**といったアイテムを取り込んで、妄想は系統立っていく。

特徴的なのは、「誰が」「なぜ」そんなことをするかという疑問が患者には欠落していることである。問いただしてみると、**スパイ組織**だのＣＩＡの企みといった、陳腐かつ曖昧な答えしか返ってこないし、理由も判然としない。病的不安が周囲に投影されて「不穏な雰囲気」をもたらし、それに対する意味づけとして追跡妄想は出現しているのであろう。「疑心暗鬼」が精神病的発展を遂げるプロセスの一典型といえる。

【電波】電波ハ分裂病者ニシカ感知デキナイ。電波ハえねるぎーヲ運ビ、めっせーじヲ伝エ、悪意ヲ届ケル。電波ハ壁ヲ貫キ、皮膚ヲ透過シ、頭蓋骨ヲ突キ抜ケル。電波ハてくのろじーデアリ、呪詛デアリ、脳細胞ノのいずデアル。精神病院ノ壁ハ、アマリニモ沢山ノ電波ニサラサレテ黒ズンデイル。

【盗害妄想】物盗られ妄想ともいう。痴呆老人においては珍しくなく、しまい忘れた財布だとか日常の品々を、嫁が盗んだなどと興奮して非難するのが典型である。短絡的に、「盗まれた！」と日頃嫌っている人のせいにしてしまうわけで、妄想というよりも言いがかりに近い。

【盗聴器】精神分裂病患者にとって盗聴器とは、妄想にリアリティーを付与するための小道具である。出現率はかなり高い。

陰謀を謀る何者かが仕掛けた盗聴器によって、患者の言動は見張られ、何もかもが筒抜けとなる。「壁に耳あり」といった言い回しで表現されることもあれば、器械の詳細が語られることもあるし、ときには睡眠中に自分自身の体内へ埋め込まれたなどと患者が信じている場合さえある。

盗聴器は、見つからないからこそ、その実在がほのめかされるといった逆説的な性質を持つ。疑惑、不審、猜疑と同義の存在であり、それが盗聴器という具体的なモノとして現れるところに分裂病特有のトーンがある。

バリエーションとしては、監視カメラで見張られているとか、脳波やテレパシーで思考を読まれるといった訴えがある。

【二笑亭】明治生まれの金満家の分裂病者、渡辺金蔵によって江東区門前仲町二―四―十に建てられた怪建築。正面には家紋のような形の巨大なはめ殺しの窓があったり、部屋割りが無茶苦茶であったり、縁が鉄の畳が敷かれていたり、節穴にガラスをはめて覗き穴にしてあったり、昇れぬ梯子があったり、和洋合体風呂なるものがあったり、どうにも整合性を欠いた不可解な建物であったらしい。敷地は九五・七坪、商店街に建っているところがいかにも唐突である。金蔵が精神病院へ強制収容されたため昭和十三年に取り壊され、現在は写真や若干の記録が残っているのみで、それらは『定本・二笑亭綺譚』（ちくま文庫）に詳しい。

まぎれもなくエキセントリックな建物ではあるが、妄想を地上へ結晶化させたものが二笑亭であるというよりは、分裂病性の思考障害に由来する衒気（げんき）的性向がそのまま垂れ流されただけの不器用な建築としか見えない。酔狂と病的幾何学主義の混合した「珍建築」と

いったところか。

【発明妄想】　途方もないものを発明すべく、あまりに非現実的な没頭を示すとき、誇大妄想の一環として発明妄想の名が冠せられる。分裂病、**パラノイア**、躁病などで見られる。発明へのこだわりの背後には、一発逆転満塁ホームランへの憧れにも似た性急かつ安直な夢想が横たわっている。

孤独な発明狂の姿を活写した藤枝静男の小説『Tさん』にはこんなくだりがある。「発明には直観が随分大きな役割を持っているし、理論的には不可能と思われる仕事をし遂げようとすれば自然にインスピレーションを持つようになるが、小インスピレーションは発明家を常に訪い、常に失望させ、常に発明に縛りつけて放さないのである」。

【パラノイア】　妄想症、偏執狂などとも言われる。一種の変人であり、ひとつの妄想にすっかり頭の中が占拠され、そのために人生がいかなる事態になろうと決して現状を省みることのない人たちである。妄想以外には、幻聴や思考障害など精神分裂病性の症状はいっさい伴わない。

好訴妄想や**発明妄想**、**ミニョン妄想**、**恋愛妄想**などが、彼らお得意のレパートリーである。また宗教の教祖だとか、カリスマ性に富んだ人物の一部にも、パラノイアは散見される。

右に列挙した各種妄想は分裂病でも見られるが、パラノイアは「病気」というよりもむしろ素質（偏執性）や性格を基盤に、さまざまな状況や環境への居直りとして導き出された「型破りの人生」なのだと言われている。病的ではあるが、「精神病」と言ってしまうには躊躇されるのが正直なところ。

抗幻覚妄想剤はほとんど効かない。パラノイアにつけるクスリはないのである。

【ヒステリー】　ヒステリーでは、精神の病気であるにもかかわらず、目が見えなくなったり、声が出なくなったり、指が動かなくなったり等、あらゆる種類の心身の病気（のイミテーション）が出現し得る。しかも他人に変貌する病（多重人格）や過去を消失する病（記憶喪失）すら出現する。すなわちヒステリーとは、考えつくかぎりの病気や障害のパロディとして出現する「心の病」であり、無意識のうちに演じられる詐病（仮病）と言える。

カテゴリーとしては**神経症**に属する。髪を振り乱して泣き叫ぶものばかりがヒステリーなのではない。自分でも気づかぬうちに病気や修羅場を「演じて」しまうことがすなわちヒステリーの正体なのである。

【被毒妄想】　食べ物に毒が混ぜられていると思い込む妄想。精神状態によって味が変わるのは当然であるが、幻聴や幻視のように幻味が出現している可能性もあろう。いずれにせよ、味覚における違和感が被害妄想の形式をとって現れるとき、それがたちまち「毒」といったモノとして知覚されてしまうところが、まさに精神病たる所以であろう。

分裂病患者にとっては、毒も**電波**もテレパシーも念力も、目には見えないがまぎれもなく害を及ぼす凶々（まがまが）しい存在として、等価なのである。

【皮膚寄生虫妄想】　患者は、初老期以降の女性に多い。かゆみ、むずむず、ざわざわ、ちくちく、といった皮膚の異常感を訴え、それは南京虫、疥癬（かいせん）、ノミ、ダニ、シラミ、その他得体の知れぬミクロな虫が皮膚に寄生したり毛穴へ卵を産みつけたせいだと主張する。そして、かさぶた、フケや角質層のカケラ、抜け落ちた毛髪などを持参し「ここに寄生虫がいます、調べてください」と真顔で提唱したり、連日何本ものバルサンを室内で焚いたりするのである。

典型例では、この症状以外に精神的な異常は認められない。老齢化に伴う皮膚の乾燥や角化、老人性掻痒症のもたらす不快感、皮膚が潤いを失い身体が朽ち果てていく予感、不潔なものに対する病的嫌悪などが、「皮膚へ寄生する虫」というおぞましいイメージに結実したのであろう。

無意識に潜む性的罪悪感、神の審罰、死、疎外、恥辱等々の象徴が虫であると深読みする研究者もいるが、それを患者へ説いても妄

想が消えないのは言うまでもない。

【貧困妄想】　うつ病で見られる。もう自分の家には財産なんかない、稼ぐ手だてもなく明日からは一家揃ってホームレスとなるしかない、会社もリストラでクビになるにちがいない、といった具合に、金銭経済に関して現実離れをした取り越し苦労をすること。うつ病に伴ういじけた気持、マイナス思考が極端なかたちで現れたもの。これは妄想ゆえに、堤清二や田中真紀子だって取り憑かれることはあり得る。

【幻の同居人】　*Phantom Boarders* の訳語。誰か見知らぬ人物が、自分の家（屋根裏、天井裏、地下室、床下、納屋等）へ密かに住みつき、物を盗んだり騒がしくする、といった内容の妄想を指す。恐怖やおののきよりも、迷惑であることを強調するところが奇異に映る。

独り暮らしの老婦人に多く、また「幻の同居人」の訴え以外には、特に精神異常や痴呆の兆候はないのが普通である。

ひっそりと孤立した生活がもたらす現実離れした心理状態や、脳機能の脆弱化を基盤に、家と自己とを同一視する心性が他人に対する違和感や警戒心とあいまって、このように「何者かが家に潜んでいる」といった妄想へ発展したものと思われる。

筆者は、過去に二例ほど遭遇したことがあるが、品の良い老婦人が押入れを開けると天井板の一部が外されていて、「ここから怪しい人が夜中に出入りして困るのです」と淡々とした口調で語ったときには、その天井裏へ通底した彼女の「心の闇」に、慄然とした思いを抱いたものであった。

B級映画や小説、都市伝説などでも「幻の同居人」のテーマはときおり登場する。我われにとって、かなり元型的なイメージと言えるものかもしれない。

【ミニョン妄想】　血統妄想のこと。ゲーテの作品の登場人物にちなんでミニョン妄想とも言われる。誇大妄想の一種であり、自分は天皇家の落胤であるといった類のことを主張する。今の親は本当の親ではなく、自分は双子の片割れゆえに平民に育てられることになったのだ等、貴種流離譚めいたストーリーをとくとくと語ってみせたりする。精神病院の慢性病棟には、この手の分裂病患者が必ず何人かはいる。

【妄想気分】　分裂病者の妄想がいまだその具体的な内容を整える以前の、「何だかよく分からないが、ただならぬことが起きつつある」予感。「空気は張りつめ、世界が意味ありげな沈黙や啓示によって充満している」かのような緊張した気分を指す。こうした感情は早晩、不安や欲望をシュールに反映して、あるいは心の底の元型的なるものを再現して、あるいは陳腐な短絡的思考を経て、ストーリー性を持った妄想へと形づくられていく。

一次妄想の亜型として位置づけられる。

【恋愛妄想】　自分がある特定の異性から愛情を寄せられている、と妄想的に確信すること。女性に多く、自分へ恋慕していると思い込むその相手は、おおむねタレントや小説家や有名人の類である。

相手のところへ手紙を出したり押しかけたりを繰り返し、やがて「誰かが愛の成就を妨害している」といった被害妄想へ転じたり、自分を棚にあげて相手をストーカー呼ばわりしたりと、まことに迷惑な言動へと発展していく。

パラノイア、分裂病、一種の人格障害などに起因する。分裂病の場合には、たとえば愛の相手と見なす小説家の作品の登場人物が自分の名前と似ているとか、まことに突飛な関係づけによって「愛のしるし」を証拠立てたりする。

恋愛妄想に陥る女性は必ずしも不美人というわけではないが、服のセンスや化粧が、どこか奇妙なことが多いようである。

筆者紹介

●**朝倉喬司** あさくら・きょうじ
'43年岐阜県生まれ。早稲田大学第一文学部卒。週刊誌記者を経てフリーに。著書には『遊歌遊侠』『走れ!国定忠治』（共に現代書館）等多数。

●**浅野恭平** あさの・きょうへい
'50年栃木県生まれ。北海道大学卒。著書に『「いなか」の挑戦』（実務教育出版）等。

●**岩崎眞美子** いわさき・まみこ
'66年生まれ。ライター。なぜか周囲に集まるサイコな人びとを見るにつけ、くよくよ物を考えても人間死んだらそれまでよ、と悟りに入る日々を送っている。

●**鵜飼潤** うかい・じゅん
'68年愛知県生まれ。編集プロダクションStudio BROS.共同主宰。

●**内池久貴** うちいけ・ひさたか
'67年福井県生まれ。早稲田大学第一文学部卒。出版社勤務等を経てフリーに。雑誌『ストロング・スタイル』『宝島』に連載を持つ。多ジャンル指向。

●**蛭子能収** えびす・よしかず
'47年長崎県生まれ。雑誌『ガロ』でデビュー。漫画家・特殊タレント。

●**大泉実成** おおいずみ・みつなり
'61年東京都生まれ。中央大学大学院文学研究科哲学専攻修了。『説得・エホバの証人と輸血拒否事件』（現代書館）で講談社ノンフィクション大賞受賞。著書に『消えたマンガ家』（太田出版）等多数。

●**小山田進一** おやまだ・しんいち
'46年新潟県生まれ。千葉大学医学部卒。Total mind care system＝TOMCAS（トムキャス）を主宰する。二一世紀の新しいマインド・ケア・システムの構築を目指す精神科医。興味ある方は連絡を。

●**春日武彦** かすが・たけひこ
'51年京都府生まれ。日本医科大学卒。精神科医。著書に『私はなぜ狂わずにいるのか』『心の闇に魔物は棲むか』（大和書房）等多数。

●**クーロン黒沢** くーろん・くろさわ
'71年東京都生まれ。著書には『電脳アジアコピー天国』（秀和システム）他。気狂いおよびジャンキー救済パソ通ネット、東京イソターネットを共同設立運営中。

●**呉智英** ご・ちえい
'46年愛知県生まれ。早稲田大学法学部卒。著書に『インテリ大戦争』（洋泉社）『賢者の誘惑』（双葉社）等多数。

●**今一生** こん・いっしょう
'65年群馬県生まれ。早稲田大学第一文学部除籍。九五年八月から一年間限定でアンチ・メディアのイベントを毎月主宰（リブロポートでの単行本化が進行中）。

●**田中聡** たなか・さとし
'62年富山県生まれ。富山大学文学専攻科修了。著書に『健康法と癒しの社会史』（青弓社）等多数。

●**塔島ひろみ** とうじま・ひろみ
'62年東京都生まれ。'84年度ユリイカ新鋭詩人に選ばれる。'87年、ミニコミ誌『車掌』を創刊。著書に『ドキュメント　ザ・尾行』（出版研）等。

●**永江朗** ながえ・あきら
'58年北海道生まれ。法政大学卒。『レジェンド』編集部を経てフリーに。著者に『菊地君の本屋』（アルメディア）等。

●**夏原武** なつはら・たけし
'59年千葉県生まれ。ビデオ専門誌編集者を経てフリーライターに。ヤクザ、運送関係と前歴は複雑怪奇。小誌多数に執筆。

●**成田毅** なりた・たけし
'64年青森県生まれ。弘前大学人文学部卒。雑誌『イマーゴ』編集長を経て、現在フリー編集&ライター。

●**根本敬** ねもと・たかし
'58年東京都生まれ。'81年に月刊漫画誌「ガロ」誌上にて『青春むせび泣き』を発表、特殊漫画家としてデビュー。著書に『怪人無礼講ララバイ』（青林堂）『人生解毒波止場』（洋泉社）等多数。

●**平山夢明** ひらやま・ゆめあき
'61年神奈川県生まれ。作家。著書に『異常快楽殺人』（角川書店）『シンカー』（徳間書店）等がある。

●**見沢知廉** みさわ・ちれん
'59年東京都生まれ。作家。詳細→39頁。

●**宮地光** みやじ・ひかる
'64年岡山県生まれ。東京都立大学人文学部卒。出版社勤務を経て、現在フリー編集&ライター。

●**村崎百郎** むらさき・ひゃくろう
'61年シベリア生まれ。中卒。八〇年に上京。工員兼鬼畜ライター。著書には『鬼畜のススメ』（データハウス）等。近刊に『電波系』（太田出版）を予定する。

●**本橋信宏** もとはし・のぶひろ
'56年埼玉県生まれ。早稲田大学政経学部卒。異色人物ルポ、ドラッグ、政治、AVといった分野が守備範囲。来春には『修羅場のサイコロジー』（講談社）を刊行予定。

●**山本弘** やまもと・ひろし
と学会会長。SF作家・ゲームデザイナー。ゲーム創作集団「グループSNE」に所属。著書に『サイバーナイト』（角川スニーカー文庫等多数。

●**吉永嘉明** よしなが・よしあき
'62年東京都生まれ。フリーライター兼編集者。謎の編集ユニット「東京公司」メンバー。編著に『危ない1号』（データハウス）等多数。

別冊宝島二八一号『隣のサイコさん』
一九九六年十一月三日発行
一九九六年十一月十五日第二刷

編集長——上田高史
編集——西川潤・梨本敬法・井野良介・田口昭（太字は本号担当者）
編集局長——石井慎二
発行人——蓮見清一
発行所——株式会社宝島社©
〒102　東京都千代田区一番町25　電話〈営業部〉03・3234・4621〈編集部〉03・3234・3692
郵便振替＝00170-1-170829㈱宝島社
印刷所——東京書籍印刷株式会社　Printed in Japan

隣のサイコさん

- 悪魔のような精神科医
- 塀の中の発狂する面々
- 盗聴器がいっぱい！
- ザ・ミザリー症候群
- シャブよりほかに神はなし！
- カウンセリングより自殺ですっきり!!
- アル中は一度死ぬ
- 殴られても好きな人
- 発明王さん、あなたに神のお恵みを
- 聖なる白痴の零落
- 人格障害に「クスリ」は効かない
- 通り魔たちの「完全なる世界」
- 妄想百科事典……

スラップスティック・ワールドへの
片道切符!!

別冊宝島二八一号 発行―宝島社

9784796692816

ISBN4-7966-9281-9

C9436 P980E

1919436009800

雑誌65984-93
定価980円(本体951円)